

### 第3節 Q調査区

Q調査区の遺構・遺物については、炉状遺構のみを低地部の範囲で取り扱った。13基の炉状遺構が検出された。

#### 1. 中世の調査

##### 炉状遺構1 (第174図)

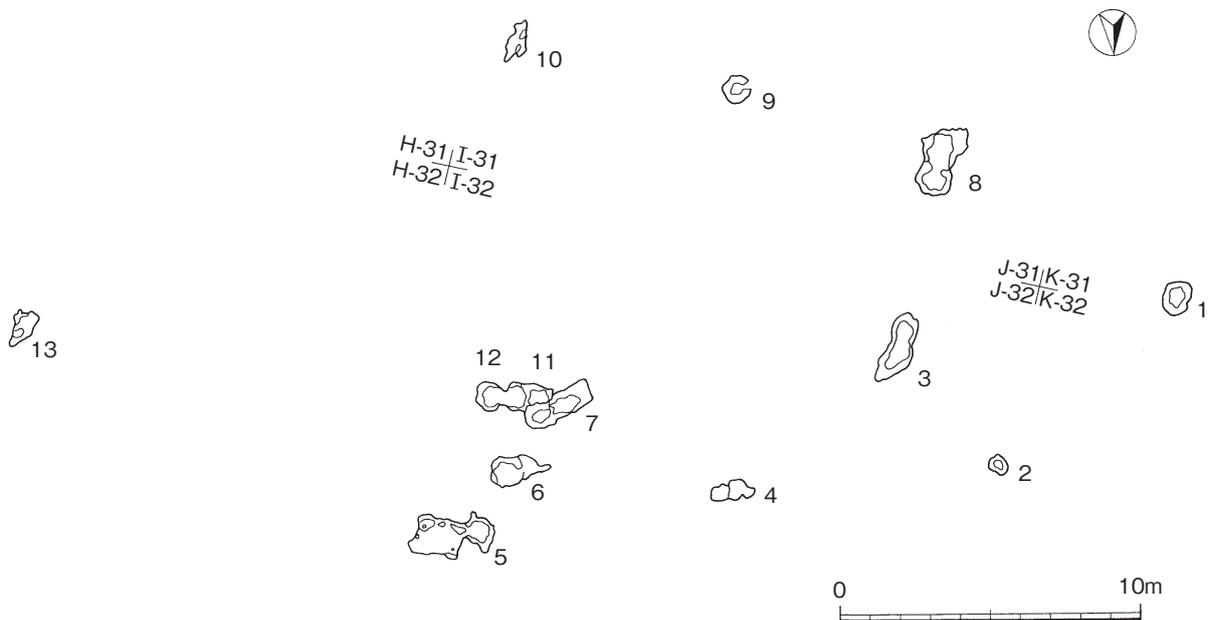
K-31区において検出された。円形の燃焼部のみ残るものの、北北西方向に掻き出し部があったものと見られる。床面の中央付近に青磁の椀と土師器が出土した。また黒曜石も出土したが、これは外部から入り込んだものと考えられる。床面は熱によって変色したと考えられ、極暗赤褐色である。焚き口より約40cm奥の炉壁の断面はフラスコ状を呈しているのが明瞭に観察され、内部には炭、灰、焼け土の混ざる灰褐色土および崩落した炉壁と考えられる赤褐色のブロック等が堆積するが分層できなかつた。また、炉壁には礫が使用されており、焚き口の左側には袖石が残る。

##### 炉状遺構2 (第174図)

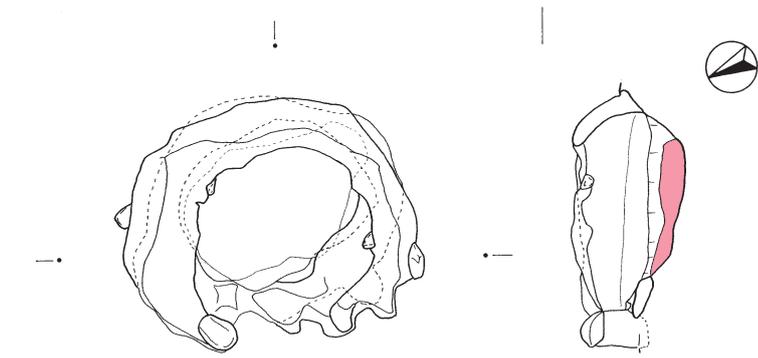
J・K-32区において検出された。円形の燃焼部のみ残るものの、残存している燃焼部の形状から北西方向に掻き出し部があったものと見られる。東側炉壁の断面はフラスコ状に抉られ、オーバーハングしている。床面は被熱により堅く締まっているが、簡単に剥がれることから、熱を逃がさないために、粘土による貼床を行っていた可能性も考えられる。埋土は概ねレンズ状の堆積をみる。

##### 炉状遺構3 (第174図)

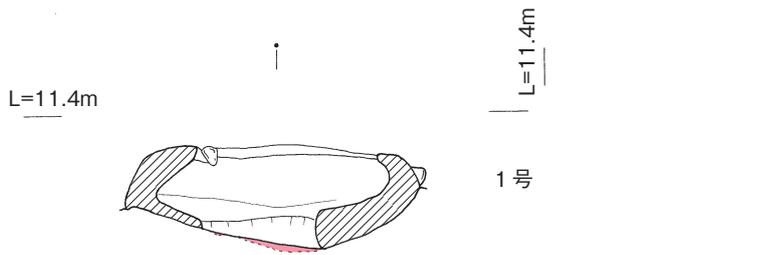
J-32区において検出された。長軸は約210cmを測る。焚き口の左右に袖石を使い、燃焼部は94cm×100cmのC字形プランを呈している。炉壁は礫と粘土を混ぜて作られてあり、残り具合も良好である。炉壁の断面はフラスコ状に抉られ、オーバーハングしている。検出面より約35cm下に被熱痕のある床面がある。掻き出し部は南南東方向にひろがる。粘土、炭、灰の混ざった埋土内には白磁と青磁片が含まれる。燃焼部の約30cm東隣に炭化物の拡がりが見られる。直径は約30cm～40cm、厚さは約2～3cm程度である。



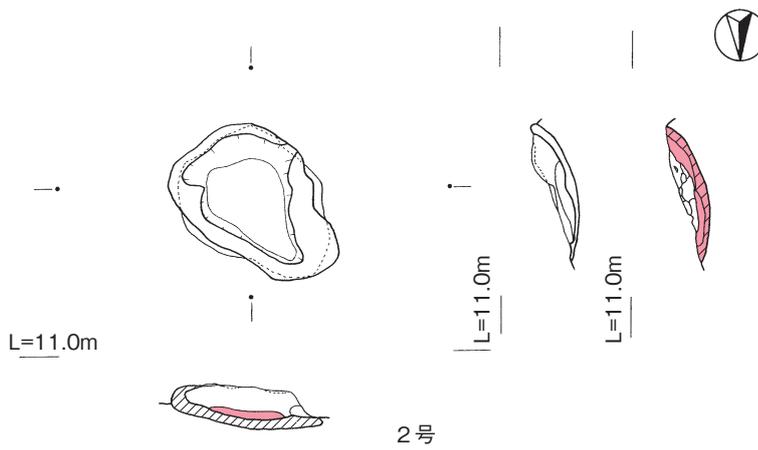
第173図 炉状遺構配置図



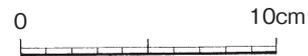
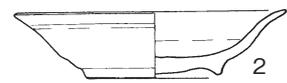
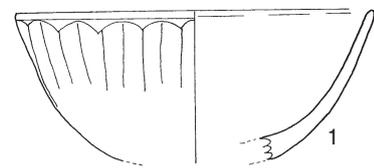
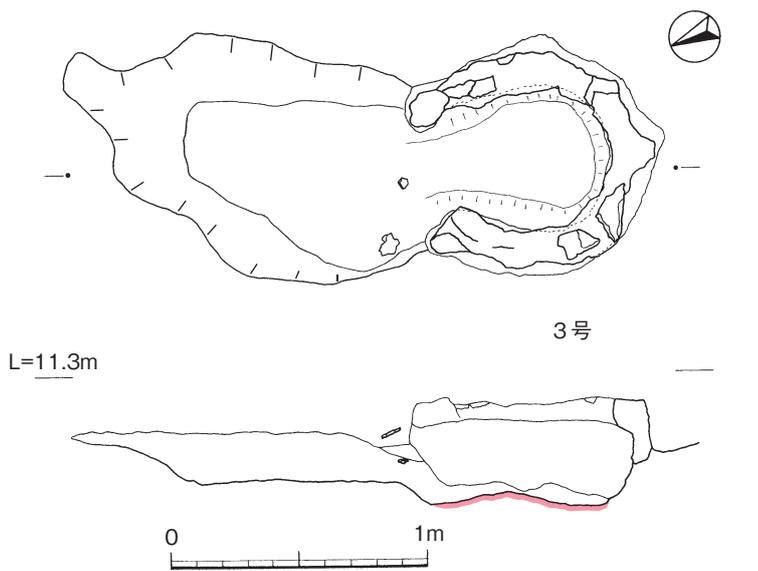
1号



2号



3号



第174図 炉状遺構1～3

#### 炉状遺構 4 (第175図)

J-32区において検出された。検出時に上部の殆どが削平され基礎部が僅かに残る程度である。焚き口は炭化物および遺構の残り具合が東側にあったものと推測できる。炉壁はとても堅く、焼き締まっている。埋土は明褐色土で炭化物や炉壁に破片を多く含む。

#### 炉状遺構 5 (第175図)

I-33区において検出された。長軸は約290cmを測る。焚き口の右に袖石が残る。燃烧部は96cm×115cmのC字形プランを呈している。炉壁は礫と粘土を混ぜて作られてあり、残り具合も良好である。炉壁の断面をみると床面からほぼ垂直に立ち上がっている。燃烧部の検出面より約40cm下に被熱で堅く締まった灰色の層がある。その直下の床面は炉壁とつながっており被熱で赤レンガ色を呈している。埋土は焼土、炭化物、灰を多く含む。掻き出し部は北東方向に広がっており、いくつかのピットを有するものの、本遺構との関連は不明である。

#### 炉状遺構 6 (第176図)

I-32区において検出された。検出時に掻き出し部の殆どが削平されている。燃烧部は赤褐色の炉壁を持ち、一部消失しているものの形状はC字状であると考えられる。燃烧部の検出面より約30cm下に被熱で赤レンガ色を呈する床面が見られる。埋土には大量の炭化物が含まれる。

#### 炉状遺構 7 (第176図)

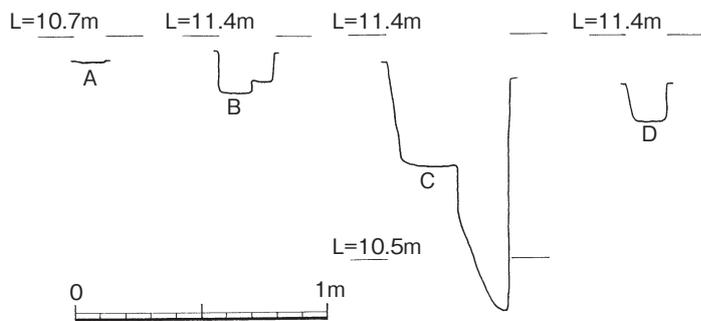
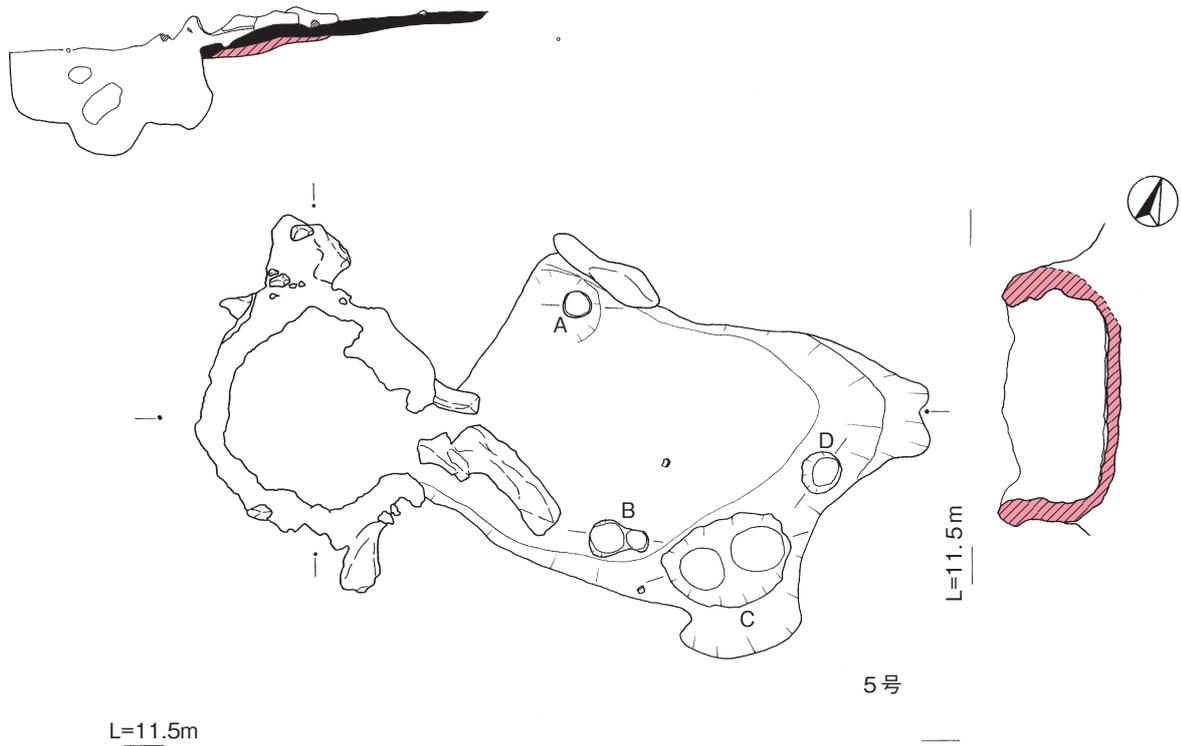
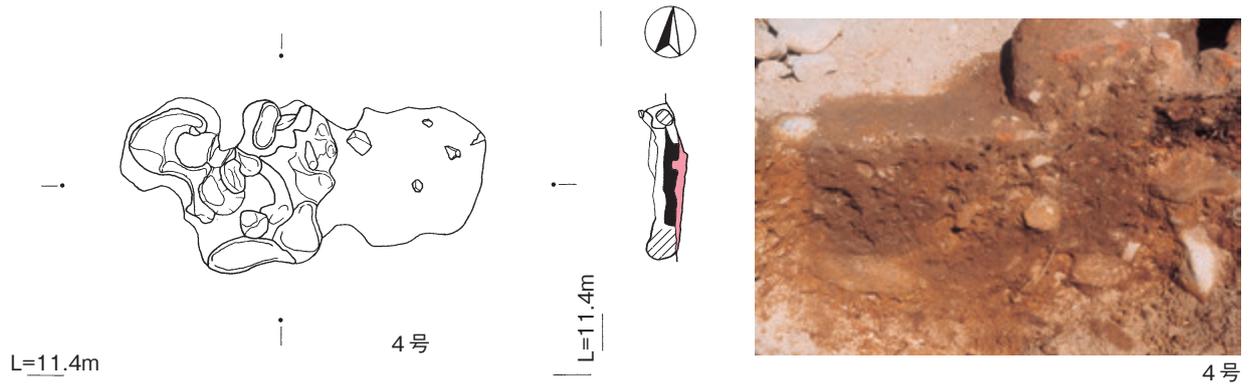
I-32区において検出された。長軸は約235cmを測る。焚き口の右に袖石が残る。燃烧部は90cm×93cmのC字形のプランを呈している。炉壁は礫と粘土を混ぜて作られてあり、残り具合も良好である。炉壁は厚さが8cm～13cmあり、断面をみると床面から垂直に近い角度で立ち上がっている。燃烧部内の埋土は炭化物と崩落した炉壁の一部と見られる粘土塊も混ざる黒褐色土である。掻き出し部の埋土は焚き口付近は極暗褐色土であり後半部分は暗褐色土とに分かれる。しっかりした掘り込みや燃烧部を構成する粘土がⅢ層にしっかり張り付いていることから、地面を掘り込んだ後、粘土を貼り付けながら本遺構を築いていったものと考えられる。11号と切り合う形で検出されたが、検出状況から11号が先に作られていると推察される。埋土中に青花の碗を含む。

#### 炉状遺構 8 (第177図)

J-31区において検出された。長軸は約225cmを測る。焚き口の左に袖石が残る。この袖石は長さが約30cmある直方体でこれを立てて据えてあり、本遺構の長期にわたる使用を意図したものではないかと推察される。燃烧部は100cm×120cmのC字形を呈している。炉壁は20cm～40cmぐらいの大きさの礫と混ぜて作られてあり、残り具合も良好である。炉壁は厚さが10cm～15cmある。断面はフラスコ状を呈し、上部がオーバーハングしており、床面は被熱で堅く焼き締まっている。燃烧部から掻き出し部にかけての埋土は粘土、炭化物、灰を多く含み、分層はできなかったため短時間のうちに埋まったものと考えられる。

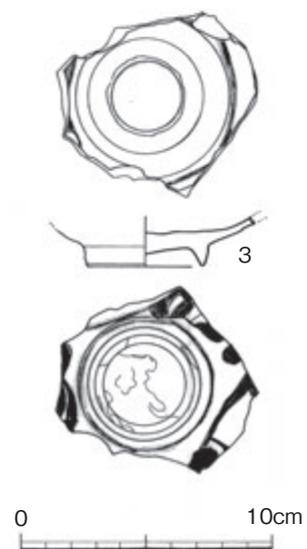
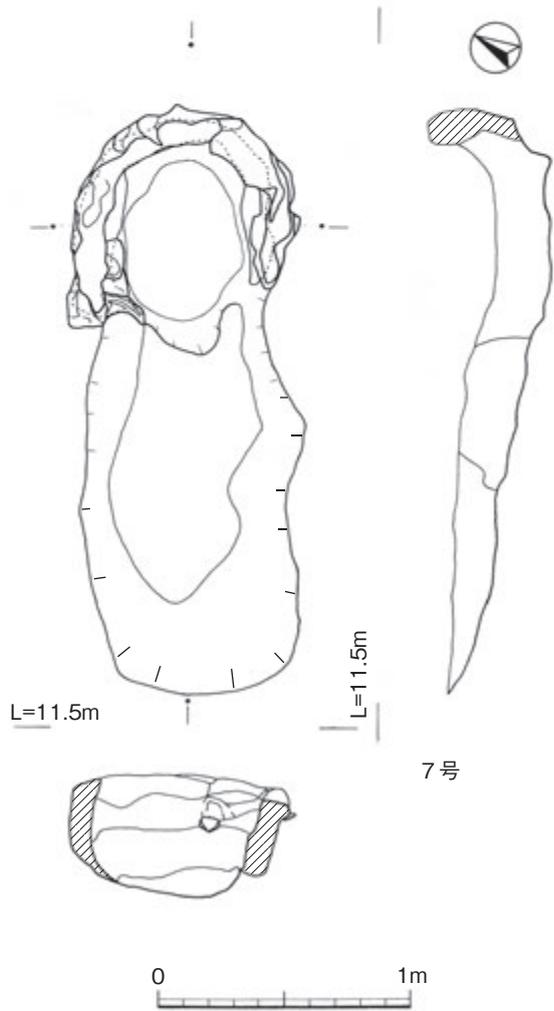
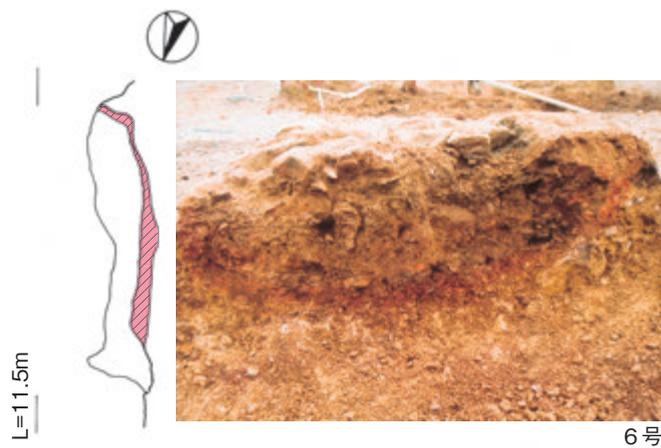
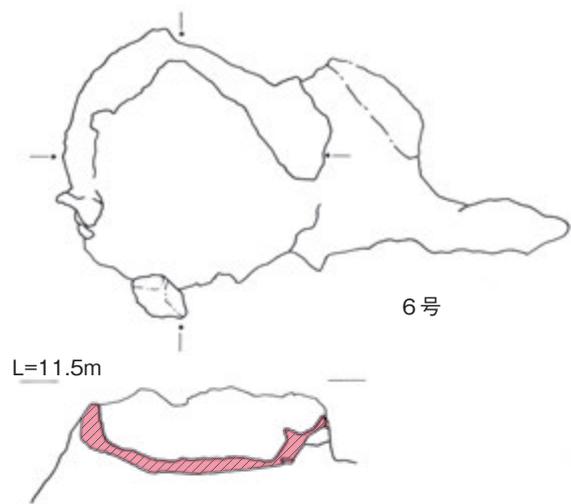
#### 炉状遺構 9 (第177図)

I-31区において検出された。赤ホヤ火山灰層上に位置する。円形の燃烧部のみ残るものの、西南西方向に掻き出し部があったものと見られる。85cm×90cmのC字形プランを呈している。炉壁は礫と粘土を混ぜて作られてある。炉壁の断面はフラスコ状を呈しており上部はオーバーハングしている。内部には炭、灰、焼け土の混ざる灰褐色土および崩落した炉壁と考えられる赤褐色のブ

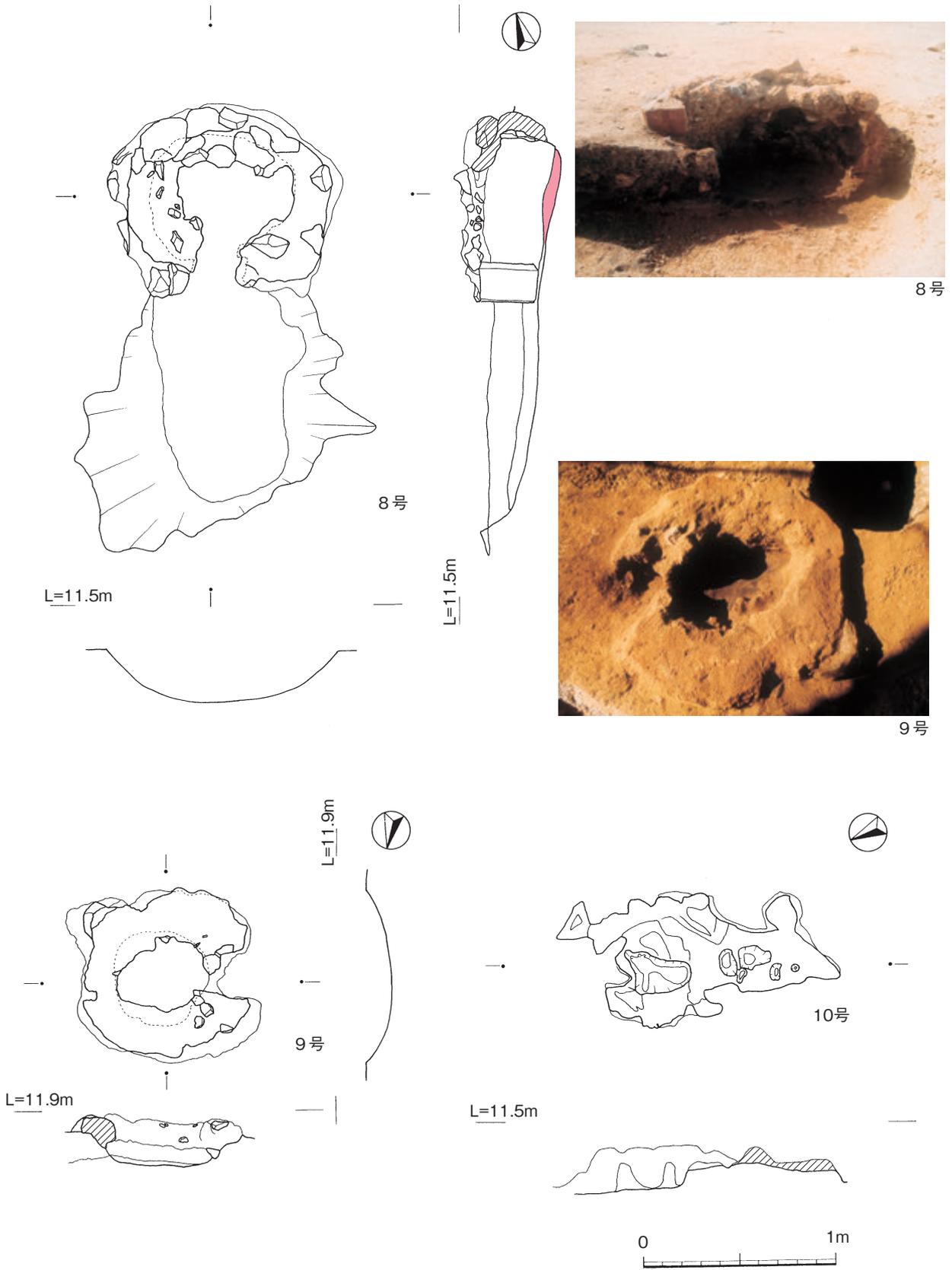


5号

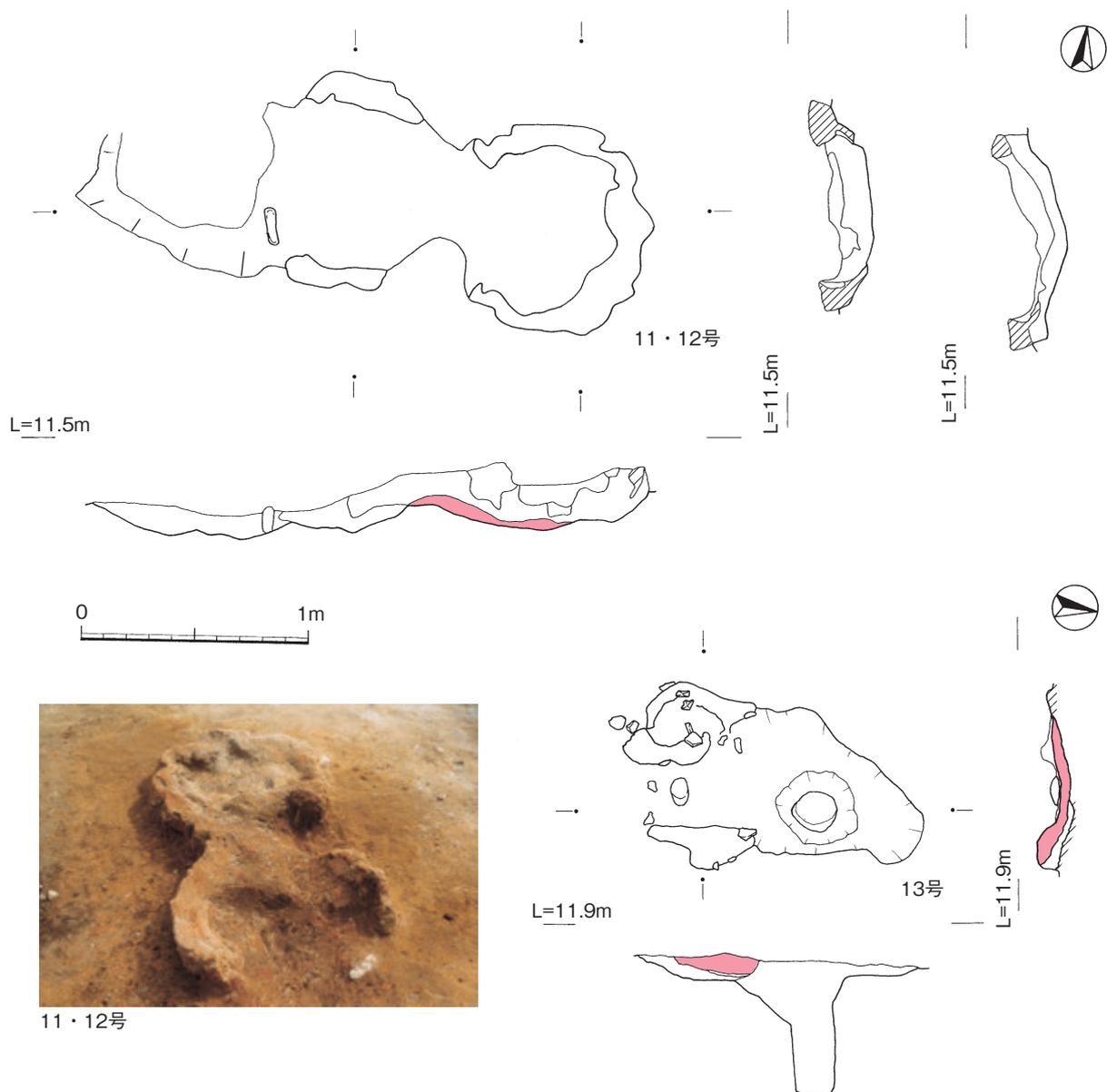
第175図 炉状遺構4・5



第176図 炉状遺構6・7



第177図 炉状遺構 8～10



第178図 炉状遺構11～13

ロック等が堆積するが分層できなかった。炉壁の中に釘とみられる鉄製品が1点あったが、本遺構の構築時に入り込んだものであろう。

#### 炉状遺構10 (第177図)

I-31区において検出された。赤ホヤ火山灰層上に位置する。

検出時に上部の殆どが削平され基礎部が僅かに残る程度で全体の形状は不明であるがC字状あるいは円形の燃焼部(炉壁)と灰の掻き出し部を有し上面観で鍵穴状を呈するものであると考えられる。焚き口は炭化物および遺構の残り具合から南南西側にあったものと推測できる。

### 炉状遺構11（第178図）

I-32区において検出された。7・12号炉状遺構と切り合うかたちで検出された。検出状況から11号が最初に作られ、次に12号が作られ、最後に7号が作られたものと考えられる。炉壁は赤褐色を呈し、埋土に炭化物や崩落した炉壁の一部と考えられる赤褐色のブロック等を含む。

### 炉状遺構12（第178図）

I-32区において検出された。11号と切り合うかたちで検出された。検出状況から11号を破棄した後に12号が作られている。焚き口は炭化物および炉壁の形状から西側にあったものと推測できる。炉壁は赤褐色を呈し、床面や側面が被熱で堅く焼き締まっている。7・11・12の各遺構は时期的に極めて同時期に稼働していたのではないかと考えられる。

### 炉状遺構13（第178図）

G-32区において検出された。検出時に上部の殆どが削平され基礎部が僅かに残る程度で全体形状は不明であるがC字状あるいは円形の燃焼部（炉壁）と灰の掻き出し部を有し上面観で鍵穴状を呈するものであると考えられる。北側に炉壁が、南側に焚き口や掻き出し部があったのではないだろうか。深さ約50cmを有するものの、本遺構との関係は不明である。

### 炉状遺構観察表

現場遺構名	区	主軸	燃焼部 (cm)	掻き出し部 (cm)	遺構内遺物	備考	形態
1号	K-32	N62° W	115×120	不明	青磁, 土師器	袖石	鍵穴形
2号	K-32	S48° E	55×60	不明	—	—	鍵穴形
3号	I-32	S20° W	94×100	94×135	白磁, 青磁, 陶器	燃焼部礫混じりの粘土	鍵穴形
4号	I-32	S83° W	不明		—	—	鍵穴形
5号	I-32	S74° W	96×115	140×190	土師器	袖石	鍵穴形
6号	I-32	N70° E	100×115	不明	—	—	鍵穴形
7号	I-32	N64° E	90×93	90×150	青花	11号と切り合う	鍵穴形
8号	I-31	N20° E	100×123	135×160	—	袖石	鍵穴形
9号	I-31	N73° E	85×90	不明	—	—	鍵穴形
10号	I-31	N23° W	不明		—	—	不明
11号	I-32	S85° E	不明		—	7号12号と切り合う	鍵穴形
12号	I-32	S85° E	85×92	不明	—	11号と切り合う	鍵穴形
13号	H-32	N10° W	不明		—	—	鍵穴形

### 炉状遺構内出土遺物観察表

挿図番号	掲載番号	種別	器種	出土区	取り上げ番号	層位	法量 (cm)			胎土の色調	釉薬の色調	備考
							口径	底径	器高			
第174図	1	青磁	椀	K-31	3 4	1号	14.0	—	—	灰白色	青磁釉	
	2	白磁	皿	J-32	6	3号	10.2	5.2	2.6	灰白色	透明釉	
第176図	3	青花	碗	I-32	32	7号	—	4.6	—	灰白色	透明釉	

#### 第4節 G調査区

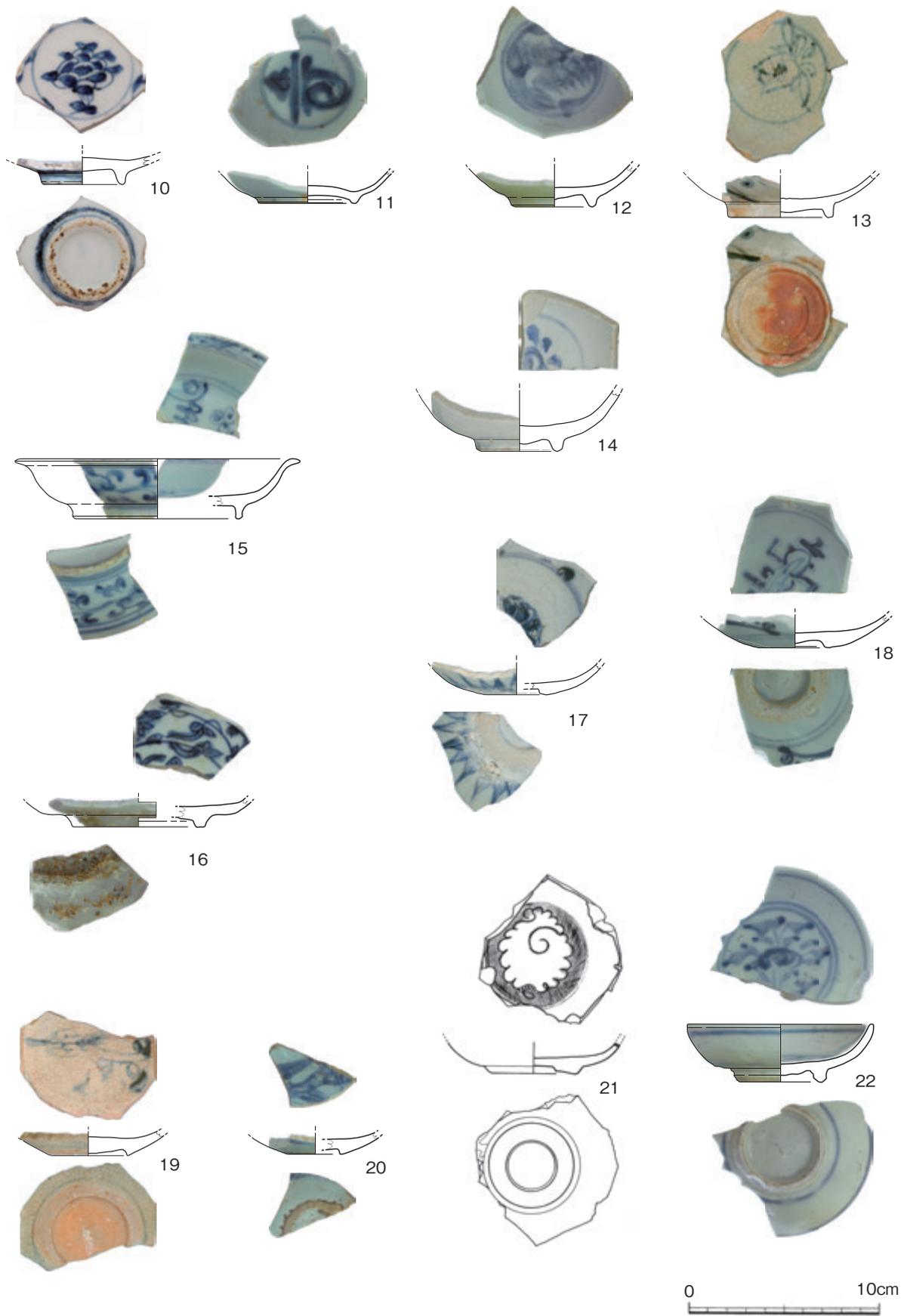
ここではG調査区から検出された遺構・遺物について報告する。低地部内での位置関係は第1図を参照にされたい。

##### 1 中世の調査

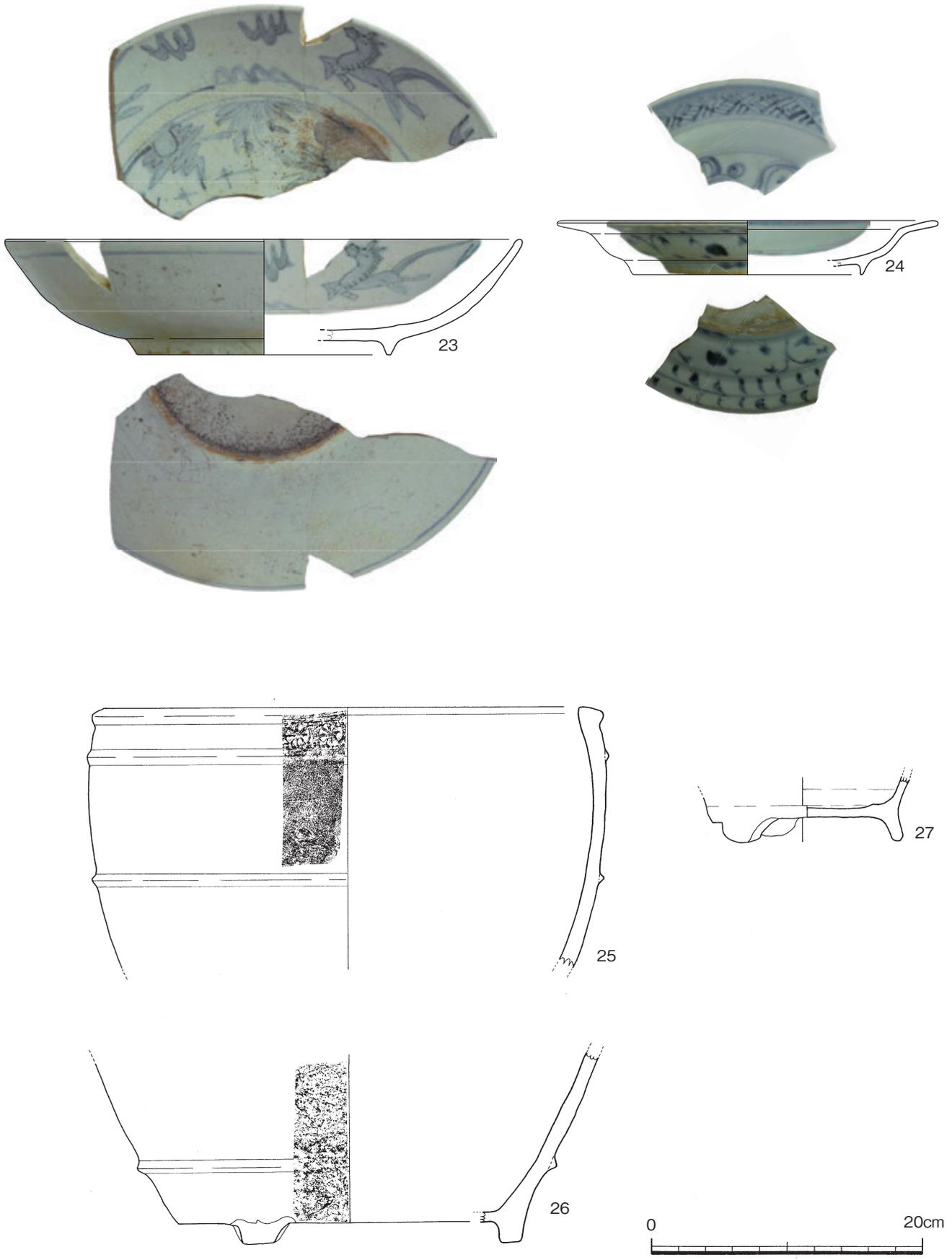
G調査区では、中世の遺構は検出されなかったが、中国青花の碗・皿等の遺物が出土した。



第179図 青花1



第180図 青花2



第181図 青花3及び瓦質土器

## 青花（第179～181図）

1～3は景德鎮窯系の蓮子碗である。4～14は見込みがゆるやかに盛り上がる饅頭心の形状の碗に分類されるものである。4は深さが深いもので、見込みに花文、外面は草花文が描かれる。畳付には砂が付着する。5～8は饅頭心の碗の口縁部である。やや深さが浅いものである。9は漳州窯系のものである。10～14は底部である。12～14は見込みが盛り上がらないタイプのものである。11～13は高台内面は露胎するもので、13は漳州窯系のものである。また13は赤色の顔料が高台内面の半面に塗布されている。

15～24は皿である。15は口縁部が端反になるものである。16は外面腰部から高台、畳付にかけて、砂粒が溶着する。17～20は底部が碁筍底になるものである。19は漳州窯系のもので、他は景德鎮系のものである。21が景德鎮窯系のもので、見込みに法螺貝が描かれる。22は福建省付近の窯で焼かれたものである。23は漳州窯系のもので、焼成不良で呉須の発色も悪い。24は景德鎮窯系のもので、折れ縁の皿である。

## 瓦質土器（第181図）

3点のみであった。25は口縁部外面に花文のスタンプが施される。26は底部である。足は1足しか残存してなかったが、3足になるものと思われる。27は瓦質としたが土師質のようなもので、底部に3足の足を有するものである。

## 青花・瓦質土器観察表

挿図番号	掲載番号	種別	器種	産地	出土区	取り上げ番号	層位	法量 (cm)			胎土の色調	釉薬の色調	施釉	備考	
								口径	底径	器高					
第179図	1	青花	碗	景德鎮窯系	G地点	—	—	—	—	5.2	淡黄色	透明釉	畳付以外施釉	C	
	2	青花	碗	景德鎮窯系	G地点	—	—	—	4.6	—	灰白色	透明釉	畳付以外施釉	C	
	3	青花	碗	景德鎮窯系	G地点	—	—	—	7.0	—	灰白色	透明釉	畳付以外施釉	C	
	4	青花	碗	景德鎮窯系	G地点	—	—	—	11.1	4.6	5.2	灰白色	透明釉	畳付以外施釉	
	5	青花	碗	景德鎮窯系	G地点	—	—	—	14.0	—	—	灰白色	透明釉	残存部全面施釉	碗E
	6	青花	碗	景德鎮窯系	G地点	—	—	—	13.2	—	—	灰白色	透明釉	残存部全面施釉	碗E
	7	青花	碗	景德鎮窯系	G地点	—	—	—	12.8	—	—	灰白色	透明釉	残存部全面施釉	碗E
	8	青花	碗	景德鎮窯系	G地点	—	—	—	11.5	—	—	灰白色	透明釉	残存部全面施釉	碗E
	9	青花	碗	漳州窯系	G地点	—	—	—	12.4	—	—	灰白色	透明釉	畳付から高台内面無釉	小野碗E 饅頭心
第180図	10	青花	碗	景德鎮窯系	G地点	—	—	—	4.2	—	灰白色	透明釉	畳付以外全面施釉	碗E 饅頭心 畳付に砂粒付着	
	11	青花	碗	景德鎮窯系	G地点	—	—	—	5.0	—	灰白色	透明釉	畳付から高台内面無釉	碗E 饅頭心 高台に砂粒付着	
	12	青花	碗	景德鎮窯系	G地点	—	—	—	4.0	—	灰白色	透明釉	畳付から高台内面無釉		
	13	青花	碗	漳州窯系	G地点	—	—	—	5.0	—	淡黄色	透明釉	高台脇から高台内面無釉	大阪 F・G	
	14	青花	碗	景德鎮窯系	G地点	—	—	—	4.0	—	灰白色	透明釉	畳付以外全面施釉		
	15	青花	皿	景德鎮窯系	G地点	—	—	—	15.0	8.6	3.2	灰白色	透明釉	畳付以外全面施釉	皿B
	16	青花	皿	景德鎮窯系	G地点	—	—	—	6.9	—	—	灰白色	透明釉	畳付以外全面施釉	景德鎮 皿B 原子高台 畳付周辺に砂粒付着
	17	青花	皿	景德鎮窯系	G地点	—	—	—	3.7	—	—	灰白色	透明釉	底面無釉	皿C 碁筍底
	18	青花	皿	景德鎮窯系	G地点	—	—	—	3.7	—	—	灰白色	透明釉	底面無釉	皿C 碁筍底
	19	青花	皿	漳州窯系	G地点	—	—	—	4.1	—	—	浅黄色	透明釉	底面の一部無釉	皿C 碁筍底
	20	青花	皿	景德鎮窯系	G地点	—	—	—	2.8	—	—	灰白色	透明釉	底面無釉	碁筍底
	21	青花	皿	景德鎮窯系	G地点	—	—	—	4.6	—	—	灰白色	透明釉	高台脇から高台内面無釉	
22	青花	皿	福建か？	G地点	—	—	—	9.8	4.4	3.1	灰白色	透明釉	畳付以外施釉		
第181図	23	青花	大皿	漳州窯系	G地点	—	—	—	28.6	14.0	6.4	浅黄橙色	透明釉	畳付以外施釉	漳州窯
	24	青花	大皿	景德鎮窯系	G地点	—	—	—	21.0	12.7	3.0	灰白色	透明釉	畳付以外施釉	景德鎮 皿F
	25	瓦質土器	火鉢		G地点	—	—	—	35.0	—	—	淡黄色	—		
	26	瓦質土器	火鉢		G地点	—	—	—	25.5	—	—	淡黄色	—		
	27	瓦質土器	火鉢		G地点	—	—	—	14.6	—	—	灰白色	—		

## 2 近世以降の調査

G調査区では、地方郷土年寄の屋形跡と、それに付帯する施設として石垣、石組み遺構、暗渠（排水施設）、池等が検出された。また、郷土年寄屋形で使用されたと思われる。薩摩焼をはじめとする陶磁器等の遺物が大量に出土している。

### (1) 遺構

#### 石垣（第182～188図）

石垣は郷土年寄屋形を囲む状態で検出されたもの（石垣1～5）と、それ以外の施設に付帯すると思われる石垣（石垣6～8）が検出されている。石材はすべてN調査区（n-3・6・9）で検出された石切場と同じ弱性溶結凝灰岩である。

#### 石垣1（第182図）

L～N-13～15区で検出された。築石は方形ないしは長方形に整形した切込接である。石垣下部は、地表面をわずかに整地した程度で根石が置かれているものと思われ、地表面の凹凸や傾斜に合わせて根石が積まれている。天端石は高さをそろえるため加工が施されている。

#### 石垣2（第182・183図）

L～O-10～13区で検出された。石垣1と同様に築石は接着面に加工を施した切込接である。石垣下部は、やや凹凸が見られるもののほぼ平坦に根石が積まれている。上部は一部欠損している箇所がみられる。

#### 石垣3（第183図）

Q～R-12・14区から検出された。築石は切込接である。築石の2か所に「矢穴」と呼ばれる長方形の小穴が見られる。矢穴とは、岩石を大きく割る際、工具で穴を穿ち、そこに穴の大きさに合う木製の楔を打ち込み、水を描けて膨張させ、その力で割ったもしくは割ろうとした痕跡である。

#### 石垣4（第183図）

N・O-13・14区で検出された。暗渠及び隠居への通路と、一段高い庭部分の境を分ける石組みである。薄い長方形に整形された石を2～3段積み上げている。

#### 石垣5（第186図）

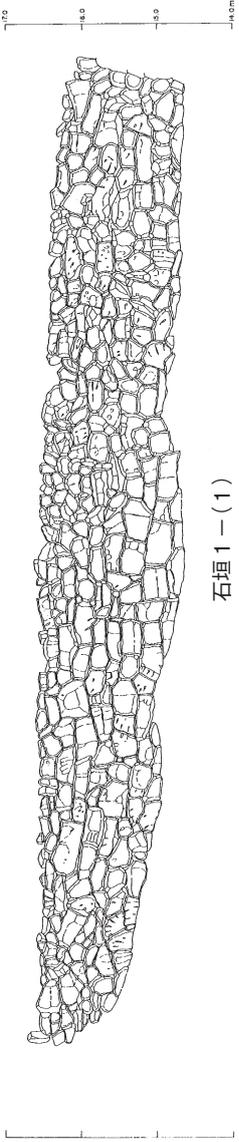
N・O-17・18区で検出された。石垣上部と下部で積み方が異なっており、古い石垣の上に新たに石垣を積み直したものと考えられる。石垣下部は野面乱積で、上部は一部布積で、表面加工石を再利用した箇所も見られる。

#### 石垣6（第187図）

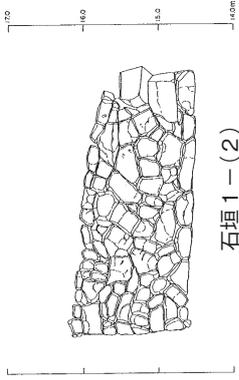
N・O-18～22区で検出された。長方形に加工された切込接の築石が布積で積まれる。石垣の高さは一定ではなく、ある部分から倍程度高く積まれる。石垣自体は凝灰岩の上に積まれ、凝灰岩にもノミ痕や石を剥ぎ取った痕が見られることから、N調査区にあった近世の石切場が採石をしなくなった後に築かれたものと思われる。石垣出隅は算木積で、裏込めにも凝灰岩が使用され、石と石の間にはバラス状になった凝灰岩や土が詰められる。

#### 石垣7（第188図）

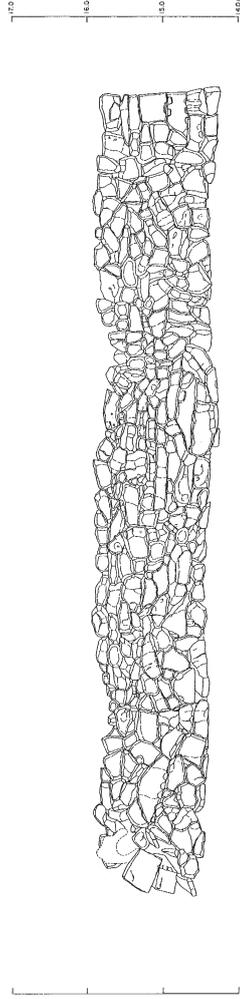
K～O-17～19区で検出された。石垣5から南東方向に延びる石垣で、やや奥まった部分に積まれたものであるため、正面にあたる石垣5に比べて築石の積み方が雑で、切込接の乱積みである。



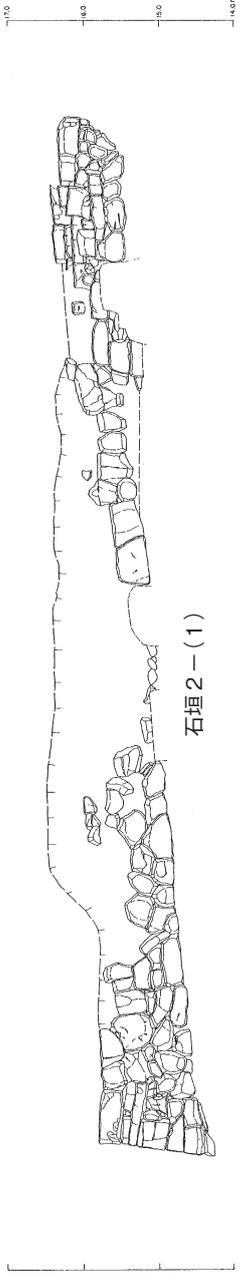
石垣1-(1)



石垣1-(2)



石垣1-(3)



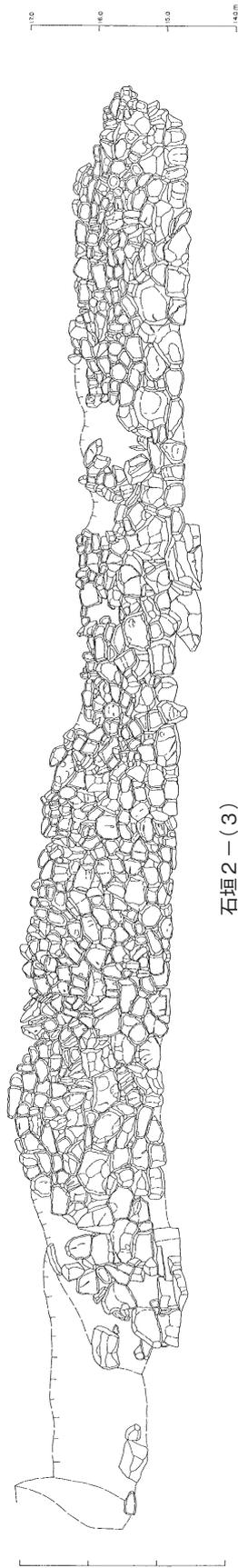
石垣2-(1)



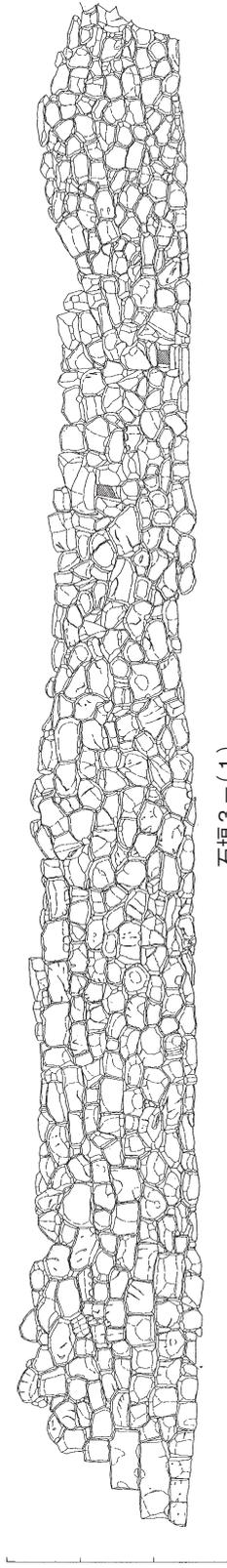
石垣2-(2)



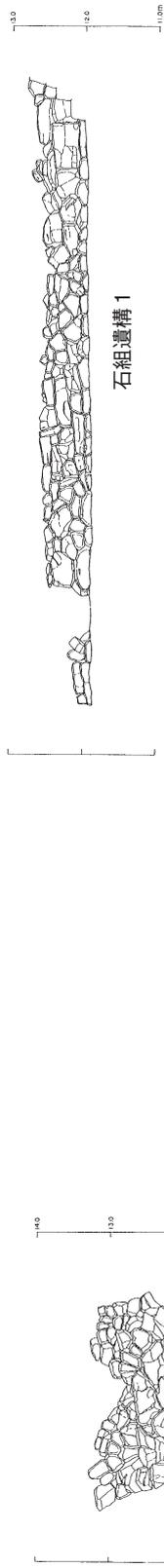
第182図 石垣1・2



石垣2-(3)

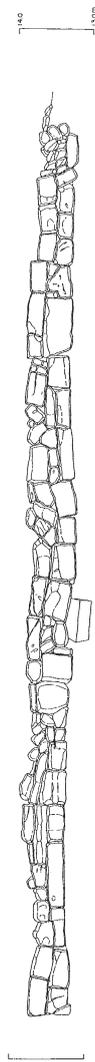


石垣3-(1)

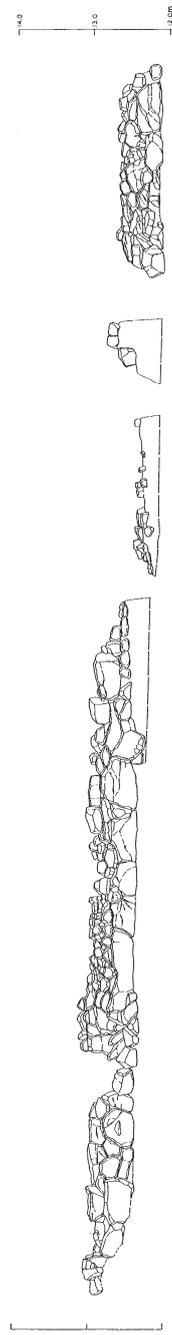


石垣3-(2)

石組遺構1



石垣4



石組遺構2



第183図 石垣2～4及び石組み遺構1・2



石垣1 左端部



石垣1 右端部



石垣2 (3) 左端部



石垣2 (3) 中央部



石垣2 (3) 右端部



石垣2 (2) 右端部



石垣3 左端部



石垣3 中央部



石垣3 右端部



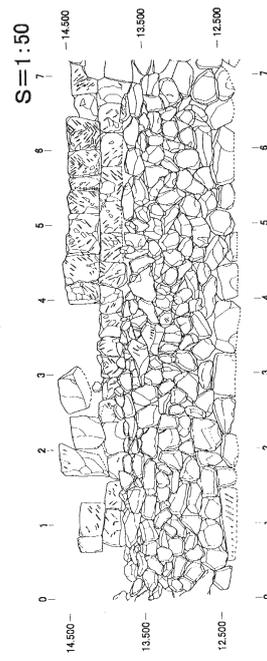
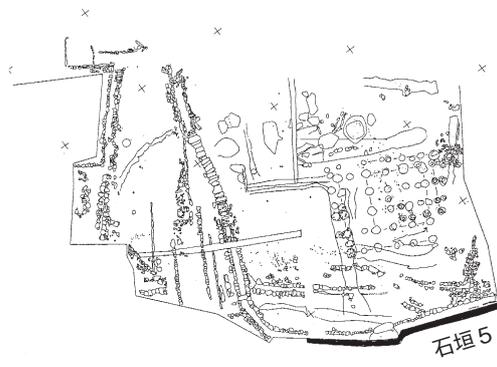
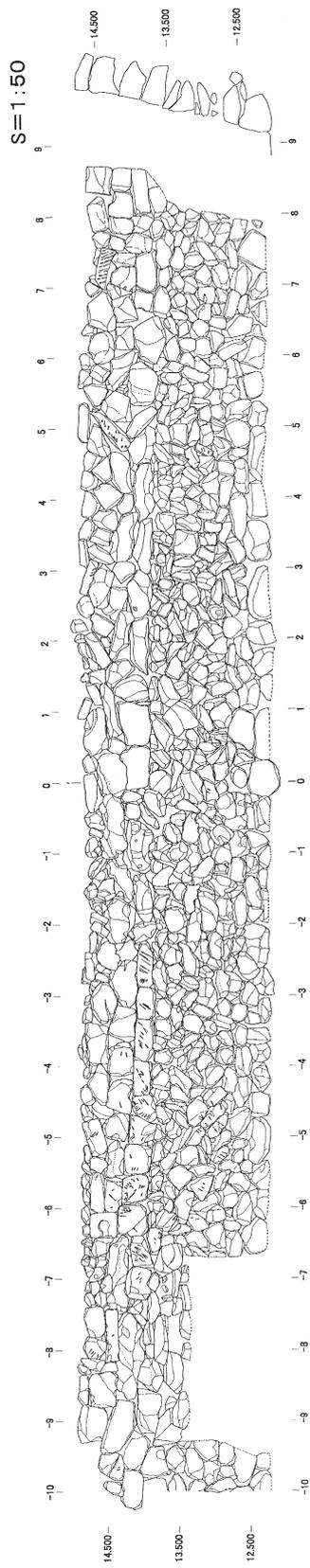
石垣3 右端～折れ部



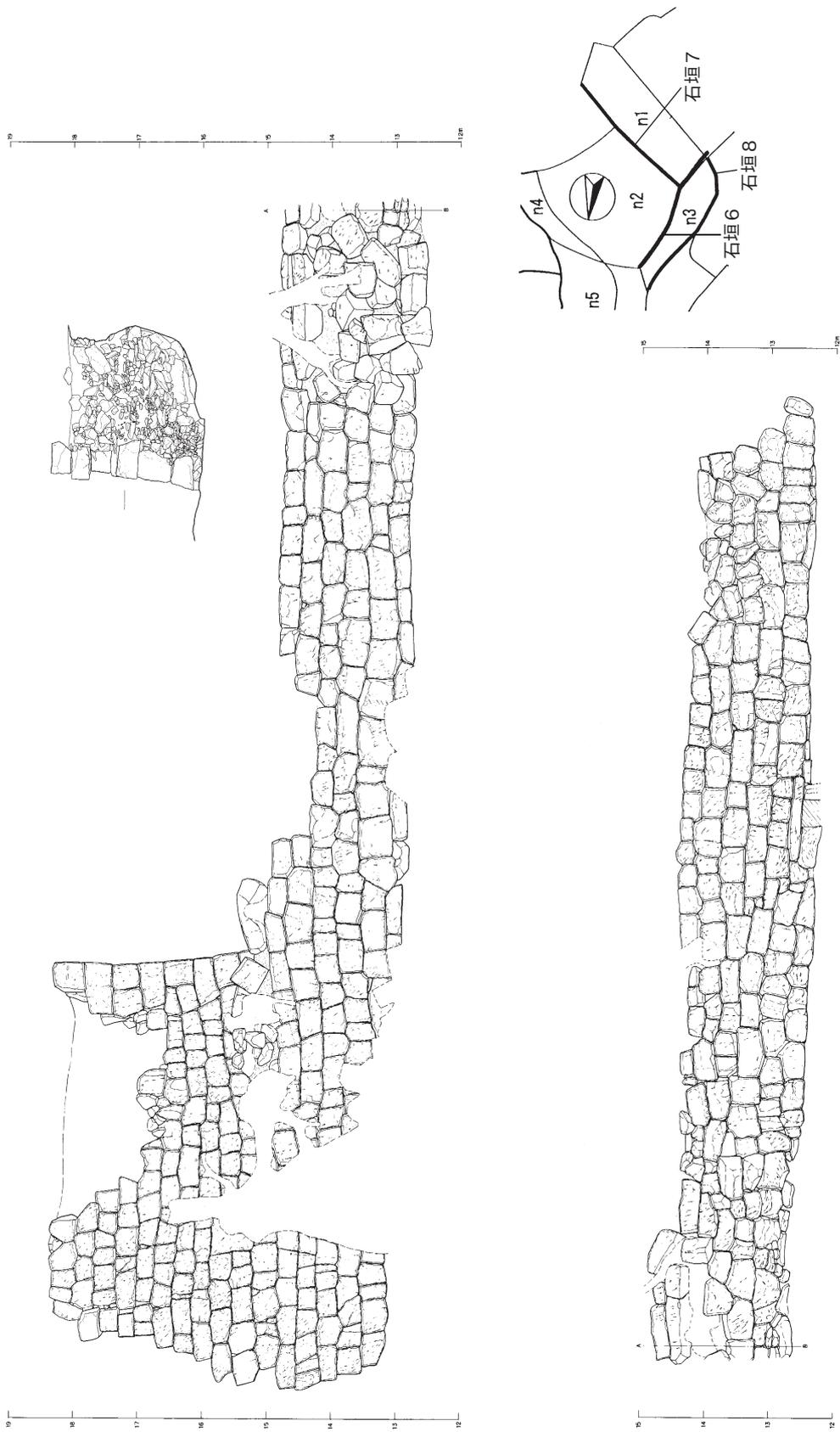
石垣遺構1 と池跡



石垣遺構2 と池跡



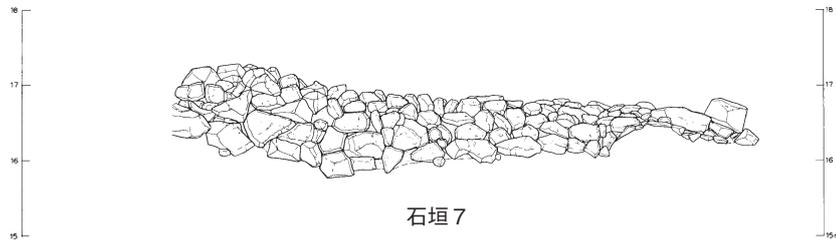
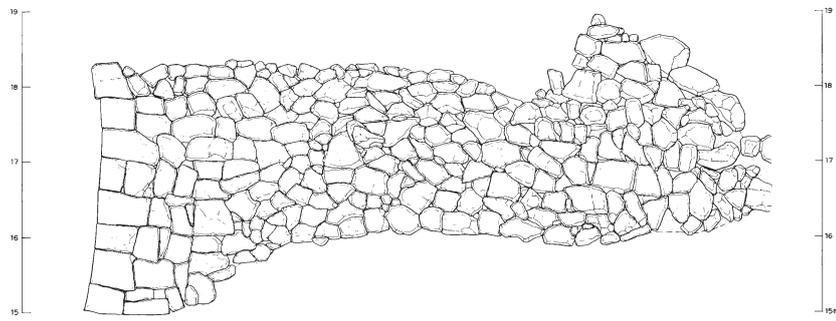
第186図 石垣5



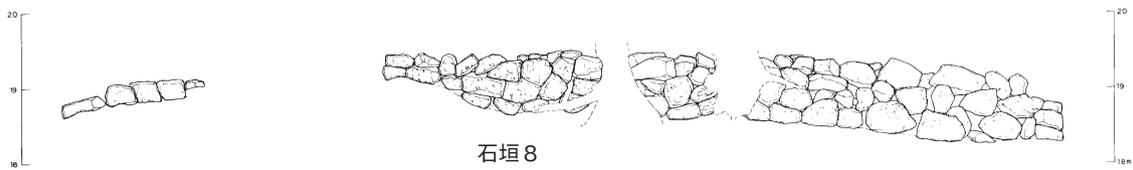
第187图 石垣6



石垣6 断面拡大図



石垣7



石垣8

第188図 石垣6 断面拡大図及び石垣7・8

## 石垣 8 (第188図)

O・P-18~23区で検出された。1~2段の低い石垣である。

## 石組み遺構 (第183図)

Q・R-12~15区で検出された。薄い長方形の角礫や円礫を積み上げ、池の縁に使用している。後方は裏込として粘土を使用して固め、土手の崩壊を防いでいる。

## 建物跡 (第189~192図)

O-16区で建物跡 1, O・P-13区で建物跡 2 の 2 棟が検出された。他にも周辺に柱穴と思われるピットが存在したが、建物跡として並ばなかった。

### 建物跡 1 (第189図)

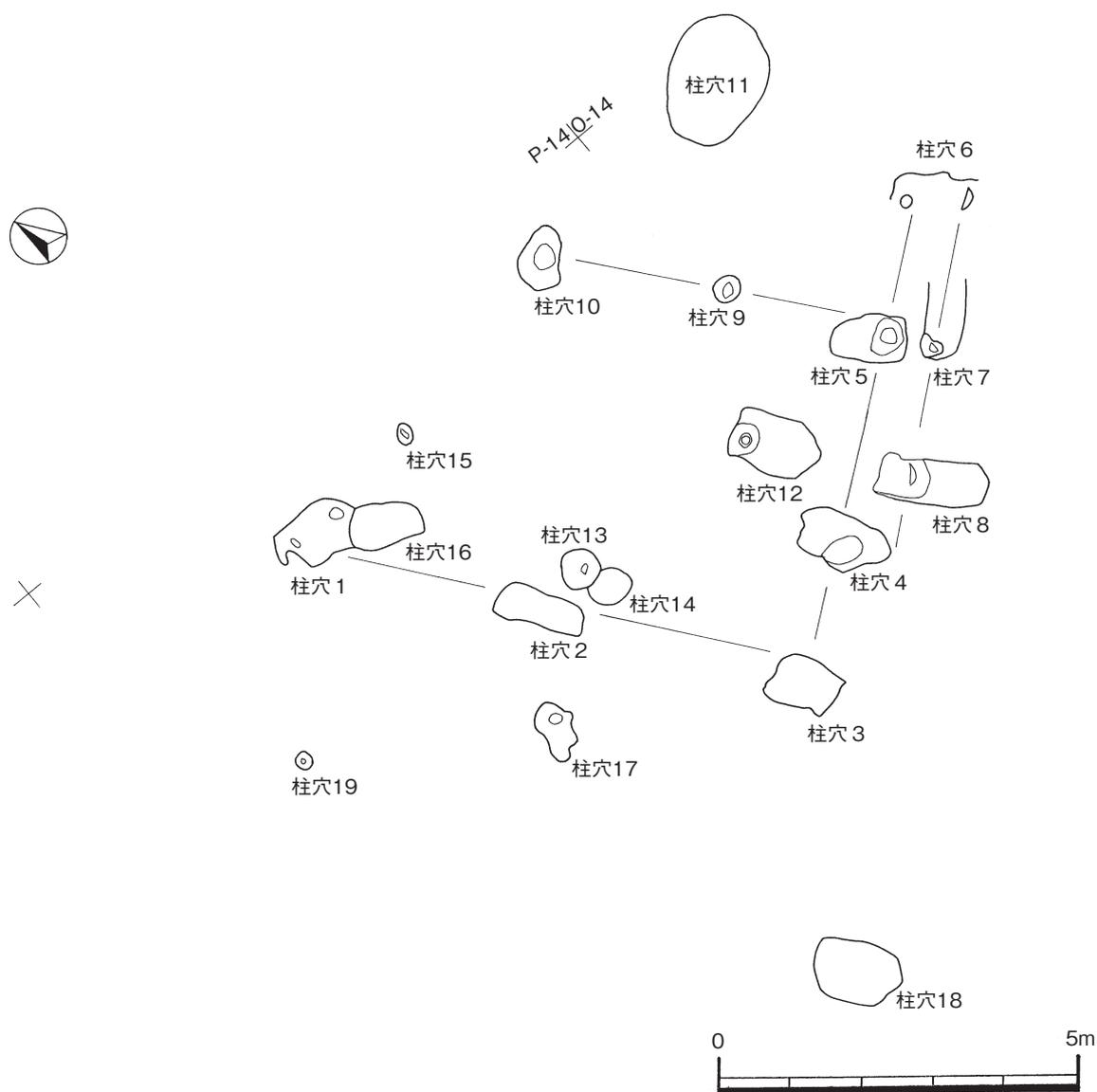
O-16区で検出された。柱穴内には礎石はなく、礎石を置くための坪地業に用いた碎石等が検出されている。各柱穴の埋土については表にまとめた。

	①	②	③
P1	柱穴痕 直径20cm Hue10Y 6/1~5/1 (灰色) シラスと腐食した土が混じっている。	シラスと①と腐食した黄軽石が混ざっている。	円礫や砂利 (小礫~中礫) が黒灰とシラスの混ざった土に入る。 Hue5Y 4/1
P2	柱穴痕あり。直径22cm 色 P1と同じ	シラスとパッチ状に入った灰色の土と混ざり土。	円礫や角のとれた石 (中礫が多い) 溶結凝灰岩や石英の脈石が多い。円状に布石してある。(マトリックスはシラスと黒灰色のまざり土)
P3	直径28cm シラスが中に入っていて固い。	①をとりまくように中礫から巨礫が入っている。	シラスと黒灰色の土との混ざり。
P4	全て P3と同じ。ただし②に小礫が多い。		
P5	柱穴痕。よくわからない。P2に類似。別の pit に切られている。		
P6	柱穴痕がある。直径18cm。灰色 Hue10Y 6/1~5/1 P2と同じ		
P7	柱穴痕があり。直径22cm ややうすい		
P8	灰褐色 (7.5YR 4/2) の土が下の pit を切っている。		①②を囲むように小礫が混じる砂が入っている。
P9	柱穴痕がはっきりしている。直径22cm		シラス P1の②円 (pit) の外側にこぶし大の中礫が数個点在
P10	柱穴痕ははっきりしない。中心はシラスが入っているが円状に灰色の土のラインが見える。		pitの外側に円状に小礫が分布。マトリックスは砂粒。
P11	シラス。柱穴痕うっすらとある。		マトリックスはシラス。小礫が pit の最外側を円状にかこむ。
P12	シラス。柱穴痕? 外ラインだけうっすらとある?		シラス Pit の最外側を円礫 (小礫) が円状にかこむ。P1に似ている。
P13	P12の①と同じ。		砂粒の中に小礫が混じってる。
P14	柱穴痕よくわからない。砂粒の中に小~中礫が入る。		シラス
P15	シラスに粘土がブロックで入る。固い遺物 (陶器の底) 出土。		
P16	P13を切ってる。石英の塊、凝灰岩などが数個たまっている。		シラス。P13の③に続く
P17	角礫と円礫と入る。スミが入っている。全体的にうすい。底が見えている。		
P18	pit 埋土がうすく所々底がみえている。陶器蓋、角礫が数個散らばっている。		
P19	炭化物が全体に入っている。		pit 最外側を囲むように中礫が分布。
P20	陶器片あり。全体的に炭、軽石が散っている。		
P21	陶器 (すり鉢) 片出土。中礫2コ (中心) pit 外側に1コ分布。		
P22	炭化物、軽石が全体的に分布。		
P23	瓦、石、炭化物混入。全体的に pit の形が不鮮明。植物の根が多くあることから、樹根によって攪乱を受けている? P11が切られている。		
P24	底の土がうっすら見えている。軽石混じりの土。		
P25	田んぼの土と同じ。 Hue/N.51 (灰色) 鉄分がにじみ出している。		
P26	軽石混じりの土。pit の径が小さい。直径約38cm		
P27	鉄滓出土。pit の直径が65cm ほど。石が pit の外側の方に数個ある。		
P28	中心部は固くしまっている。中心部シラス (灰色) 外側スミ混じり。P27の土に類似。石が数個 (5コ) ほど pit 外側に分布。		
P29	二枚貝片出土。中心部 P27の土に類似。外側シラス混じり土。巨礫2コ分布 (外側)		

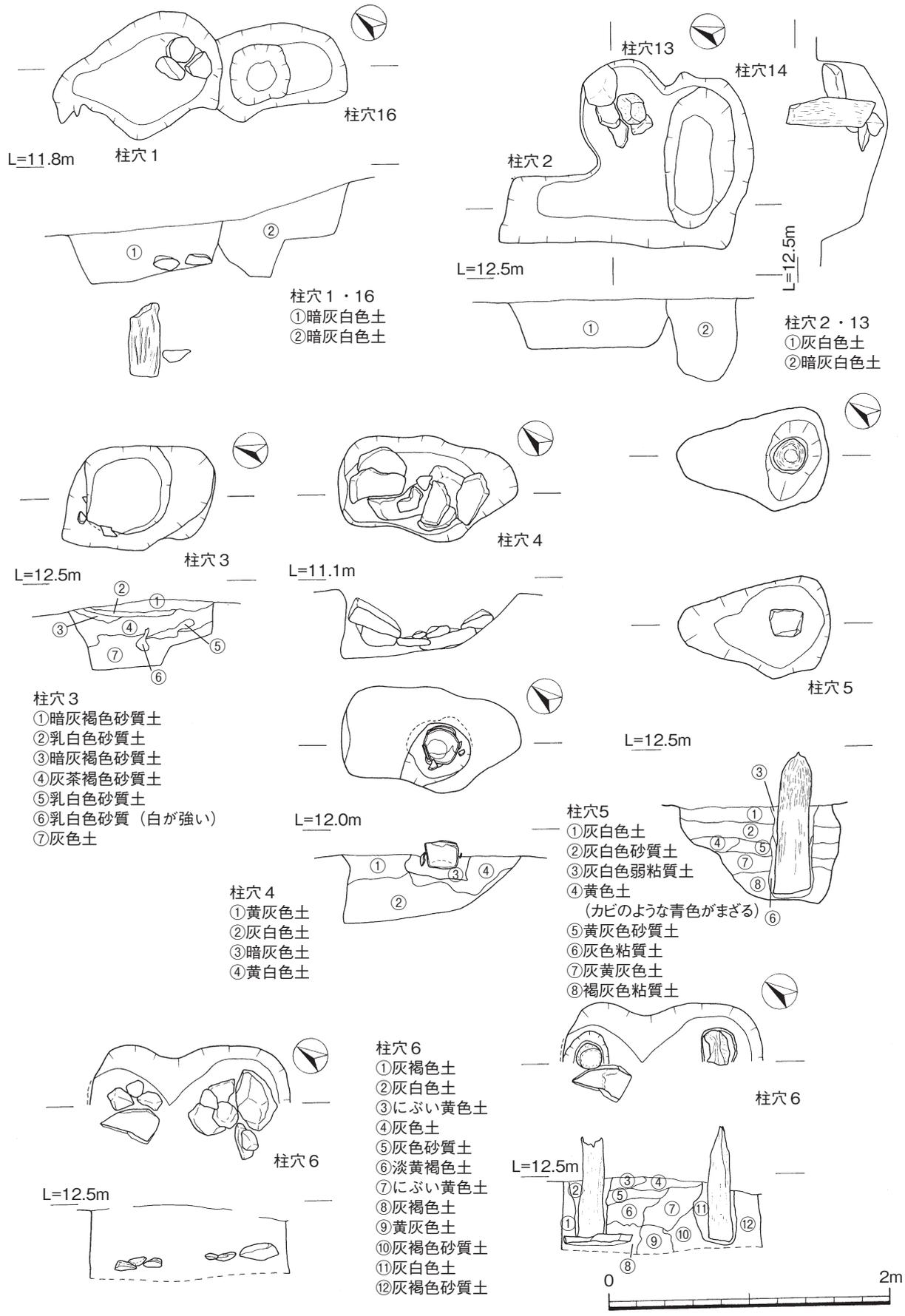
P17~P29 (P25のぞく)  
Hue10Y 0/1~5/1 (灰色)

## 建物跡 2 (第190~192図)

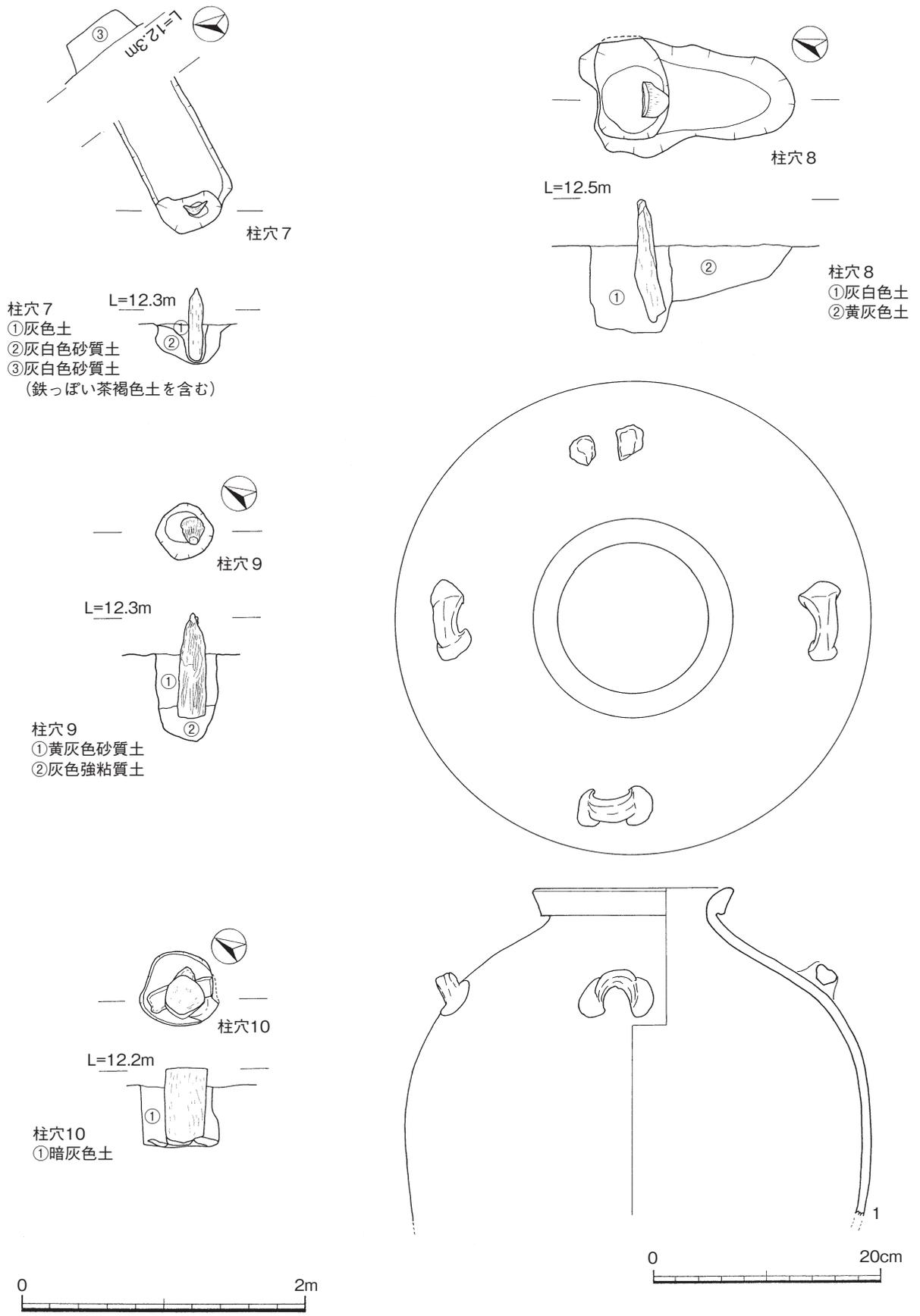
O・P-13区で検出された。完全な建物跡には復元できなかったが、柱穴が並んだ一部を掲載した。柱穴1は柱が残存しており、2個の根石で支えられていた。柱穴2については、検出時は近接する柱穴13・14と埋土も異なり分かれていたが、最終的に一つにつながり切り合い関係はつかめなかった。柱穴3は埋土から苗代川系薩摩焼の小片が検出された。柱穴4は、柱穴下位から平たい礫が敷き詰められるように検出された。柱が沈まないようにしかれた根石と考えられる。また上部からは、苗代川系の薩摩の壺が出土しており、口縁部から胴部までの半分の形状のものが、口縁部を下にして出土した。柱を固定するために利用したものか、または地鎮のためか、詳細は不明である。柱穴5は柱が残存していた。柱穴6には根石が2か所確認され、柱が2本建っていた。根石の回りは粘土が詰められている。柱穴7・8・9は柱が残存していた。柱穴10は下部に平たい石が敷き詰められ、やや太めの柱が建てられていた。



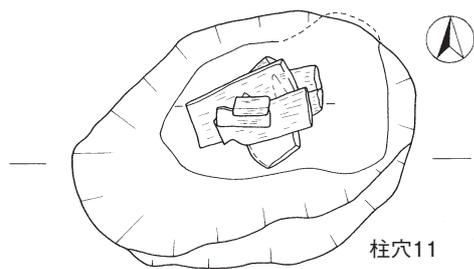
第190図 建物跡 2



第191図 柱穴1

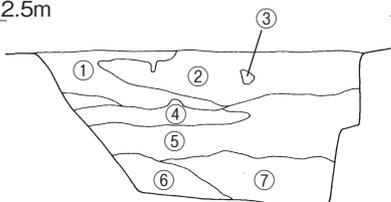


第192図 柱穴 2 及び出土遺物

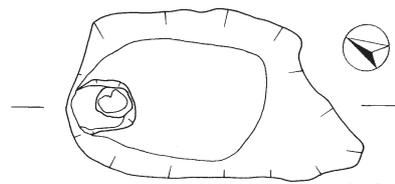


柱穴11

L=12.5m

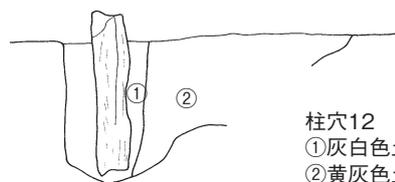


- 柱穴11  
 ①黄灰白色土  
 ②暗灰白色土  
 ③黒褐色土  
 ④灰白色砂質土  
 (粒子が細かくサラサラ)  
 ⑤明灰白色土  
 ⑥黄灰白色土  
 ⑦灰白色土



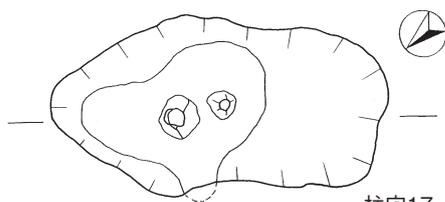
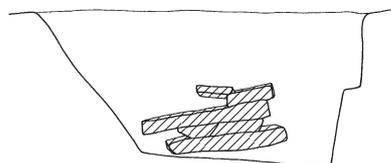
柱穴12

L=12.5m



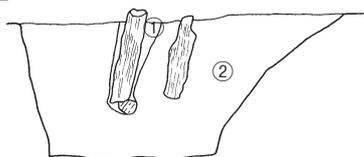
- 柱穴12  
 ①灰白色土  
 ②黄灰色土

L=12.5m

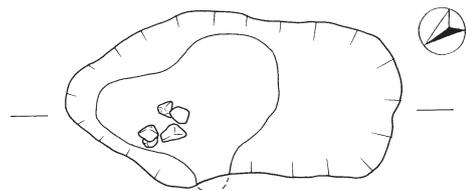


柱穴17

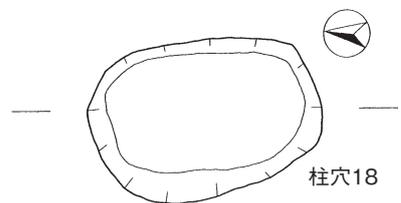
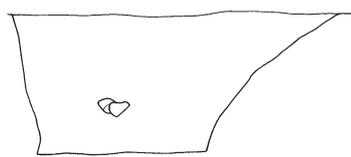
L=12.4m



- 柱穴17  
 ①灰白色土 (粘質土)  
 ②灰白色砂質土

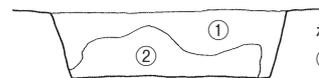


L=12.4m



柱穴18

L=12.5m



- 柱穴18  
 ①乳白色土 (茶褐色(さびた様な土)を含む)  
 ②灰茶褐色砂質土 (茶褐色(さびた様な土)を含む)



柱穴15

L=12.2m



- 柱穴15  
 ①黄灰色土



柱穴19

L=12.1m



- 柱穴19  
 ①黄灰色砂質土



第193図 柱穴3

建物跡 1 観察表

柱穴番号	柱間 (cm)	柱穴番号	柱間 (cm)	柱穴番号	柱間 (cm)
P35-P34	108.0	P34-P33	128.0	P33-P30	100.0
P35-P8	118.0	P8-P44	127.0	P44-P45	116.0
P30-P25	122.0	P25-P24	108.0	P24-P11	72.0
P23-P22	83.0	P22-P17	122.0	P17-P45	125.0

柱穴番号	深さ (cm)	長径 (cm)	短径 (cm)	掘り方
P35	20.0	80.0	66.0	円
P34	14.0	104.0	98.0	円
P33	12.0	80.0	77.0	円
P30	40.0	96.0	90.0	円
P8	24.0	80.0	72.0	円
P44	24.0	86.0	71.0	円
P45	24.0	83.0	76.0	円
P25	41.0	65.0	62.0	円
P24	41.0	100.0	97.0	円
P11	35.0	74.0	(52.0)	楕円
P17	8.0	68.0	54.0	楕円
P22	12.0	80.0	76.0	円
P23	(24.0)	118.0	48.0	楕円

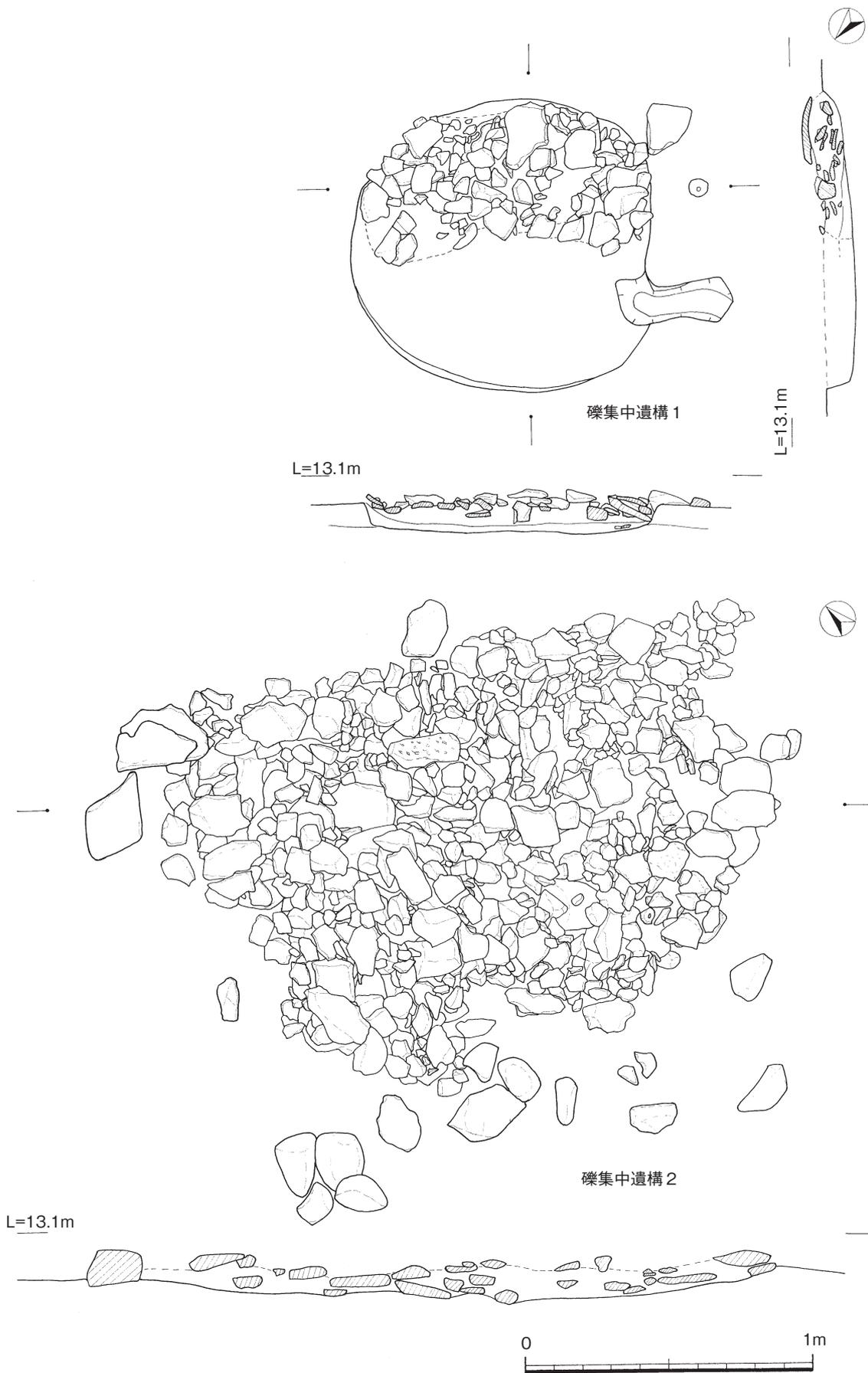
柱穴番号	柱間 (cm)								
P52-P53	40.0	P53-P54	136.0	P54-P55	23.0	P55-P56	104.0	P56-P32	40.0
P51-P46	70.0	P46-P43	81.0	P43-P42	136.0	P42-P41	107.0	P41-P40	121.0
P39-P38	145.0	P26-P27	81.0	P27-P28	118.0	P28-P29	72.0		
P4-P3	57.0	P3-P2	150.0	P2-P1	122.0				

柱穴番号	深さ (cm)	長径 (cm)	短径 (cm)	掘り方
P52	13.0	73.0	70.0	円
P53	18.0	58.0	54.0	円
P54	10.0	80.0	75.0	円
P55	44.0	76.0	64.0	円
P56	10.0	134.0	104.0	楕円
P32	35.0	94.0	86.0	楕円
P51	19.0	98.0	95.0	円
P46	17.0	60.0	50.0	楕円
P43	10.0	92.0	76.0	楕円
P42	6.0	69.0	57.0	楕円
P41	( 6.0)	90.0	76.0	楕円
P40	5.1	82.0	65.0	楕円
P39	23.0	63.0	62.0	円
P38	27.0	58.0	46.0	楕円
P26	( 5.0)	56.0	50.0	円
P27	10.0	70.0	64.0	円
P28	10.0	78.0	70.0	円
P29	10.0	74.0	20.0	楕円
P4	20.0	85.0	66.0	楕円
P3	23.0	60.0	55.0	円
P2	22.0	60.0	56.0	円
P1	20.0	63.0	53.0	円

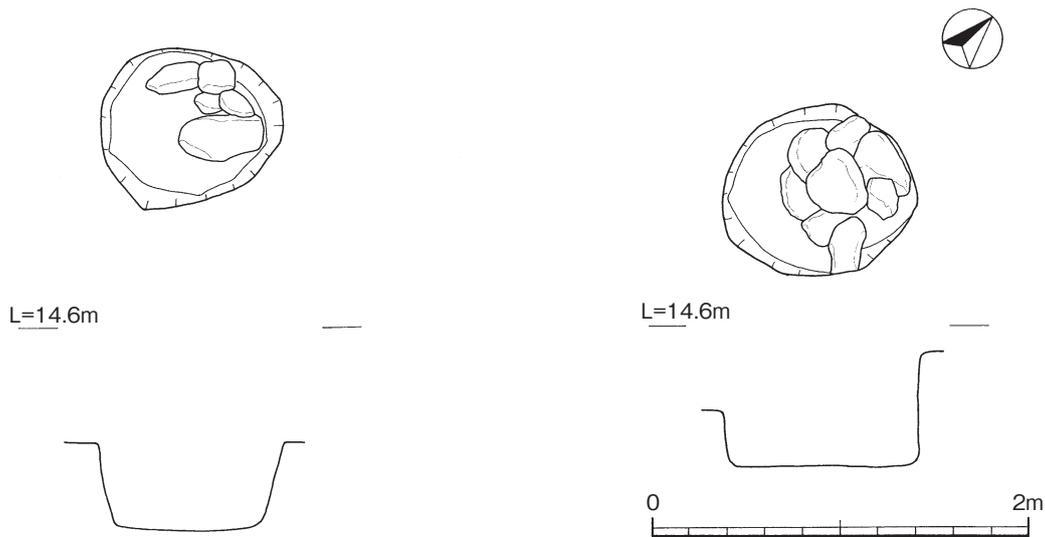
建物跡 2 観察表

柱穴番号	柱間 (cm)	柱穴番号	長径 (cm)	短径 (cm)	掘り方
P1-P2	350.0	P1	(110.0)	100.0	楕円
P2-P3	380.0	P2	125.0	45.0	楕円
P3-P4	200.0	P3	109.0	70.0	楕円
P4-P5	320.0	P4	129.0	70.0	楕円
P5-P6	190.0	P5	115.0	80.0	楕円
P6-P7	210.0	P6	150.0	—	楕円
P7-P8	190.0	P7	( 95.0)	50.0	楕円
P5-P9	240.0	P8	145.0	90.0	楕円
P9-P10	270.0	P9	40.0	40.0	円
		P10	95.0	55.0	楕円

挿図番号	掲載番号	種別	分類	器種	産地	出土区	取り上げ番号	層位	法量 (cm)			胎土の色調	釉薬の色調	施釉	時期	備考
									口径	底径	器高					
第192図	1	陶器	壺	壺	薩摩苗代川系	G地点	—	4	17.4	—	—	暗赤褐色	鉄釉	残存部全面施釉	18世紀後半	



第194図 礫集中遺構 1・2



第195図 不明遺構

### その他の柱穴（第191・193図）

柱穴11～柱穴19は建物跡2の周辺に検出された柱穴である。柱穴11は土坑内からは板状の木片が7枚積み重ねられた状態で出土した。木片は加工されたものや、今から加工しようと線を引いたもの等が見られた。また、5枚目の木片と最下位の6・7枚目の木片の間には石が挟まれていた。柱穴12は柱が残存していた。柱穴13は柱が残存し、その柱を支えるように寝石が4個詰められていた。柱穴14は柱や寝石は検出されなかった。柱穴15はやや細い柱が残存していた。柱穴16は柱や寝石は検出されなかった。柱穴17は二本の柱が残存しており、斜めに刺さっていた。下部からは寝石が検出された。柱穴18は柱や寝石は検出されなかった。柱穴19はやや細い柱が残存していた。柱穴15と柱穴19の柱については、建物用の柱というより杭の可能性が考えられる。

### 礫溜まり（第194図）

N・O-15区で2基検出されたが、用途等の詳細は不明である。

#### 礫溜まり1（第194図）

N・O-15区で検出された。礫溜まりの部分は長径100cm、短径50cmを計り、直径約100cm、深さ約10cmの浅い掘り込みの一方に片寄っている。石材は軟質凝灰岩で、扁平なものが多く見られる。風化のためか脆くなった石も見られる。遺物は出土しなかった。

#### 礫溜まり2（第194図）

O-15区で検出された。長径約240cm、短径約150cmを計り、石材は周辺の石垣と同様の軟質凝灰岩である。礫とともに瓦や薩摩焼の小片も出土しているが、詳細な時期は判断できず、図化も不可能であった。

### 不明遺構（第195図）

N調査区、n-1で検出された。鶴嘴等で凝灰岩の地山を平らに整地し、凝灰岩を削り抜いてピットをつくる。ピット内には根石の様な石がはいっており、柱穴の可能性も考えられるが、ピットは2基のみで周辺に柱穴らしきものはなく、詳細が不明な遺構である。

## (2) 遺物

郷土年寄屋敷跡からは大量の陶磁器が出土した。そのほとんどは肥前系陶磁器と在地の薩摩焼であるが、京焼や関西系、瀬戸・美濃系の陶磁器も多くはないが見られる。

陶磁器の分類については、まず磁器、陶器等の材質別に大分類し、さらに器種ごとに細分化を行った。紙面構成の都合上、産地や生産年代等については前後することがあるが、それらの詳細については観察表にまとめた。以下、特徴的な所見が見られる遺物についてのみ述べることにしたい。

### 磁器 (第196～220図)

#### 碗類 (第196～201図)

1～22は丸碗である。薄手の丸碗から「くらわんか碗」と呼ばれる大量生産された厚手のものまで見られる。1は一重編み目文の描かれたやや深めのものである。4は外面にコンニャク印判で四方襷文が押される。5は厚手で小振りのものである。11は見込みに幅広の蛇の目釉剥ぎが見られる。13は高台が低く、線書きによるタコ唐草文が描かれる。14は外面に花唐草が描かれる。嬉野地方の窯産の可能性が考えられる。17は波佐見焼で、外面腰部から高台内面にかけて露胎する。見込みに蛇の目釉剥ぎが施される。18は見込みに手書き五弁花が描かれる。20は外面青磁釉の碗である。22は波佐見焼の碗で、丸文が描かれる。

23は朝顔形の碗で、白磁である。

24は望料形の碗である。見込みに虫文が見られる。

25・26は腰部が張るタイプの湯飲み碗である。見込みにはコンニャク印判五弁花が見られる。

27・28は小広東碗である。外面は梵字が簡略化された文様が描かれ、見込みには小さな虫文が描かれる。また、見込みの素地には削りの痕跡が観察される。28は在地系のものである可能性が高い。

29～38は広東碗である。29は肥前系のもので、高台が細く垂直に削り出される。31は見込みに「しらさぎ」の文様が描かれる。32・34・37は外面に山水文が描かれたものである。透明釉が青みがかっており、37のように呉須が滲んでいることから、在地系のものであると思われる。36は小形のものである。

38は平形の碗である。呉須の発色が悪く、灰色がかっており、在地系のものであると思われる。

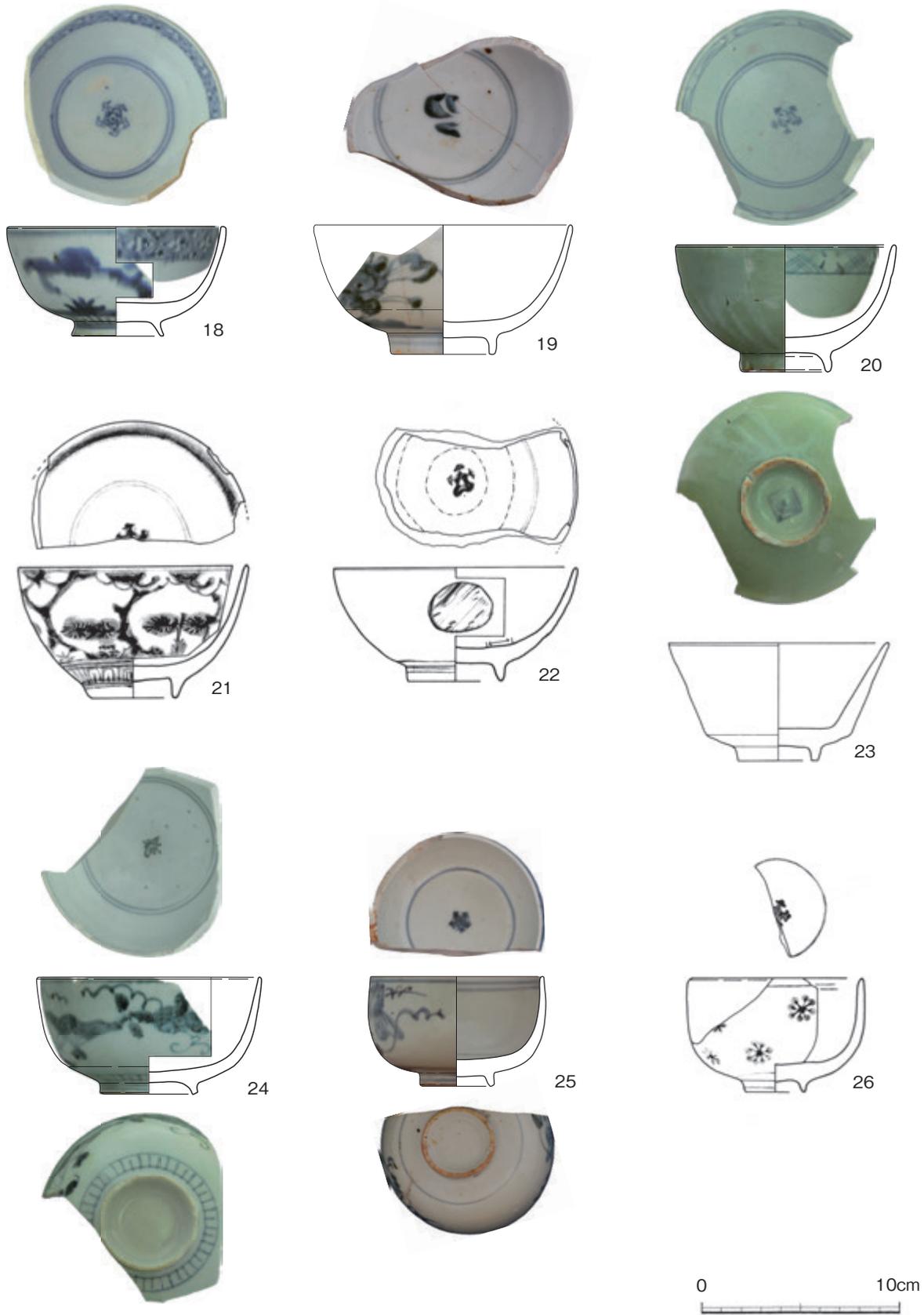
39～53は端反碗である。透明釉が青みがかり、呉須の発色が悪いものが多く見られ、それらについては在地系の可能性が高い。42は波佐見焼である。見込みに「寿」の未字が描かれる。43は見込みに釜道具4足の足つきハマを使用した目跡が残る。44は見込みに窯道具3足の足つきハマを使用した目跡が残る。45は大振りの端反碗で、胎土は灰色を呈する。背面には鳳凰文が描かれ、見込みには滲んでいるがコンニャク印判が見られる。49は清朝磁器の影響を受けた文様が描かれるもので、呉須が滲み在地系のものであると思われる。54は清朝磁器で、景德鎮窯系のものである。

55・56は統制食器である。「65」の数字が窺える。

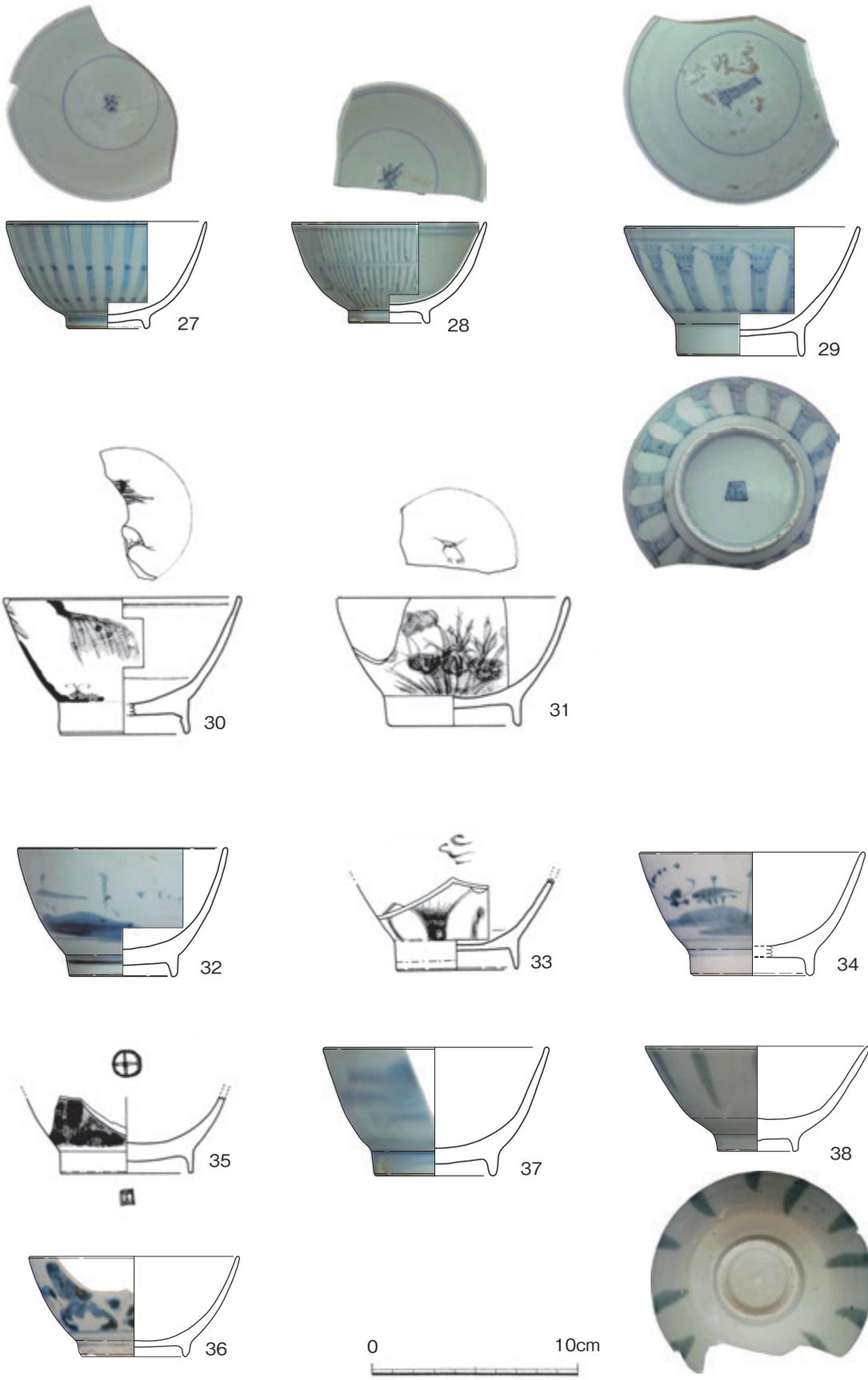
57～65は筒形碗である。57は大振りのもので、外面に菊花散らし文が描かれる。58は見込みにコンニャク印判五弁花が見られる。59は外面が青磁釉のもので、見込みにコンニャク印判五弁花が観



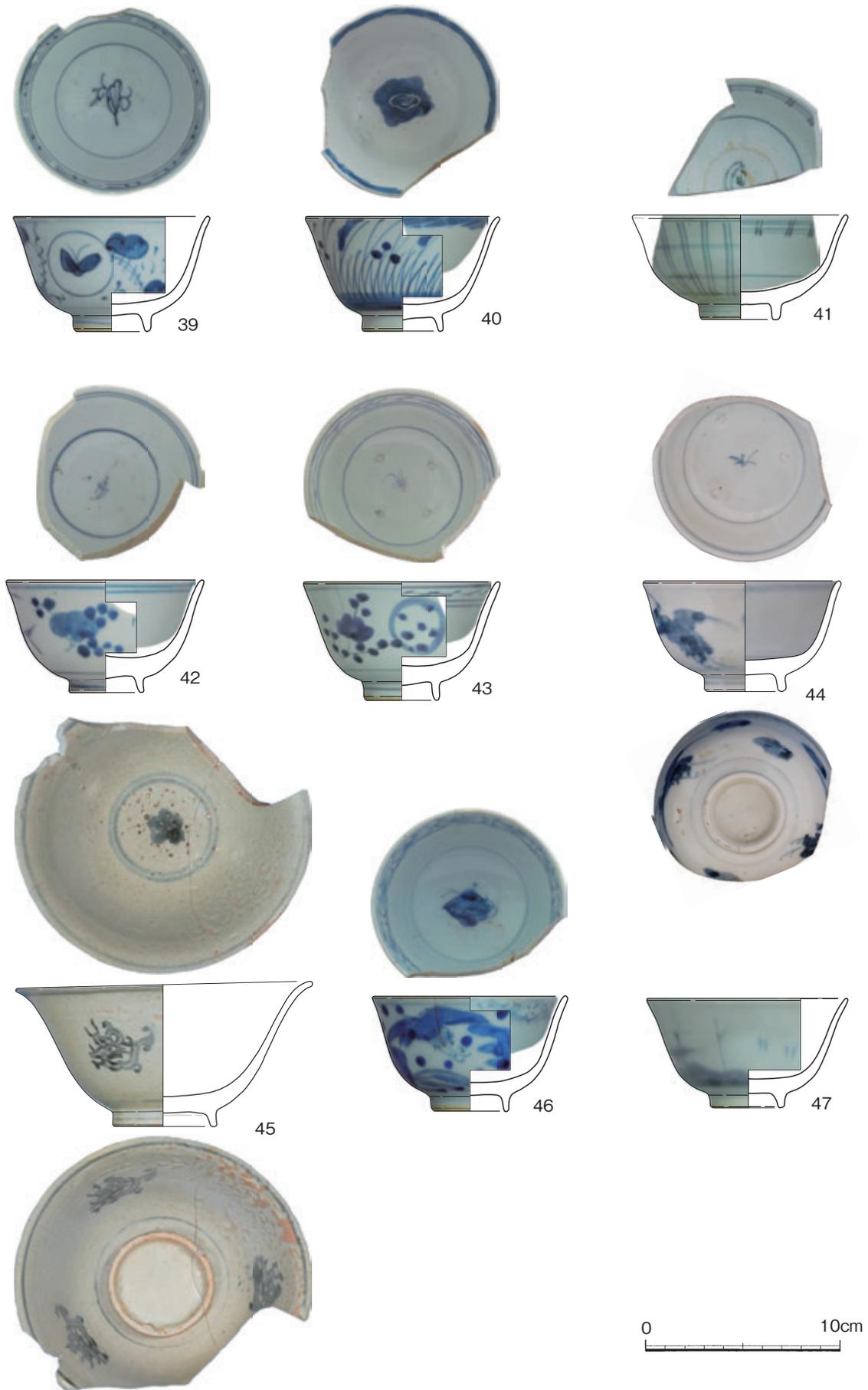
第196図 磁器 1 碗類



第197図 磁器2 碗類



第198図 磁器 3 碗類



第199図 磁器 4 碗類

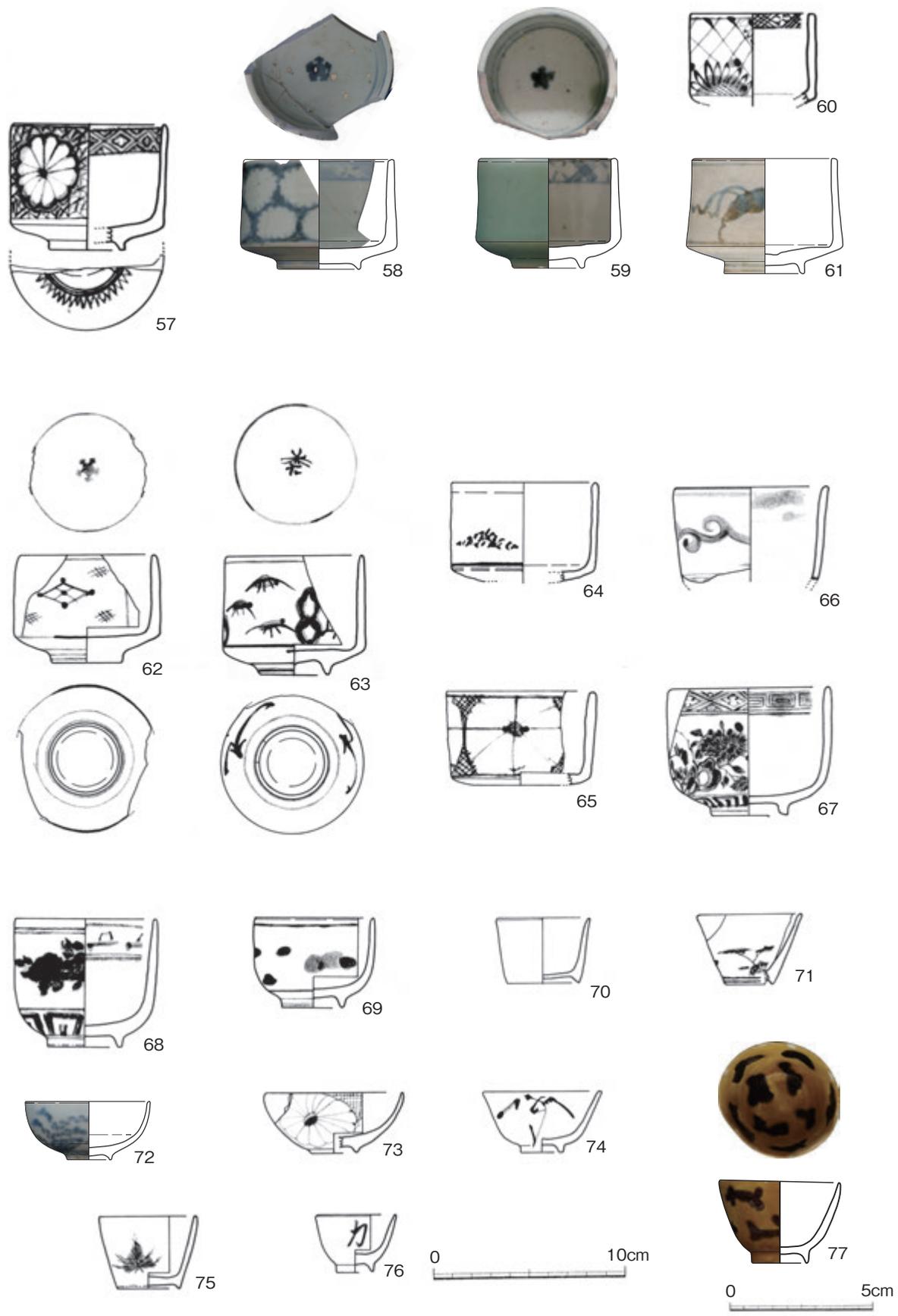
察される。60はやや小振りのものである。61は胎土が灰白色を呈する。62は見込みにコンニャク印判五弁花が見られる。63は在地系と思われるものである。外面は雪持笹文、内面は虫文が描かれる。64・65は呉須の発色が悪く灰色気味である。

66～69は丸形の湯飲み碗である。66は腰部は欠損しているが、丸形になるものである。67・68はやや大振りのものである。69は小振りのもので、在地系のもと思われる。

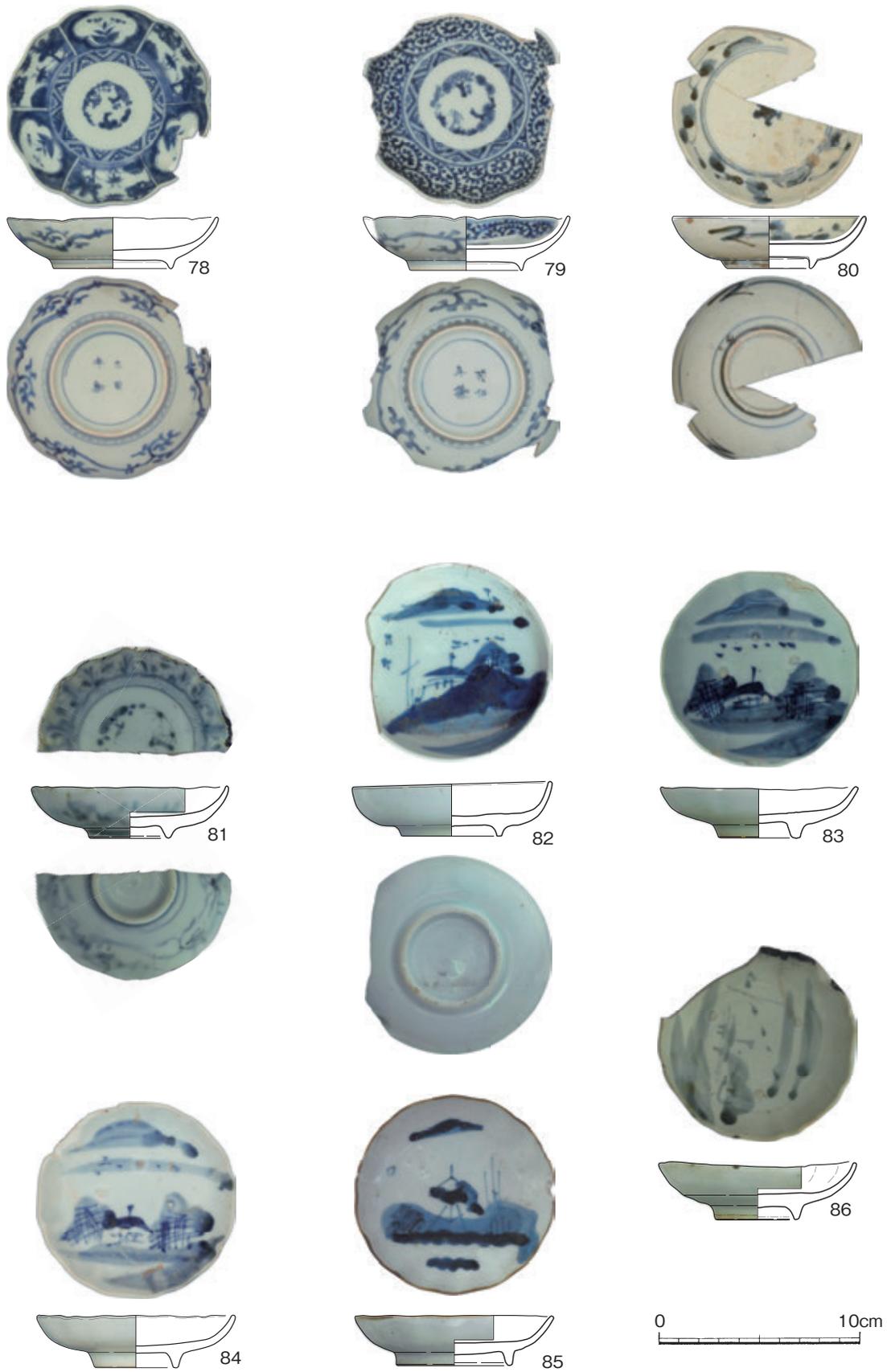
70～77は小坏である。70・71・75は、高台と胴部との境が明瞭でなく、一続きになるもので、先端は細く尖る。72・73は高台径が小さく、口径は大きいものである。74は外面に笹文が描かれるものである。76は「カ」の文字が描かれたもので、特注品と思われる。77は長崎県長与窯産または在地の平佐焼と思われる三彩の小坏である。



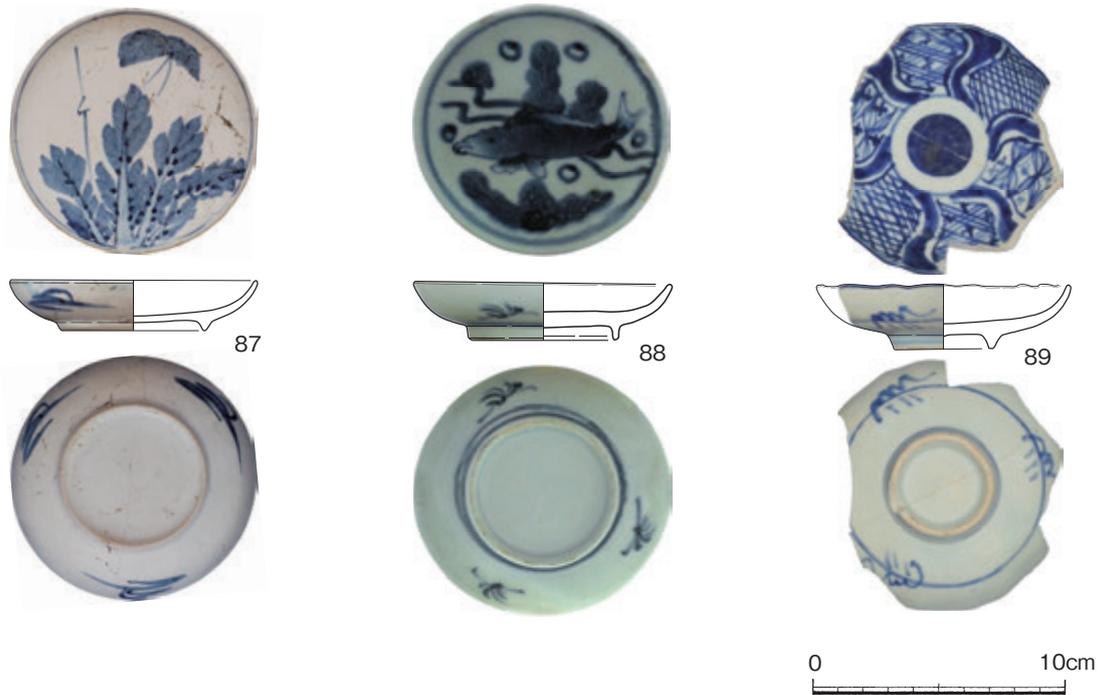
第200図 磁器 5 碗類



第201图 磁器6 碗類



第202図 磁器 7 皿類



第203図 磁器 8 皿類

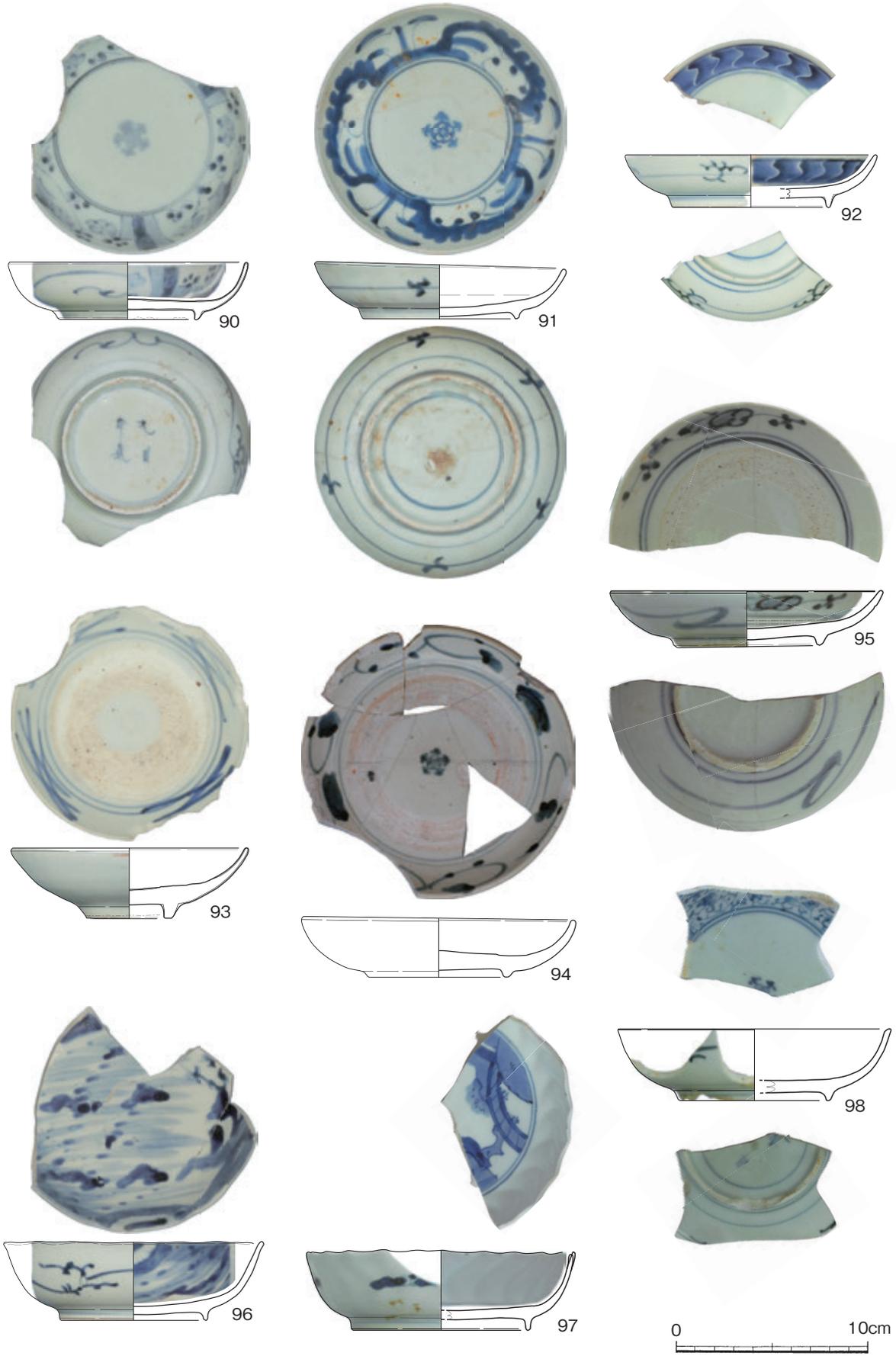
#### 皿類 (第202～211図)

78～119は皿である。口径2～3寸のものを小皿、一般に五寸皿と呼ばれる口径5寸前後のもの、6寸～8寸前後のものを中皿、9寸以上のものを大皿とした。

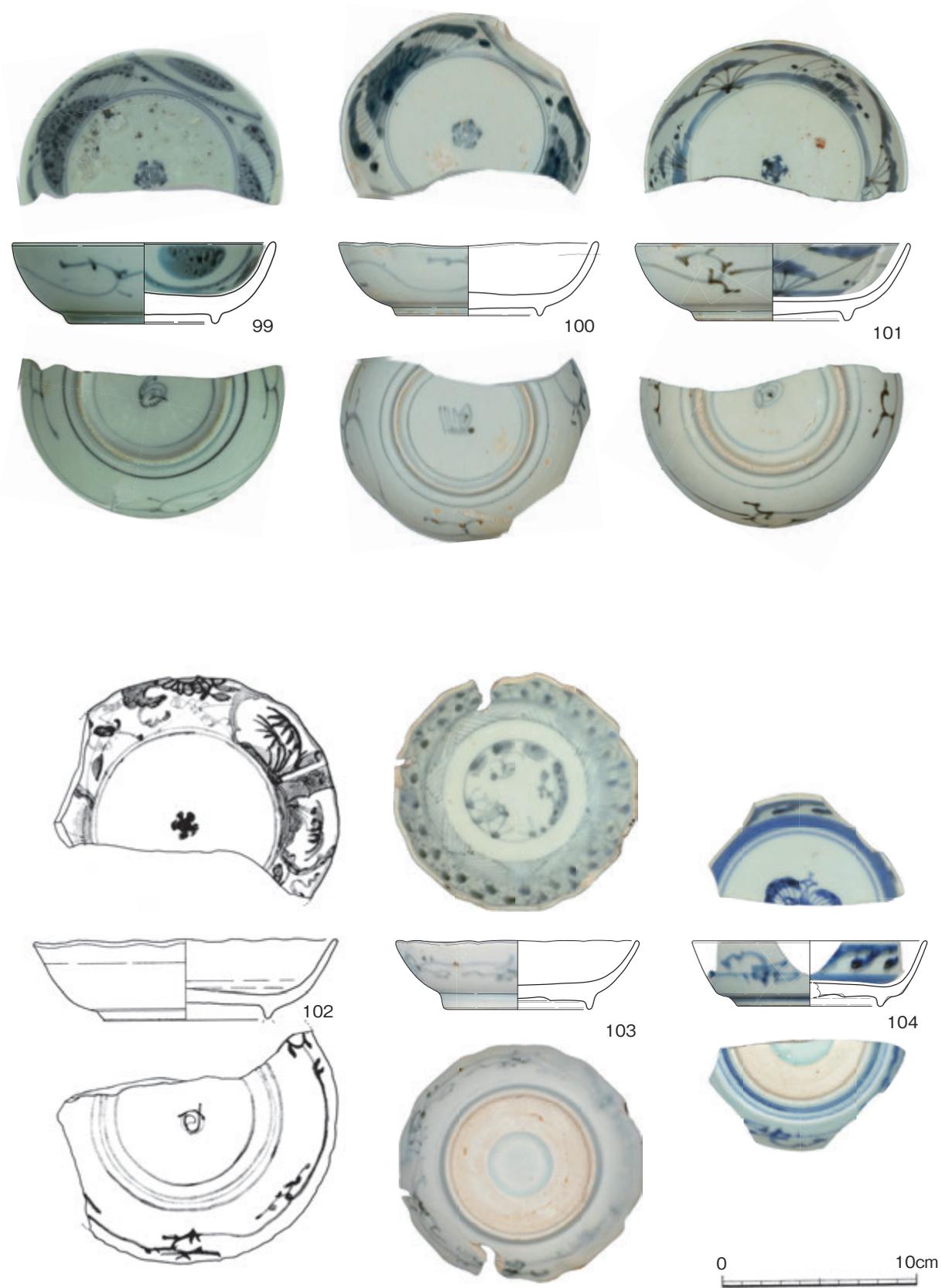
78～89は小皿に分類されるものである。78・79は稜花皿である。78は裏銘に「大明年製」、79は「成化年製」が見られる。81～86は在地系の皿である。81は稜花皿で、青みがかった透明釉に呉須が滲んでいる。82～86は見込みに山水文が描かれており、82を除き稜花皿である。85は口唇部が口紅となる。86は灯明皿として使用されたのか、口縁部の一部に煤が付着する。87は焼成不良のため透明釉が熔けず、表面が白濁している。88・89は銅板転写のコバルトを使用した近代以降のものである。

90～107は中皿である。90～95は深さの浅いものである。90は「大明年製」の裏銘が入る。91は見込みに手書き五弁花が見られる。92は墨弾きで文様が描かれる。93が在地系のもので、見込みに幅広い蛇の目釉剥ぎが施され、アルミナが塗布される。高台は太く、端部は平らに削り出される。94は波佐見焼である。見込みは蛇の目釉剥ぎが施される。96～107は深さの深いものである。96は裏銘に「渦福」が見られる。98は裏銘に「年製」の二文字が観察されるが、欠損のためそれ以前は不明である。また、ハリ支えの痕跡も残る。99～102は見込みにコンニャク印判の五弁花が押され、裏銘に「渦福」が入るものである。99は波佐見焼である。103～107は蛇の目凹型高台のものである。103は在地系のものである。105は白化粧土をかけた後、呉須で文様を描いており、志田焼と思われる。

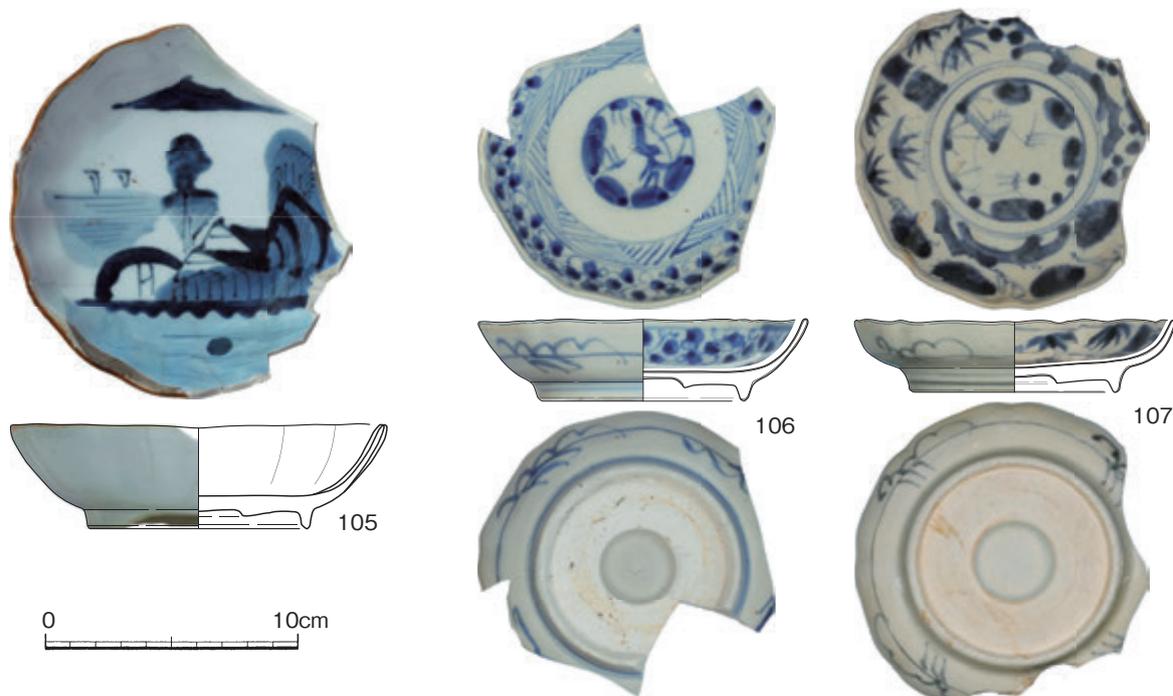
108～117は大皿に分類されるものである。108は波佐見焼である。高台内底にハリ支えの目跡が残る。109は高台内底に3か所以上のハリ支えの目跡が見られる。114は志田焼と思われるもので、高台内底にハリ支えの目跡が観察できる。また、文字を略した裏銘が書かれる。115は波佐見焼で



第204図 磁器9 皿類



第205図 磁器10 皿類



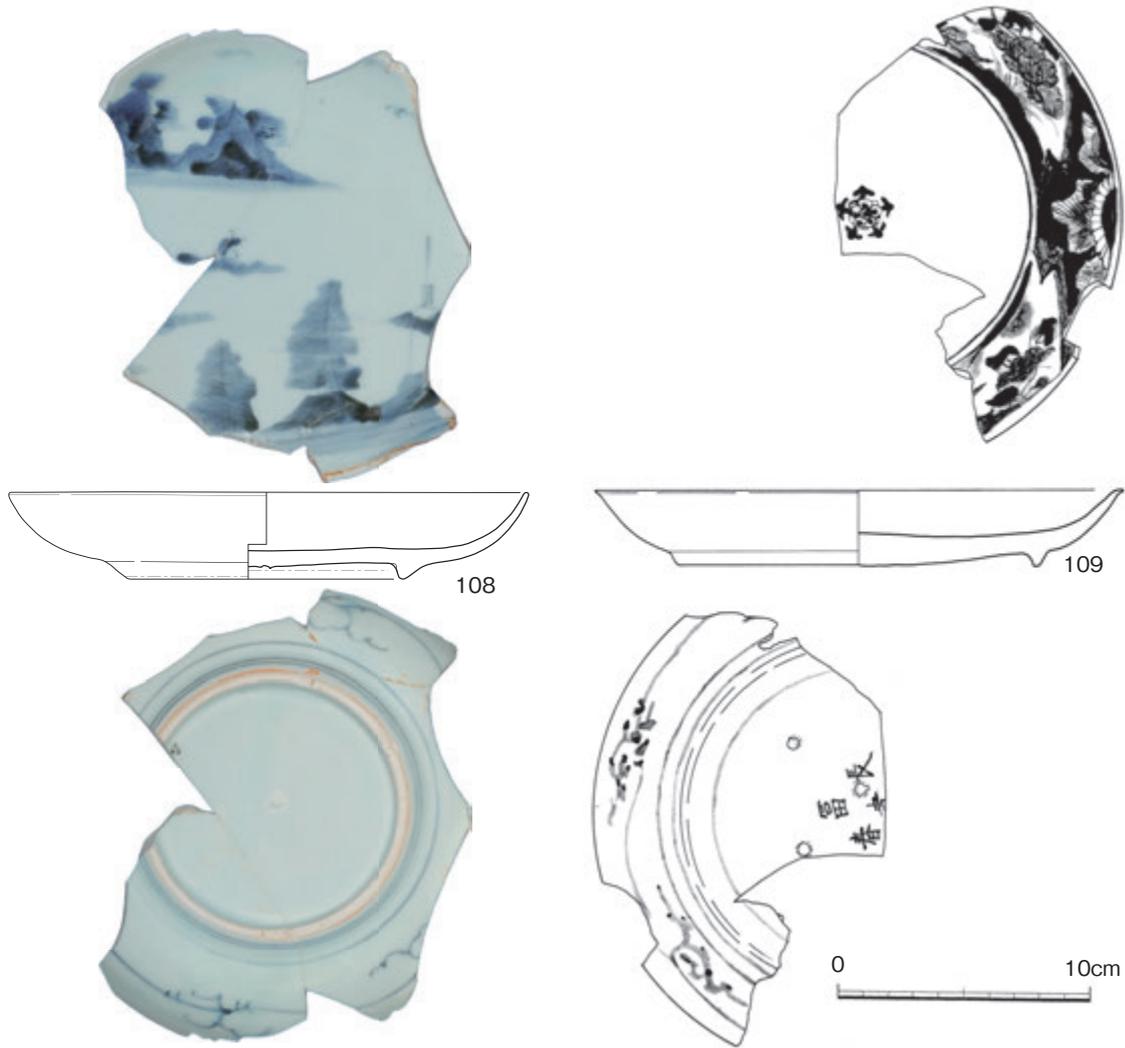
第206図 磁器11 皿類

ある。見込みに手書き五弁花，裏銘に「渦福」が見られる。116・117は口縁部が折れ縁になるものである。どちらも高台は蛇の目凹型高台で，アルミナが塗布されている。

118・119はその他の器形を呈する皿である。118は外面青磁釉のものである。119は角皿で，やや青みがかった透明釉がかかる。高台内底にはアルミナが付着している。

磁器観察表 1

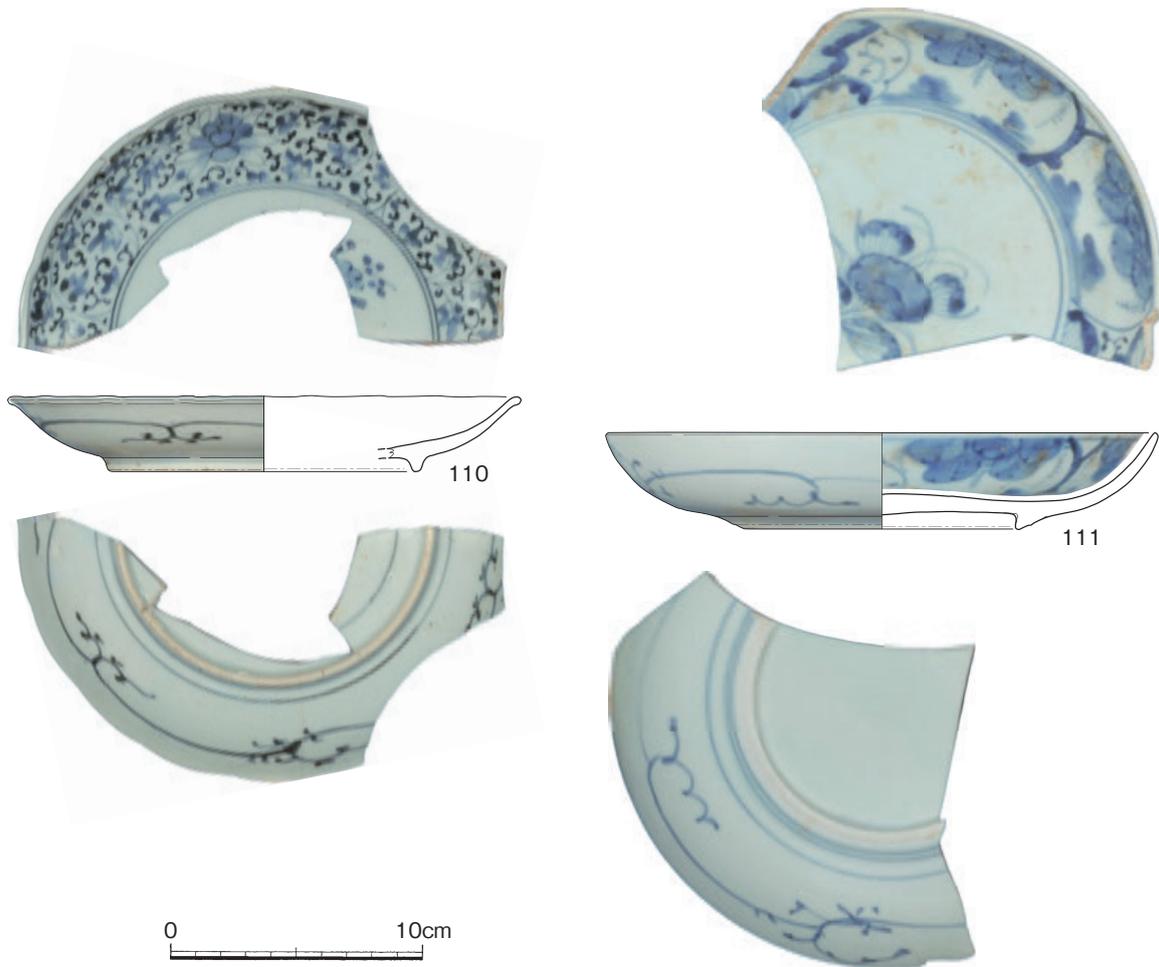
挿入 番号	掲載 番号	種別	分類	器種	産地	出土区	法量 (cm)			胎土の 色 調	釉薬の種類 色 調	施釉部位	時期	備 考
							口径	底径	器高					
第 196 図	1	染付	碗	丸碗	肥前	G地点	10.1	4.1	7.4	白色	透明釉	畳付は釉剥ぎ	1650～60年代	一重編み目文
	2	染付	碗	丸碗	肥前	G地点	10.8	4.2	5.5	白色	透明釉	畳付は釉剥ぎ	18世紀後半	梅花文 見込みに蛇目釉剥ぎ
	3	染付	碗	丸碗	肥前	G地点	10.6	3.9	5.9	白色	透明釉	畳付は釉剥ぎ	18世紀前半	雪の輪梅花文
	4	染付	碗	丸碗	肥前	G地点	10.3	4.1	5.5	灰白色	透明釉	畳付は釉剥ぎ	18世紀前半	コンニャク印判
	5	染付	碗	丸碗	肥前	G地点	9.6	3.9	5.1	灰白色	透明釉	畳付は釉剥ぎ	18世紀後半	雪の輪花文
	6	染付	碗	丸碗	肥前系	G地点	10.8	4.7	5.1	灰白色	透明釉	畳付は釉剥ぎ	18中～後半	花文 見込みに蛇の目釉剥ぎ
	7	染付	碗	丸碗	肥前	G地点	11.4	4.8	5.9	白色	透明釉	畳付は釉剥ぎ	17世紀第4四半期～18世紀後半	花文
	8	染付	碗	丸碗	肥前	G地点	10.0	2.4	5.2	白色	透明釉	畳付は釉剥ぎ	18世紀第2・第3四半期	一重編み目文
	9	染付	碗	丸碗	肥前系	G地点	9.7	4.0	5.1	灰白色	透明釉	畳付は釉剥ぎ	18世紀後半	二重編み目文
	10	染付	碗	丸碗	肥前	G地点	10.2	—	—	白色	透明釉	畳付は釉剥ぎ	18世紀前半	丸文
	11	染付	碗	丸碗	肥前系	G地点	13.4	4.6	4.5	灰白色	透明釉	畳付は釉剥ぎ	18世紀第4四半期	見込みに蛇の目釉剥ぎ
	12	染付	碗	丸碗	肥前系	G地点	11.2	—	—	灰白色	透明釉	畳付は釉剥ぎ	18世紀後半	花文
	13	染付	碗	丸碗	肥前	G地点	10.0	—	4.7	白色	透明釉	畳付は釉剥ぎ	18世紀後半	蛸唐草文
	14	染付	碗	丸碗	肥前	G地点	10.0	4.6	5.6	白色	透明釉	畳付は釉剥ぎ	18世紀前半	花唐草文
	15	染付	碗	丸碗	肥前	G地点	12.0	4.6	4.8	灰白色	透明釉	畳付は釉剥ぎ	18世紀後半	笹文 見込みに蛇の目釉剥ぎ アルミナを塗布
	16	染付	碗	丸碗	肥前系	G地点	11.4	4.4	6.1	灰白色	透明釉	畳付は釉剥ぎ	18世紀第2・第3四半期	松文
	17	染付	碗	丸碗	肥前 (波佐見)	G地点	—	2.6	—	灰白色	透明釉	外面腰部～高台内底は無釉	17世紀後半	見込みに蛇の目釉剥ぎ
第 197 図	18	染付	碗	丸碗	肥前	G地点	10.9	4.6	5.6	灰白色	透明釉	畳付は釉剥ぎ	18世紀第4四半期	松文 見込みに手書き五弁花
	19	染付	碗	丸碗	肥前	G地点	13.0	5.3	6.7	白色	透明釉	畳付は釉剥ぎ	18世紀第2・第3四半期	花文か？
	20	染付	碗	丸碗	肥前	G地点	11.2	4.4	6.5	白色	(外) 青磁釉 (内) 透明釉	畳付は釉剥ぎ	18世紀後半	手書き五弁花 四方禪文 裏銘「渦福」
	21	染付	碗	丸碗	肥前	G地点	11.6	4.4	5.8	白色	透明釉	畳付は釉剥ぎ	18世紀中～後半	松文 コンニャク印判五弁花
	22	染付	碗	丸碗	肥前 (波佐見)	G地点	12.4	4.8	5.8	白色	透明釉	畳付は釉剥ぎ	18世紀後半	丸文 コンニャク印判五弁花 見込みに蛇の目釉剥ぎ



第207図 磁器12 皿類

磁器観察表 2

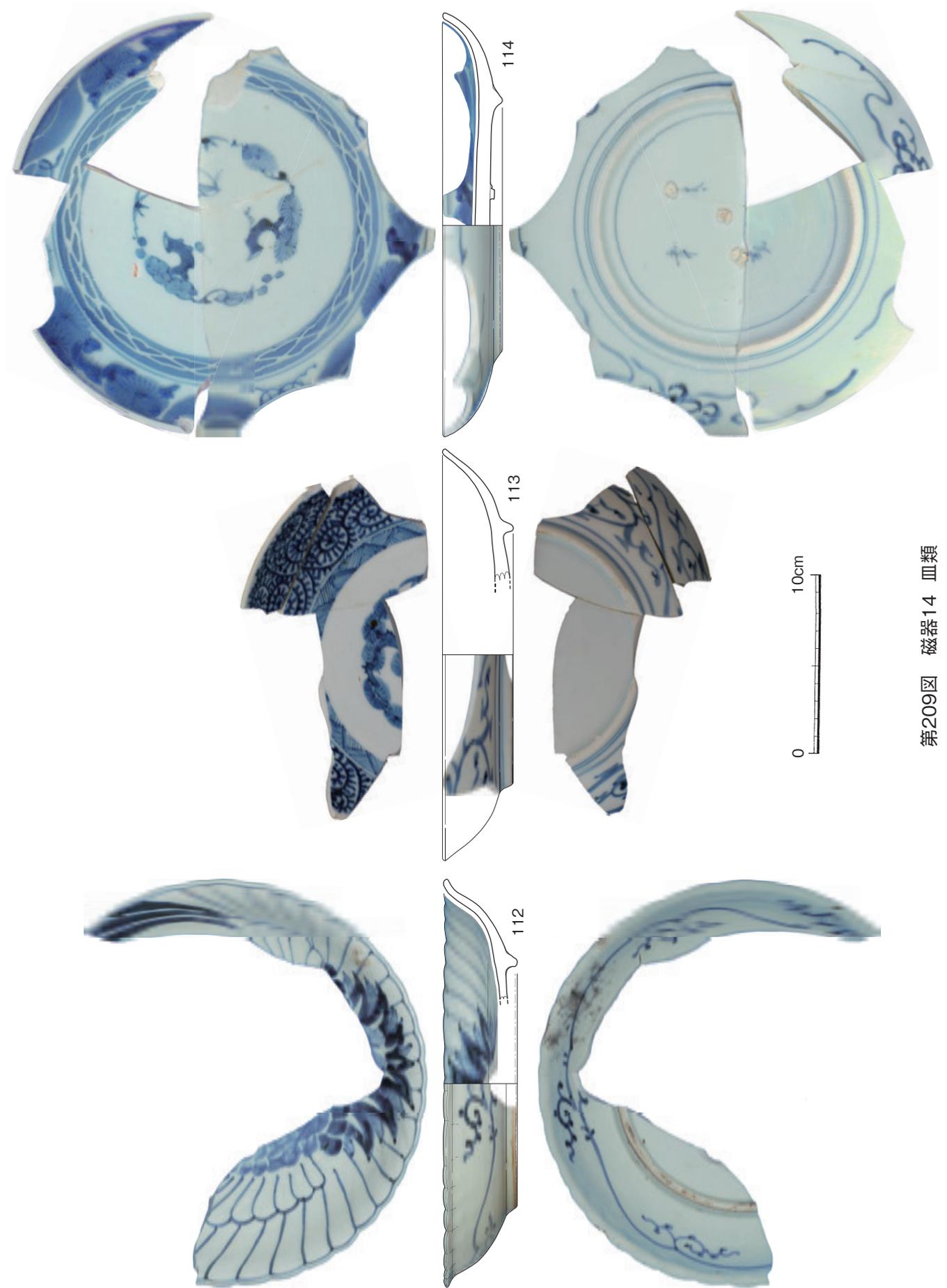
挿図 番号	掲載 番号	種別	分類	器種	産地	出土区	法量 (cm)			胎土の 色 調	釉薬の種類 色 調	施釉部位	時期	備 考
							口径	底径	器高					
第 197 図	23	白磁	碗	朝顔形	肥前系	G地点	11.2	4.0	6.0	白色	透明釉	畳付は釉剥ぎ	18世紀前半	
	24	染付	碗	もうりょう形	肥前	G地点	11.3	4.5	6.0	白色	透明釉	畳付は釉剥ぎ	1770~90年代	見込みに虫文
	25	染付	碗	茶飲み碗	肥前系	G地点	8.7	3.5	5.6	白色	透明釉	畳付は釉剥ぎ	1770~90年代	宝文か? コンニャク印判五弁花
	26	染付	碗	茶飲み碗	肥前	G地点	8.8	3.1	5.8	白色	透明釉	畳付は釉剥ぎ	1770~90年代	花文 コンニャク印判五弁花
第 198 図	27	染付	碗	小広東碗	肥前系	G地点	9.8	3.8	5.4	白色	透明釉	畳付は釉剥ぎ	1770~1810年代	見込みに虫文
	28	染付	碗	小広東碗	肥前系	G地点	9.5	3.9	5.1	白色	透明釉	畳付は釉剥ぎ	1770~1810年代	見込みに虫文 梵字文
	29	染付	碗	広東碗	肥前 (有田)	G地点	11.3	6.1	6.4	白色	透明釉	畳付は釉剥ぎ	1770~1810年代	
	30	染付	碗	広東碗	肥前系	G地点	11.6	6.2	6.8	白色	透明釉	畳付は釉剥ぎ	19世紀前半	鳳凰文
	31	染付	碗	広東碗	肥前 (有田)	G地点	11.4	—	6.4	白色	透明釉	畳付は釉剥ぎ	1780~1810年代	見込み白鷲文
	32	染付	碗	広東碗	肥前系	G地点	10.2	5.0	6.4	白色	透明釉	畳付は釉剥ぎ	18世紀後半~19世紀前半	山水文
	33	染付	碗	広東碗	肥前系	G地点	—	6.0	—	灰白色	透明釉	畳付は釉剥ぎ	1780~19世紀前半	
	34	染付	碗	広東碗	肥前系	G地点	11.0	5.2	6.2	白色	透明釉	畳付は釉剥ぎ	1780~19世紀前半	山水文
	35	染付	碗	広東碗	在地系	G地点	—	6.4	—	白色	透明釉	畳付は釉剥ぎ	1780~19世紀前半	見込みに丸十
	36	染付	碗	小広東碗	肥前系	G地点	10.2	5.0	5.0	白色	透明釉	畳付は釉剥ぎ	1780~19世紀初頭	雪の輪文
第 199 図	37	染付	碗	小広東碗	在地系	G地点	11.0	5.7	6.4	白色	透明釉	畳付は釉剥ぎ	1780~幕末	山水文
	38	染付	碗	在地系	在地系	G地点	11.0	4.3	5.3	白色	透明釉	畳付は釉剥ぎ	幕末	見込みに蛇の目釉剥ぎ
	39	染付	碗	端反碗	肥前系	G地点	10.0	3.8	6.0	白色	透明釉	畳付は釉剥ぎ	18世紀後半~19世紀前半	花と蝶
	40	染付	碗	端反碗	肥前系	G地点	10.0	4.1	6.0	白色	透明釉	畳付は釉剥ぎ	1820~60年代	
	41	染付	碗	端反碗	肥前 (波佐見)	G地点	11.0	3.8	5.5	白色	透明釉	畳付は釉剥ぎ	1820~61年代	
	42	染付	碗	端反碗	肥前系	G地点	10.1	3.7	5.9	白色	透明釉	畳付は釉剥ぎ	1820~62年代	見込み寿
	43	染付	碗	端反碗	肥前系	G地点	10.0	3.7	6.2	白色	透明釉	畳付は釉剥ぎ	1820~63年代	雪の輪花文 見込みに足つきハマの目跡 有り 四か所



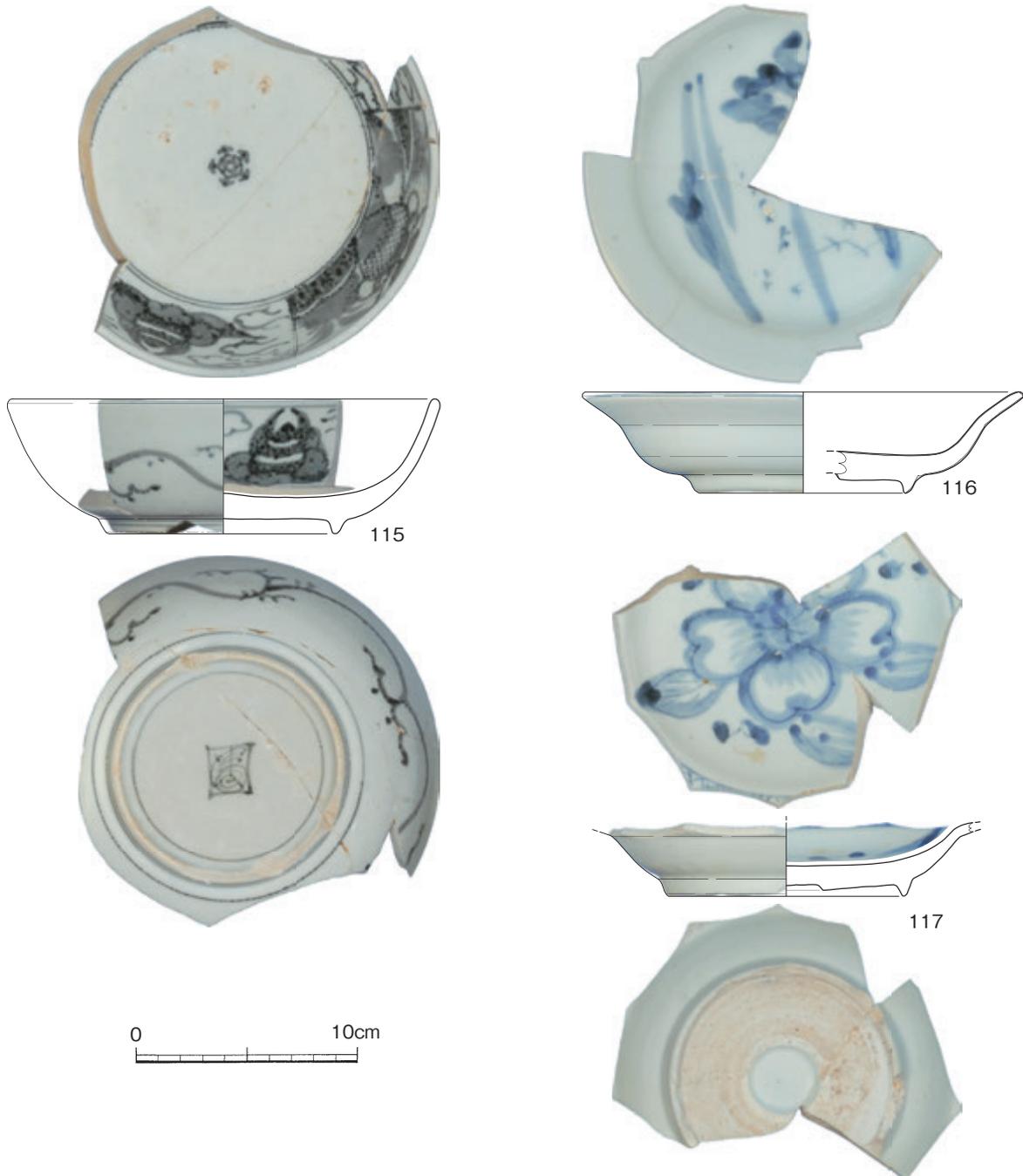
第208図 磁器13 皿類

磁器観察表3

挿図 番号	掲載 番号	種別	分類	器種	産地	出土区	法量 (cm)			胎土の 色 調	釉薬の種類 色 調	施釉部位	時期	備 考
							口径	底径	器高					
第199 図	44	染付	碗	端反碗	肥前系	G地点	10.1	3.9	5.8	白色	透明釉	畳付は釉剥ぎ	18世紀後半～19世紀前半	見込みに足つきハマの目跡 有り 三か所
	45	染付	碗	端反碗	肥前	G地点	15.3	7.6	5.1	灰色	透明釉	畳付は釉剥ぎ	18世紀後半	見込みにコンニャク印判五 弁花
	46	染付	碗	端反碗	在地系	G地点	10.0	3.8	6.0	白色	透明釉	畳付は釉剥ぎ	18世紀後半～19世紀前半	見込みに宝文 雪の輪文
	47	染付	碗	端反碗	在地系	G地点	10.6	3.6	5.8	白色	透明釉	畳付は釉剥ぎ	18世紀後半～19世紀前半	山水文
第200 図	48	染付	碗	端反碗	在地系	G地点	10.0	3.7	5.8	白色	透明釉	畳付は釉剥ぎ	19世紀	見込み荒磯文 花文
	49	染付	碗	端反碗	在地系	G地点	8.4	3.4	4.7	白色	透明釉	畳付は釉剥ぎ	18世紀後半～19世紀	中国磁器の影響
	50	染付	碗	端反碗	在地系	G地点	9.4	3.7	6.3	白色	透明釉	畳付は釉剥ぎ	18世紀後半～19世紀	花文 見込みは荒磯文
	51	染付	碗	端反碗	在地系	G地点	8.0	3.2	4.9	灰白色	透明釉	畳付は釉剥ぎ	18世紀後半～19世紀	花文
	52	染付	碗	端反碗	肥前系	G地点	10.0	4.8	4.8	白色	透明釉	畳付は釉剥ぎ	19世紀前半	
	53	染付	碗	端反碗	在地系	G地点	10.0	4.1	4.9	灰白色	透明釉	畳付は釉剥ぎ	18世紀後半	山水文
	54	染付	碗	端反碗	中国清	G地点	9.6	3.7	5.1	白色	透明釉	畳付は釉剥ぎ	18世紀末～19世紀前半	
	55	染付	碗		肥前	G地点	—	—	—	白色	透明釉	畳付は釉剥ぎ	近代	陶製食器
	56	染付	碗		肥前	G地点	—	4.6	—	白色	透明釉	畳付は釉剥ぎ	近代	陶製食器
第201 図	57	染付	碗	筒型碗	肥前	G地点	8.2	4.0	6.6	白色	透明釉	畳付は釉剥ぎ	1760～80年代	菊文
	58	染付	碗	筒型碗	肥前	G地点	7.7	4.2	5.8	白色	透明釉	畳付は釉剥ぎ	1770～90年代	コンニャク印判五弁花 目跡あり 雪の輪文
	59	染付	碗	筒型碗	肥前	G地点	7.0	3.6	5.8	白色	(外) 青磁釉 (内) 透明釉	畳付は釉剥ぎ	1760～80年代	コンニャク印判五弁花 四方標文
	60	染付	碗	筒型碗	肥前	G地点	6.4	—	—	白色	透明釉	畳付は釉剥ぎ	1770～90年代	格子に花文
	61	染付	碗	筒型碗	肥前系	G地点	7.2	4.1	6.1	灰色	透明釉	畳付は釉剥ぎ	1780～19世紀初頭	
	62	染付	碗	筒型碗	肥前	G地点	7.0	3.6	5.7	灰色	透明釉	畳付は釉剥ぎ	1780～1810年代	コンニャク印判五弁花 四方標文
	63	染付	碗	筒型碗	在地系か?	G地点	7.2	3.6	6.3	灰色	透明釉	畳付は釉剥ぎ	1780～19世紀初頭	雷持ち笹文 見込み虫文
	64	染付	碗	筒型碗	肥前系	G地点	7.6	—	—	白色	透明釉	畳付は釉剥ぎ	1780～19世紀初頭	
	65	染付	碗	筒型碗	肥前	G地点	7.8	—	4.9	白色	透明釉	畳付は釉剥ぎ	1780～19世紀初頭	花文
	66	染付	碗	湯飲み碗	肥前系	G地点	8.0	—	—	白色	透明釉	畳付は釉剥ぎ	1820～60年代	
	67	染付	碗	湯飲み碗	肥前系	G地点	8.4	4.0	6.7	白色	透明釉	畳付は釉剥ぎ	幕末	花文
	68	染付	碗	湯飲み碗	肥前系	G地点	7.2	3.8	6.7	白色	透明釉	畳付は釉剥ぎ	幕末	花文
	69	染付	碗	湯飲み碗	肥前系	G地点	6.2	3.2	4.7	白色	透明釉	畳付は釉剥ぎ	19世紀前半～中葉	



第209図 磁器14 皿類



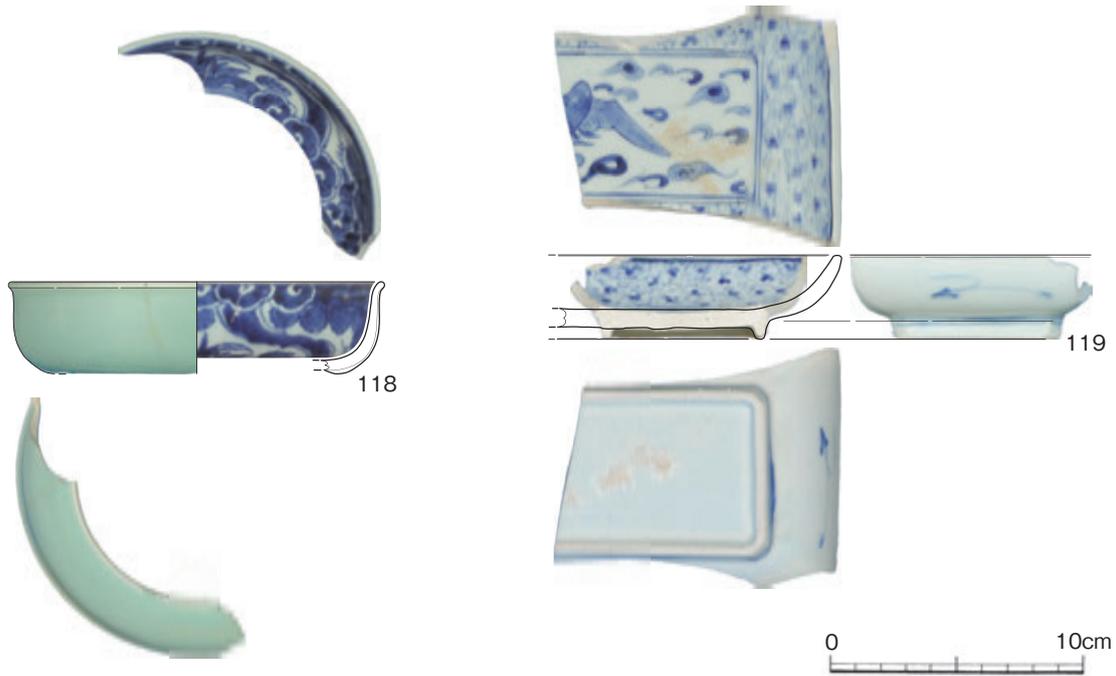
第210図 磁器15 皿類

磁器観察表 4

挿図 番号	掲載 番号	種別	分類	器種	産地	出土区	法量 (cm)			胎土の 色 調	釉薬の種類 色 調	施釉部位	時期	備 考
							口径	底径	器高					
第 201 図	70	染付	碗	小杯	肥前	G地点	5.0	3.6	3.4	白色	透明釉	畳付は釉剥ぎ	18世紀第4四半期~19世紀	
	71	染付	碗	小杯	肥前	G地点	5.4	2.4	3.7	白色	透明釉	畳付は釉剥ぎ	18世紀後半	
	72	染付	碗	小杯	肥前系	G地点	6.5	4.2	3.1	白色	透明釉	畳付は釉剥ぎ	19世紀前半~中葉	
	73	染付	碗	小杯	肥前系	G地点	7.2	2.4	3.2	白色	透明釉	畳付は釉剥ぎ	18世紀後半~19世紀初頭	花文
	74	染付	碗	小杯	在地系か?	G地点	5.8	2.2	3.2	白色	透明釉	畳付は釉剥ぎ	19世紀前半~中葉	笹文
	75	染付	碗	小杯	肥前系	G地点	5.0	3.2	3.8	白色	透明釉	畳付は釉剥ぎ	18世紀後半~19世紀後半	松文
	76	染付	碗	小杯	肥前か?	G地点	4.2	1.9	3.1	白色	透明釉	畳付は釉剥ぎ	19世紀	カの字
77	染付	碗	小杯	平佐または 長与か?	G地点	4.2	1.9	2.9	白色	透明釉	畳付は釉剥ぎ	19世紀	三彩	
第 202 図	78	染付	皿	小皿	肥前 (有田)	G地点	10.4	5.8	2.7	白色	透明釉	畳付は釉剥ぎ	1760~80年代	菱花皿
	79	染付	皿	小皿	肥前 (有田)	G地点	10.2	5.6	2.8	白色	透明釉	畳付は釉剥ぎ	1760~80年代	蛸唐草文
	80	染付	皿	小皿	肥前	G地点	9.6	4.2	2.7	白色	透明釉	畳付は釉剥ぎ	18世紀後半	コンニャク印判五弁花
	81	染付	皿	小皿	在地系	G地点	9.8	3.9	2.7	白色	透明釉	畳付は釉剥ぎ	18世紀後半	菱花皿

磁器観察表 5

挿図番号	掲載番号	種別	分類	器種	産地	出土区	法量 (cm)			胎土の色調	釉薬の種類色調	施釉部位	時期	備考
							口径	底径	器高					
第202図	82	染付	皿	小皿	在地系	G地点	9.9	5.0	2.7	白色	透明釉	畳付は釉剥ぎ	19世紀前葉～中葉	山水文
	83	染付	皿	小皿	在地系	G地点	9.7	3.7	2.7	白色	透明釉	畳付は釉剥ぎ	19世紀前葉～中葉	山水文 桜花皿
	84	染付	皿	小皿	在地系	G地点	9.9	4.0	2.7	白色	透明釉	畳付は釉剥ぎ	19世紀前葉～中葉	山水文 桜花皿
	85	染付	皿	小皿	肥前系 (志田)	G地点	9.8	5.6	2.5	白色	透明釉	畳付は釉剥ぎ	1820～60年代	山水文 桜花皿 口唇部に口紅
	86	染付	皿	小皿	在地系	G地点	9.8	3.8	3.0	白色	透明釉	畳付は釉剥ぎ	1820～60年代	山水文 桜花皿 足つきハマの目跡三か所あり
第203図	87	染付	皿	小皿	肥前	G地点	10.0	5.7	2.0	白色	透明釉	畳付は釉剥ぎ	19世紀	蝶と野菜
	88	染付	皿	小皿	肥前系	G地点	10.2	5.6	2.3	白色	透明釉	畳付は釉剥ぎ	19世紀	魚文
	89	染付	皿	小皿	肥前	G地点	10.0	4.0	2.6	白色	透明釉	畳付は釉剥ぎ	近代以降	
第204図	90	染付	皿	中皿	肥前	G地点	12.4	7.2	3.0	白色	透明釉	畳付は釉剥ぎ	18世紀前半	コンニャク印判五弁花 花文
	91	染付	皿	中皿	肥前	G地点	13.0	8.0	3.0	白色	透明釉	畳付は釉剥ぎ	1690～18世紀第1四半期	手書き五弁花 雪の輪文
	92	染付	皿	中皿	肥前有田	G地点	13.0	8.2	2.8	白色	透明釉	畳付は釉剥ぎ	17世紀末～18世紀初頭	墨弾き
	93	染付	皿	中皿	在地系	G地点	11.2	4.4	3.7	白色	透明釉	畳付は釉剥ぎ	19世紀前半	見込み蛇の目釉剥ぎ アルミナを塗布
	94	染付	皿	中皿	肥前波佐見	G地点	14.1	7.2	3.0	灰白色	透明釉	畳付は釉剥ぎ	18世紀後半	手書き五弁花 見込み蛇の目釉剥ぎ 花唐草
	95	染付	皿	中皿	肥前系	G地点	14.4	8.0	3.0	灰白色	透明釉	畳付は釉剥ぎ	18世紀後半	見込み蛇の目釉剥ぎ
	96	染付	皿	中皿	肥前	G地点	13.4	7.6	4.1	白色	透明釉	畳付は釉剥ぎ	18世紀前半	荒磯文 裏銘「鴻福」
	97	染付	皿	中皿	肥前有田	G地点	13.8	9.0	4.1	白色	透明釉	畳付は釉剥ぎ	1740～70年代	桜花皿
98	染付	皿	中皿	肥前	G地点	14.3	8.0	3.8	白色	透明釉	畳付は釉剥ぎ	18世紀第1四半期	手書き五弁花 花唐草	
第205図	99	染付	皿	中皿	肥前波佐見	G地点	13.4	7.4	4.2	白色	透明釉	畳付は釉剥ぎ	18世紀中葉～後葉	手書き五弁花 裏銘「鴻福」
	100	染付	皿	中皿	肥前波佐見	G地点	13.2	7.4	3.8	白色	透明釉	畳付は釉剥ぎ	18世紀中葉～後葉	手書き五弁花 裏銘「鴻福」
	101	染付	皿	中皿	肥前波佐見	G地点	12.0	7.6	4.0	白色	透明釉	畳付は釉剥ぎ	18世紀中葉～後葉	コンニャク印判五弁花 扇文 裏銘「鴻福」
	102	染付	皿	中皿	肥前波佐見	G地点	15.5	8.4	4.1	灰白色	透明釉	畳付は釉剥ぎ	18前葉～中葉	コンニャク印判 笹文 桜花皿 裏銘「鴻福」
	103	染付	皿	中皿	在地系	G地点	12.4	7.3	3.6	白色	透明釉	畳付は釉剥ぎ	18世紀後半～19世紀初頭	花唐草文 桜花皿 蛇の目凹型高台
	104	染付	皿	中皿	肥前系	G地点	12.0	7.2	3.4	白色	透明釉	畳付は釉剥ぎ	18世紀後半～19世紀初頭	蛇の目凹型高台
第206図	105	染付	皿	中皿	肥前 (志田焼き)	G地点	15.0	8.5	4.2	白色	透明釉	畳付は釉剥ぎ	19世紀前葉～中葉	山水文 口唇 口紅 蛇の目凹型高台
	106	染付	皿	中皿	在地系	G地点	13.0	8.0	3.3	白色	透明釉	畳付は釉剥ぎ	近代以降	蛇の目凹型高台 花唐草文 桜花皿
	107	染付	皿	中皿	肥前系	G地点	12.6	8.0	2.9	白色	透明釉	畳付は釉剥ぎ	19世紀	蛇の目凹型高台 雪の輪文 桜花皿
第207図	108	染付	皿	大皿	肥前	G地点	20.8	11.0	3.5	灰白色	透明釉	畳付は釉剥ぎ	18世紀後半	高台内底にハリ支えあと 山水文
	109	染付	皿	大皿	肥前	M	21.0	14.4	3.0	白色	透明釉	畳付は釉剥ぎ	18世紀第2～第3四半期	花文 手書き五弁花 高台内底にハリ支えあと
第208図	110	染付	皿	大皿	肥前	G地点	20.2	12.2	3.1	白色	透明釉	畳付は釉剥ぎ	18世紀前半	花唐草文
	111	染付	皿	大皿	肥前系	G地点	21.8	10.9	3.9	白色	透明釉	畳付は釉剥ぎ	18世紀後半	
第209図	112	染付	皿	大皿	肥前	G地点	23.2	14.0	4.2	白色	透明釉	畳付は釉剥ぎ	18世紀後半	
	113	染付	皿	大皿	肥前系	G地点	23.5	14.6	4.1	白色	透明釉	畳付は釉剥ぎ	18世紀末～19世紀前半	蜻蛉草文
	114	染付	皿	大皿	肥前有田	G地点	24.3	14.6	3.4	白色	透明釉	畳付は釉剥ぎ	18世紀末～19世紀前半	花文 高台内底ハリ支えあり
第210図	115	染付	皿	大皿	肥前波佐見	G地点	19.4	10.4	6.2	白色	透明釉	畳付は釉剥ぎ	18世紀第2～第3四半期	手書き五弁花 裏銘「鴻福」
	116	染付	皿	大皿	肥前系	G地点	20.2	9.3	4.7	白色	透明釉	畳付は釉剥ぎ	19世紀	山水文 蛇の目凹型高台
	117	染付	皿	大皿	肥前系	G地点	—	10.8	3.4	白色	透明釉	畳付は釉剥ぎ	18世紀後半～19世紀前半	花文 蛇の目凹型高台
第211図	118	染付	皿		肥前	G地点	14.8	—	—	白色	(内) 透明釉 (外) 青磁釉	畳付は釉剥ぎ	1750～80年代	
	119	染付	皿	角皿	肥前系	G地点	—	—	3.4	白色	透明釉	畳付は釉剥ぎ	18世紀末～19世紀前半	花唐草文に鷹か? アルミナ付着
	120	染付	鉢	猪口	肥前有田	G地点	8.5	6.2	6.7	白色	透明釉	畳付は釉剥ぎ	18世紀後半	蛇の目凹型高台
	121	染付	鉢	猪口	肥前系	G地点	7.1	5.0	6.0	白色	透明釉	畳付は釉剥ぎ	18世紀末～19世紀前半	岩に蘭
	122	染付	鉢	猪口	肥前	G地点	7.6	4.5	5.9	白色	透明釉	畳付は釉剥ぎ	18世紀前葉～中葉	花文

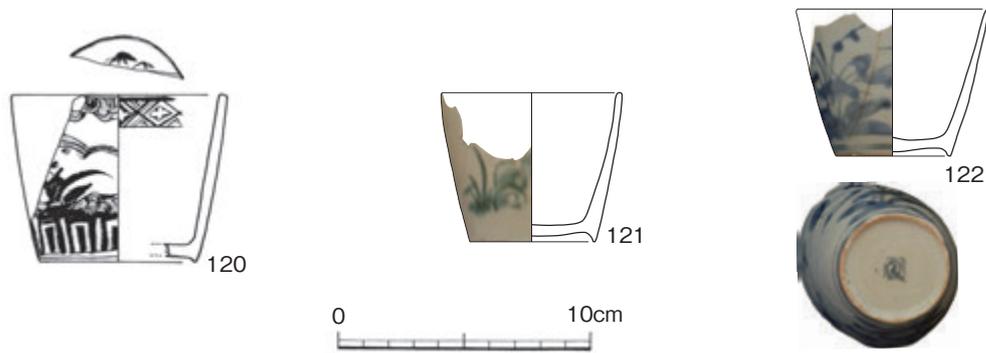


鉢類 (第211~213図)

鉢は小形のものから大形のものまで見られる。そば猪口は鉢として分類した。

120~122はそば猪口である。120は蛇の目凹型高台になるものである。122は裏銘に「渦福」が入る。

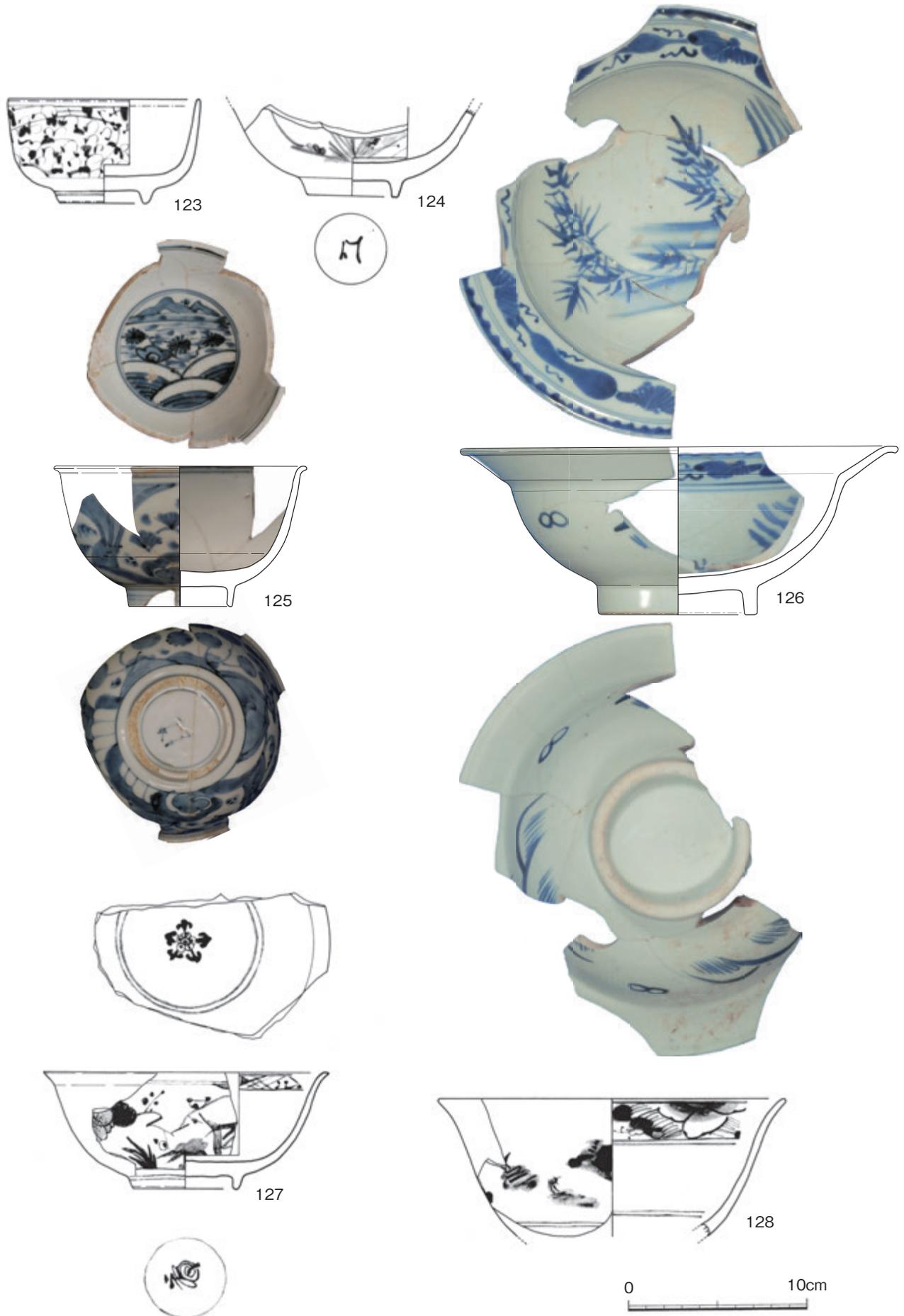
123はやや青みがかった透明釉に、呉須が滲んでいる。124は波佐見焼である。125は見込みに荒磯文が描かれる。126は口縁部が折れ縁になるものである。127は見込みに手書きのコンニャク印判、裏銘に「渦福」が見られる。129は青みがかった透明釉に呉須が滲む。131は白濁した透明釉に、貫



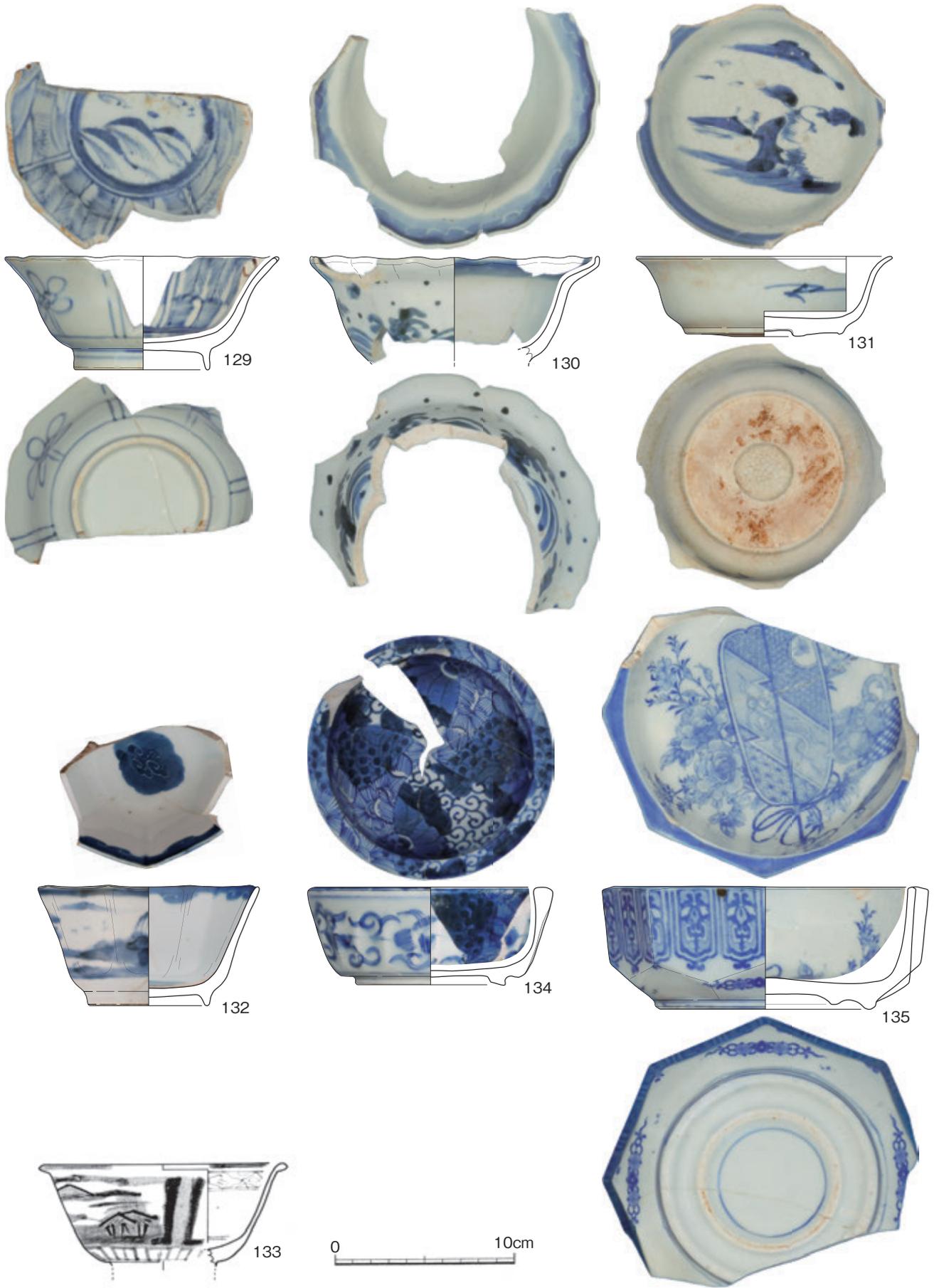
第211図 磁器16 皿・鉢類

磁器観察表 6

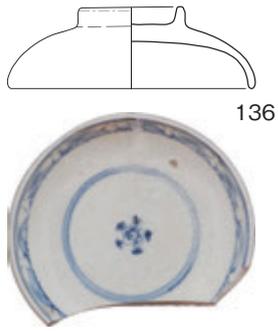
挿図番号	掲載番号	種別	分類	器種	産地	出土区	法量 (cm)			胎土の色調	釉薬の種類・色調	施釉部位	時期	備考
							口径	底径	器高					
第212図	123	染付	鉢	鉢	在地系か?	G地点	10.6	4.8	5.9	白色	透明釉	畳付は釉剥ぎ	19世紀前葉~中葉	花唐草文
	124	染付	鉢	鉢	肥前波佐見	G地点	—	—	5.2	灰白色	透明釉	畳付は釉剥ぎ	18世紀後半	雪の輪文
	125	染付	鉢	鉢	肥前	G地点	13.7	5.8	8.0	白色	透明釉	畳付は釉剥ぎ	18世紀前半	荒磯文
	126	染付	鉢	鉢	肥前系	G地点	24.6	8.6	9.6	白色	透明釉	畳付は釉剥ぎ	19世紀前葉~中葉	笹文
	127	染付	鉢	鉢	肥前	M	16.0	5.0	6.6	白色	透明釉	畳付は釉剥ぎ	18世紀前葉~中葉	手書き五弁花
	128	染付	鉢	鉢	肥前	G地点	19.2	—	—	白色	透明釉	畳付は釉剥ぎ	18世紀末~19世紀前半	山水文
第213図	129	染付	鉢	鉢	在地系	G地点	15.1	7.4	6.4	白色	透明釉	畳付は釉剥ぎ	幕末	八角鉢
	130	染付	鉢	鉢	肥前系	G地点	16.1	—	—	白色	透明釉	畳付は釉剥ぎ	19世紀前半	稜花鉢
	131	染付	鉢	鉢	肥前系	G地点	14.4	8.4	4.4	白色	透明釉	畳付は釉剥ぎ	19世紀前半	山水文 蛇の目凹型高台
	132	染付	鉢	鉢	肥前系	G地点	12.2	6.5	6.8	白色	透明釉	畳付は釉剥ぎ	1780~1820年代	山水文
	133	染付	鉢	鉢	肥前	G地点	13.8	—	—	白色	透明釉	畳付は釉剥ぎ	1780~1820年代	山水文
	134	染付	鉢	鉢	肥前有田	G地点	13.0	8.2	5.5	白色	透明釉	畳付は釉剥ぎ	1840~60年代 (幕末)	
	135	染付	鉢	鉢	肥前系	G地点	16.9	11.6	6.9	白色	透明釉	畳付は釉剥ぎ	近代以降	二重高台



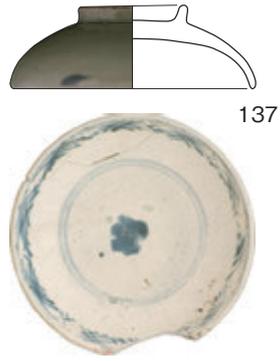
第212図 磁器17 鉢類



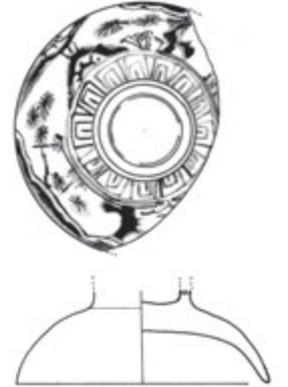
第213図 磁器18 鉢類



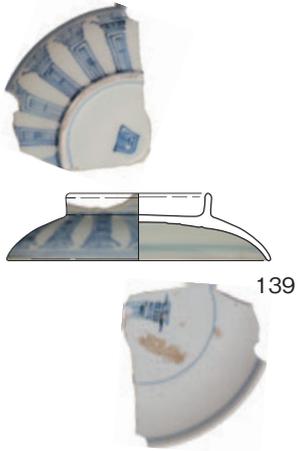
136



137



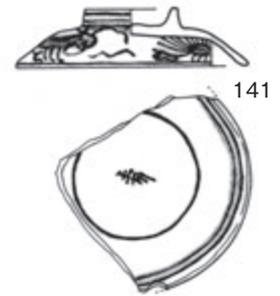
138



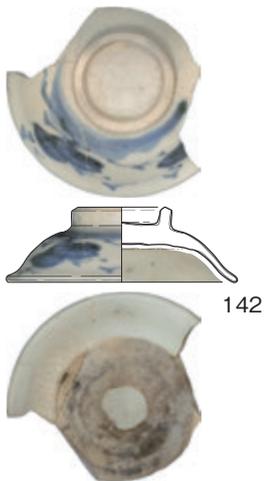
139



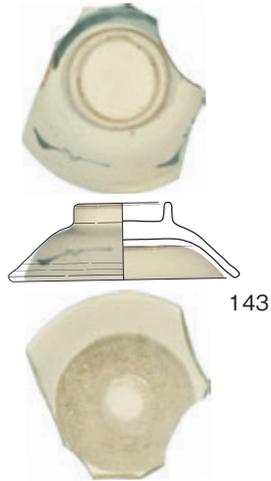
140



141



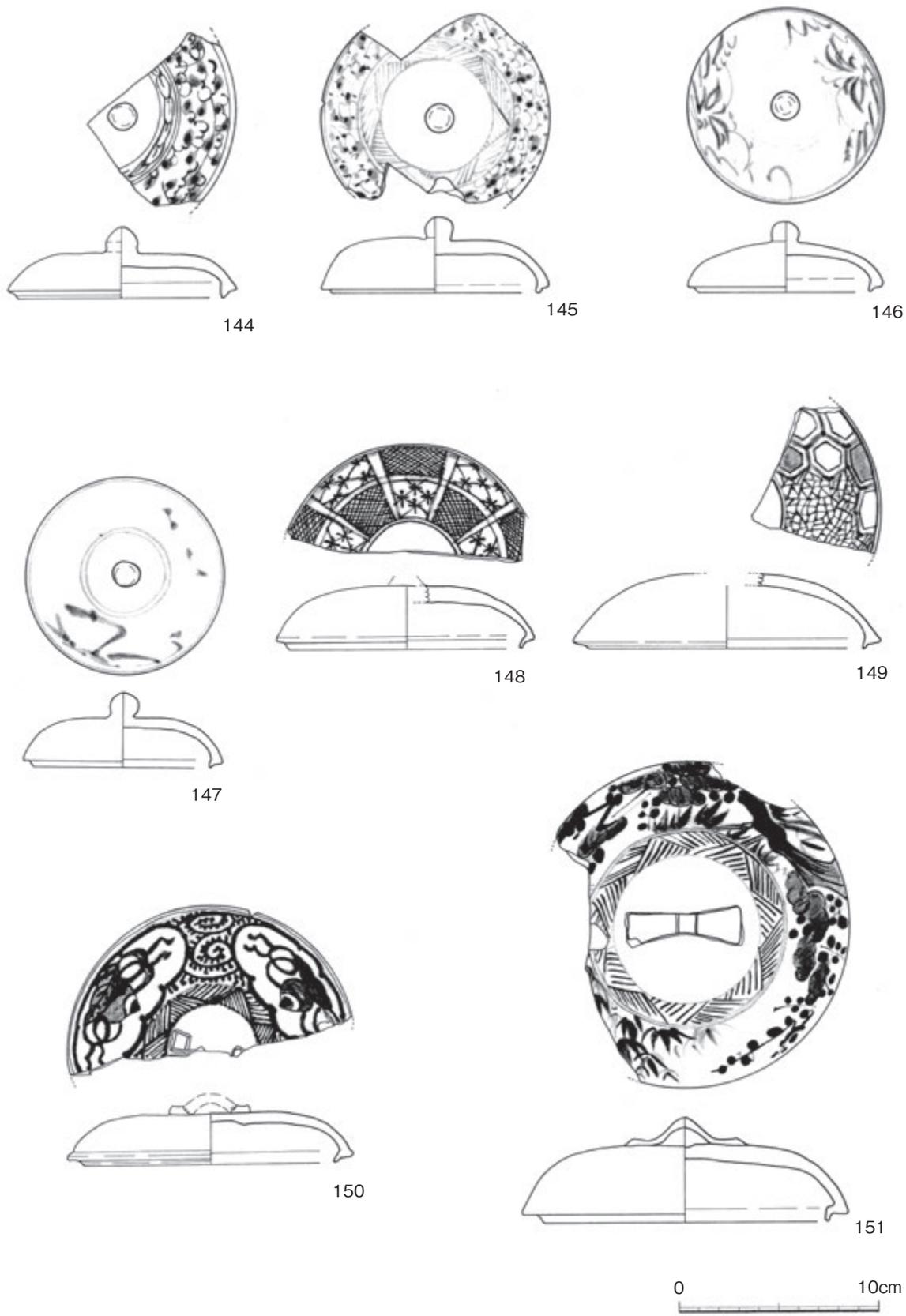
142



143



第214図 磁器19 蓋類



第215図 磁器20 蓋類

入が入る。132は八角の鉢である。釉は青みがかり、在地系のもと思われる。134は厚手のもので、口唇部まで文様が描かれる。高台は短く幅広である。135は高台が二重高台を呈するもので、近代以降のものである。

### 蓋類（第214・215図）

碗蓋，蓋物の蓋等をまとめて掲載した。

136～143は碗蓋である。136～138は丸碗の蓋である。136・137はつまみ内部には「渦福」が観察できる。外面は青磁釉である。見込みに滲んでいるが，コンニャク印判の五弁花が押される。139は広東碗の蓋である。140～143は端反碗の蓋である。142・143は見込みに蛇の目釉剥ぎが見られる。

144～151は蓋物の蓋である。144～147は丸形につまみが付く。148・149は欠損しているが，つまみがつくものと思われる。150・151はアーチ状につまみがつくものである。151は近代以降のものである。

### 色絵（第216・217図）

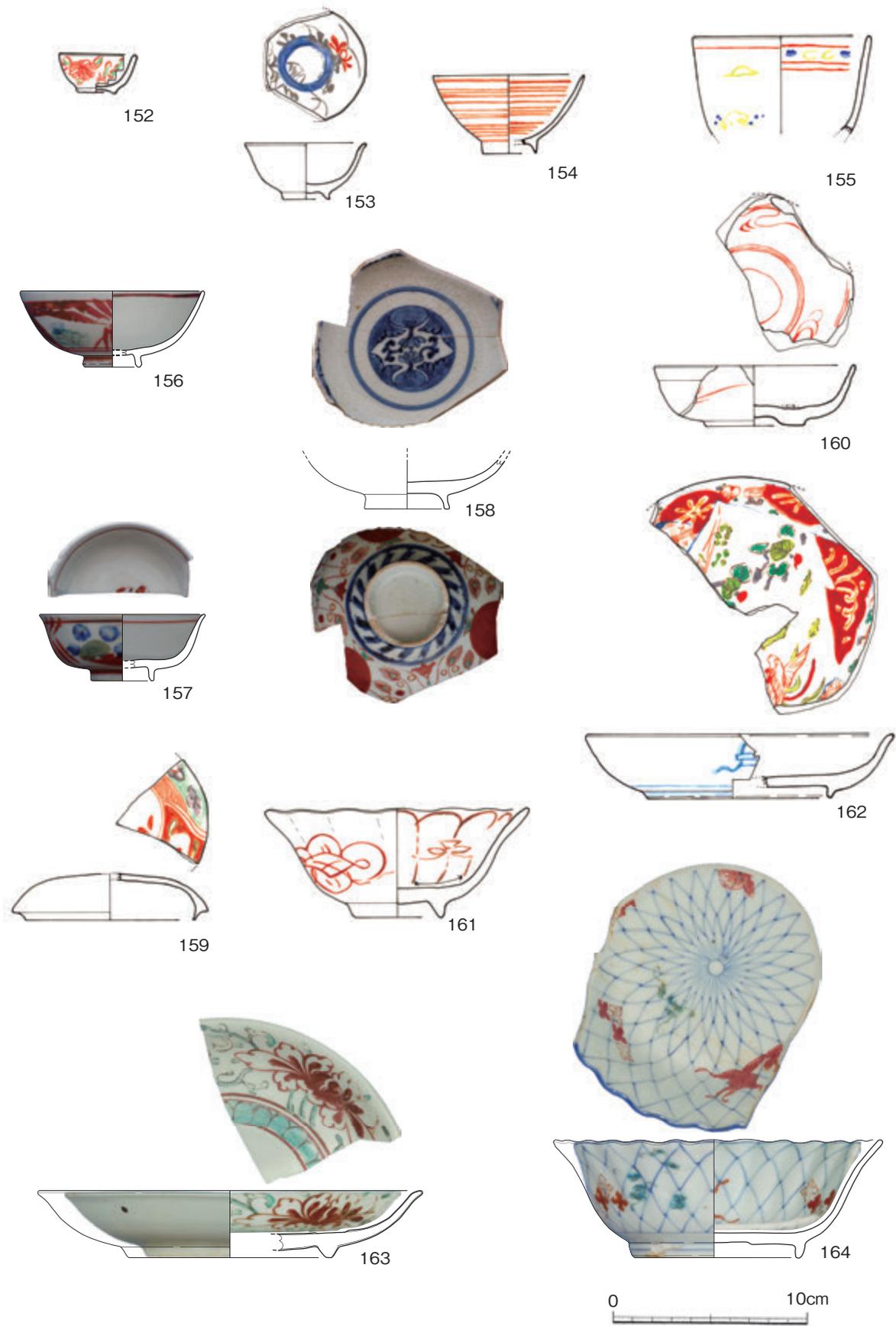
数量的には多くはないが，様々な器種で色絵が見られる。

152は中国福建省付近で生産されたと思われる小坏である。黄緑と朱色の2色で文様が描かれる。153は小坏である。見込みの蛇の目釉剥ぎを隠すために，青色の顔料が塗られる。154は小碗である。155は湯飲み碗である。在地系の色絵と思われる。156は瀬戸・美濃産の小碗である。朱色の他，青，黄緑，黄色の顔料で文様が描かれる。157は小碗であるが，近代以降のものである。158は肥前針田の金襴手で，鉢である。外面は赤玉と瓔珞文が描かれる。高級品である。159は蓋物の蓋である。朱色と黄緑で文様が描かれる。160は高台が幅広の小碗で，見込みに蛇の目釉剥ぎが施されることは珍しい。161は八角の鉢である。朱色の顔料で文様が描かれる。見込みの蛇の目釉剥ぎは黒く塗られ，黄緑のしみも見られる。162は近代以降の皿である。163は皿である。朱と黄緑で文様が描かれる。蛇の目釉剥ぎの部分にも文様が描かれる。164は幕末の有田焼で，金魚が描かれる。165・166は段重である。165は少なくとも3段はあったものと思われる。167は油壺である。頸部下位に朱色の線が幅広に描かれる。168は蓋物の蓋と身である。169は御神酒瓶である。底面に墨書が観察される。170は近代以降の仏花瓶である。171～174は仏飯器である。172は瀬戸・美濃産である。脚部が充実せず，バチ状である。173は菊の花びらの文様が描かれる。174は近代以降の瀬戸・美濃焼である。

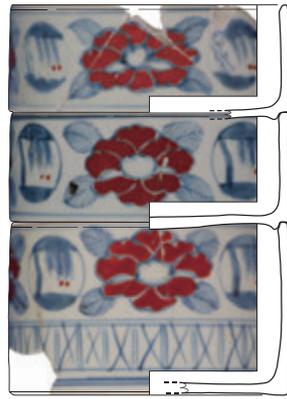
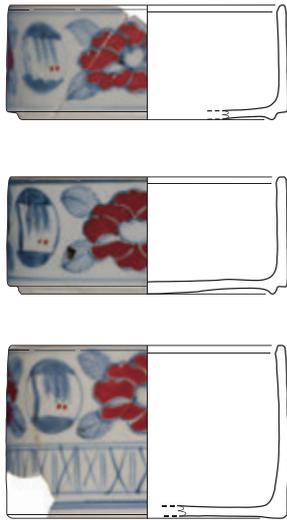
### 水注類（第218図）

土瓶・酒器等の液体を入れて注ぐものを水注として分類した。

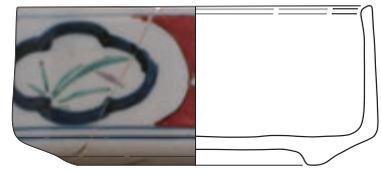
175・176は土瓶である。在地系のもと思われる。175は茶止め穴が2穴で，176は3穴である。177・178は酒器である。底部は平底で，無釉である。アーチ状の磁器製の取っ手がつく。在地系のものである。179は薩摩で一般的に「からから」と呼ばれる酒器である。在地系のものである。180は近代以降の酒器である。透明釉はやや黄色みを帯びる。文様は型押しで，青色の顔料で着色される。三河内焼の可能性も考えられる。



第216図 磁器21 色絵



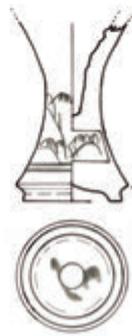
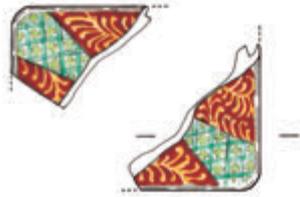
165



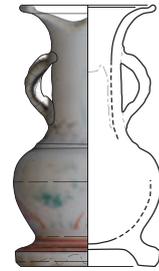
166



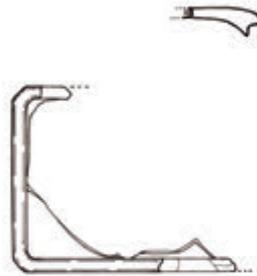
167



169



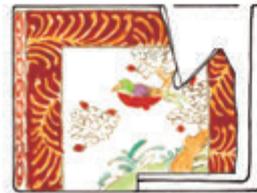
170



171



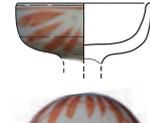
172



168



173



174



第217図 磁器22 色絵



第218図 磁器23 水注類

瓶類 (第219図)

181は一重編目文の瓶である。182は瓶としたが、欠損している部分に注口部がつく可能性も考えられる。184は近代以降のものである。185～187は油壺である。



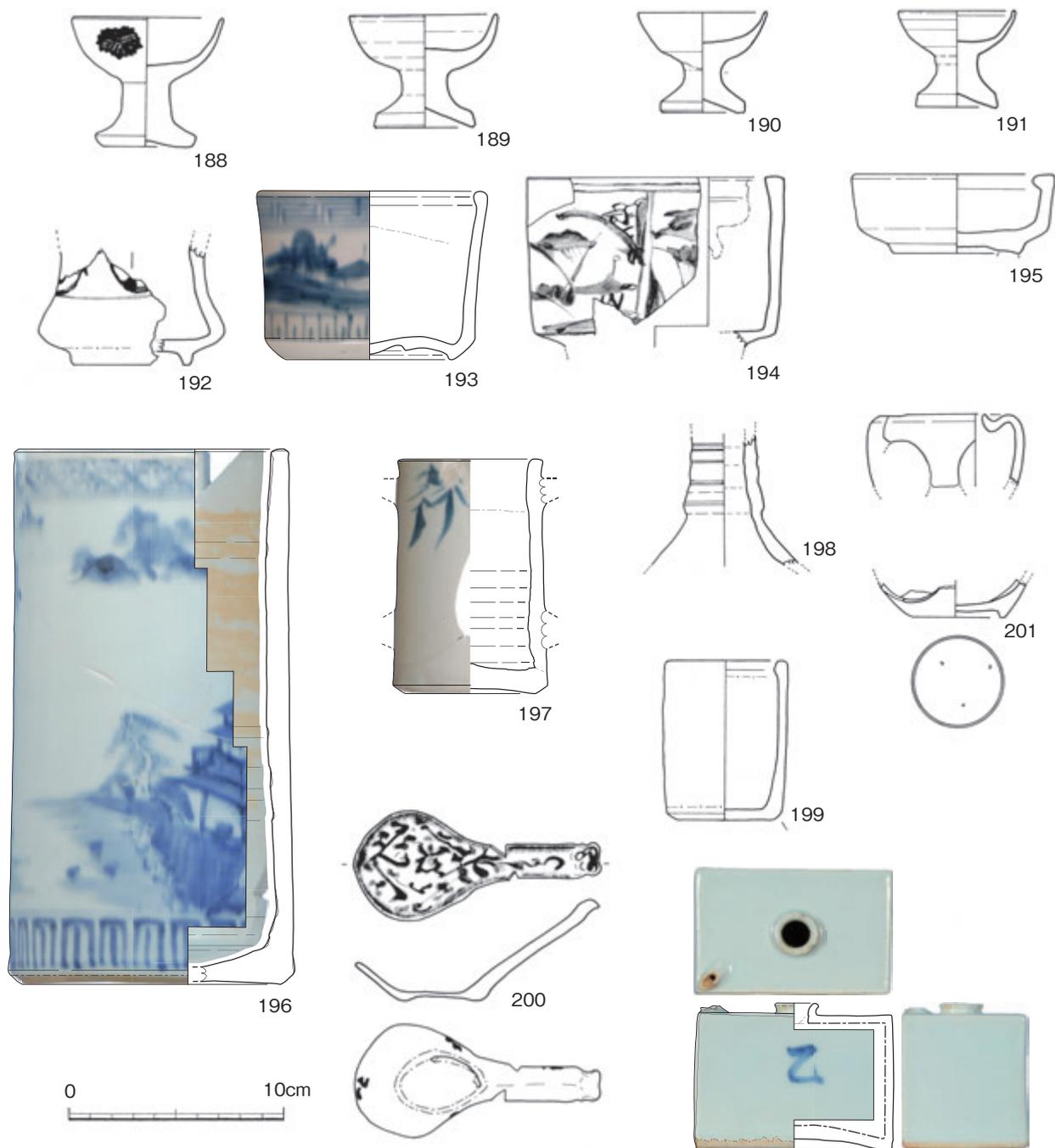
第219図 磁器24 瓶類他

磁器観察表 7

挿入番号	掲載番号	種別	器種	分類	産地	出土区	法量 (cm)			胎土の色調	釉薬の種類・色調	施釉部位	時期	備考
							口径	つまみ径	器高					
第214図	136	染付	蓋	丸碗蓋	肥前系	G地点	9.6	3.9	3.3	白色	(内) 透明釉 (外) 青磁釉	畳付は釉測ぎ	18世紀後半	手書き五弁花
	137	染付	蓋	丸碗蓋	肥前系	G地点	9.5	4.1	3.4	白色	(内) 透明釉 (外) 青磁釉	畳付は釉測ぎ	18世紀後半	コンニャク印判五弁花
	138	染付	蓋	丸碗蓋	肥前	G地点	10.0	—	3.6	白色	透明釉	畳付は釉測ぎ	18世紀後半	手書き五弁花
	139	染付	蓋	広東碗蓋	肥前	G地点	10.4	5.5	2.7	白色	透明釉	畳付は釉測ぎ	1780～1810年代	
	140	染付	蓋	端反碗蓋	肥前系	G地点	8.7	3.4	3.0	白色	透明釉	畳付は釉測ぎ	1820～60年代	
	141	染付	蓋	端反碗蓋	在地系	G地点	9.2	3.9	2.3	白色	透明釉	畳付は釉測ぎ	18世紀後半～19世紀初頭	花唐草
	142	染付	蓋	端反碗蓋	肥前系	G地点	9.0	3.4	3.0	灰色	透明釉	畳付は釉測ぎ	18世紀後半～19世紀初頭	山水文 蛇の目釉測ぎ
143	染付	蓋	端反碗蓋	肥前系	G地点	9.0	3.6	3.1	白色	透明釉	畳付は釉測ぎ	1820～60年代		
第215図	144	染付	蓋	蓋物蓋	肥前系	G地点	11.6	—	3.6	灰白色	透明釉	畳付は釉測ぎ	19前葉～中葉	花唐草
	145	染付	蓋	蓋物蓋	在地系	G地点	10.3	—	3.8	白色	透明釉	畳付は釉測ぎ	19前葉～中葉	花唐草
	146	染付	蓋	蓋物蓋	肥前系	G地点	8.7	—	3.6	白色	透明釉	畳付は釉測ぎ	18世紀末～19世紀前半	紅葉文
	147	染付	蓋	蓋物蓋	肥前系	G地点	8.8	—	3.8	白色	透明釉	畳付は釉測ぎ	19世紀前葉～中葉	帆掛船
	148	染付	蓋	蓋物蓋	肥前系	G地点	13.0	—	3.2	白色	透明釉	畳付は釉測ぎ	18世紀末～19世紀前半	
	149	染付	蓋	蓋物蓋	肥前	G地点	13.8	—	—	灰白色	透明釉	畳付は釉測ぎ	18世紀後半	
	150	染付	蓋	蓋物蓋	肥前	G地点	14.4	—	2.5	白色	透明釉	畳付は釉測ぎ	18世紀後半	蛸唐草に花文
151	染付	蓋	蓋物蓋	肥前系	G地点	16.4	—	5.3	白色	透明釉	畳付は釉測ぎ	近代以降		
挿入番号	掲載番号	種別	分類	器種	産地	出土区	法量 (cm)			胎土の色調	釉薬の種類・色調	施釉部位	時期	備考
							口径	底径	器高					
第216図	152	色絵	碗	小杯	中国	G地点	4.0	1.9	2.0	白色	透明釉	畳付は釉測ぎ	18世紀	福建省 型押し 口測ぎ 徳花蓋
	153	色絵	碗	小杯	肥前系	G地点	6.2	2.4	2.9	白色	透明釉	畳付は釉測ぎ	1820～70年代	蛇の目釉測ぎ
	154	色絵	碗	小碗	肥前有田	G地点	7.8	2.8	4.1	白色	透明釉	畳付は釉測ぎ	18世紀後半	
	155	色絵	碗	湯飲み碗	肥前系 (平佐か?)	G地点	9.2	—	—	白色	透明釉	畳付は釉測ぎ	19世紀	
	156	色絵	碗	小碗	瀬戸・美濃	G地点	9.5	2.9	4.0	白色	透明釉	畳付は釉測ぎ	19世紀	
	157	色絵	碗	小碗	肥前	G地点	8.5	3.0	3.5	白色	透明釉	畳付は釉測ぎ	近代以降	
	158	色絵	鉢	鉢	肥前有田	G地点	4.4	—	—	白色	透明釉	畳付は釉測ぎ	18世紀第2～第4四半期	赤玉の環珞文
	159	色絵	蓋	蓋物蓋	肥前	G地点	8.8	—	—	白色	透明釉	畳付は釉測ぎ	18世紀後半～19世紀初頭	
	160	色絵	碗	小碗	肥前系	G地点	10.4	—	3.1	白色	透明釉	畳付は釉測ぎ	18世紀	見込みに蛇の目釉測ぎ 流水文
	161	色絵	鉢	鉢	肥前系 (在地か?)	G地点	13.6	4.8	5.6	白色	透明釉	畳付は釉測ぎ	19世紀前葉～中葉	蛇の目釉測ぎ
	162	色絵	皿	中皿	肥前	G地点	15.6	—	3.4	白色	透明釉	畳付は釉測ぎ	近代以降	
	163	色絵	皿	大皿	肥前	G地点	20.0	10.6	3.5	白色	透明釉	畳付は釉測ぎ	18世紀	蛇の目釉測ぎ
164	色絵	鉢	鉢	肥前有田	G地点	8.6	4.4	6.2	白色	透明釉	畳付は釉測ぎ	1820～60年代(幕末)	一重縞目文 金魚文	
第217図	165	色絵	鉢	段重	肥前	G地点	10.9	10.0	4.6	白色	透明釉	畳付は釉測ぎ	18世紀第4～19世紀第1四半期	上段 花文
							10.9	10.0	4.7	白色	透明釉	畳付は釉測ぎ		中段
							10.9	10.7	7.0	白色	透明釉	畳付は釉測ぎ		下段
	166	色絵	鉢	段重	肥前	G地点	14.1	9.4	6.4	白色	透明釉	畳付は釉測ぎ	18世紀第4～19世紀第1四半期	
	167	色絵	瓶類	油壺	肥前	G地点	2.8	—	—	灰白色	透明釉	畳付は釉測ぎ	17世紀後半	
	168	色絵	鉢類	蓋物	肥前	G地点	9.8	9.4	7.3	白色	透明釉	畳付は釉測ぎ	1820～60年代(幕末)	
	169	色絵	瓶類	御神酒瓶	肥前系	G地点	—	3.9	—	白色	透明釉	畳付は釉測ぎ	19世紀前半～幕末	笹文
	170	色絵	瓶類	仏花瓶	肥前か?	G地点	5.2	5.4	10.5	白色	透明釉	畳付は釉測ぎ	近代以降	
	171	色絵	仏具	仏飯器	肥前	G地点	6.2	3.8	5.5	白色	透明釉	畳付は釉測ぎ	18世紀中～後半	笹文
172	色絵	仏具	仏飯器	瀬戸・美濃	G地点	5.2	4.4	5.3	白色	透明釉	畳付は釉測ぎ	19世紀後半～明治	花文	
173	色絵	仏具	仏飯器	肥前有田	G地点	5.5	3.5	4.6	白色	透明釉	畳付は釉測ぎ	18世紀中葉～後葉	菊の花文	
174	色絵	仏具	仏飯器	瀬戸・美濃	G地点	5.2	—	—	白色	透明釉	畳付は釉測ぎ	近代以降	花文	
第218図	175	白磁	水注	土瓶	在地系	G地点	5.2	4.6	7.9	白色	透明釉	内面・底部は無釉	19世紀後半	
	176	染付	水注	土瓶	在地系	G地点	5.4	—	—	白色	透明釉	内面は無釉	19世紀	茶止め穴 三穴
	177	染付	水注	酒器	肥前系 (平佐)	G地点	5.8	8.7	—	白色	透明釉	内面・底面は無釉	18世紀後半	花文
	178	染付	水注	酒器	肥前系 (平佐)	G地点	5.8	8.3	7.6	白色	透明釉	内面・底面は無釉	18世紀後半	山水文
	179	染付	水注	からから	肥前系 (平佐)	G地点	2.8	4.7	11.7	白色	透明釉	底面無釉	19世紀	
	180	染付	水注	からから	肥前系 (三河内か?)	G地点	—	4.0	—	白色	透明釉	底面無釉	近代以降	
第219図	181	染付	瓶類	徳利	肥前	G地点	—	6.0	—	灰白色	透明釉	内面無釉	1650～70年代	一重縞目文
	182	染付	瓶類	徳利か?	在地系	G地点	3.3	—	—	白色	透明釉	内面無釉	18世紀後半～19世紀前半	花唐草文
	183	染付	瓶類	徳利	肥前系	G地点	3.5	—	—	灰色	透明釉	内面無釉	19世紀	雪の輪文
	184	染付	瓶類	徳利	肥前系	G地点	2.6	6.4	23.1	白色	透明釉	内面無釉	近代以降	山水文
	185	染付	瓶類	油壺	肥前	G地点	2.5	—	—	灰白色	透明釉	内面無釉	18世紀	花文
	186	染付	瓶類	油壺	肥前	G地点	3.2	—	—	灰白色	透明釉	内面無釉	18世紀	花文
	187	染付	瓶類	油壺	肥前	G地点	2.1	3.7	7.2	白色	透明釉	内面無釉	18世紀後半～19世紀前半	

その他 (第220図)

188~191は仏飯器である。188はコンニャク印判で文様がスタンプされている。189~191は在地系のものである。192は陶胎染付の仏花瓶である。193~195は火入れである。193は青みがかった透明釉に呉須が滲む。在地系のものである。194は陶胎染付である。195は外面青磁釉の灰吹きであるが、口縁部には敲打痕が見られない。196・197は花瓶である。在地系のものと思われる。197は吊り下げに使用する取っ手部が欠損している。200は中国産のレンゲである。景德鎮窯系のものである。201は杯台である。側面に円形の穴が4か所あけられる。黄白色の緻密な胎土に上から黄色の釉薬がかかる。202は水滴としたが、やや大形のため酒瓶の可能性も考えられる。片面に「○」に「カ」の字と反対側に「乙」の字が入れている。特注品と思われる。



第220図 磁器25 その他

202

磁器観察表 8

押回 番号	掲載 番号	種別	分類	器種	産地	出土区	法量 (cm)			胎土の 色 調	釉薬の種類 色 調	施釉部位	時期	備 考
							口径	底径	器高					
第 220 図	188	染付	仏具	仏飯器	肥前系	G地点	7.0	4.0	6.1	灰色	透明釉	底面無釉	18世紀後半	コンニャク印判
	189	白磁	仏具	仏飯器	在地系 (平佐)	G地点	6.9	4.7	5.3	灰白色	透明釉	脚部無釉	19世紀	
	190	白磁	仏具	仏飯器	在地系 (平佐)	G地点	5.9	4	4.7	灰白色	透明釉	脚部無釉	19世紀	
	191	白磁	仏具	仏飯器	在地系 (平佐)	G地点	7.6	3.8	4.5	灰白色	透明釉	脚部無釉	19世紀	
	192	陶胎染付	仏具	仏花器	肥前	G地点	—	5.7	—	灰褐色	灰釉	高台から高台内面・ 内面無釉	18世紀前半	
	193	染付	仏具	香炉	在地系 (平佐)	G地点	10.2	7.8	8	白色	透明釉	内面無釉	19世紀	山水文 蛇の目凹型高台
	194	陶胎染付	仏具	香炉	肥前	M地点	12.0	—	—	灰褐色	透明釉	内面無釉	18世紀前半	
	195	染付	仏具	火入れ	肥前	G地点	9.2	6.0	3.7	橙色	青磁釉		18世紀前半	
	196	染付	瓶類	花器	在地系	G地点	12.4	12.0	25.4	白色	透明釉	底面無釉	19世紀	山水文
	197	染付	瓶類	花瓶	在地系 (平佐)	G地点	6.4	6.0	11.1	白色	透明釉	底面・内面中位以下 無釉	19世紀	
	198	染付	瓶	花瓶か?	肥前	G地点	—	—	—	灰白色	青磁釉	内面無釉	17世紀後半	
	199	染付		灰落とし	肥前	G地点	5.8	5.2	7.5	白色	青磁釉	内面・底面無釉	18世紀	
	200	染付		れんげ	中国 景德鎮窯	G地点	—	—	—	白色	透明釉		19世紀前半	花唐草文
	201	染付		坏台	ミンバイ	G地点	3.8 —	— 4.2	— —	白色	透明釉		19世紀	底面にハマの目跡三か所有 り
202	染付	瓶類	水滴か? 酒器か?	在地系 (平佐)	G地点	1.9	9.2	7.0	白色	透明釉	底面無釉	19世紀	「○カ」と「乙」の文字	

### 陶器 (第221~269図)

陶器については器種を大分類として分類したが、産地が明確なものについてはそれぞれの器種の中でまとめて掲載した。

### 碗 (第221~224図)

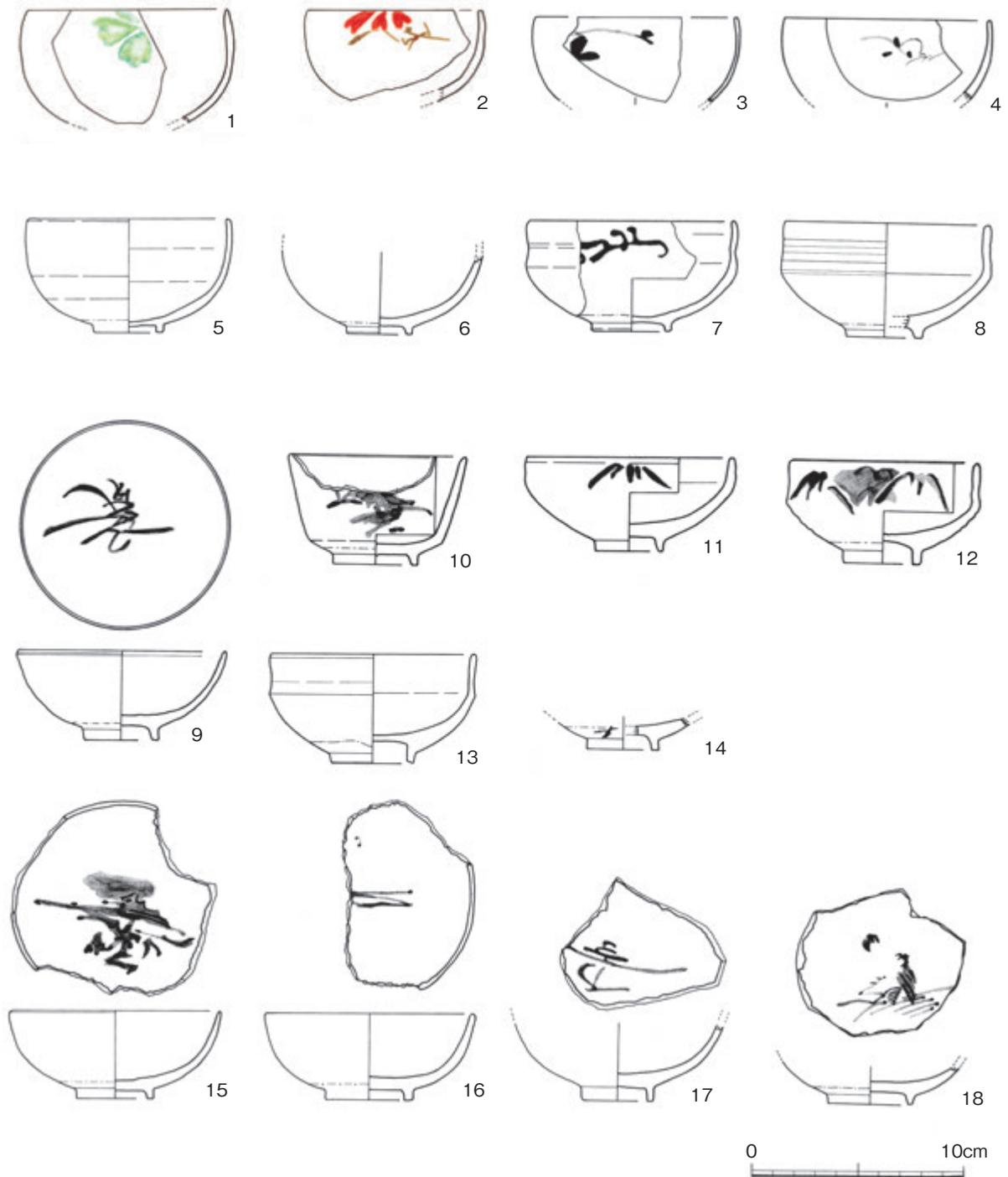
1~8は関西系の碗である。胎土は黄白色で、緻密である。透明釉が高台脇までかかり、高台と高台内面は露胎する。高台の削りはシャープで、四角形に削られる。1~6は体部が丸みを帯びるものである。1は外面口縁部下位に黄緑色の顔料で文様が描かれる。2は鉄絵と赤褐色の顔料で文様が描かれる。3・4は鉄絵である。7・8は煎じ碗形のものである。腰部で内側に屈曲するが口縁部はわずかに外反する。7は口縁外面に鉄絵が描かれる。

9~14は肥前系陶器で、京焼風陶器である。胎土は黄白色で、緻密である。透明釉が高台脇までかかり、高台と高台内面は露胎する。高台の削りはシャープで、四角形に削られる。9は半球形の碗で、見込みに鉄絵で「寿」の文字が記される。10は腰折の碗で、体部側面に鉄絵が描かれる。11~13は煎じ碗形のものである。11・12は外面口縁部に鉄絵の笹文が描かれる。14は高台脇に鉄絵が描かれる。15~18は9~14と同じ肥前系の京焼風陶器であるが、前述のものとはやや削りの技法等が異なるものである。見込みには鉄絵が描かれる。

19~31は肥前系陶器の碗である。19は鉄絵が描かれる唐津焼である。20は唐津焼と思われるが、胎土が橙色を呈する点や、高台の削りなどの面でやや疑わしい。21は肥前の内野山系のものである。外面に銅緑釉が腰部までかかり、内面は透明釉がかかる。高台は露胎する。22は内外面にハケ目の施される碗である。23は小形の天目碗である。高台内面に胎土目の目跡が残る。24は打ちハケ目の碗である。大振りのものは珍しい。25は呉器手の碗である。26は、高台内面を削りだし角張らず、丸くつくられる。27は腰部でやや折れるもので、高台脇から高台内面は露胎する。28は内野山系のものである。高台は露胎し、見込みは蛇の目釉剥ぎが施される。29は見込みに砂粒のついた高台痕が見られる。陶胎染付と同じ胎土である。30は肥前の青磁碗である。31は萩焼である。藁灰釉が厚手にかかり、鉄釉が内外面に一部かかる。腰部はシャープに削り出され、高台内面もシャープな巴状に削り出される。

32~40は薩摩焼の堅野系の碗である。一般的「白薩摩」と呼ばれるもので、白色陶胎に透明釉がかけられる。32~34は半球形のもので、高台脇に千鳥が描かれ、32のみが鉄絵で、他は呉須である。35は腰折れ形のものである。36は腰部の折れが2段階になるものである。37は小碗である。39は腰部から高台脇までに筋状の沈線が廻る。40は近代以降のものである。

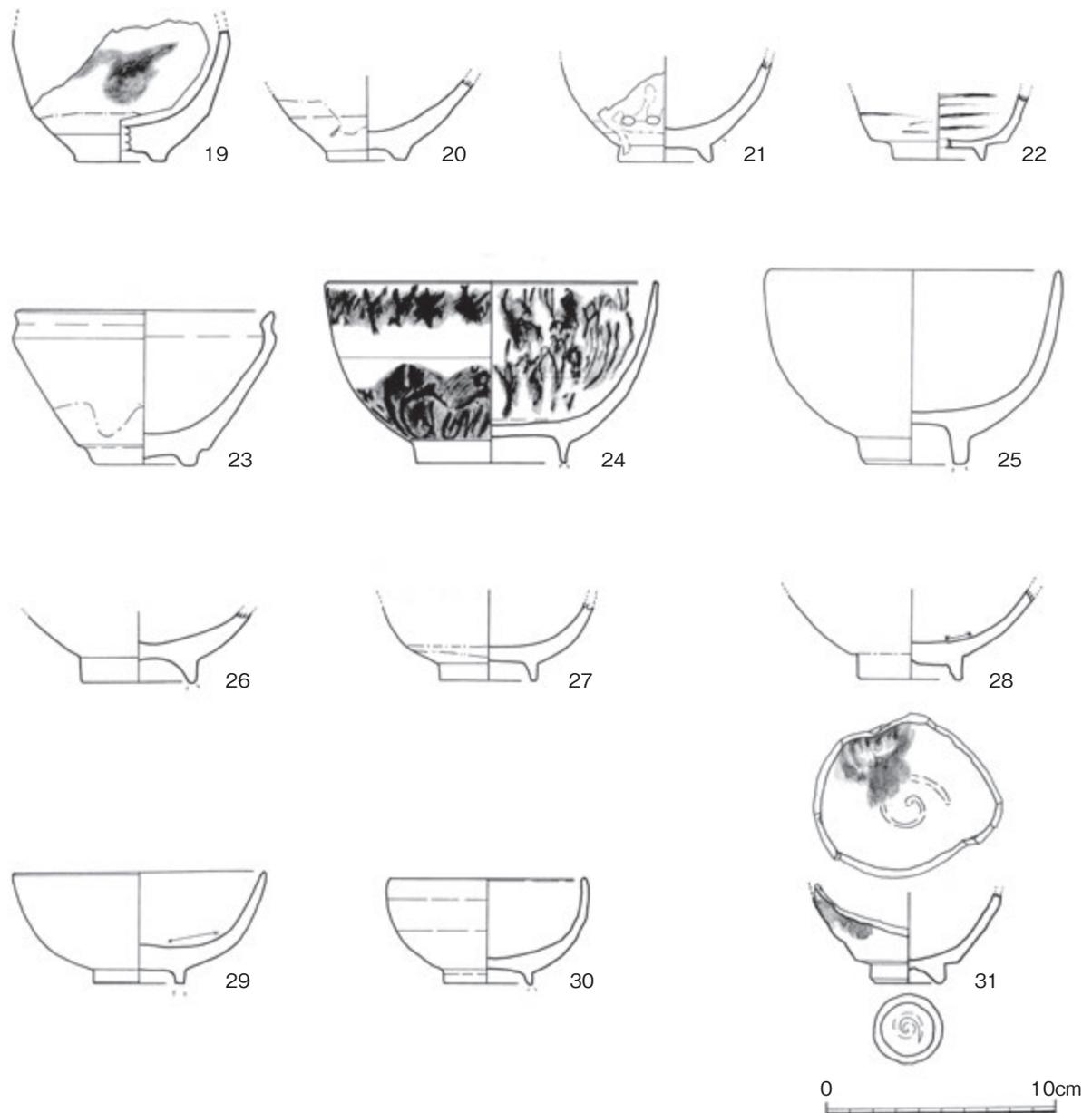
41~45は薩摩焼の苗代川系の碗である。畳付以外全面施釉され、41・42は高台内面が巴状に削られる。釉薬は甕・壺と同じものが使われている。



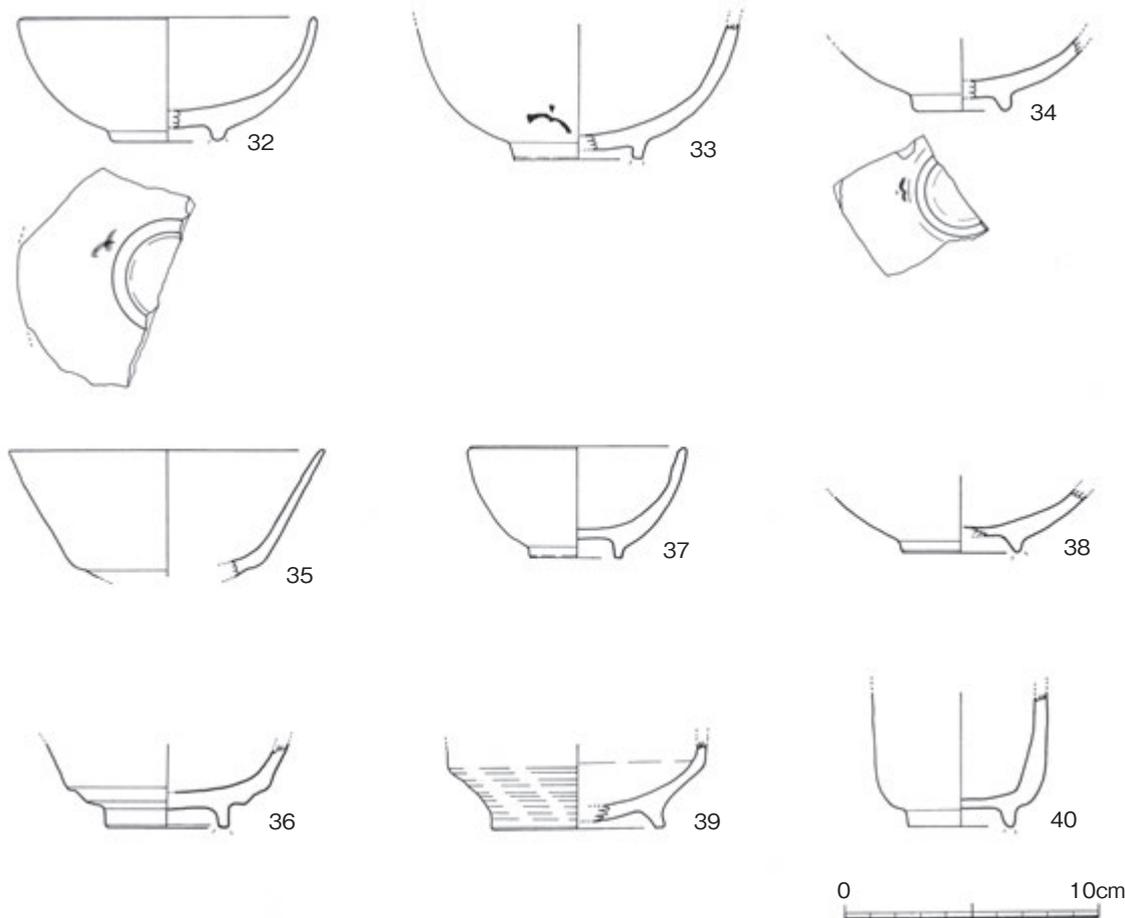
第221図 陶器1 碗類

46～55は加治木・始良系とも言われる，薩摩焼の龍門司系の碗である。胎土は茶褐色系で，苗代川系の碗と比べて緻密である。重ね焼きのため，見込みに蛇の目釉剥ぎが施される。46～49は鉄釉がかかるものである。46・47は小形の碗である。50は黒釉の上から透明釉がかけられたものである。51～53は白化粧土の上に褐釉がかけられる二彩手である。53は褐釉が腰部までかかるもので，腰部から高台は露胎する。52・53は見込みに蛇の目釉剥ぎが施される。54は白化粧土に透明釉がかかるもので，高台内は露胎する。55は褐釉のかけられた口縁部である。

56～64は小坏である。56は陶胎染付のものである。57は腰部と高台がシャープに削り出されるもので，透明釉が腰部までかかる。58は黄色の釉に透明釉がかけられたもので，内面は無釉である。小坏に分類したが，他の器種の可能性がある。59～63は薩摩焼の堅野系である。59～62は白色陶胎の白薩摩で，61には呉須で，62には鉄釉で千鳥が描かれる。64は宋胡録写しの文様が鉄釉で描かれる。



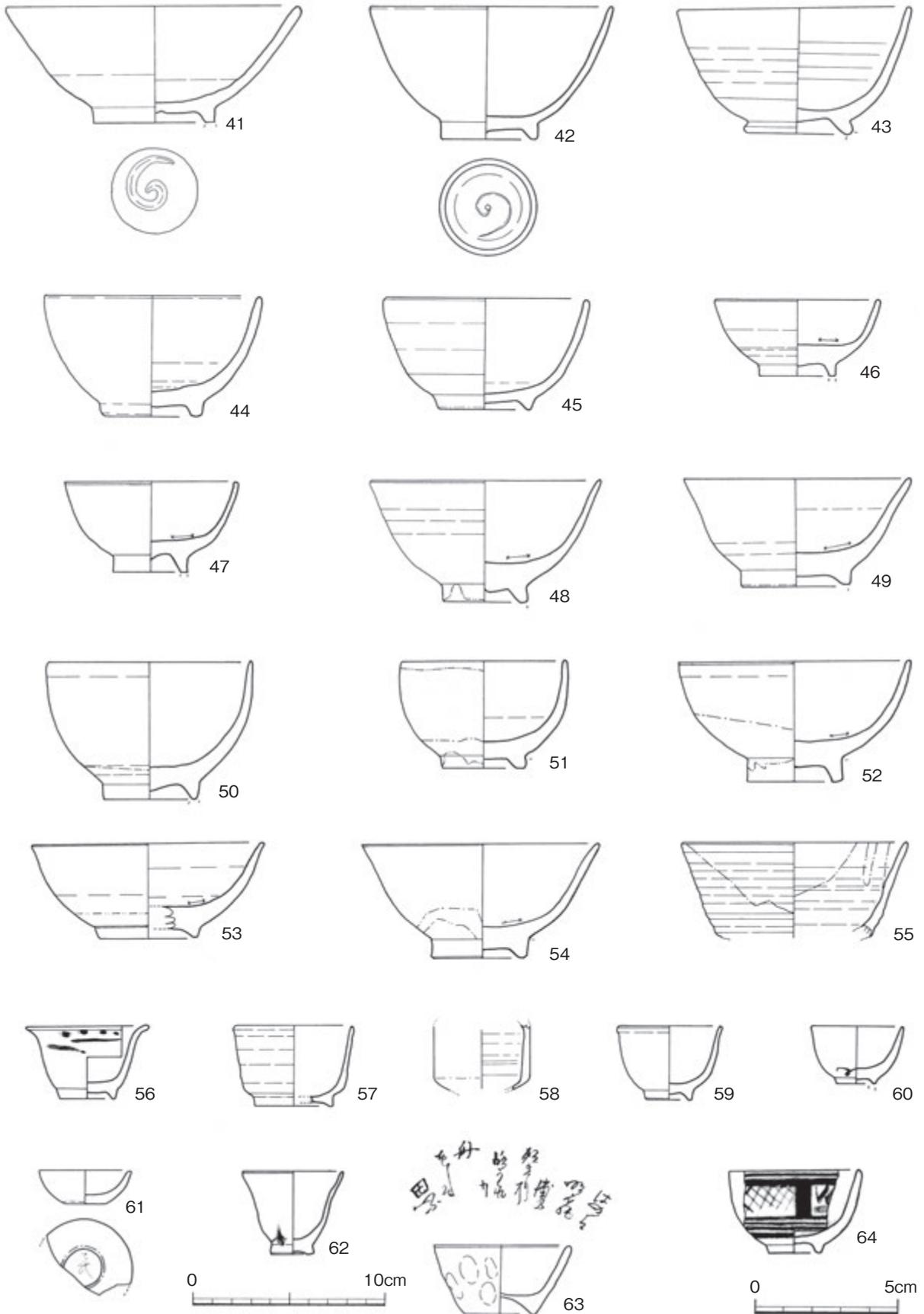
第222図 陶器 2 碗類



第223図 陶器 3 碗類

陶器観察表 1

挿図 番号	掲載 番号	種別	分類	器種	産地	出土区	法量 (cm)			胎土の 色調	釉薬の種類 色調	施釉部位	時期	備 考
							口径	底径	器高					
第 221 図	1	陶器	碗	丸碗	関西系	G地点	9.4	—	—	黄白色	透明釉	外面腰部～高台内面は無釉	18世紀前半	黄緑の上絵
	2	陶器	碗	丸碗	関西系	G地点	8.2	—	—	黄白色	透明釉	外面腰部～高台内面は無釉	18世紀前半	赤色の上絵
	3	陶器	碗	丸碗	関西系	G地点	9.6	—	—	黄白色	透明釉	外面腰部～高台内面は無釉	18世紀前半	鉄絵
	4	陶器	碗	丸碗	関西系	G地点	9.6	—	—	黄白色	透明釉	外面腰部～高台内面は無釉	18世紀前半	鉄絵
	5	陶器	碗	丸碗	関西系	G地点	9.6	3.2	5.4	黄白色	透明釉	外面腰部～高台内面は無釉	18世紀前半	
	6	陶器	碗	丸碗	関西系	G地点	—	3.0	—	黄白色	透明釉	外面腰部～高台内面は無釉	18世紀前半	
	7	陶器	碗	煎じ碗	関西系	G地点	9.8	3.6	5.2	黄白色	透明釉	外面腰部～高台内面は無釉	18世紀前半	鉄絵
	8	陶器	碗	煎じ碗	関西系	G地点	9.6	3.6	5.4	黄白色	透明釉	外面腰部～高台内面は無釉	18世紀前半	
	9	陶器	碗	丸碗	肥前	G地点	10.0	3.6	4.3	灰黄色	灰釉	外面腰部～高台内面は無釉	18世紀前半	見込みに鉄絵「寿」か?
	10	陶器	碗	腰折れ碗	肥前	G地点	8.4	4.0	5.2	黄白色	透明釉	外面腰部～高台内面は無釉	18世紀前半	外面鉄絵
	11	陶器	碗	煎じ碗	肥前	G地点	9.8	3.2	4.5	黄白色	透明釉	外面腰部～高台内面は無釉	18世紀前半	笹文の鉄絵
	12	陶器	碗	煎じ碗	肥前	G地点	9.0	3.6	4.9	黄白色	透明釉	外面腰部～高台内面は無釉	18世紀前半	笹文の鉄絵
	13	陶器	碗	煎じ碗	肥前	G地点	9.8	3.8	5.2	灰黄色	透明釉	外面腰部～高台内面は無釉	18世紀前半	
	14	陶器	碗	煎じ碗	肥前	G地点	—	3.4	—	黄白色	透明釉	外面腰部～高台内面は無釉	18世紀前半	
	15	陶器	碗	丸碗	肥前	G地点	10.0	3.6	4.2	黄白色	透明釉	外面腰部～高台内面は無釉	18世紀前半	見込みに鉄絵
	16	陶器	碗	丸碗	肥前	G地点	10.0	4.2	4.0	黄白色	透明釉	外面腰部～高台内面は無釉	18世紀前半	見込みに鉄絵
	17	陶器	碗	丸碗	肥前	G地点	—	3.4	—	黄白色	透明釉	外面腰部～高台内面は無釉	18世紀前半	見込みに鉄絵
	18	陶器	碗	丸碗	肥前	G地点	—	4.0	—	黄白色	透明釉	外面腰部～高台内面は無釉	18世紀前半	見込みに鉄絵
第 222 図	19	陶器	碗		肥前唐津	G地点	—	4.0	—	褐色	灰釉	外面腰部～高台内面は無釉	1590～1610年代	鉄絵
	20	陶器	碗		肥前唐津	G地点	—	3.5	—	黄白色	灰釉	外面腰部～高台内面は無釉	1590～17世紀前半	
	21	陶器	碗		肥前内野山系	G地点	—	4.2	—	黄白色	(外) 銅緑釉 (内) 透明釉	外面腰部～高台内面は無釉	1590～1610年代	
	22	陶器	碗	腰折れ碗	肥前	G地点	—	4.0	—	灰褐色	透明釉	壘付は無釉	18世紀前半	ハケ目
	23	陶器	碗	天目碗	肥前	G地点	12.4	4.6	6.8	灰色	黒釉	外面腰部～高台内面は無釉	1590～1630年代	
	24	陶器	碗	大碗	肥前	G地点	14.6	6.6	8.0	にぶい 赤褐色	鉄釉・白化粧 土	壘付は無釉	18世紀前半	打ちハケ目



第224図 陶器 4 碗類

陶器観察表 2

挿図 番号	掲載 番号	種別	分類	器種	産地	出土区	法量 (cm)			胎土の 色 調	釉薬の種類 色 調	施釉部位	時期	備 考
							口径	底径	器高					
第 222 図	25	陶器	碗	呉器手碗	肥前	G地点	12.9	4.3	9.8	灰黄色	透明釉	畳付は無釉	18世紀前半	
	26	陶器	碗	碗	肥前	G地点	—	5.0	—	灰白色	透明釉	畳付は無釉	17世紀後半	
	27	陶器	碗	碗	肥前か?	G地点	—	4.3	—	灰白色	透明釉・白化粧釉	外面腰部～高台内面は無釉	18世紀前半	
	28	陶器	碗	碗	肥前内野山系	G地点	—	4.6	—	灰白色	透明釉	高台から高台内面無釉	18世紀前半	見込みに蛇の目釉剥ぎ
	29	陶器	碗	碗	肥前内野山系	G地点	11.0	4.0	4.9	灰白色	透明釉	畳付は無釉	18世紀前半	見込みに蛇の目釉剥ぎ
	30	陶器	碗	碗	肥前	G地点	8.4	3.8	4.6	灰白色	青磁釉	—	18世紀代	
	31	陶器	碗	碗	萩	G地点	—	3.0	—	灰白色	灰釉・鉄釉	外面腰部～高台内面は無釉	18世紀代	
第 223 図	32	白色陶胎	碗	丸碗	薩摩堅野系	G地点	11.8	4.4	4.9	灰白色	透明釉	畳付は無釉	18世紀代	鉄釉の千鳥印有り
	33	白色陶胎	碗	丸碗	薩摩堅野系	G地点	—	5.2	—	灰白色	透明釉	畳付は無釉	18世紀代	呉須の千鳥印有り
	34	白色陶胎	碗	丸碗	薩摩堅野系	G地点	—	3.8	—	灰白色	透明釉	畳付は無釉	18世紀代	鉄釉の千鳥印有り
	35	白色陶胎	碗	腰折れ碗	薩摩堅野系	G地点	15.0	—	—	黄白色	透明釉	—	18世紀代	
	36	白色陶胎	碗	腰折れ碗	薩摩堅野系	G地点	—	4.8	—	灰白色	透明釉	畳付は無釉	18世紀代	
	37	白色陶胎	碗	小碗	薩摩堅野系	G地点	8.4	3.6	4.4	灰白色	透明釉	畳付は無釉	18世紀代	
	38	白色陶胎	碗	碗	薩摩堅野系	G地点	—	4.6	—	黄白色	透明釉	畳付は無釉	18世紀代	
	39	白色陶胎	碗	筒型碗か?	薩摩堅野系	G地点	—	6.6	—	灰白色	透明釉	畳付は無釉	18世紀代	
	40	白色陶胎	碗	湯飲み碗	薩摩堅野系	G地点	—	4.2	—	灰白色	透明釉	畳付は無釉	19世紀後半	
	第 224 図	41	陶器	碗	碗	薩摩苗代川系	G地点	15.4	6.3	6.1	にぶい 黄褐色	鉄釉	高台は無釉	19世紀
42		陶器	碗	碗	薩摩苗代川系	G地点	12.6	5.0	6.9	にぶい 赤褐色	鉄釉	畳付は無釉	19世紀	
43		陶器	碗	碗	薩摩苗代川系	G地点	12.2	5.6	6.6	にぶい 褐色	鉄釉	畳付は無釉	19世紀	
44		陶器	碗	碗	薩摩苗代川系	G地点	11.4	5.2	6.2	にぶい 赤褐色	鉄釉	畳付～高台内面無釉	19世紀	
45		陶器	碗	碗	薩摩苗代川系	G地点	10.8	4.8	5.8	灰褐色	鉄釉	畳付は無釉	19世紀	
46		陶器	碗	碗	薩摩龍門司系	G地点	8.5	3.9	4.0	灰色	鉄釉	—	18世紀後半	
47		陶器	碗	碗	薩摩龍門司系	G地点	9.1	3.9	4.7	褐灰色	鉄釉	—	18世紀後半	
48		陶器	碗	碗	薩摩龍門司系	G地点	12.0	4.2	6.4	灰色	鉄釉	—	18世紀後半	
49		陶器	碗	碗	薩摩龍門司系	G地点	11.7	5.5	5.7	暗灰色	鉄釉	—	18世紀後半	
50		陶器	碗	碗	薩摩龍門司系	G地点	10.6	4.8	7.2	灰色	鉄釉・透明釉	—	18世紀後半	
51		陶器	碗	碗	薩摩龍門司系	G地点	8.6	4.2	5.6	灰黄色	褐釉	—	18世紀前半	
52		陶器	碗	碗	薩摩龍門司系	G地点	12.0	4.8	6.5	褐色	鉄釉	—	18世紀後半	
53		陶器	碗	碗	薩摩龍門司系	G地点	12.0	5.4	4.9	にぶい 褐色	鉄釉	—	18世紀前半	
54		陶器	碗	碗	薩摩龍門司系	G地点	12.4	4.8	6.0	灰白色	白化粧釉・透明釉	—	18世紀後半	
55		陶器	碗	碗	薩摩龍門司系	G地点	11.8	—	5.0	黄灰色	灰釉	—	18世紀前半	
56		陶胎染付	碗	小坏	肥前	G地点	6.4	2.8	3.8	灰色	透明釉	畳付は釉剥ぎ	18世紀前半	
57		陶器	碗	小坏	関西系か?	G地点	6.2	4.0	4.2	黄白色	透明釉	腰部～高台内面無釉	18世紀代	
58		磁器	碗	小坏か?	肥前	G地点	—	—	—	白色	黄釉に透明釉	内面無釉	17世紀後半	
59	陶器	碗	小坏	薩摩堅野系	G地点	5.0	2.4	3.9	灰白色	透明釉	畳付は釉剥ぎ	18世紀代か?	千鳥印有り	
60	陶器	碗	小坏	薩摩堅野系	G地点	4.8	2.0	3.0	灰白色	透明釉	畳付は釉剥ぎ	18世紀代か?	千鳥印有り	
61	陶器	碗	小坏	肥前か?	G地点	4.8	2.0	1.7	灰白色	透明釉	底面無釉	18世紀代か?		
62	陶器	碗	小坏	薩摩堅野系	G地点	5.2	2.2	4.3	灰白色	透明釉	畳付は釉剥ぎ	18世紀代か?	千鳥印有り	
63	陶器	碗	小坏	薩摩か?	G地点	7.2	3.6	3.6	黄白色	透明釉	畳付は無釉	近代以降		
64	陶器	碗	小坏	薩摩苗代川系	G地点	4.4	1.8	2.9	灰褐色	透明釉	畳付は釉剥ぎ	18世紀代	宋胡録	

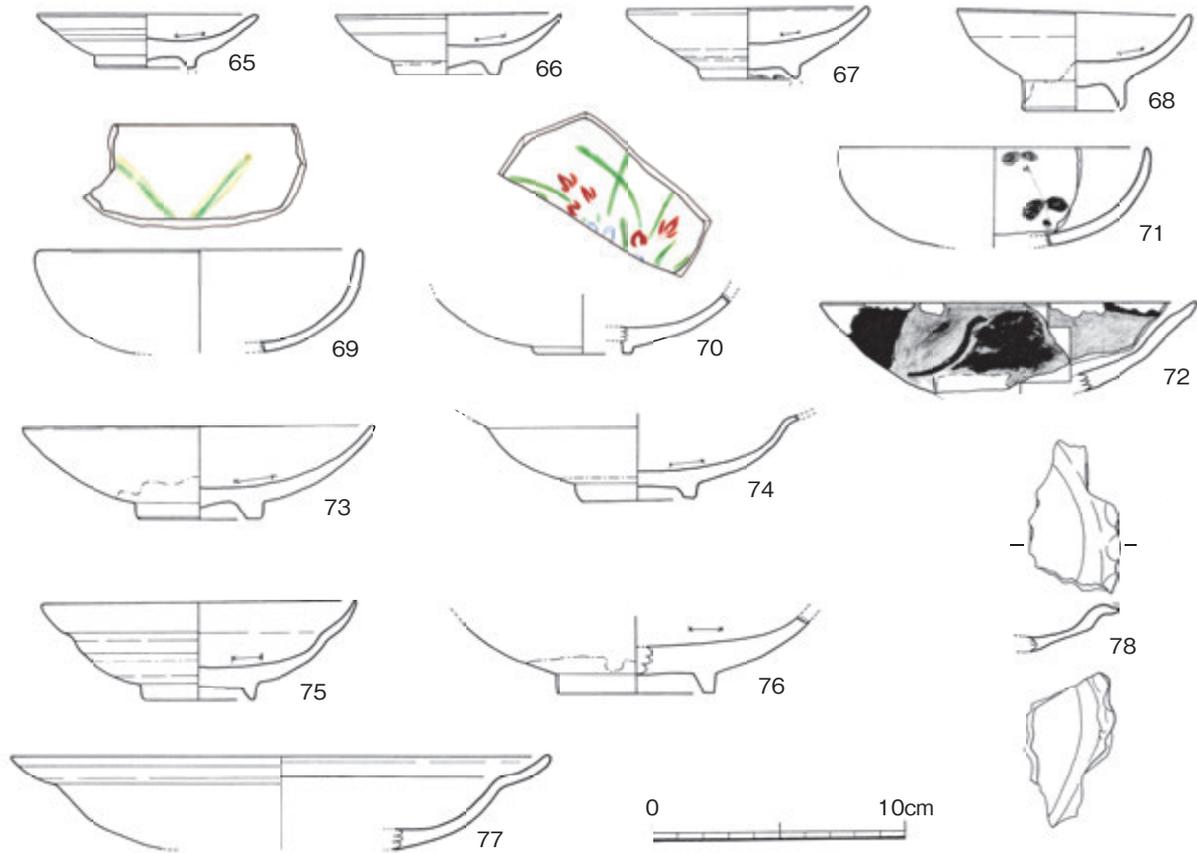
Ⅲ (第225・226図)

65～83はⅢである。

65～68は小皿である。薩摩焼の龍門司系のものである。見込みは蛇の目釉剥ぎされ、65・66は高台内面まで施釉され、その他は露胎する。67は畳付に砂が付着する。68は高台が高いもので、Ⅲに分類したが、盃の可能性も考えられる。

69～78は中皿である。69・70は関西系の皿である。見込みに上絵付で花文が描かれる。71は京焼で、上絵付けで花文が描かれる。72は肥前の皿である。73～76は内野山系の皿である。見込みには蛇の目釉剥ぎが施され、外面腰部から高台内面まで露胎する。73は内面に銅緑釉、外面に透明釉がかかるもので、74は内外面褐釉がかかるものである。75・76は内外面とも透明釉がかかるものである。77は薩摩焼で堅野系の白色陶胎である。78は瀬戸・美濃の皿である。口縁部を花びら状に装飾している。

79～83は大皿である。79～82は肥前の陶器で唐津焼である。79は鉄釉で文様が描かれる。80は二彩手で、見込みに砂目が観察できる。81は三島手のものである。82は二彩手で見込みに輪状の砂目が観察される。83は薩摩焼の苗代川系の皿である。口縁は輪花状につままれ、底面には足がつけられる。



第225図 陶器 5 皿類

#### 鉢 (第227図)

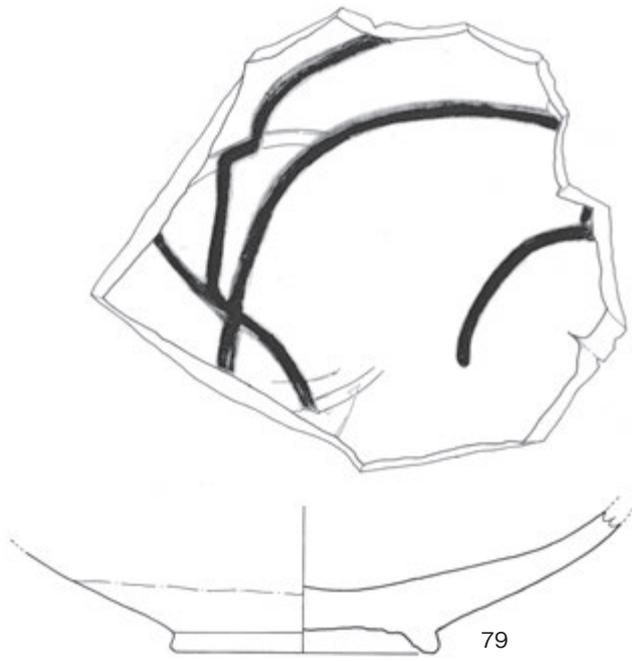
84～89は鉢である。84は大形のもので、内野山系のものである。内外面に銅緑釉がかかる。85・86は片口になると思われるものである。85は関西系のもので、見込みに目跡が観察される。87～89は薩摩焼の鉢である。87・88は龍門司系のもので、87は白化粧に透明釉の二彩手、88は二彩手に飛び鉋が施される。89は白色陶胎の白薩摩と思われる。底面に半球状の足が3足つけられている。

#### 瓶類 (第228・229図)

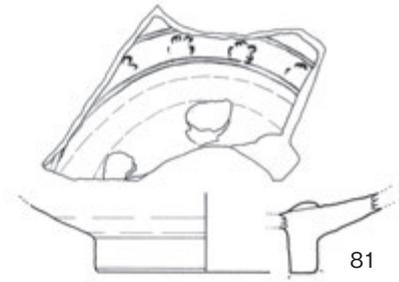
90～108は瓶類である。徳利・酒瓶等を瓶類として分類した。

90～99は薩摩焼の苗代川系の徳利である。90～93は17世紀代の初期薩摩焼である。器壁は非常に薄く、内面には同心円状のタタキ目が残る。93は特に器壁が薄く、作りがシャープなものである。94は胴部である。外面に沈線が5条廻り、内面は横方向の筋状の工具痕が残る。95～99は底部である。95は外底面は無釉で、内面に横方向の筋状の工具痕が残る。96・97は薄手の作りのもので、初期薩摩焼と思われる。97は外底面に貝目が残る。98はやや厚手のものである。胴部下位に貝目が見られる。99は底面に穿孔が観察できるもので、全体の状況は不明である。瓶として分類したが他の器種の可能性も考えられる。100は薩摩焼苗代川焼の雲助徳利である。外面に縦位の調整痕が観察できる。101は琉球の荒焼の徳利である。胎土は赤褐色で焼き締めである。

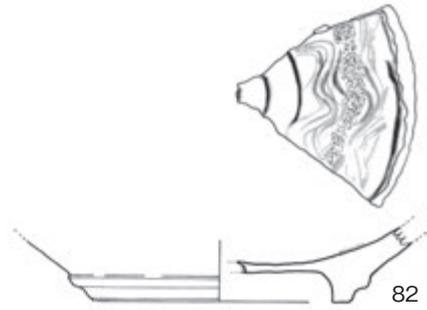
107・108は琉球荒焼の泡盛用の徳利である。



79



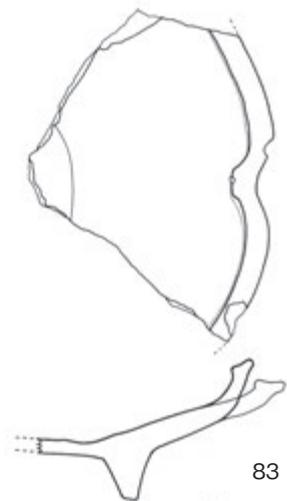
81



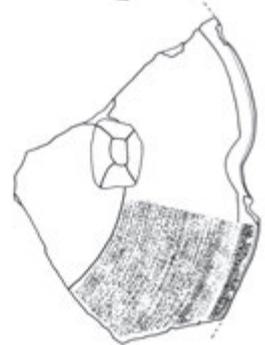
82



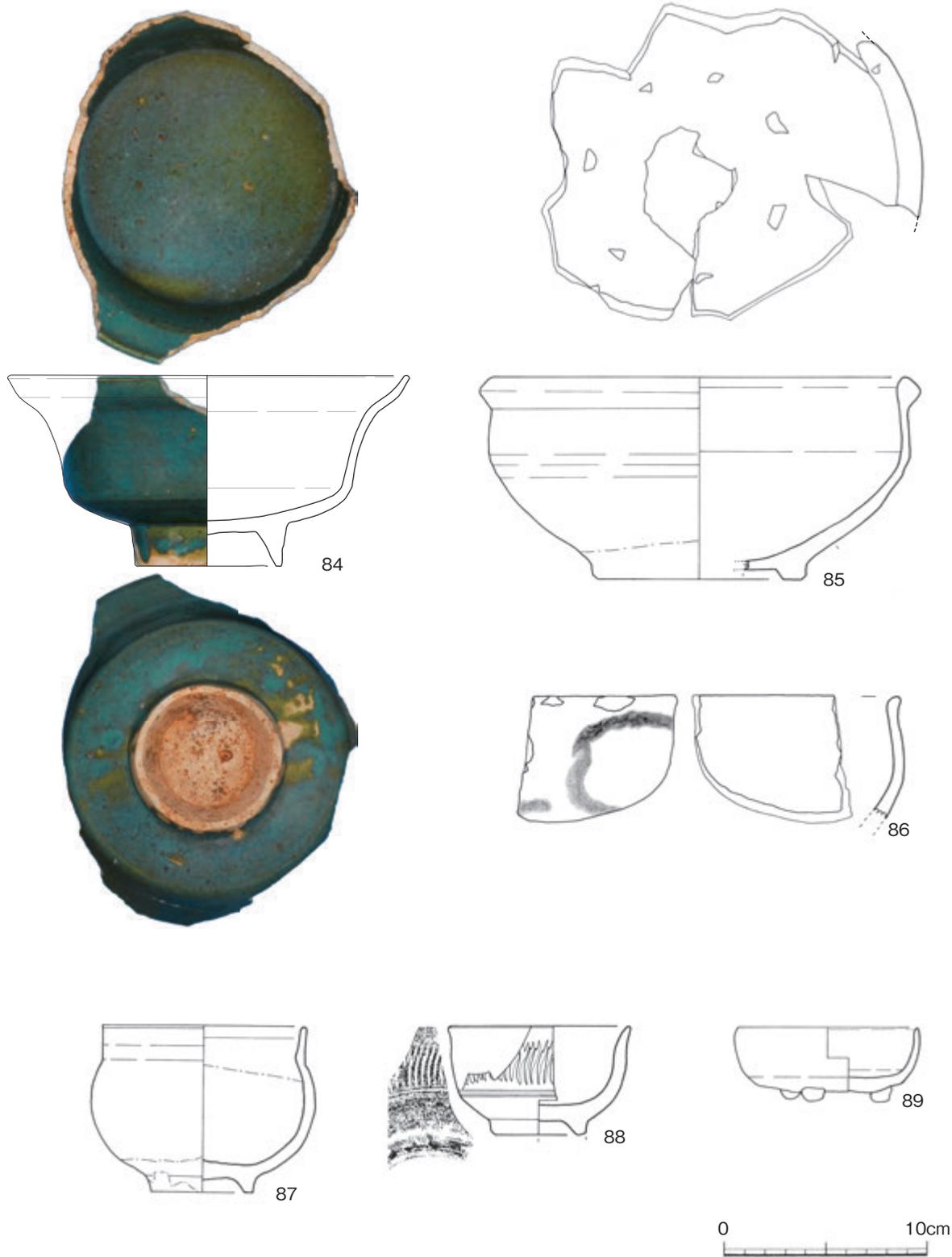
80



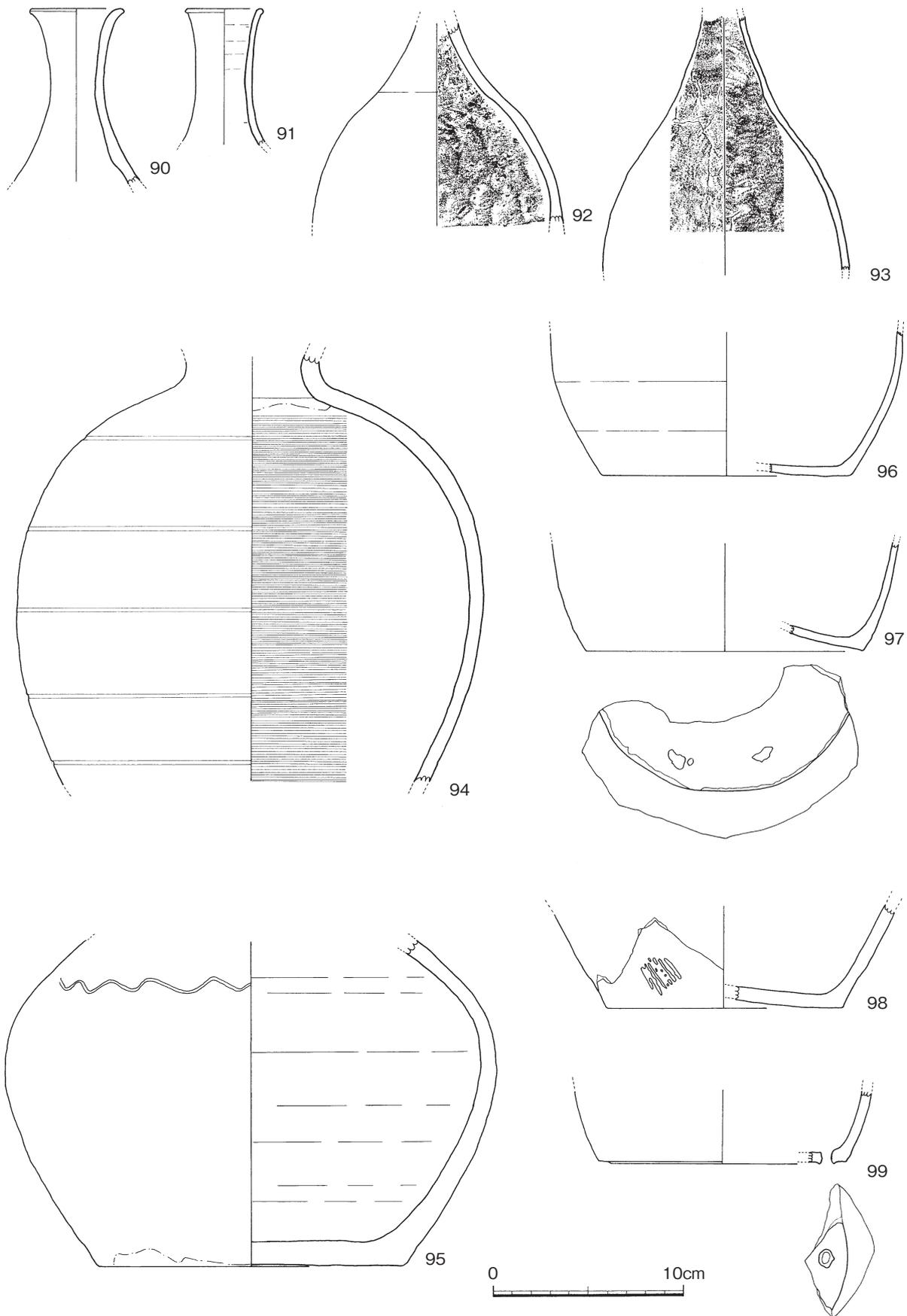
83



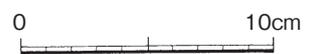
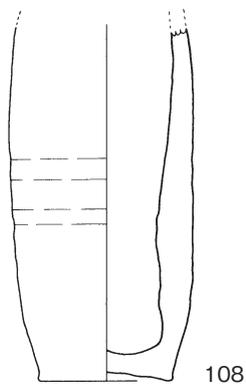
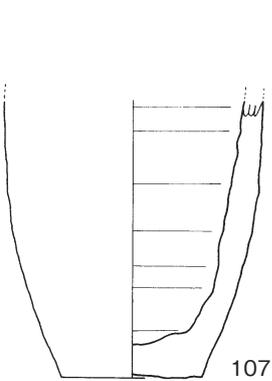
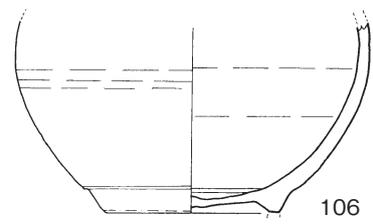
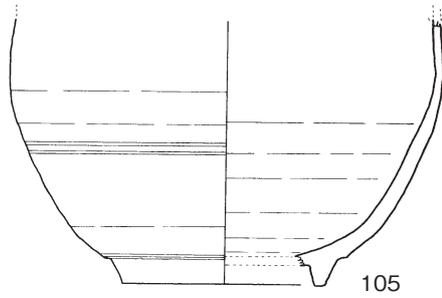
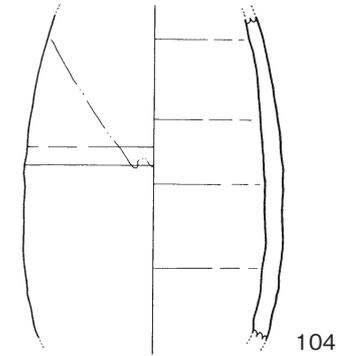
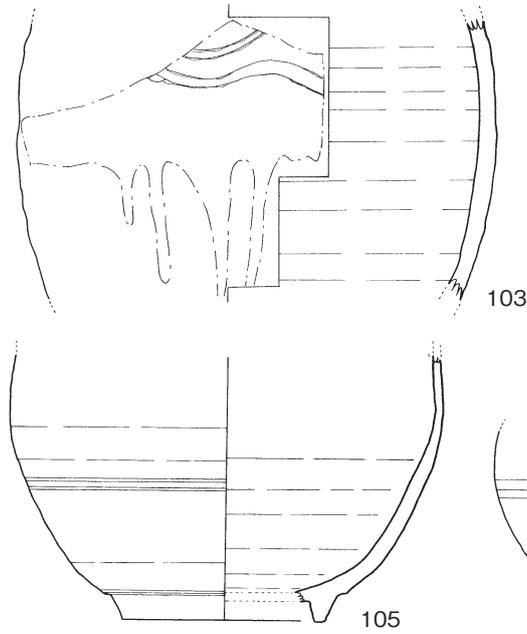
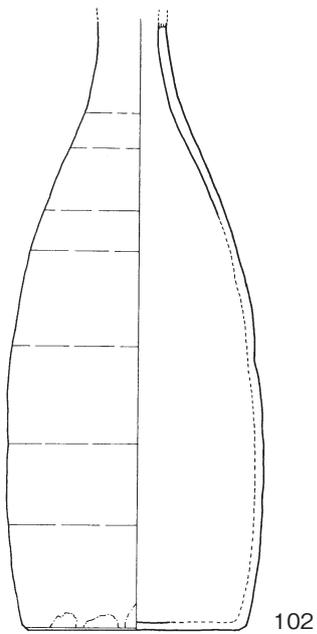
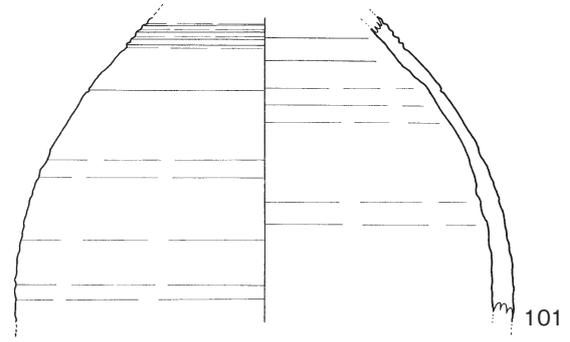
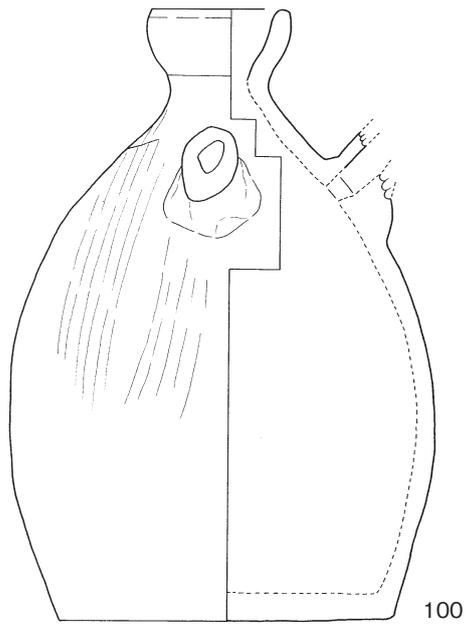
第226図 陶器 6 皿類



第227図 陶器 7 鉢類



第228図 陶器 8 瓶類



第229図 陶器 9 瓶類

陶器観察表 3

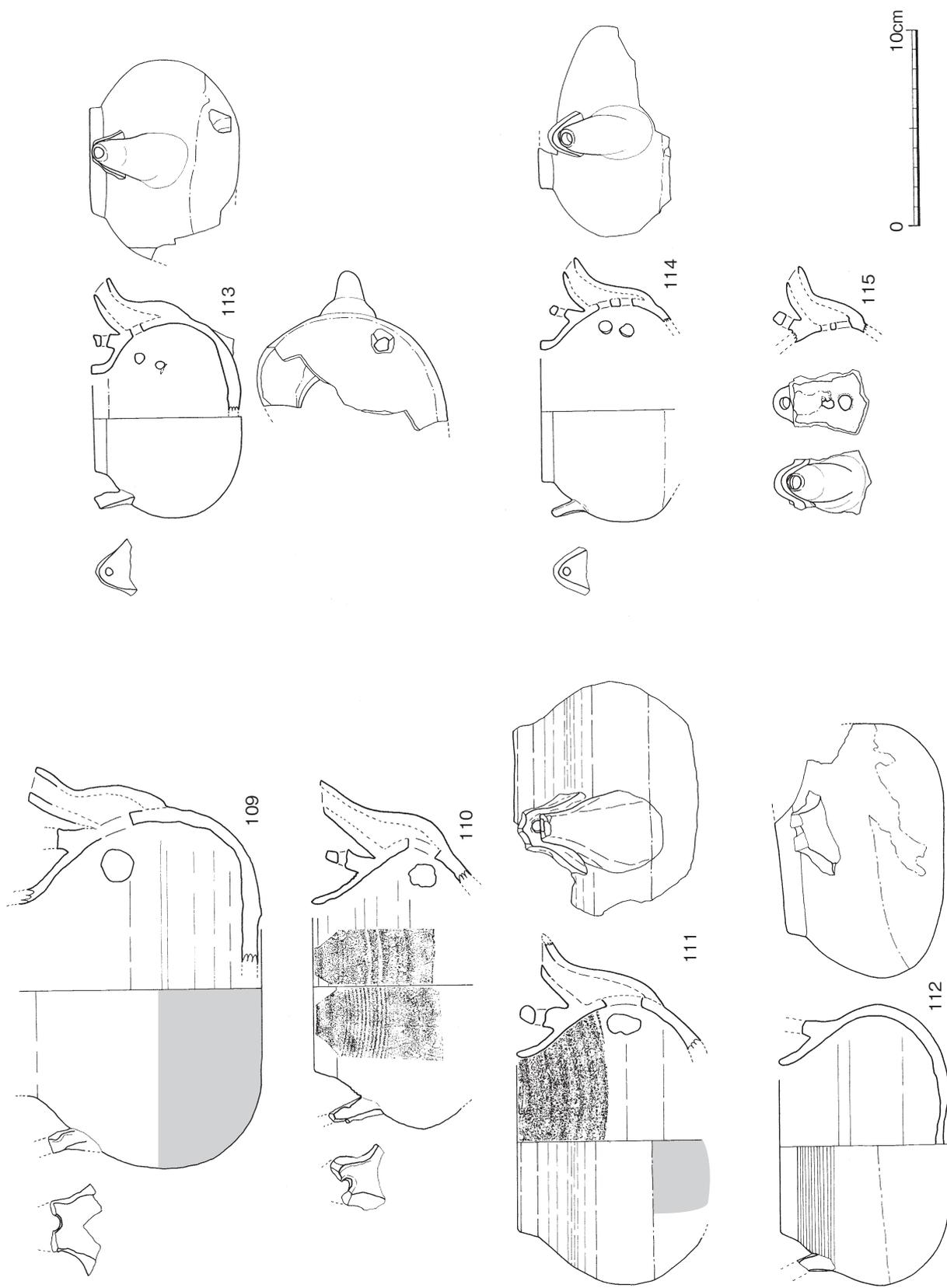
挿図 番号	掲載 番号	種別	分類	器種	産地	出土区	法量 (cm)			胎土の 色 調	釉薬の種類 色 調	施釉部位	時期	備 考
							口径	底径	器高					
第 225 図	65	陶器	皿	小皿	薩摩龍門司系	G地点	8.6	3.8	2.1	灰褐色	鉄釉	畳付は釉剥ぎ	18世紀代	見込みに蛇の目釉剥ぎ
	66	陶器	皿	小皿	薩摩龍門司系	G地点	9.0	4.0	1.9	灰褐色	鉄釉	腰部～高台内面無釉	18世紀代	見込みに蛇の目釉剥ぎ
	67	陶器	皿	小皿	薩摩龍門司系	G地点	9.5	3.8	2.8	灰色	白化粧土と透明釉	畳付は釉剥ぎ	18世紀代	見込みに蛇の目釉剥ぎ 高台に砂粒付着 二彩手
	68	陶器	皿か碗	小皿か小 杯	薩摩龍門司系	G地点	9.2	3.7	3.8	淡褐色	鉄釉	腰部～高台内面無釉	18世紀代	見込みに蛇の目釉剥ぎ
	69	陶器	皿	中皿	関西系	G地点	12.8	—	—	灰白色	透明釉	腰部～高台内面無釉	18世紀代	内面に上絵
	70	陶器	皿	中皿	京焼	G地点	—	4.0	—	黄白色	透明釉	腰部～畳付内面無釉	18世紀代	内面に上絵
	71	陶器	皿	中皿	関西系	G地点	12.2	—	—	黄白色	透明釉	腰部～高台内面無釉	18世紀代	内面に上絵
	72	陶器	皿	中皿	肥前	G地点	15.0	—	—	にぶい 赤褐色	鉄釉	腰部～高台内面無釉	1590～1610年代	
	73	陶器	皿	中皿	肥前系	G地点	13.6	4.8	3.7	灰色	(外) 透明釉 (内) 銅緑釉	腰部～高台内面無釉	17世紀後半～18世紀 初頭	見込みに蛇の目釉剥ぎ
	74	陶器	皿	中皿	肥前系	G地点	—	4.6	—	灰色	鉄釉	腰部～高台内面無釉	17世紀後半～18世紀初頭	見込みに蛇の目釉剥ぎ
	75	陶器	皿	中皿	関西系	G地点	12.5	4.4	3.9	浅黄色	透明釉	腰部～高台内面無釉	17世紀末～18世紀前半	見込みに蛇の目釉剥ぎ
	76	陶器	皿	中皿	関西系	G地点	—	6.2	—	灰白色	透明釉	腰部～高台内面無釉	17世紀末～18世紀前半	見込みに蛇の目釉剥ぎ
	77	陶器	皿	中皿	在りか?	G地点	21.3	—	—	灰白色	透明釉	腰部～高台内面無釉	18世紀代	
	78	陶器	皿	中皿	瀬戸・美濃	G地点	—	—	—	灰白色	透明釉	腰部～高台内面無釉	17世紀～18世紀代	
79	陶器	皿	大皿	肥前	G地点	—	10.4	—	茶褐色	鉄釉	腰部～高台内面無釉	1590～1610年代	鉄絵	
第 226 図	80	陶器	皿	大皿	肥前	G地点	—	10.4	—	褐灰色	透明釉・白化 粧土	腰部～高台内面無釉	17世紀後半	見込に砂目 二彩手
	81	陶器	皿	大皿	肥前	G地点	—	9.0	—	にぶい 赤褐色	透明釉	畳付は無釉	17世紀後半	見込に胎土目 三島手・象嵌
	82	陶器	皿	大皿	肥前	G地点	—	10.2	—	にぶい 赤褐色	透明釉	腰部～高台内面無釉	18世紀第二四半期～ 第三四半期	見込みにハケ目・砂目
	83	陶器	皿	大皿	薩摩苗代川系	G地点	—	—	—	明赤褐 色	鉄釉	全面施釉	18世紀代	三足 椀花皿
第 227 図	84	陶器	鉢	鉢	肥前	G地点	19.7	7.3	9.5	灰白色	銅緑釉	高台脇～高台内面は無釉	17世紀後半～18世紀初頭	
	85	陶器	鉢	片口	関西系	G地点	20.4	10.0	10.0	灰褐色	灰釉か?	腰部～高台内面無釉	19世紀代	見込みに目跡あり
	86	陶器	鉢	片口	肥前	G地点	—	—	—	にぶい 赤褐色	鉄釉	全面施釉	1590～1620年代	鉄絵
	87	陶器	鉢	鉢	薩摩龍門司系	G地点	10.0	5.0	8.2	褐色	白化粧土と透明釉	高台脇～高台内面は無釉	18世紀後半	二彩手
	88	陶器	鉢	鉢	薩摩龍門司系	G地点	8.8	4.6	5.4	にぶい 赤褐色	白化粧土と透明釉	高台脇～高台内面は無釉	19世紀代	飛び髭
	89	陶器	鉢	鉢	薩摩か?	G地点	10.8	—	3.8	黄白色	透明釉	三足のみ無釉	19世紀代か?	三足
第 228 図	90	陶器	瓶	徳利	薩摩苗代川系	G地点	3.2	—	—	黒褐色	鉄釉		17世紀後半	
	91	陶器	瓶	徳利	薩摩苗代川系	G地点	4.0	—	—	黒褐色	鉄釉		17世紀後半	
	92	陶器	瓶	徳利	薩摩苗代川系	G地点	—	—	—	黒褐色	鉄釉		17世紀後半	内面に同心円状のタタキ目
	93	陶器	瓶	徳利	薩摩苗代川系	G地点	—	—	—	黒褐色	鉄釉		17世紀後半	内面に同心円状のタタキ目
	94	陶器	瓶	徳利	薩摩苗代川系	G地点	—	—	—	赤褐色	鉄釉		19世紀代	外面沈線五条 内面ヘラ状工具による横筋 波状文
	95	陶器	瓶	徳利	薩摩苗代川系	G地点	—	15.6	—	橙色	鉄釉	底面無釉	19世紀代	外面ヘラ状工具による横筋 波状文
	96	陶器	瓶	徳利	薩摩苗代川系	G地点	—	13.0	—	灰褐色	鉄釉	内面無釉	17世紀後半	外面に貝目
	97	陶器	瓶	徳利	薩摩苗代川系	G地点	—	14.6	—	灰褐色	鉄釉	内面無釉	17世紀後半	外面に貝目
	98	陶器	瓶	徳利	薩摩苗代川系	G地点	—	12.4	—	赤褐色	鉄釉		18世紀代	腰部に貝目
	99	陶器	瓶	?	薩摩苗代川系	G地点	—	13.2	—	灰褐色	鉄釉		17世紀後半～18世紀代	底面に穿孔有り 外面に工具縦位の ヘラ状工具痕あり
第 229 図	100	陶器	瓶	徳利	薩摩苗代川系	G地点	5.5	13.1	24.4	灰褐色	鉄釉	外底面無釉	19世紀代	外面に工具縦位の ヘラ状工具痕あり
	101	陶器	瓶	徳利	壺屋	G地点	—	—	—	にぶい 赤褐色	焼き締め	—	18世紀後半	琉球荒焼き
	102	陶器	瓶	徳利	関西系	G地点	—	8.3	—	黄灰色	透明釉	底面無釉	19世紀代	
	103	陶器	瓶か鉢	瓶か鉢	肥前	G地点	—	—	—	褐灰色	白化粧土	外面に白ハケ目 内面と外面腰部以下無釉	18世紀	
	104	陶器	瓶か鉢	瓶か鉢	肥前内野山系	G地点	—	—	—	赤褐色	白化粧土	畳付は釉剥ぎ 内面無釉	18世紀後半	畳付に目跡あり
	105	陶器	瓶	徳利	瀬戸・美濃	G地点	—	8.0	—	黄白色	褐釉		18世紀	
	106	陶器	瓶	瓶	薩摩龍門司系	G地点	—	6.8	—	暗赤灰 色	白化粧土	内面・畳付～高台内面は無釉	18世紀後半	
	107	陶器	瓶	徳利	壺屋	G地点	—	5.6	—	暗赤灰 色	焼き締め		18世紀後半～19世紀代	琉球荒焼き
	108	陶器	瓶	徳利	壺屋	G地点	—	5.3	—	暗赤灰 色	焼き締め		18世紀後半～19世紀代	琉球荒焼き 自然釉かかる

土瓶 (第230～235図)

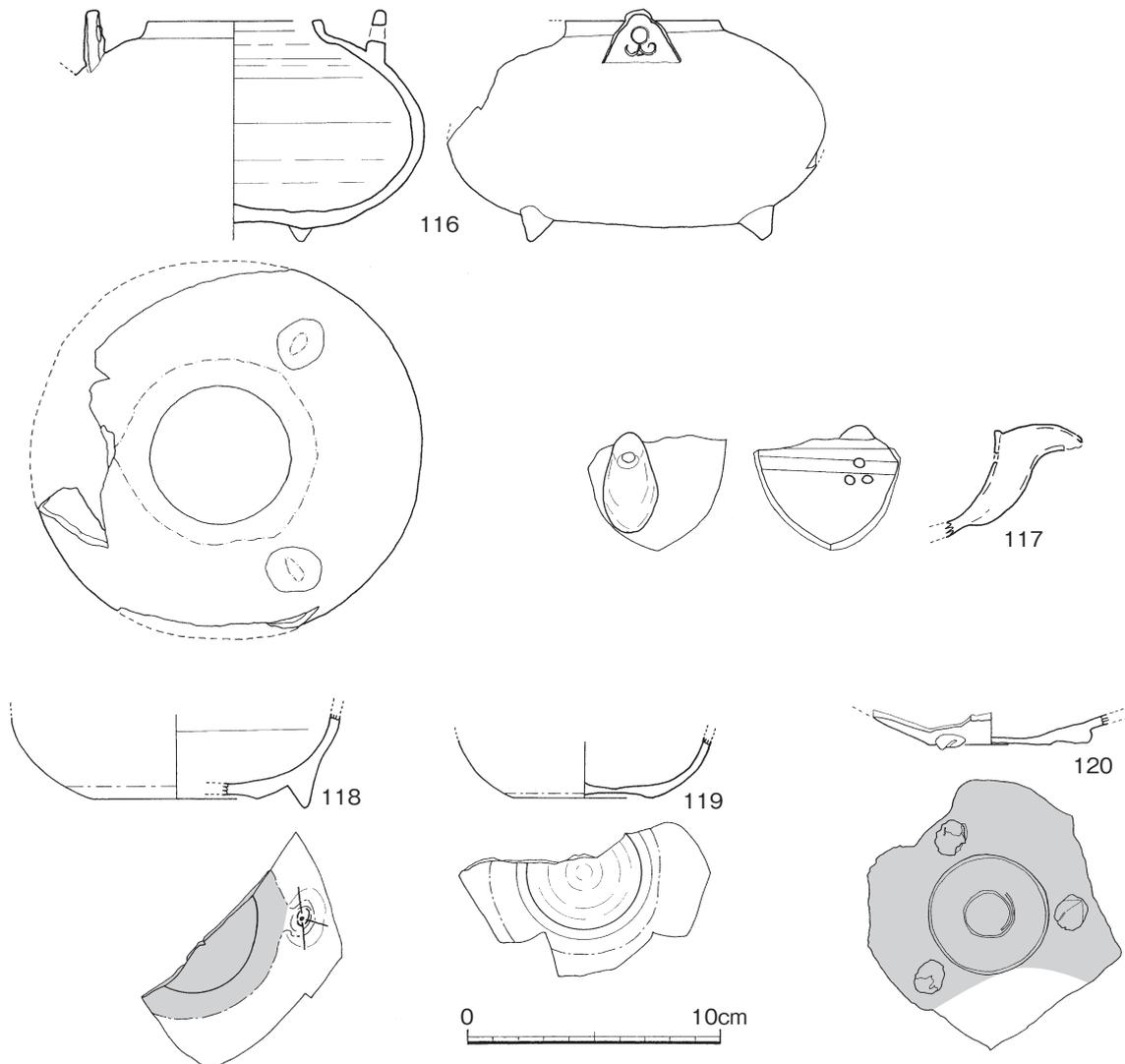
109～131は土瓶である。

109～112は胴部が下垂した形状で、肩部に筋状の工具痕が残るものである。胴部と口縁部の境は明確ではなく、なだらかに窄まる。注口は溜め口であるが、先端は受け口ではなくまっすぐに作られる。胎土は粗く、微細な砂粒を多く含む。底面に足はなく、茶止め穴もない。産地は、熊本の八代焼と思われる。

113～131は苗代川系の土瓶である。茶褐色系の胎土に鉄釉が、胴部下位までかかる。底部は削り出しされ、筋状の工具痕が残るものが多い。また、3足の足がつけられる。113～115は茶止め穴が2穴のものである。116～119は薩摩焼堅野系の土瓶である。釉薬は、底面中央の削り部脇までかかり、足部にも先端を除きかかる。116は褐釉のもので、内面にもかかる。器形は平形で、胴部は尖らない。117は注口部である。118は底部である。白色陶胎のもので、底面には煤が付着する。120は関西系のものである。小さい足がつく。121・122は、底部中央の削りが浅く、ほとんど平坦に近いもので、器形は胴部がやや下垂した丸形である。足は底面で注口のやや左もしくはほぼ真下



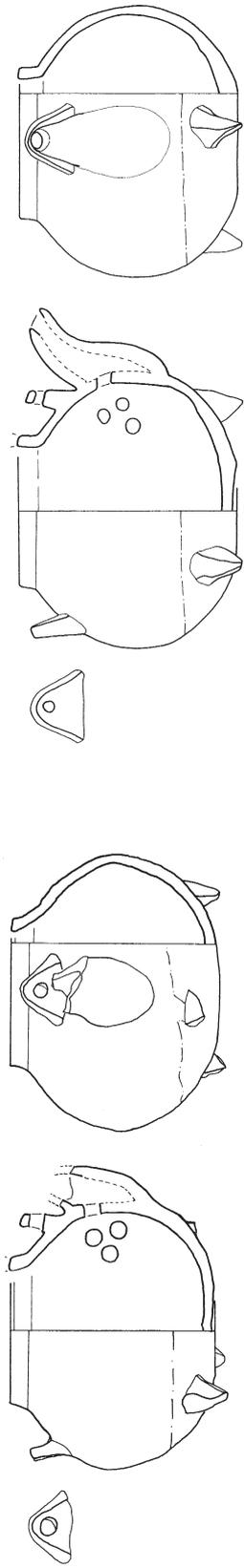
第230図 陶器10 土瓶



第231図 陶器11 土瓶

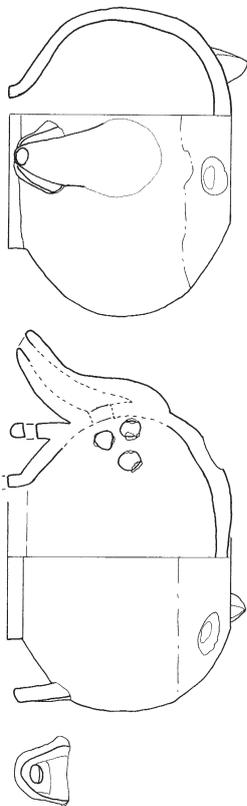
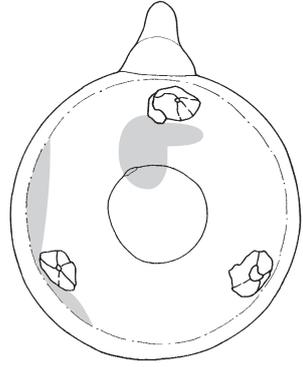
陶器観察表 4

挿図 番号	掲載 番号	種別	分類	器種	産地	出土区	法量 (cm)			胎土の 色調	釉薬の種類 色調	施釉部位	時期	備 考
							口径	底径	器高					
第 230 図	109	陶器	水注	土瓶	肥後八代	G地点	—	8.4	—	褐色	鉄釉	底面無釉	19世紀代	
	110	陶器	水注	土瓶	肥後八代	G地点	8.6	—	—	にぶい 橙色	鉄釉	底面無釉	19世紀代	外面口縁部下に横筋
	111	陶器	水注	土瓶	肥後八代	M地点	9.0	—	—	赤褐色	鉄釉	底面無釉	19世紀代	外面口縁部下に横筋
	112	陶器	水注	土瓶	肥後八代	G地点	8.8	—	8.6	赤褐色	鉄釉	底面無釉	19世紀代	外面口縁部下に横筋
	113	陶器	水注	土瓶	薩摩苗代川系	G地点	5.5	—	—	黒色	鉄釉	底面無釉 内面無釉	19世紀代	茶止め穴 二穴
	114	陶器	水注	土瓶	薩摩苗代川系 か?	G地点	7.2	—	—	暗褐色	鉄釉か?	底面無釉 内面無釉	19世紀代	茶止め穴 二穴
第 231 図	115	陶器	水注	土瓶	薩摩苗代川系 か?	G地点	—	—	—	明褐色	鉄釉		19世紀代	茶止め穴 二穴
	116	陶器	水注	土瓶	薩摩堅野系	G地点	7.0	—	—	黄灰色	褐釉	口唇部・底面無釉	18世紀後半	
	117	陶器	水注	土瓶	薩摩堅野系	G地点	—	—	—	黄灰色	透明釉	内面無釉	19世紀代	
	118	陶器	水注	土瓶	薩摩堅野系	G地点	—	—	—	灰白色	透明釉	底面無釉	18世紀後半	底面にス付着
	119	陶器	水注	土瓶	薩摩堅野系	G地点	—	5.4	—	にぶい 赤褐色	鉄釉	底面無釉	19世紀代	
第 232 図	120	陶器	水注	土瓶	関西系	G地点	—	—	—	黄白色	(外) 無釉 (内) 透明釉		19世紀代か?	三足 底面にス付着
	121	陶器	水注	土瓶	薩摩苗代川系	G地点	6.1	—	9.0	赤褐色	鉄釉	口唇部・底面無釉	18世紀後半	
	122	陶器	水注	土瓶	薩摩苗代川系	G地点	6.5	—	—	にぶい 橙色	鉄釉	口唇部・底面無釉	18世紀後半	
	123	陶器	水注	土瓶	薩摩苗代川系	G地点	5.7	—	9.3	にぶい 褐色	鉄釉	口唇部・底面無釉	18世紀後半	
第 233 図	124	陶器	水注	土瓶	薩摩苗代川系	G地点	6.1	—	—	灰褐色	鉄釉	口唇部・底面無釉	18世紀後半	
	125	陶器	水注	土瓶	薩摩苗代川系	G地点	5.4	—	7.9	にぶい 褐色	鉄釉	口唇部・底面無釉	18世紀後半	
	126	陶器	水注	土瓶	薩摩苗代川系	G地点	7.2	—	10.5	にぶい 褐色	鉄釉	口唇部・底面無釉	18世紀後半	
	127	陶器	水注	土瓶	薩摩苗代川系	G地点	6.2	—	7.8	暗褐色	鉄釉	口唇部・底面無釉	18世紀後半	
	128	陶器	水注	土瓶	薩摩苗代川系	G地点	6.4	—	—	明褐色	鉄釉	口唇部・底面無釉	18世紀後半	
第 234 図	129	陶器	水注	土瓶	薩摩苗代川系	G地点	7.0	—	8.5	赤褐色	鉄釉	口唇部・底面無釉	19世紀代	底面に重ね焼きの跡あり
	130	陶器	水注	土瓶	薩摩苗代川系	G地点	7.0	—	7.5	にぶい 褐色	鉄釉	口唇部・底面無釉	18世紀後半~18世紀 前半	底面に貝目 底面にス付着
	131	陶器	水注	土瓶	薩摩苗代川系	G地点	—	—	—	にぶい 褐色	鉄釉	底面無釉	18世紀後半~19世紀 前半	底面に貝目

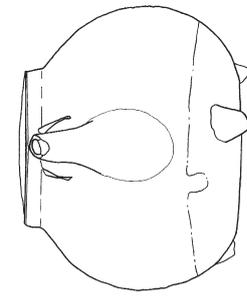


121

123



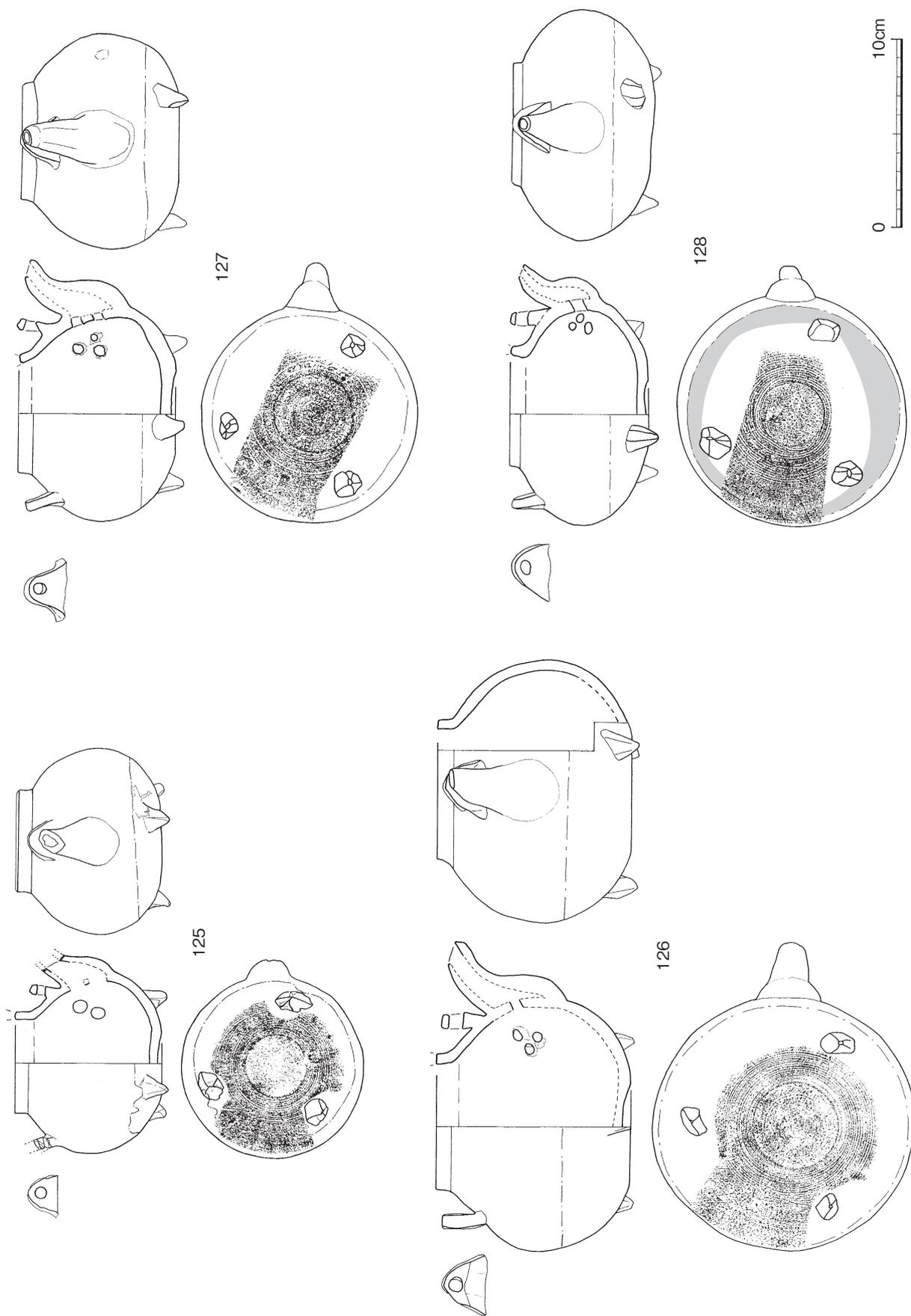
122



124

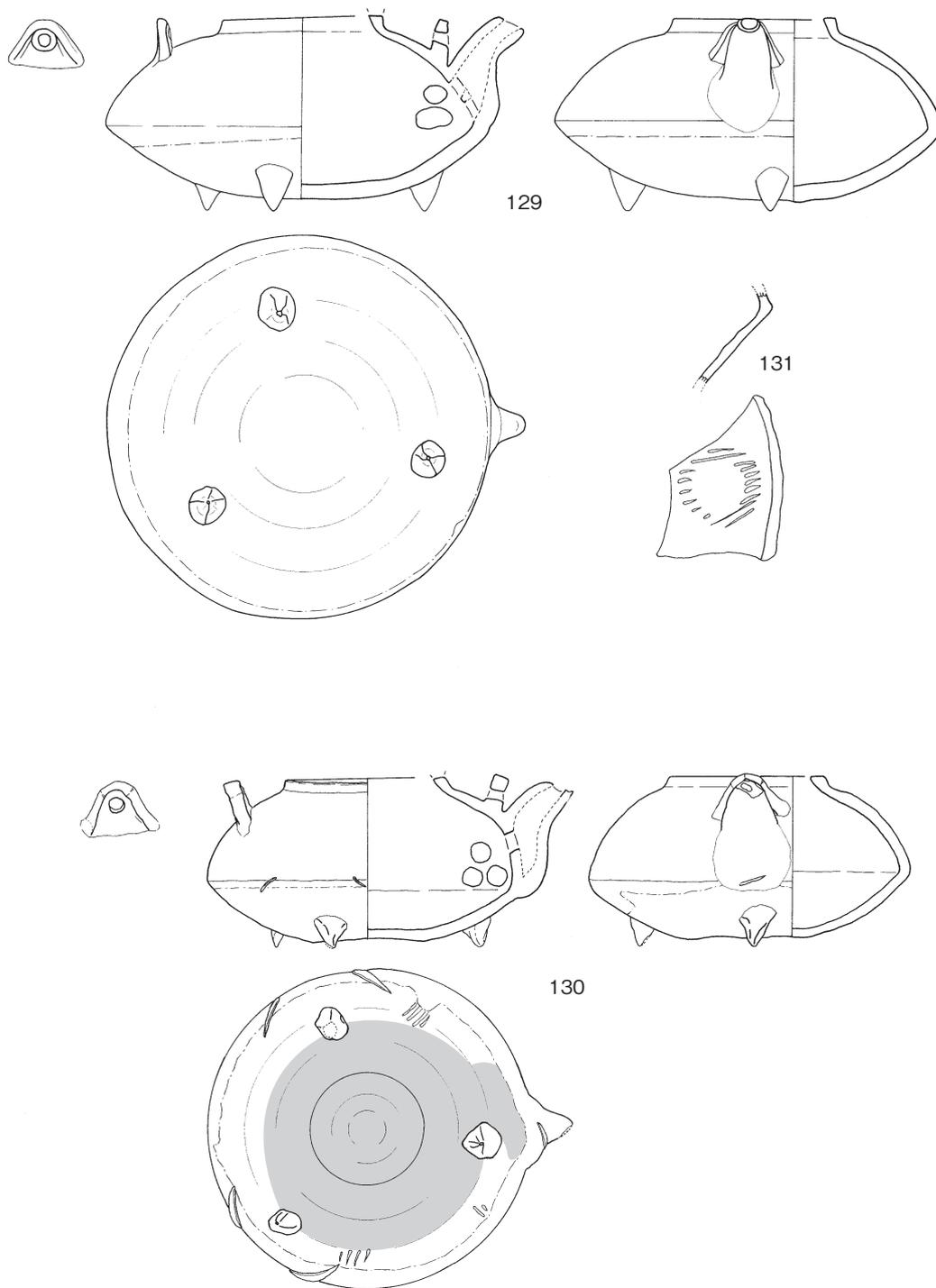


第232图 陶器12 土瓶

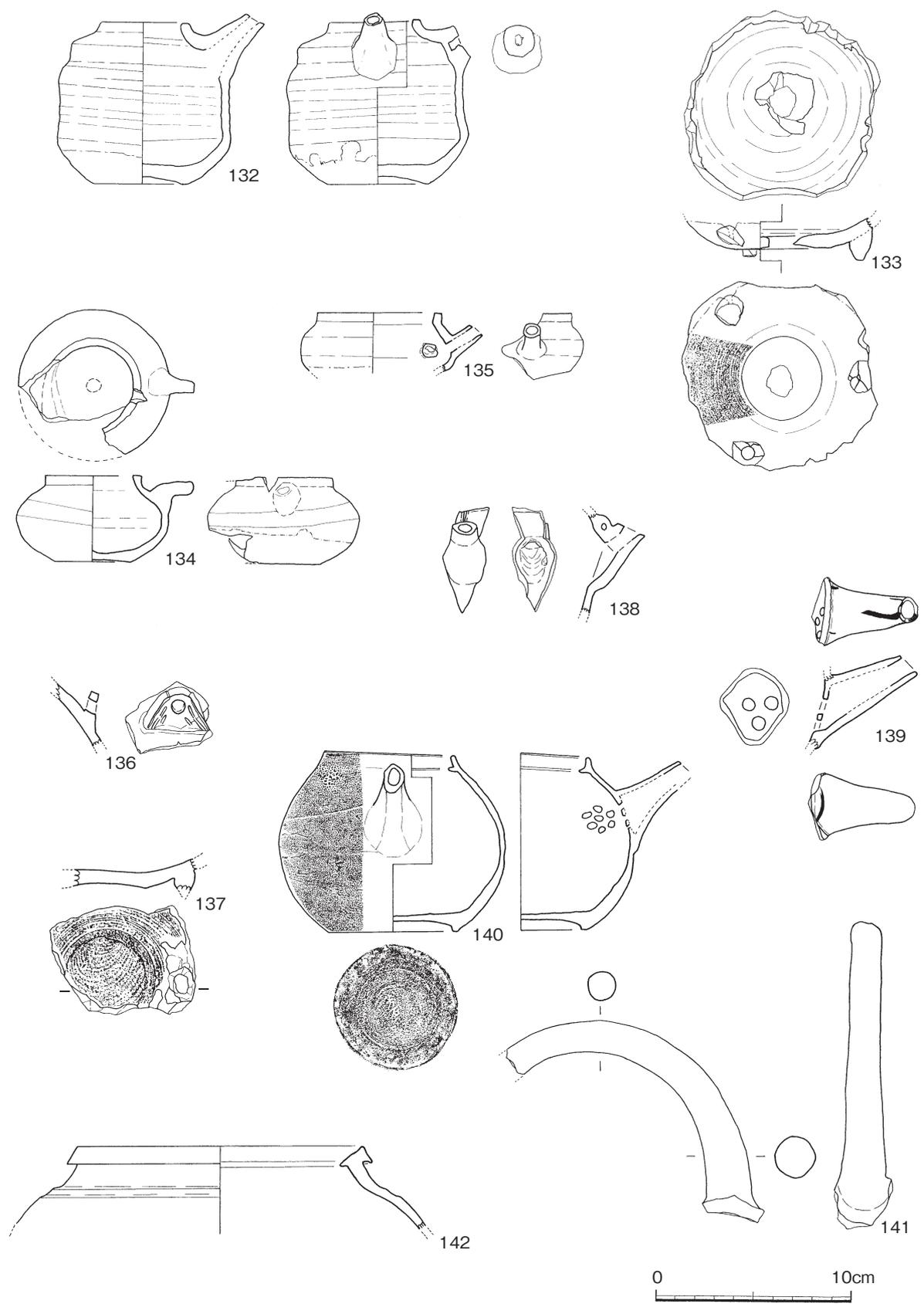


第233图 陶器13 土瓶

から三角形状に均等に3足つけられる。123~127は丸形のもので、底面中央の削りがやや深いものである。足は底面で注口のやや右側に均等に3足つけられる。128~131は器形が平形のものである。128は胴部中位が尖らず、丸みを帯びる。129~131は、胴部中位に稜を持つものである。130は注口の真下から3足がつく。底面に貝目が観察される。131にも貝目が観察される。



第234図 陶器14 土瓶



第235図 陶器15 水注類 土瓶・急須他

132～136は薩摩焼の苗代川系のものである。132は急須である。133は土瓶の底部に穿孔があけられたものである。134・135は楽飲みのような用途に使用されたと思われるものである。136は装飾の施された土瓶の耳部である。137は外底面に糸切りが観察されるもので、産地は不明である。138・139は関西系の水注類の注口部である。139には鉄絵が描かれる。140は薩摩焼の龍門司系の急須である。鮫肌で、外底面に「芳右」の銘が入る。141は陶製の水注の把手部である。142は17世紀代の薩摩焼で、苗代川系のものである。蓋受け部があることから、水注に分類した。

陶器観察表5

挿図 番号	掲載 番号	種別	分類	器種	産地	出土区	法量 (cm)			胎土の 色 調	釉薬の種類 色 調	施釉部位	時期	備 考
							口径	底径	器高					
第 235 図	132	陶器	水注	急須	薩摩苗代川系	G地点	3.9	4.8	8.3	暗赤褐色	鉄釉	腰部～底面無釉 口唇部無釉	19世紀代	
	133	陶器	水注	土瓶	薩摩苗代川系	G地点	—	—	—	赤褐色	鉄釉	底面無釉	19世紀代	底面に穿孔有り
	134	陶器	水注	楽飲み	薩摩苗代川系	G地点	5.0	3.8	4.5	暗赤褐色	鉄釉	腰部～底面無釉	19世紀代	
	135	陶器	水注	楽飲み	薩摩苗代川系	G地点	7.4	—	—	褐色	鉄釉	腰部～底面無釉	19世紀代	
	136	陶器	水注	土瓶	薩摩苗代川系	G地点	—	—	—	褐色	鉄釉	—	19世紀代	耳部に装飾有り
	137	陶器	水注	土瓶	不明	G地点	—	—	—	灰褐色	—	—	19世紀代か?	底面中央糸切り
	138	陶器	水注	?	関西系	G地点	—	—	—	にい濁色	—	—	19世紀代	
	139	陶器	水注	土瓶	関西系	G地点	—	—	—	黄白色	透明釉	内面無釉	19世紀代	注口部に鉄絵
	140	陶器	水注	急須	薩摩龍門司系	G地点	6.6	6.8	9.3	灰褐色	鮫肌釉	底面無釉	19世紀後半	底面に「芳右」の銘有り
	141	陶器	水注	把手	薩摩苗代川系	G地点	—	—	—	黄灰色	鉄釉	—	17世紀後半～18世紀代	水注の陶製の把手
	142	陶器	水注	水注か?	薩摩苗代川系	G地点	14.4	—	—	灰褐色	鉄釉	口唇部無釉	17世紀後半～18世紀代	

### 蓋 (第236・237図)

土瓶蓋, 土鍋蓋, 雪平鍋等の蓋を掲載した。

143～152は薩摩焼の苗代川系のものである。148は上面2か所に重ね焼きの痕跡が見られる。149～151は上面に重ね焼きの痕跡が輪状に残る。152は上面端部に3条の沈線が巡る。153・155は薩摩焼の龍門司系のものである。153は、上面に黒釉と青流しの文様が施される。154は肥前のものと思われる、胎土は黄白色で、上面に鉄絵が描かれる。

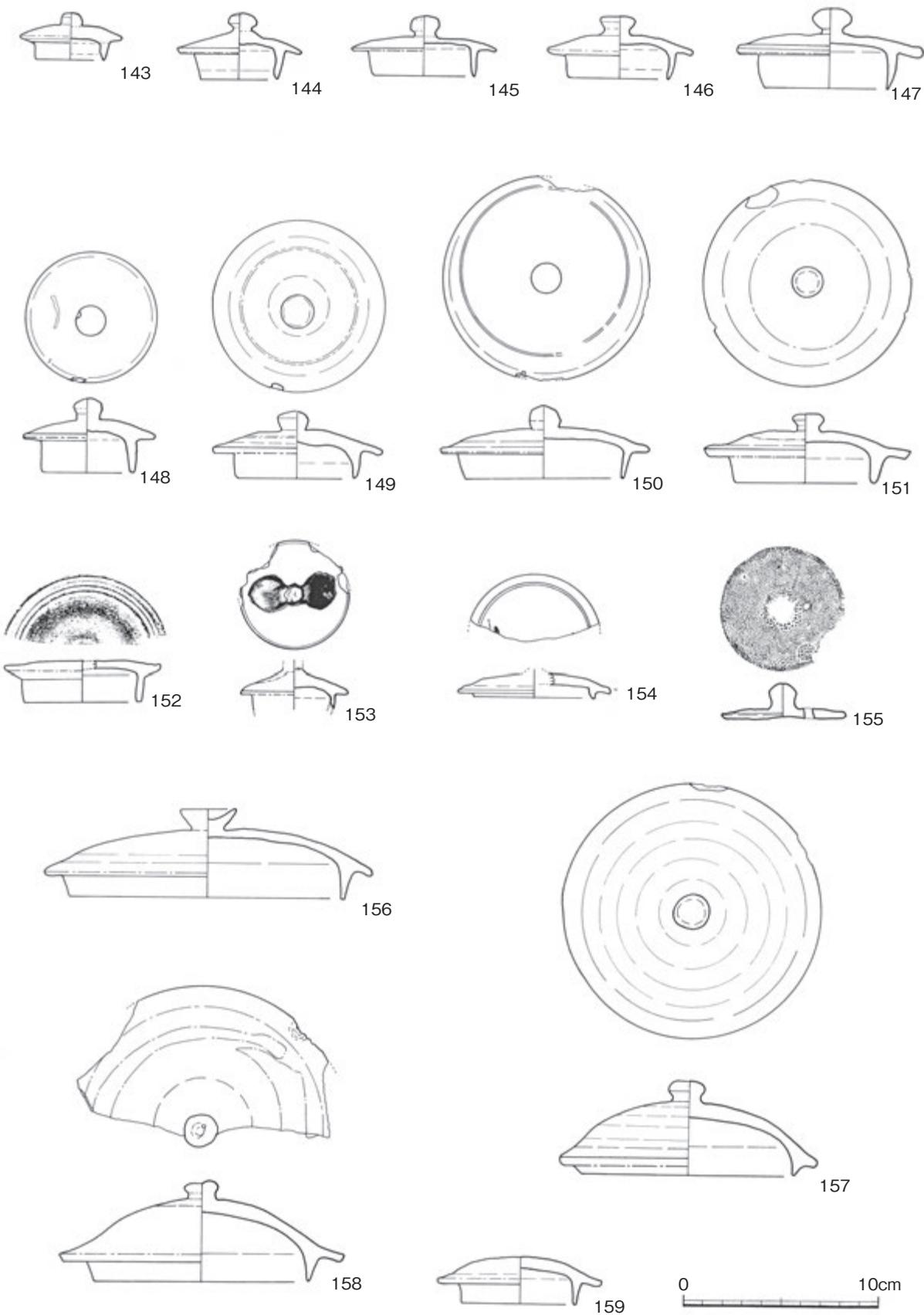
156～158は大形の蓋で、土鍋用のものである。159は小壺用で、つまみはない。160・161は大形のつまみのない蓋である。161は関西系のもので、上面に鉄絵が描かれる。162～164は鍋の蓋である。162・163は飛び鉤が施される。164は内面天井部は円状の釉がかからない部分が見られる。

### 鍋類 (第237・238図)

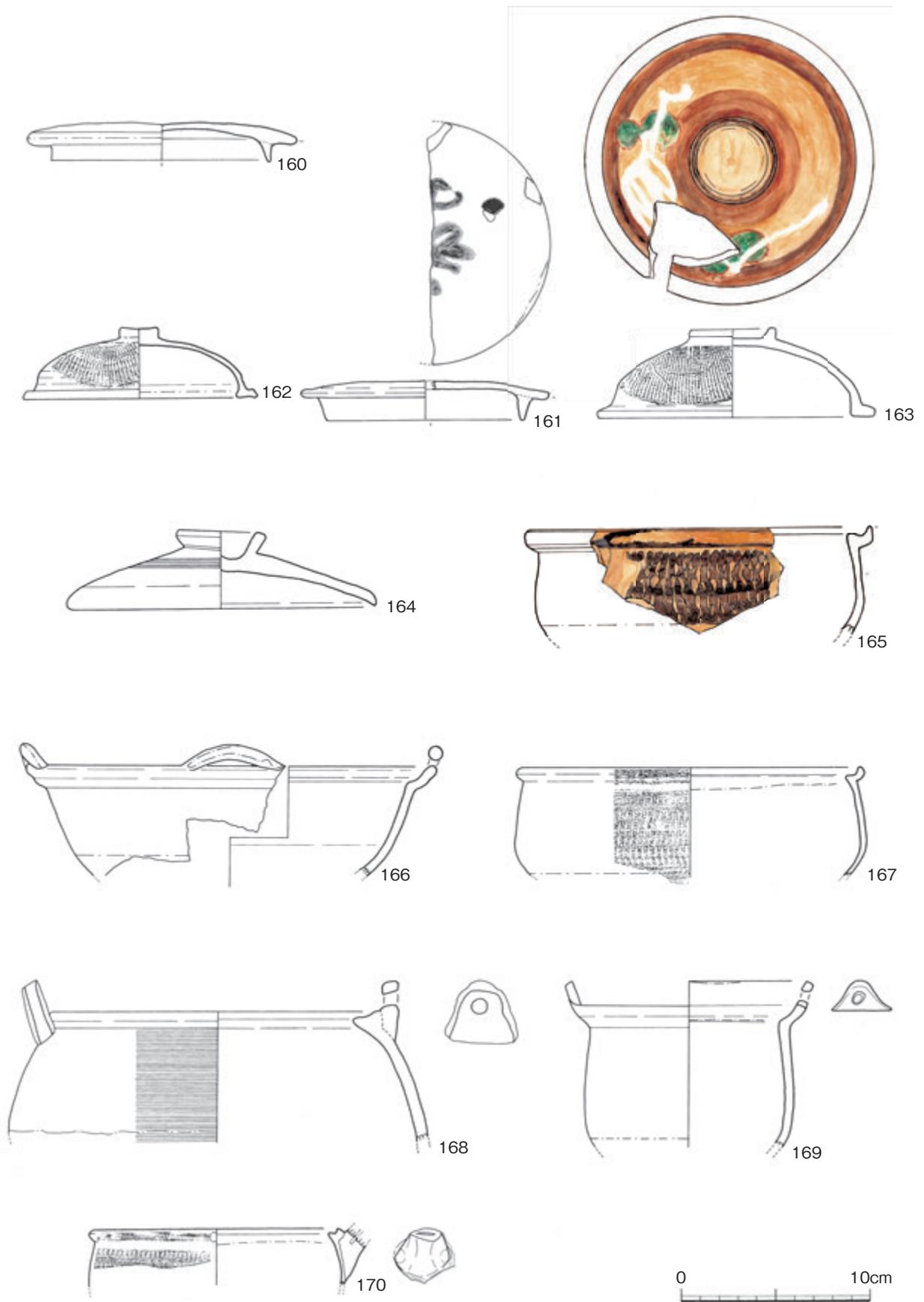
165～180は鍋である。火にかけるため、底面は露胎する。165・167・170の3点は関西系のもので、外面に飛び鉤が施される。172・178は欠損しているが、把手がつくと思われる。他はすべて薩摩焼で苗代川系のものである。羽釜形のものや片口がつくもの等、様々な形状のものがある。

### 片口 (第239図)

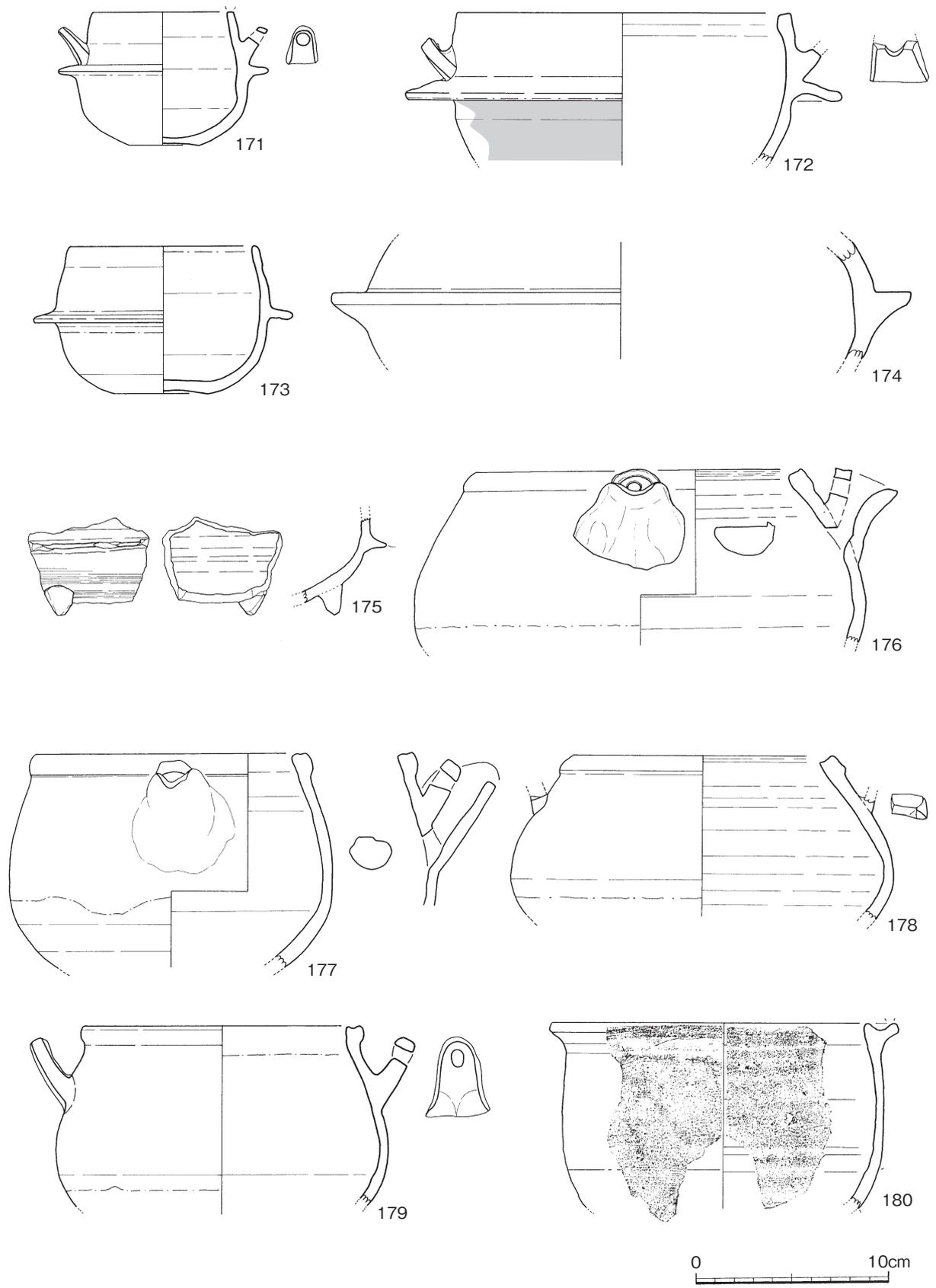
181～189は片口である。すべて薩摩焼の苗代川系のものである。181～183は器壁が厚でのものである。内外面がヘラ状工具による横筋が観察される。181は外底面に貝目が観察される。184～189は器壁が薄手のもので、17世紀代のもと考えられる。185・189は内面に同心円状のタタキ目が残る。187～189は片口部である。



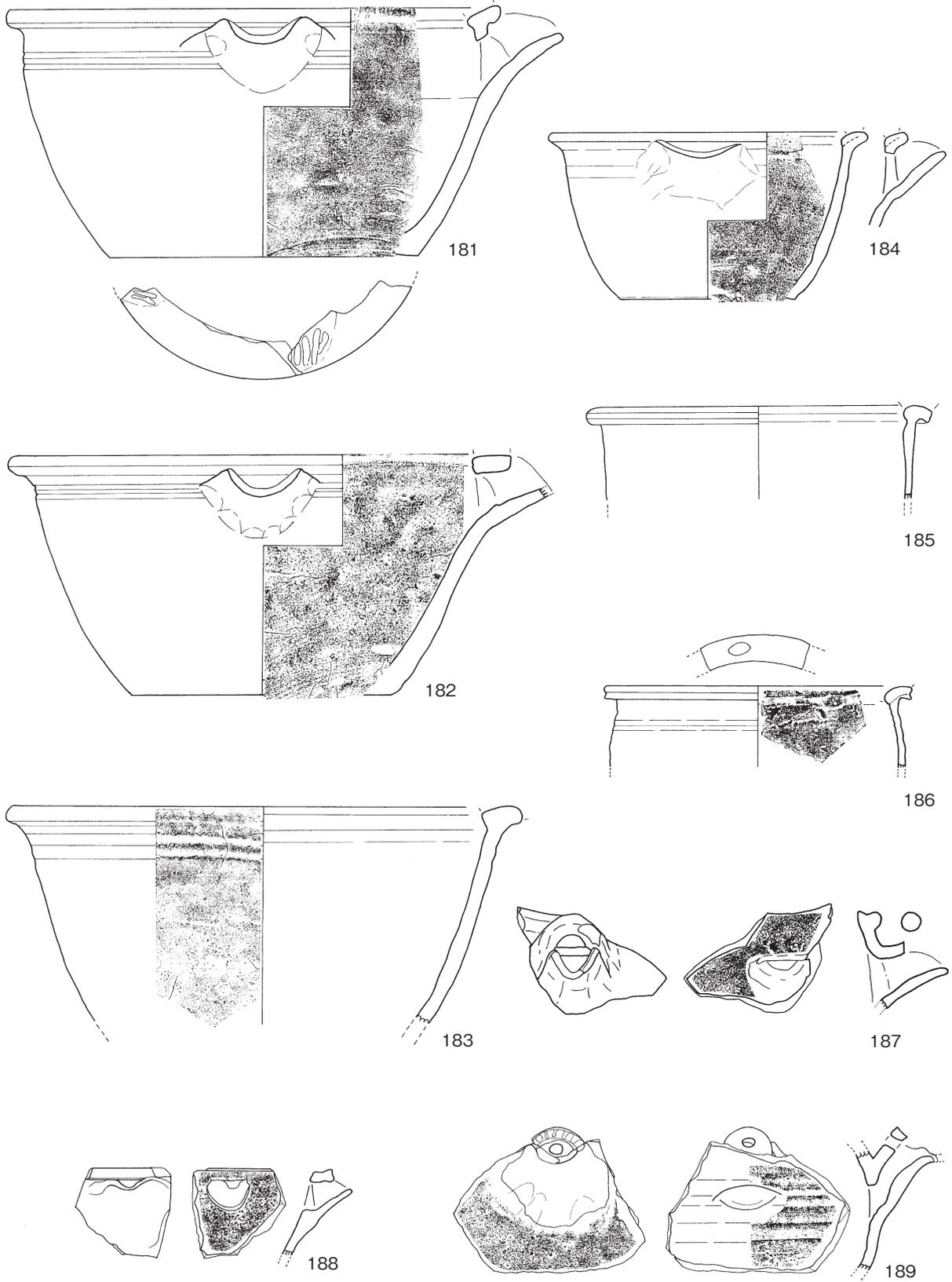
第236図 陶器16 蓋類



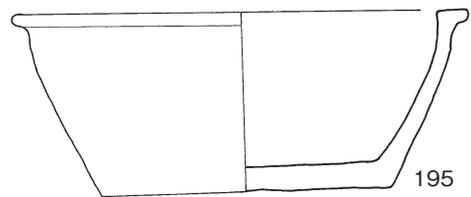
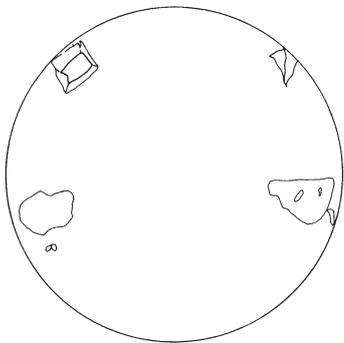
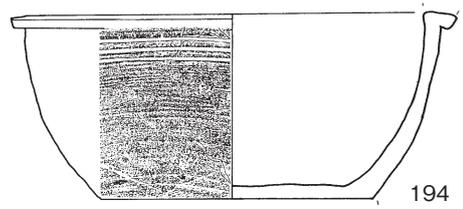
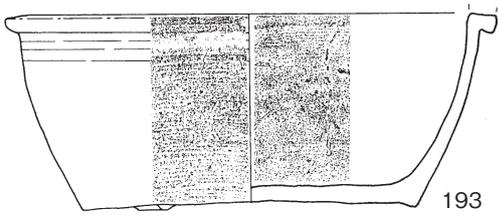
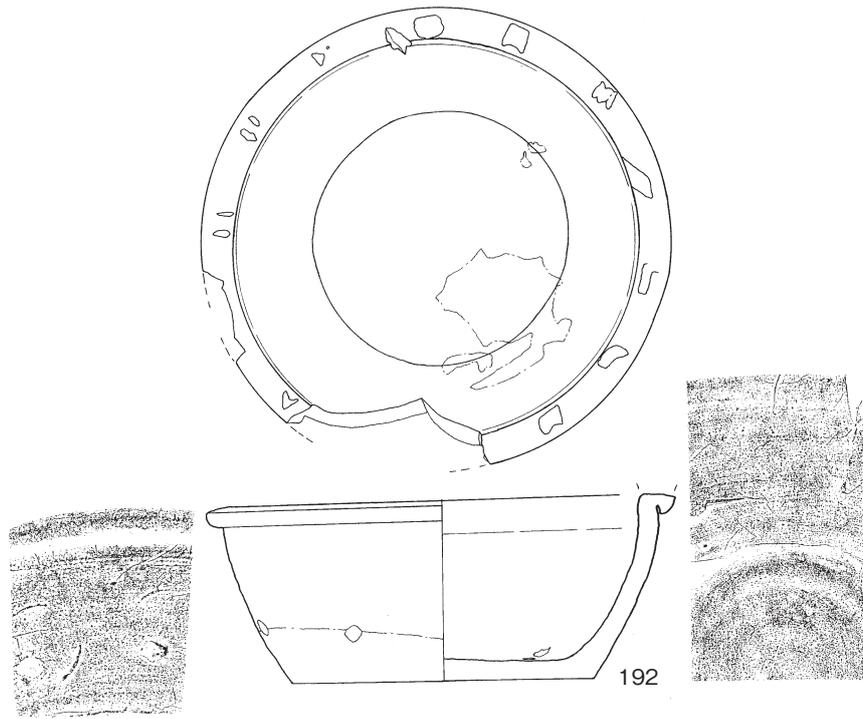
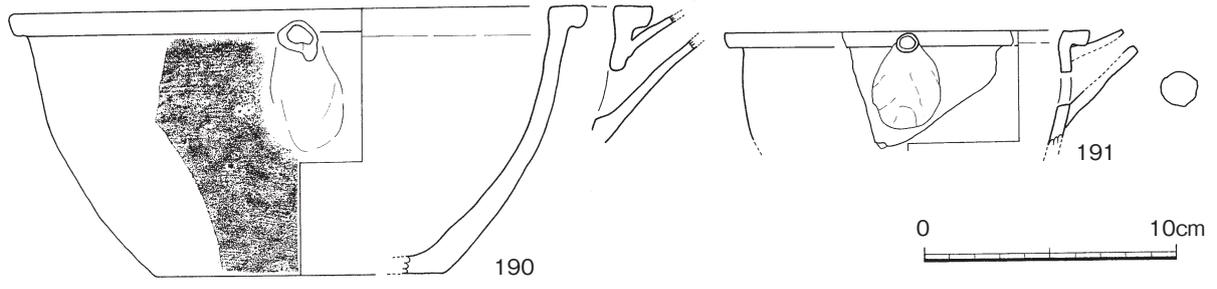
第237図 陶器17 蓋・鍋類



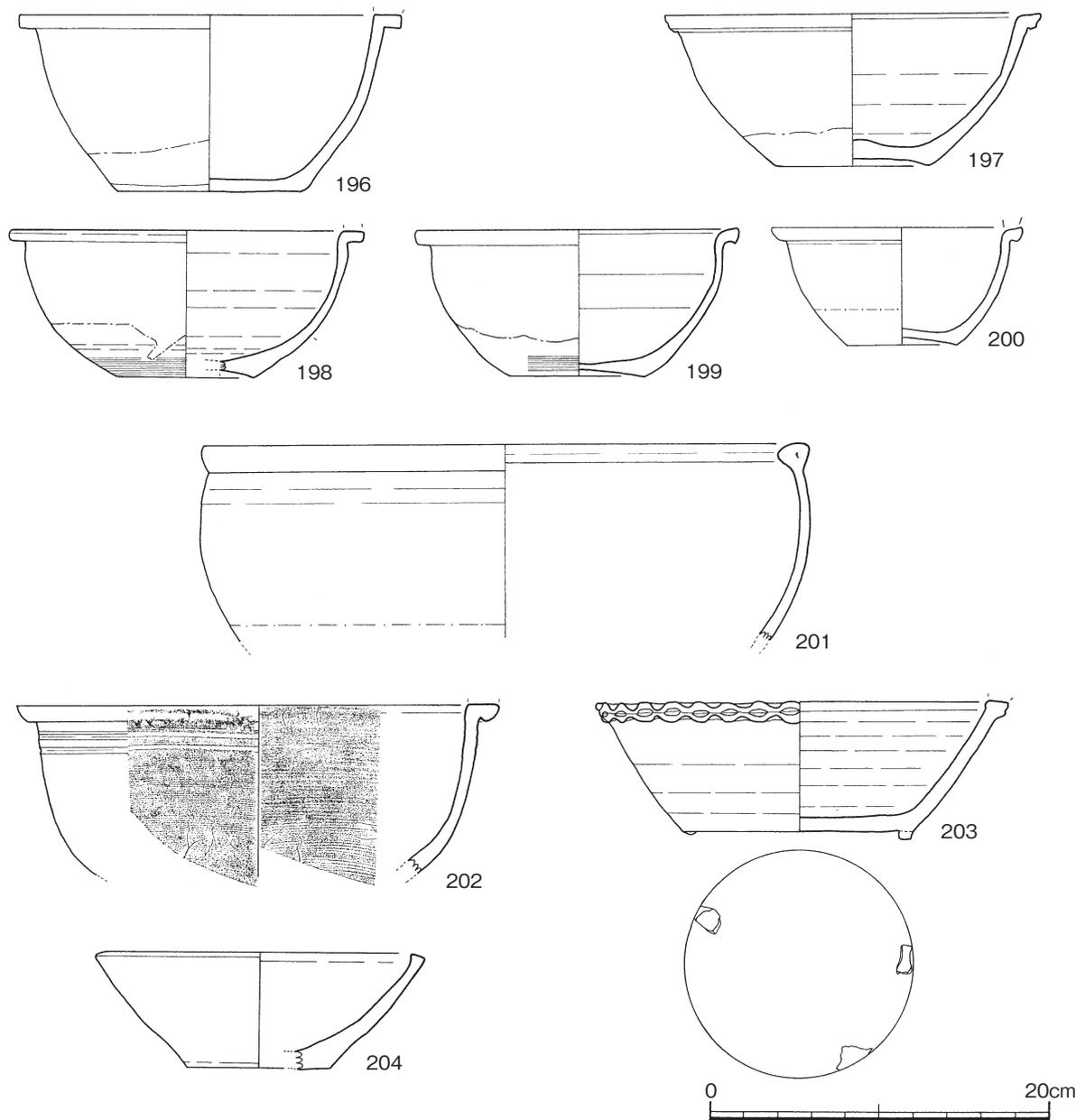
第238図 陶器18 鍋・釜類



第239图 陶器19 片口



第240図 陶器20 鉢



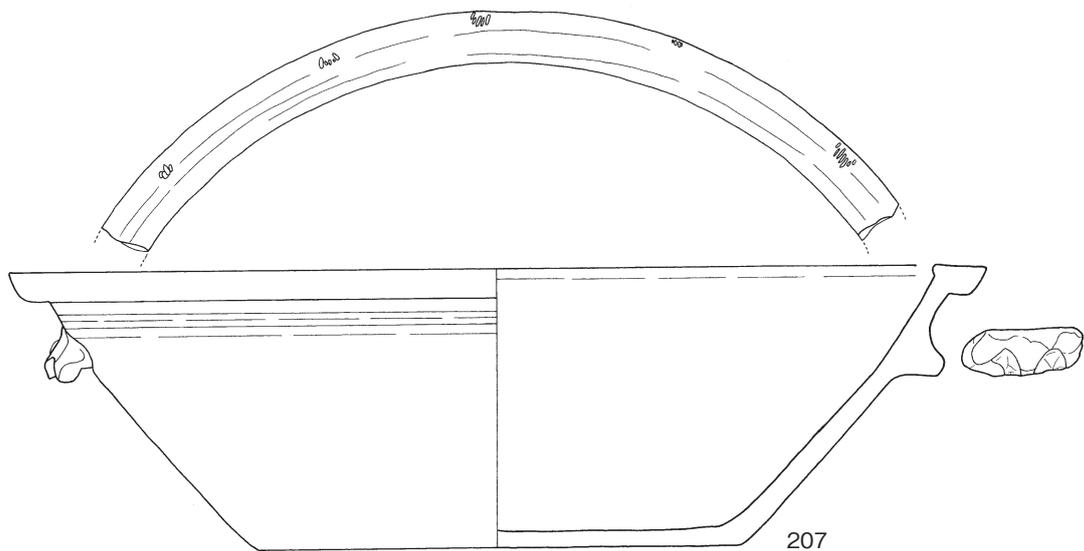
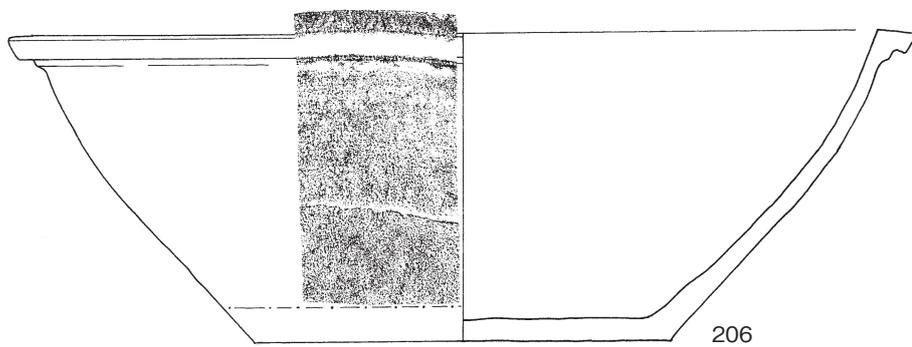
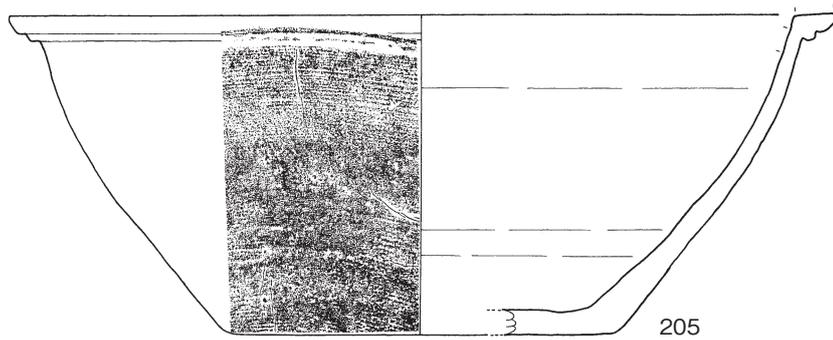
第241図 陶器21 鉢

鉢（第240～242図）

190～207は鉢である。こね鉢としての用途が考えられる。産地は薩摩焼の苗代川系である。190・191は胴部に注口がつくものである。192～195は口径と底径の差が小さいものである。口縁部は断面が「L」字状もしくは三角形を呈し、コマ目が残るものが見られる。内外面はヘラ状工具による横筋が入る。口唇部と底面は釉が拭き取られて無釉となっている。

196～202は胴部がやや丸みを帯びるもので、釉は内面と外面胴部下位までかかる。器面調整はヘラ状工具によるもので、横筋が観察される。203は、口縁部端部をつまんで装飾している。外底面には、焼成時製品同士の熔着を防ぐために挟まれた平コマが残っている。204は鉢に分類したが、用途は不明である。外面にのみ雑に鉄釉がかかる。

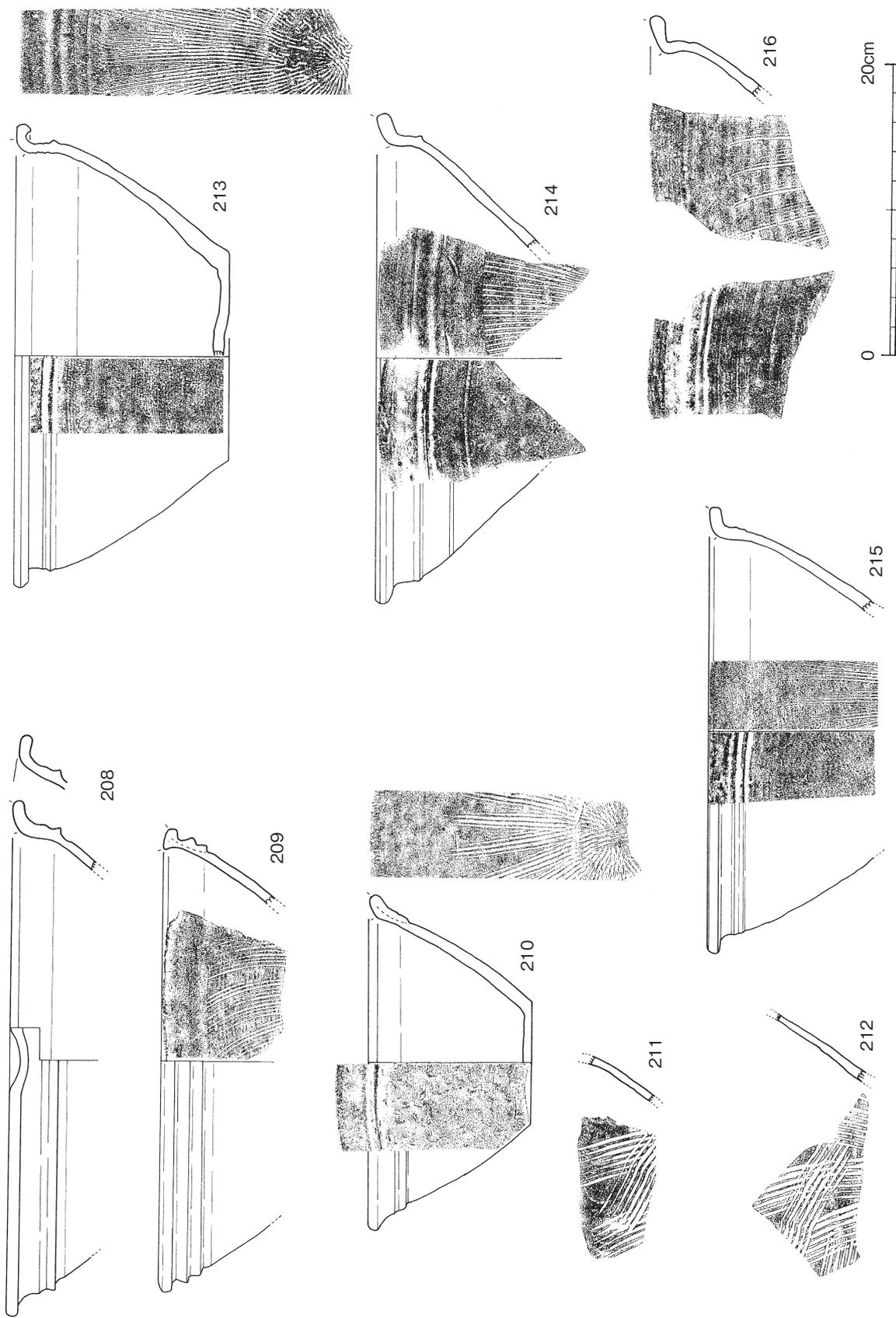
205～207は大形の鉢である。207は把手状の突起が2か所つくものである。口唇部に貝目が残る。



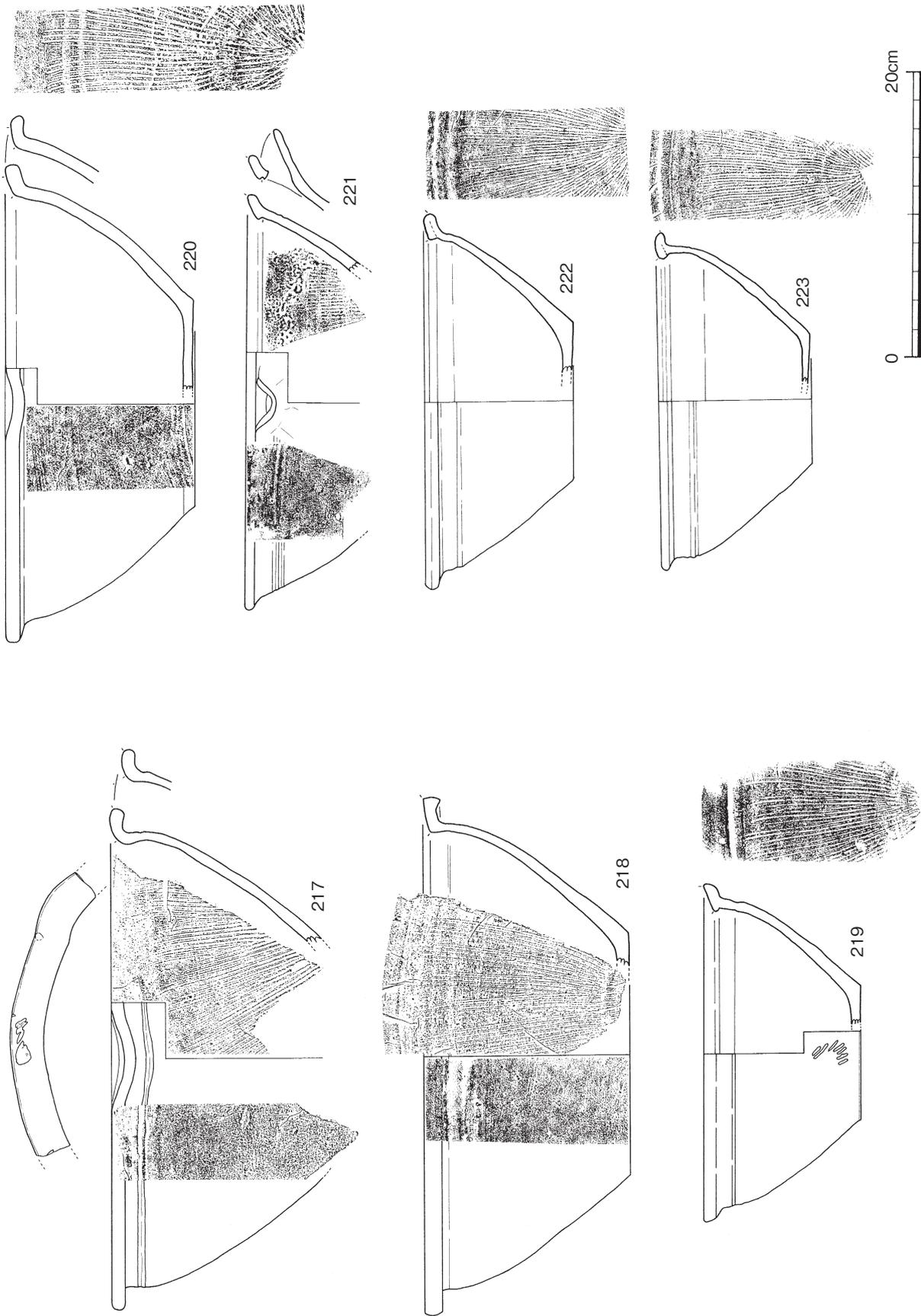
第242図 陶器22 鉢

陶器観察表6

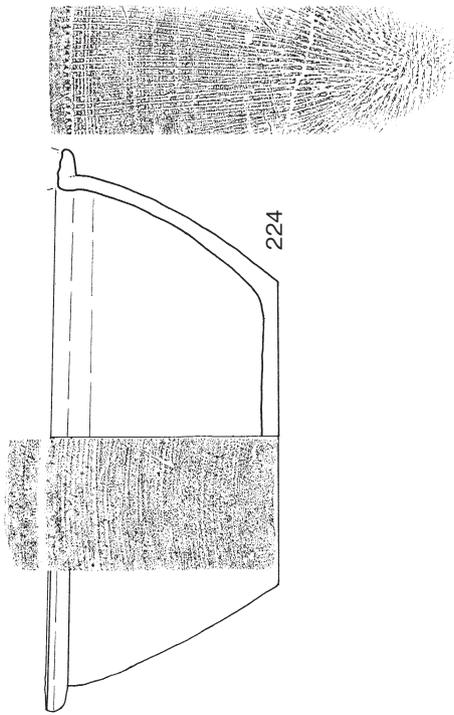
挿入番号	掲載番号	種別	器種	分類	産地	出土区	法量 (cm)			胎土の色調	釉薬の種類・色調	施釉部位	時期	備考
							口径	底径	器高					
第236図	143	陶器	蓋	土瓶蓋	薩摩苗代川系	G地点	3.6	5.2	2.4	赤褐色	鉄釉	上面施釉	18世紀後半～19世紀代	
	144	陶器	蓋	土瓶蓋	薩摩苗代川系	G地点	4.0	6.4	3.4	にぶい褐色	鉄釉	上面施釉	18世紀後半～19世紀代	
	145	陶器	蓋	土瓶蓋	薩摩苗代川系	G地点	5.2	7.4	3.1	淡褐色	鉄釉	上面施釉	18世紀後半～19世紀代	
	146	陶器	蓋	土瓶蓋	薩摩苗代川系	G地点	5.1	7.5	3.2	にぶい褐色	鉄釉	上面施釉	18世紀後半～19世紀代	
	147	陶器	蓋	土瓶蓋	薩摩苗代川系	G地点	6.3	9.5	4.1	にぶい褐色	鉄釉	上面施釉	18世紀後半～19世紀代	
	148	陶器	蓋	土瓶蓋	薩摩苗代川系	G地点	4.7	6.7	3.8	にぶい褐色	鉄釉	上面施釉	18世紀後半～19世紀代	
	149	陶器	蓋	土瓶蓋	薩摩苗代川系	G地点	6.1	8.8	3.5	赤褐色	鉄釉	上面施釉	18世紀後半～19世紀代	上面に重ね焼きの跡有り
	150	陶器	蓋	土瓶蓋	薩摩苗代川系	G地点	8.2	10.7	3.8	灰褐色	鉄釉	上面施釉	18世紀後半～19世紀代	上面に重ね焼きの跡有り
	151	陶器	蓋	土瓶蓋	薩摩苗代川系	G地点	7.2	10.6	3.6	赤褐色	鉄釉	上面施釉	18世紀後半～19世紀代	上面に重ね焼きの跡有り
	152	陶器	蓋	土瓶蓋	薩摩苗代川系	G地点	6.0	8.0	—	灰褐色	鉄釉	上面施釉	18世紀後半～19世紀代	上面端部に三条の沈線巡る
	153	陶器	蓋	土瓶蓋	薩摩龍門司系	G地点	4.0	5.6	—	灰黄色	鉄釉・黒流し	上面施釉	18世紀後半～19世紀代	上面に黒流しの文様有り
	154	陶器	蓋	土瓶蓋	肥前	G地点	6.7	—	—	黄白色	透明釉	上面施釉	18世紀後半～19世紀代	上面に鉄絵
	155	陶器	蓋	急須蓋	薩摩龍門司系	G地点	6.4	—	1.8	褐色	鉄釉	上面施釉	19世紀代後半	
	156	陶器	蓋	鍋蓋	薩摩苗代川系	G地点	14.2	16.9	4.6	赤褐色	鉄釉	上面施釉	19世紀代	口唇部にスス付着
	157	陶器	蓋	鍋蓋	薩摩苗代川系	G地点	11.0	17.2	4.9	赤褐色	鉄釉	上面施釉	19世紀代	
158	陶器	蓋	鍋蓋	薩摩苗代川系	G地点	11.2	14.6	5.2	暗褐色	鉄釉	上面施釉	19世紀代		
159	陶器	蓋	壺蓋	薩摩苗代川系	G地点	4.8	8.8	2.4	にぶい褐色	鉄釉	上面施釉	19世紀代		
第237図	160	陶器	蓋	鍋蓋	関西系	G地点	11.8	14.4	2.0	灰白色	透明釉	上面施釉	19世紀代	底径は上径
	161	陶器	蓋	鍋蓋	関西系	G地点	10.4	13.0	2.0	灰白色	透明釉	上面施釉	19世紀代	底径は上径 上面に鉄絵
	162	陶器	蓋	鍋蓋	関西系	G地点	12.4	2.0	3.7	黄白色	(内)透明釉	内面のみ施釉	19世紀代	底径はつまみ径 上面飛び鉤 鉄釉の裝飾
	163	陶器	蓋	鍋蓋	関西系	G地点	14.8	4.6	4.8	黄白色	(内)透明釉	内面のみ施釉	19世紀代	底径はつまみ径 上面飛び鉤 上絵付け 鉄釉の裝飾
	164	陶器	蓋	鍋蓋	関西系	G地点	16.2	4.1	4.2	黄白色	透明釉	つまみ部口唇・内面中央は無釉	19世紀代	底径はつまみ径
	165	陶器	鍋	鍋	関西系	G地点	18.0	—	—	にぶい褐色	褐色・透明釉	口唇部無釉	19世紀代	飛び鉤
	166	陶器	鍋	鍋	薩摩苗代川系か?	G地点	23.8	—	—	にぶい褐色	透明釉	腰部～底面は無釉	19世紀代	
	167	陶器	鍋	鍋	関西系	G地点	18.4	—	—	にぶい褐色	褐色・透明釉	口唇部無釉	19世紀代	飛び鉤
	168	陶器	鍋	鍋	薩摩苗代川系	G地点	14.0	—	—	明赤褐色	鉄釉	口唇部・腰部～底面は無釉	19世紀代	
	169	陶器	鍋	鍋	薩摩苗代川系	G地点	13.0	—	—	赤褐色	鉄釉	口唇部・腰部～底面は無釉	19世紀代	
	170	陶器	鍋	鍋	関西系	G地点	12.8	—	—	灰白色	褐色・透明釉	口唇部無釉	19世紀代	飛び鉤
第238図	171	陶器	釜	羽釜	薩摩苗代川系	G地点	7.3	3.6	7.0	赤褐色	鉄釉	羽部下位～底面は無釉	19世紀代	
	172	陶器	釜	羽釜	薩摩苗代川系	G地点	15.4	—	—	赤褐色	鉄釉	羽部下位～底面は無釉	19世紀代	底面にスス付着
	173	陶器	釜	羽釜	薩摩苗代川系	G地点	9.6	6.8	7.7	褐色	鉄釉	羽部下位～底面は無釉	19世紀代	
	174	陶器	釜	羽釜	薩摩苗代川系か?	G地点	—	—	—	褐色	鉄釉	羽部下位～底面は無釉	19世紀代	羽部下位からスス付着
	175	陶器	釜	羽釜	薩摩苗代川系	G地点	—	—	—	褐色	鉄釉	羽部下位～底面は無釉	19世紀代	三足
	176	陶器	釜	山茶釜	薩摩苗代川系	G地点	16.8	—	—	灰色	鉄釉か?	口唇部・腰部～底面は無釉	19世紀代	片口有り
	177	陶器	釜	山茶釜	薩摩苗代川系	G地点	14.0	—	—	にぶい褐色	鉄釉	口唇部・腰部～底面は無釉	19世紀代	片口有り
	178	陶器	釜	山茶釜	薩摩苗代川系	G地点	13.6	—	—	黒褐色	鉄釉	口唇部・腰部～底面は無釉	19世紀代	
	179	陶器	釜	山茶釜	薩摩苗代川系	G地点	14.6	—	—	暗褐色	鉄釉	口唇部・腰部～底面は無釉	19世紀代	
	180	陶器	釜	山茶釜	薩摩苗代川系	G地点	18.0	—	—	褐色	鉄釉	口唇部・腰部～底面は無釉	19世紀代	
第239図	181	陶器	鉢	片口	薩摩苗代川系	G地点	24.9	15.1	12.6	暗赤褐色	鉄釉	口唇部無釉	18世紀代	外底面に貝目
	182	陶器	鉢	片口	薩摩苗代川系	G地点	24.9	13.0	12.1	赤褐色	鉄釉	口唇部無釉 外底面拭き取り	18世紀代	
	183	陶器	鉢	片口	薩摩苗代川系	G地点	25.2	—	—	灰褐色	灰釉か?	口唇部無釉	18世紀代	
	184	陶器	鉢	片口	薩摩苗代川系	G地点	16.2	8.8	8.5	黒褐色	鉄釉	口唇部無釉	18世紀代	外底面に貝目
	185	陶器	鉢	片口	薩摩苗代川系	G地点	19.2	—	—	黒褐色	鉄釉	口唇部無釉	17世紀後半	内面に同心円状のタタキ目
	186	陶器	鉢	片口	薩摩苗代川系	G地点	15.4	—	—	灰褐色	灰釉	口唇部無釉	17世紀後半	口唇部に貝目
	187	陶器	鉢	片口	薩摩苗代川系	G地点	—	—	—	黒褐色	鉄釉	口唇部無釉	19世紀代	
	188	陶器	鉢	片口	薩摩苗代川系	G地点	—	—	—	にぶい褐色	鉄釉	口唇部無釉	18世紀代	
	189	陶器	鉢	片口	薩摩苗代川系	G地点	—	—	—	明褐色	鉄釉	—	19世紀代	
第240図	190	陶器	鉢	鉢	薩摩苗代川系	G地点	23.0	—	—	赤褐色	鉄釉	口唇部・外底面無釉	19世紀代	注口有り
	191	陶器	鉢	鉢	薩摩苗代川系	G地点	14.4	—	—	黒褐色	鉄釉	口唇部・外底面無釉	19世紀代	注口有り
	192	陶器	鉢	鉢	薩摩苗代川系	G地点	24.9	16.1	9.7	赤褐色	鉄釉	腰部～外底面無釉	19世紀代	口唇部にコマ目 側面に突起有り
	193	陶器	鉢	鉢	薩摩苗代川系	G地点	23.8	17.9	10.4	赤褐色	鉄釉	口唇部・外底面無釉	19世紀代	
	194	陶器	鉢	鉢	薩摩苗代川系	G地点	21.3	14.8	9.8	赤褐色	鉄釉	口唇部・外底面無釉	19世紀代	外底面にコマ目
	195	陶器	鉢	鉢	薩摩苗代川系	G地点	24.1	15.5	9.5	赤褐色	鉄釉	口唇部・外底面無釉	19世紀代	内面にター州状の異物付着
第241図	196	陶器	鉢	鉢	薩摩苗代川系	G地点	22.6	10.8	10.5	赤褐色	鉄釉	口唇部・腰部～外底面無釉	19世紀代	
	197	陶器	鉢	鉢	薩摩苗代川系	G地点	22.2	9.2	9.0	黒褐色	鉄釉	口唇部・腰部～外底面無釉	19世紀代	
	198	陶器	鉢	鉢	薩摩苗代川系	G地点	21.0	8.0	8.6	にぶい赤褐色	鉄釉	口唇部・腰部～外底面無釉	19世紀代	
	199	陶器	鉢	鉢	薩摩苗代川系	G地点	19.2	7.9	8.6	明赤褐色	鉄釉	口唇部・腰部～外底面無釉	19世紀代	
	200	陶器	鉢	鉢	薩摩苗代川系	G地点	14.6	6.4	6.9	暗赤灰色	鉄釉	口唇部・腰部～外底面無釉	19世紀代	
	201	陶器	鉢	鉢	薩摩苗代川系	G地点	31.6	—	—	灰褐色	鉄釉か?	口唇部・腰部～外底面無釉	19世紀代	調整不良
	202	陶器	鉢	鉢	薩摩苗代川系	G地点	28.2	—	—	暗褐色	鉄釉	口唇部無釉	19世紀代	
	203	陶器	鉢	鉢	薩摩苗代川系	G地点	24.3	13.6	8.2	にぶい褐色	鉄釉	口唇部・外底面無釉	19世紀代	口縁部裝飾 外底面コマ目
	204	陶器	鉢	鉢	薩摩苗代川系	G地点	14.6	6.4	5.1	赤褐色	鉄釉	口唇部・内面・外底面無釉	19世紀代	
	205	陶器	鉢	鉢	薩摩苗代川系	G地点	44.0	19.9	16.1	褐色	鉄釉	口唇部・腰部～外底面無釉	19世紀代	
第242図	206	陶器	鉢	鉢	薩摩苗代川系	G地点	45.0	22.0	16.5	褐色	鉄釉	口唇部・腰部～外底面無釉	19世紀代	
	207	陶器	鉢	鉢	薩摩苗代川系	G地点	52.0	25.4	15.0	赤褐色	鉄釉か?	口唇部無釉	18世紀後半か?	焼成不良 口唇部に貝目



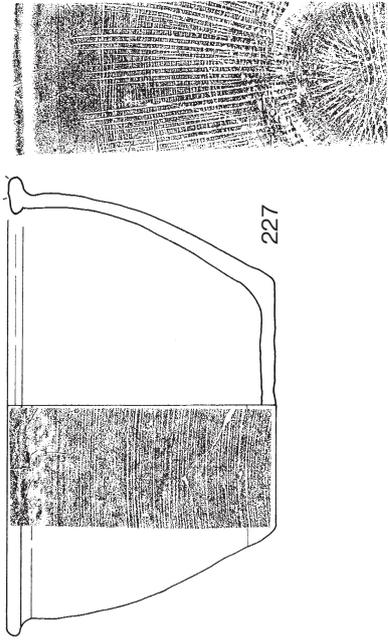
第243図 陶器23 插鉢



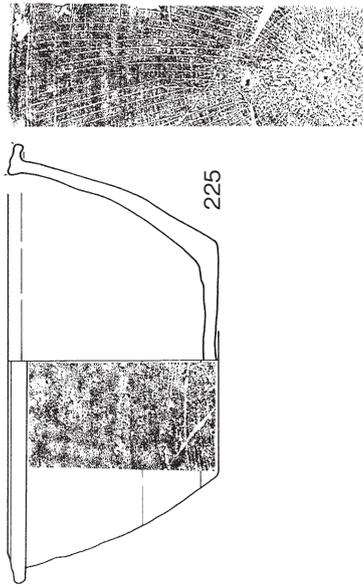
第244図 陶器24 播鉢



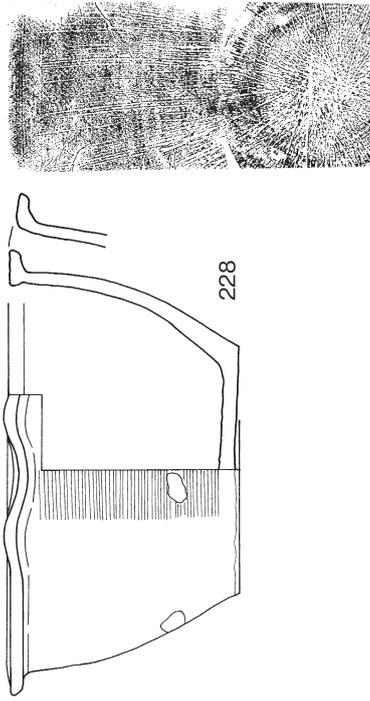
224



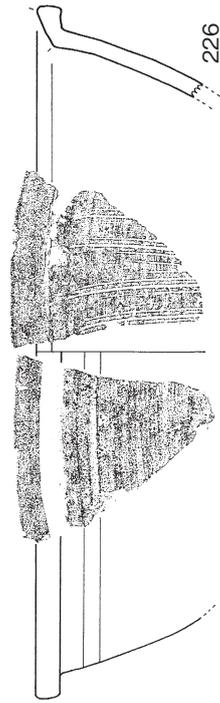
227



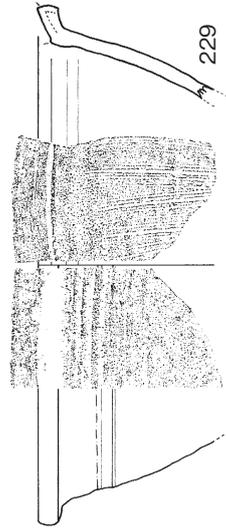
225



228



226

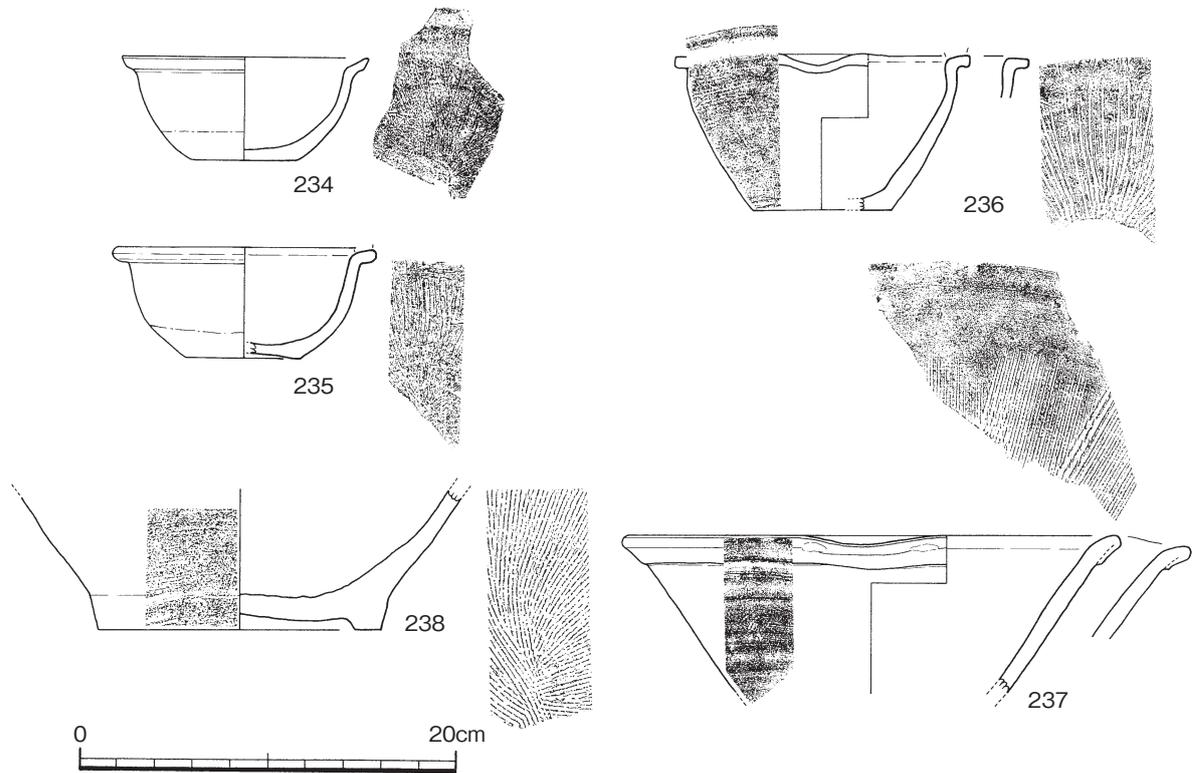


229



第245図 陶器25 播鉢

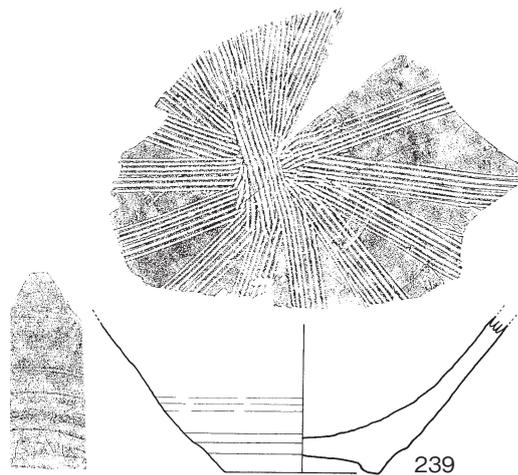




第247図 陶器27 播鉢

播鉢（第243～247図）

208～239は播鉢である。208～236は薩摩焼の苗代川系で、208～216は口縁部を外側に折り曲げて肥厚させ、2条の低い突帯を巡らせるものである。播り目は、211・212を除き細くシャープで、単位ごとの間隔があく。播り目の上端は余白を残す。釉は口唇部を除き、全面に施釉される。211・212は17世紀代の初期薩摩焼である。胎土が層状を呈し、器壁は非常に薄く、釉も黄緑色の灰釉が薄くかかる。17世紀初めの串木野窯の製品である可能性の考えられる資料である。

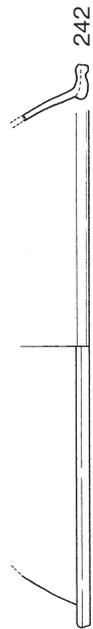
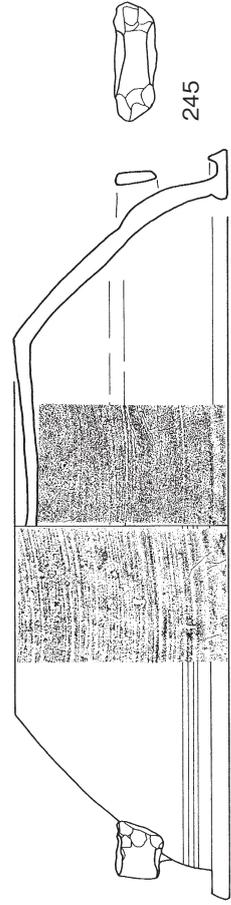
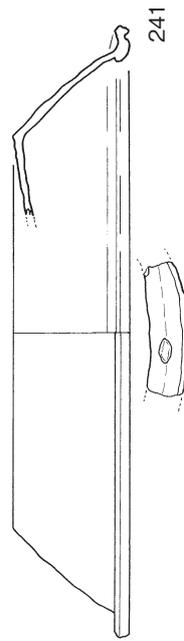
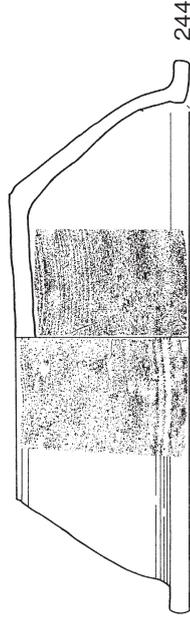
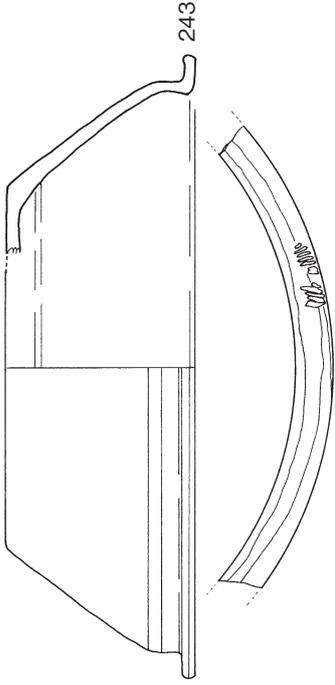
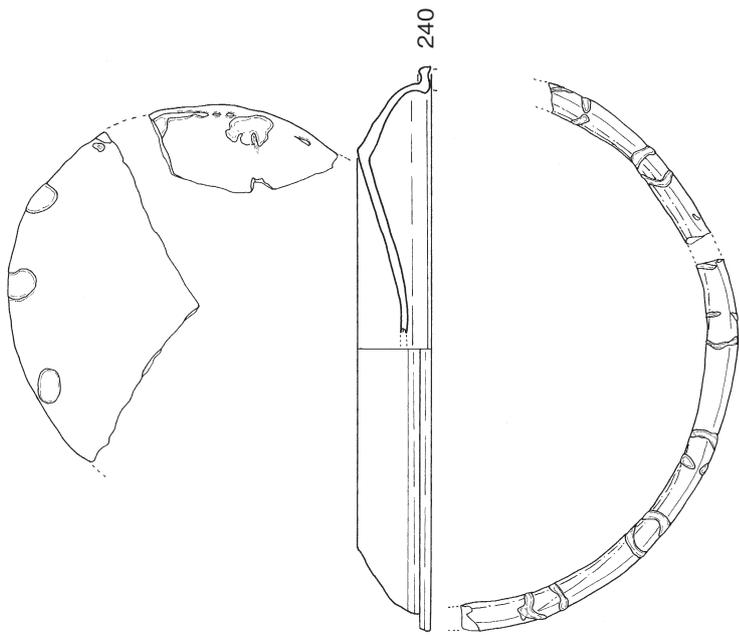


217～219は口縁部を折り返して肥厚させるもので、突帯が退化して浅い沈線となる。221～223は口縁部を外側に折り返したあと、さらに内側に折り返して丸くおさめるものである。両タイプとも播り目は細くシャープで密に入り、上端は口縁部まで達する。釉は口唇部を除き全面に施釉される。219は胴部下位に貝目が残る。

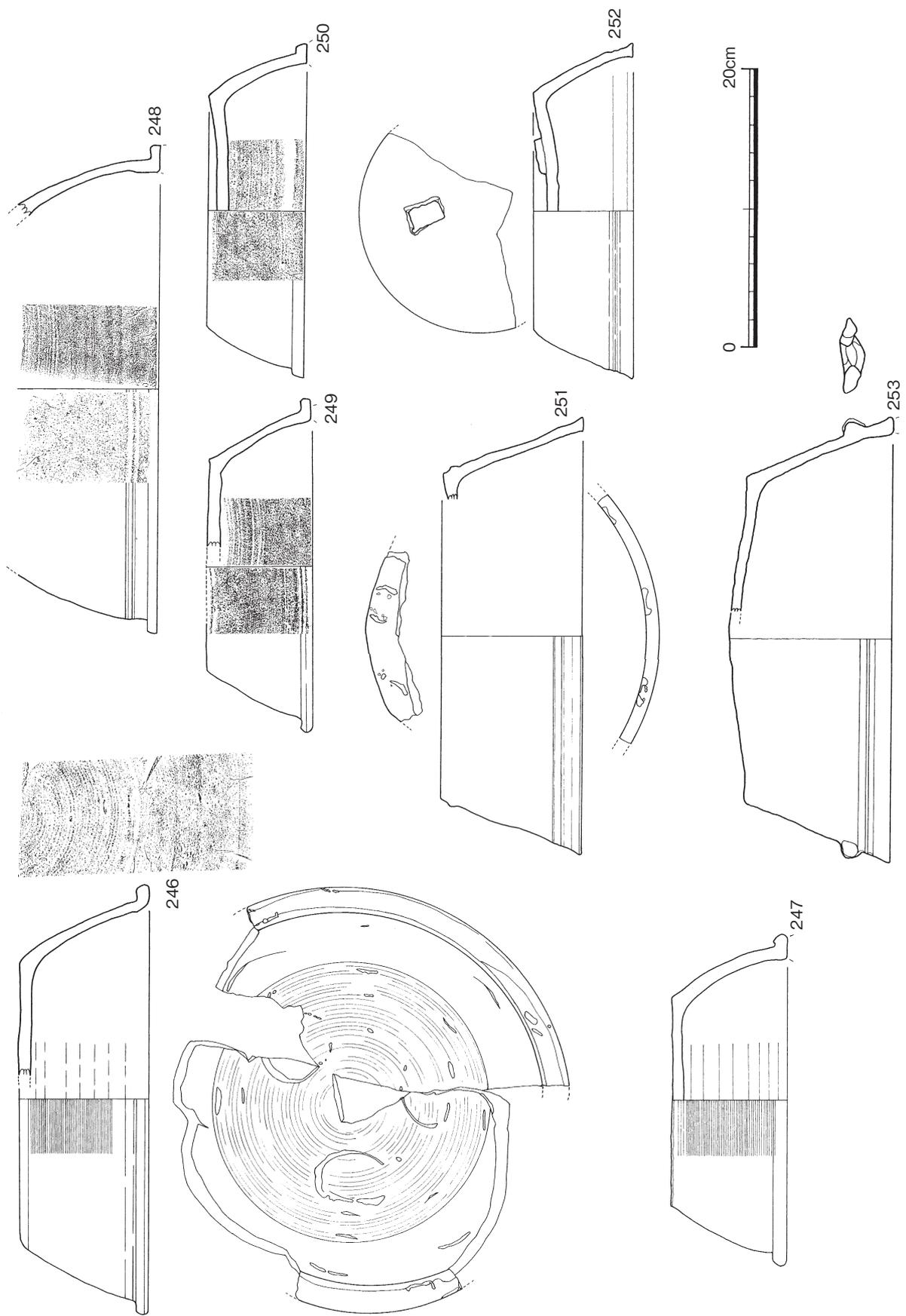
224～231は、口縁部が「L」字状を呈する。播り目は細くシャープで目も粗いが、単位間は詰まっている。上端は口縁部まで延び、播り目の下に横筋が入る。釉は口唇部と外底面は拭き取られる。232・233は外面胴部下位に円錐状の突起がつく。

234～236は小形の播鉢である。237～239は肥前系の播鉢である。237はタタキ成形でつくられるもので、口縁部先端を外側に折り返し丸くおさめる。幅広い単位のシャープで、粗い播り目が、口縁部下位に余白をあけて入る。238は高台付の播鉢である。豊付から高台内底は露胎する。239は底部である。太く粗い播り目が、余白を残して入る。胎土は緻密である。

234～236は小形の播鉢である。237～239は肥前系の播鉢である。237はタタキ成形でつくられるもので、口縁部先端を外側に折り返し丸くおさめる。幅広い単位のシャープで、粗い播り目が、口縁部下位に余白をあけて入る。238は高台付の播鉢である。豊付から高台内底は露胎する。239は底部である。太く粗い播り目が、余白を残して入る。胎土は緻密である。



第248図 陶器28 蓋類



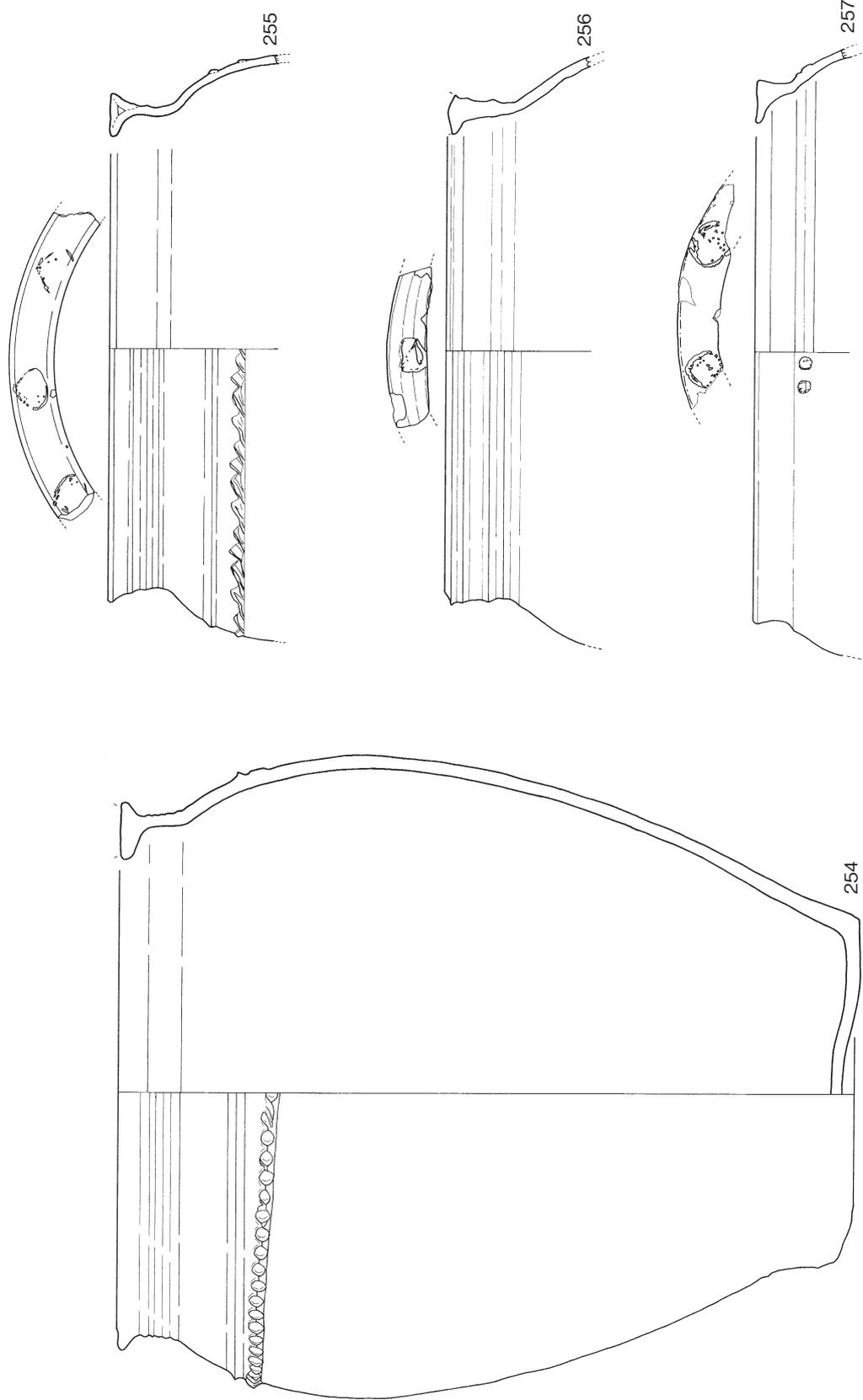
第249図 陶器29 蓋類

蓋 (第248・249図)

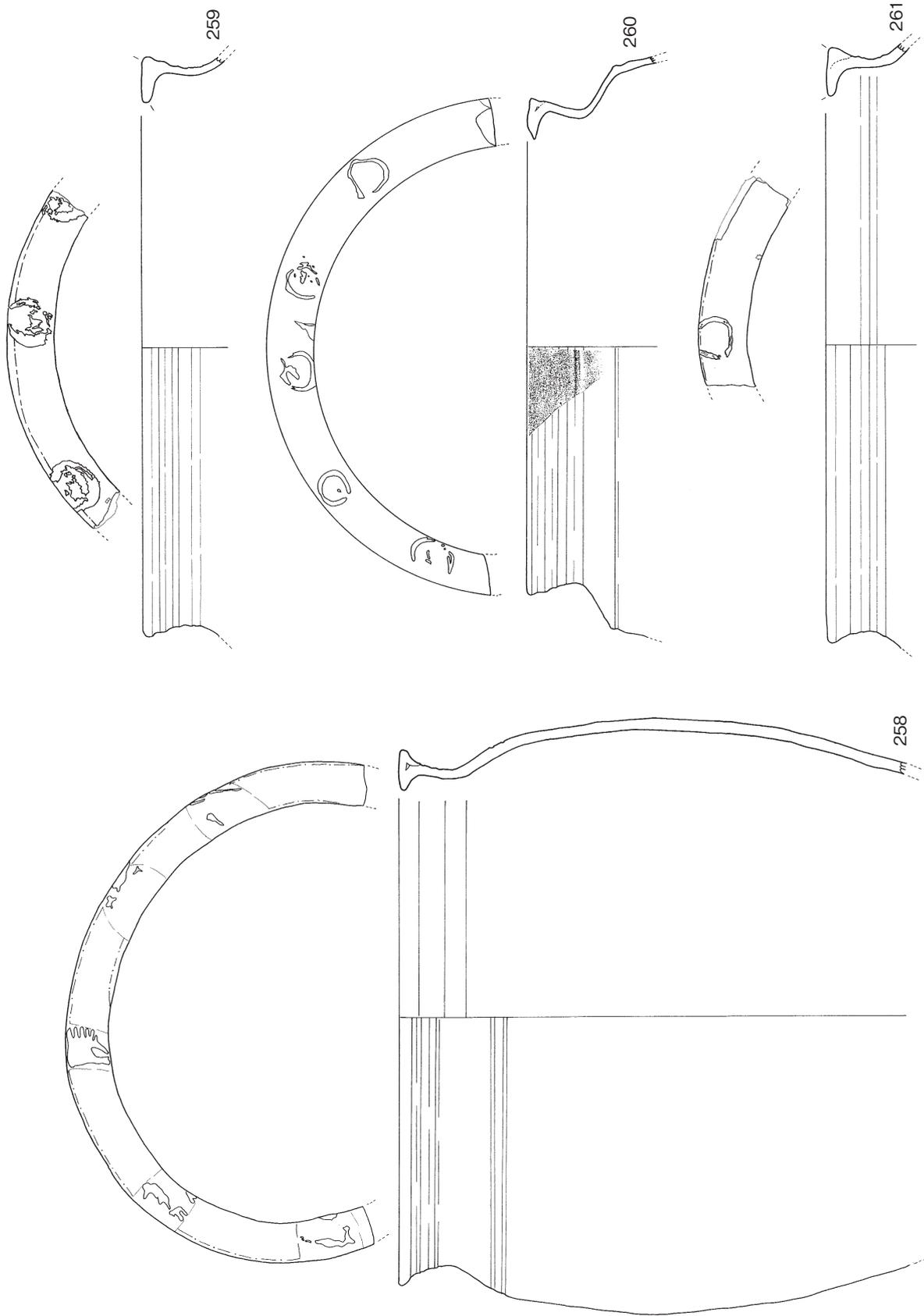
240～253は甕・壺に被せて用いる蓋である。薩摩焼苗代川系のものである。240～242は口唇部の外側が溝縁状を呈すものである。器壁は非常に薄く、胎土は層状となっている。釉は薄い鉄釉がかかり、口唇部は釉剥ぎされる。また、口唇部及び底部には貝目が残る。243～245は口縁部が「L」字状を呈するもので、釉は鉄釉が口唇部を除きかけられる。内外面はヘラ状工具による横筋が残る。245は把手が2か所つく。246～250は口径と底径の差が小さく、口縁部が「L」字状を呈するものである。器面調整はヘラ状工具で行われ、内外面とも横筋が観察される。釉は鉄釉がかかり、口唇部と外底面は拭き取られる。246は内底面に貝目が残る。251～253は口縁部は屈曲せず、まっすぐにのびるもので、外面口縁部下位には2条の浅い沈線が廻る。釉は鉄釉が口唇部と外底面以外にかかる。251は口唇部と上面に貝目が残る。252は上面にコマ目が熔着する。253は把手状のものが2か所観察される。

陶器観察表7

挿図 番号	掲載 番号	種別	分類	器種	産地	出土区	法量 (cm)			胎土の 色 調	釉薬の種類 色 調	施釉部位	時期	備 考
							口径	底径	器高					
第243 図	208	陶器	鉢	すり鉢	薩摩苗代川系	G地点	35.2	—	—	橙色	灰釉か?	口唇部無釉	18世紀代	
	209	陶器	鉢	すり鉢	薩摩苗代川系	G地点	32.0	—	—	明褐色	灰釉か?	口唇部無釉	17世紀後半	口唇部に貝目
	210	陶器	鉢	すり鉢	薩摩苗代川系	G地点	23.1	8.9	11.1	赤褐色	灰釉か?	口唇部無釉	17世紀後半	
	211	陶器	鉢	すり鉢	薩摩苗代川系	G地点	—	—	—	灰褐色	灰釉	—	17世紀前半	
	212	陶器	鉢	すり鉢	薩摩苗代川系	G地点	—	—	—	灰褐色	灰釉	—	17世紀前半	
	213	陶器	鉢	すり鉢	薩摩苗代川系	G地点	31.4	14.0	14.7	黒褐色	鉄釉	口唇部無釉	18世紀代	
	214	陶器	鉢	すり鉢	薩摩苗代川系	G地点	33.8	—	—	暗褐色	鉄釉	口唇部無釉	18世紀代	
	215	陶器	鉢	すり鉢	薩摩苗代川系	G地点	30.6	—	—	赤褐色	鉄釉	口唇部無釉	18世紀代	
216	陶器	鉢	すり鉢	薩摩苗代川系	G地点	—	—	—	灰褐色	鉄釉	口唇部無釉	18世紀代		
第244 図	217	陶器	鉢	すり鉢	薩摩苗代川系	G地点	35.0	—	—	灰褐色	鉄釉	口唇部無釉	18世紀代	口唇部に貝目
	218	陶器	鉢	すり鉢	薩摩苗代川系	G地点	36.2	17.0	14.3	にぶい 赤褐色	鉄釉	口唇部無釉	18世紀代	
	219	陶器	鉢	すり鉢	薩摩苗代川系	G地点	23.6	9.4	10.9	にぶい 灰褐色	鉄釉	口唇部無釉	18世紀代	腰部に貝目
	220	陶器	鉢	すり鉢	薩摩苗代川系	G地点	33.6	14.4	13.0	明赤褐 色	鉄釉	口唇部無釉	18世紀代	
	221	陶器	鉢	すり鉢	薩摩苗代川系	G地点	39.2	—	—	灰褐色	鉄釉	口唇部無釉	18世紀代	
	222	陶器	鉢	すり鉢	薩摩苗代川系	G地点	25.6	11.0	10.3	にぶい 赤褐色	鉄釉	口唇部無釉	18世紀代	
	223	陶器	鉢	すり鉢	薩摩苗代川系	G地点	23.6	9.2	10.6	にぶい 赤褐色	鉄釉	口唇部無釉	18世紀代	
第245 図	224	陶器	鉢	すり鉢	薩摩苗代川系	G地点	29.8	16.1	12.4	赤褐色	鉄釉か?	口唇部・外底面無釉	19世紀代	
	225	陶器	鉢	すり鉢	薩摩苗代川系	G地点	23.4	12.4	11.2	灰褐色	鉄釉	口唇部・腰部～外底 面無釉	19世紀代	
	226	陶器	鉢	すり鉢	薩摩苗代川系	G地点	36.8	—	—	赤褐色	鉄釉	口唇部無釉	19世紀代	
	227	陶器	鉢	すり鉢	薩摩苗代川系	G地点	24.6	13.4	14.3	赤褐色	鉄釉か?	口唇部・外底面無釉	19世紀代	
	228	陶器	鉢	すり鉢	薩摩苗代川系	G地点	23.8	13.2	12.3	明赤褐 色	鉄釉	口唇部無釉	19世紀代	腰部に突起有り
	229	陶器	鉢	すり鉢	薩摩苗代川系	G地点	27.4	—	—	にぶい 赤褐色	鉄釉	口唇部無釉	19世紀代	
第246 図	230	陶器	鉢	すり鉢	薩摩苗代川系	G地点	31.2	15.6	13.6	灰褐色	鉄釉	口唇部・外底面無釉	19世紀代	
	231	陶器	鉢	すり鉢	薩摩苗代川系	G地点	26.6	15.8	12.7	赤褐色	鉄釉	口唇部・外底面無釉	19世紀代	
	232	陶器	鉢	すり鉢	薩摩苗代川系	G地点	—	17.0	—	赤褐色	灰釉	外底面無釉	19世紀代	腰部に突起有り
	233	陶器	鉢	すり鉢	薩摩苗代川系	G地点	—	17.0	—	にぶい 褐色	灰釉	外底面無釉	19世紀代	腰部に突起有り 外底面に重ね焼きの跡あり
	234	陶器	鉢	餌すり鉢	薩摩苗代川系	G地点	13.1	5.6	5.5	灰褐色	鉄釉	腰部～外底面無釉	19世紀代	
第247 図	235	陶器	鉢	餌すり鉢	薩摩苗代川系	G地点	13.6	6.0	5.9	赤褐色	鉄釉	口唇部・腰部～外底 面無釉	19世紀代	
	236	陶器	鉢	すり鉢	薩摩苗代川系	G地点	15.6	7.4	8.4	黒褐色	鉄釉	口唇部無釉	19世紀代	
	237	陶器	鉢	すり鉢	肥前	G地点	26.6	—	—	にぶい 橙色	鉄釉	—	18世紀代	タタキ成形
	238	陶器	鉢	すり鉢	肥前	G地点	—	15.0	—	暗赤褐 色	鉄釉	量付～高台内面無釉	18世紀代	
	239	陶器	鉢	すり鉢	肥前	G地点	—	8.2	—	にぶい 黄褐色	残存部無釉	—	1590～1630年代	
	第248 図	240	陶器	蓋	蓋	薩摩苗代川系	G地点	30.2	21.5	3.9	灰褐色	鉄釉	口唇部無釉	17世紀前半
241		陶器	蓋	蓋	薩摩苗代川系	G地点	32.4	21.0	6.2	灰褐色	鉄釉	口唇部無釉	17世紀前半	口唇部に貝目
242		陶器	蓋	蓋	薩摩苗代川系	G地点	30.0	—	—	灰褐色	鉄釉	口唇部無釉	17世紀前半	
243		陶器	蓋	蓋	薩摩苗代川系	G地点	33.2	19.0	10.1	暗赤褐 色	鉄釉	口唇部無釉	17世紀後半	口唇部に貝目
244		陶器	蓋	蓋	薩摩苗代川系	G地点	29.2	16.2	9.2	にぶい 褐色	鉄釉	口唇部無釉 上面拭き取り	18世紀代	
245		陶器	蓋	蓋	薩摩苗代川系	G地点	40.0	20.2	11.4	明褐色	鉄釉	口唇部無釉 上面拭き取り	18世紀代	把手2か所有り
246		陶器	蓋	蓋	薩摩苗代川系	G地点	19.8	31.0	9.1	暗褐色	鉄釉	口唇部・上面無釉	18世紀代	見込みに貝目
第249 図	247	陶器	蓋	蓋	薩摩苗代川系	G地点	23.8	15.0	8.2	褐色	鉄釉か?	口唇部無釉	19世紀代	
	248	陶器	蓋	蓋	薩摩苗代川系	G地点	17.5	—	—	明赤褐 色	鉄釉	口唇部無釉	19世紀代	
	249	陶器	蓋	蓋	薩摩苗代川系	G地点	24.0	15.0	7.5	灰褐色	鉄釉	口唇部・上面無釉	19世紀代	
	250	陶器	蓋	蓋	薩摩苗代川系	G地点	24.0	16.6	6.9	黒褐色	鉄釉	口唇部・上面無釉	19世紀代	
	251	陶器	蓋	蓋	薩摩苗代川系	G地点	31.6	23.2	10.1	黒褐色	鉄釉	口唇部無釉	17世紀後半～18世紀代	上面に貝目
	252	陶器	蓋	蓋	薩摩苗代川系	G地点	24.0	17.0	7.2	黒褐色	鉄釉	口唇部無釉	19世紀代	上面にコマ熔着
	253	陶器	蓋	蓋	薩摩苗代川系	G地点	31.8	16.0	11.5	黒褐色	鉄釉	口唇部無釉 上面拭き取り	19世紀代	



第250図 陶器30 甕類



第251図 陶器31 甕類

## 陶器観察表 8

挿図 番号	掲載 番号	種別	分類	器種	産地	出土区	法量 (cm)			胎土の 色 調	釉薬の種類 色 調	施釉部位	時期	備 考
							口径	底径	器高					
第 250 図	254	陶器	甕	甕	薩摩苗代川系	G地点	33.4	22.2	48.1	灰褐色	鉄釉	口唇部無釉	17世紀後半～18世紀代	口唇部に貝目
	255	陶器	甕	甕	薩摩苗代川系	G地点	23.0	—	—	灰褐色	鉄釉	口唇部無釉	17世紀後半～18世紀代	口唇部に貝目
	256	陶器	甕	甕	薩摩苗代川系	G地点	33.4	—	—	明赤褐色	鉄釉	口唇部無釉	17世紀後半～18世紀代	口唇部に貝目
	257	陶器	甕	甕	薩摩苗代川系	G地点	35.2	—	—	明赤褐色	鉄釉	口唇部無釉	17世紀後半～18世紀代	口唇部に貝目
第 251 図	258	陶器	甕	甕	薩摩苗代川系	G地点	36.6	—	—	灰褐色	鉄釉	口唇部無釉	17世紀後半～18世紀代	口唇部に貝目
	259	陶器	甕	甕	薩摩苗代川系	G地点	36.8	—	—	灰褐色	鉄釉	口唇部無釉	17世紀後半～18世紀代	口唇部に貝目
	260	陶器	甕	甕	薩摩苗代川系	G地点	34.0	—	—	灰褐色	鉄釉	口唇部無釉	17世紀後半～18世紀代	口唇部に貝目
	261	陶器	甕	甕	薩摩苗代川系	G地点	40.4	—	—	灰褐色	鉄釉	口唇部無釉	17世紀後半～18世紀代	口唇部に貝目

### 甕 (第250～256図)

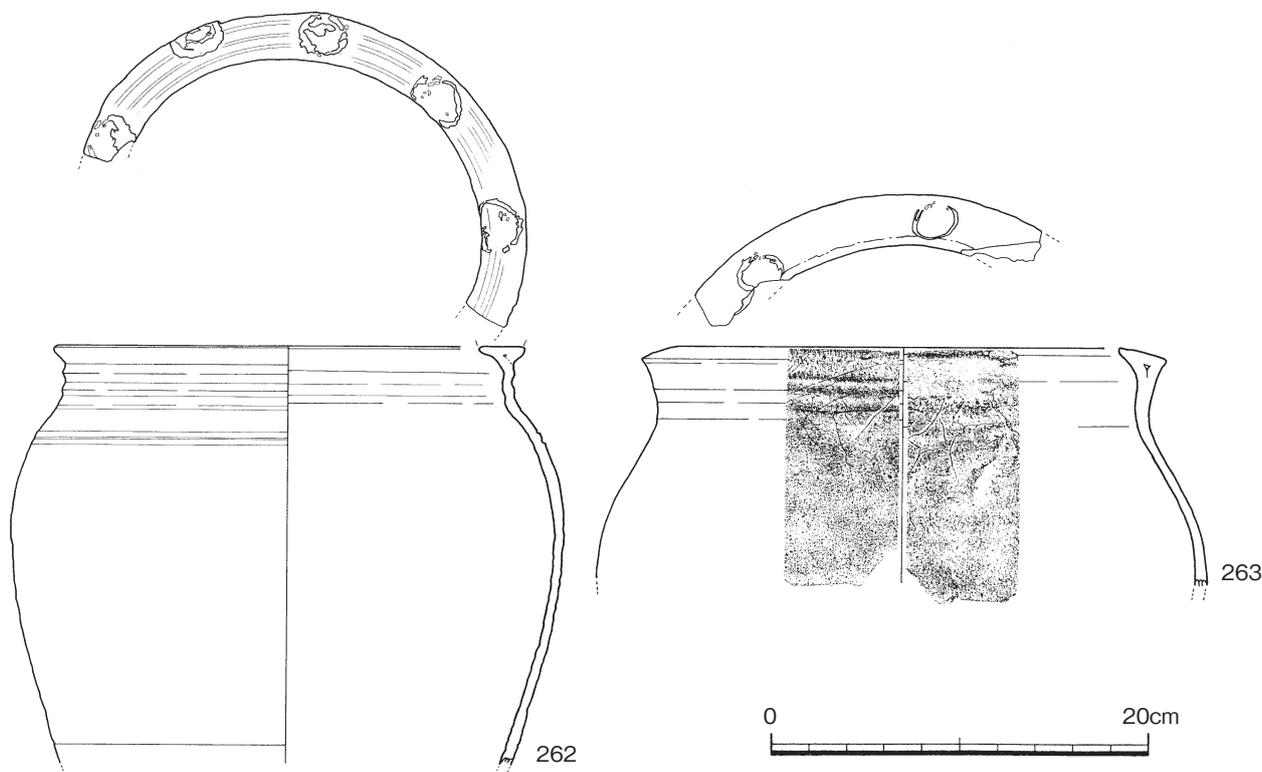
254～277は甕である。277以外は薩摩焼苗代川系のものである。254～261は口縁部が断面三角形を呈するものである。肩部に縄目突帯が付くものと付かないものがある。また254を除き、口唇部には貝目が残る。器壁は薄く、器壁調整は釉が厚くかかるため判別不能であるが、ヘラ状工具による強い横筋痕は見られる。

264～266は口縁部が「T」字状を呈するものである。内外面に、ヘラ状工具による横筋が観察される。

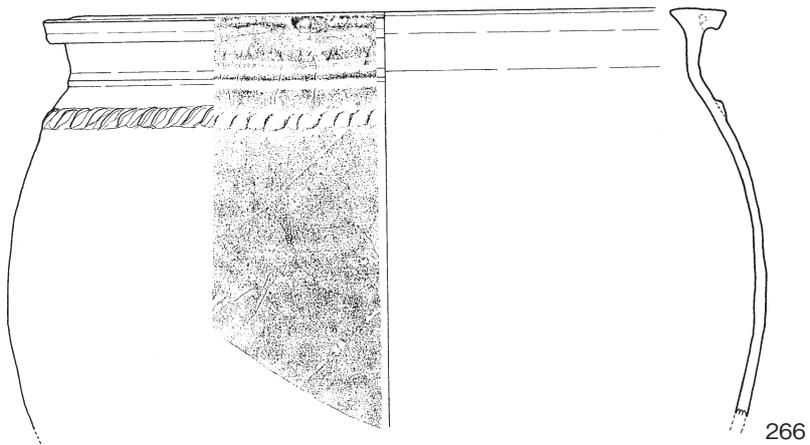
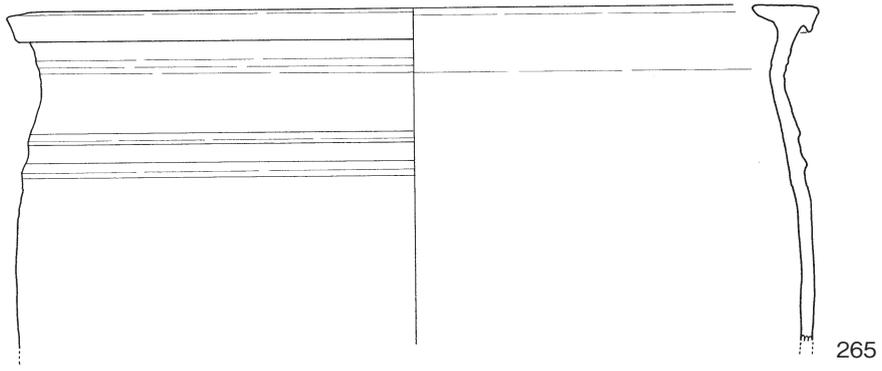
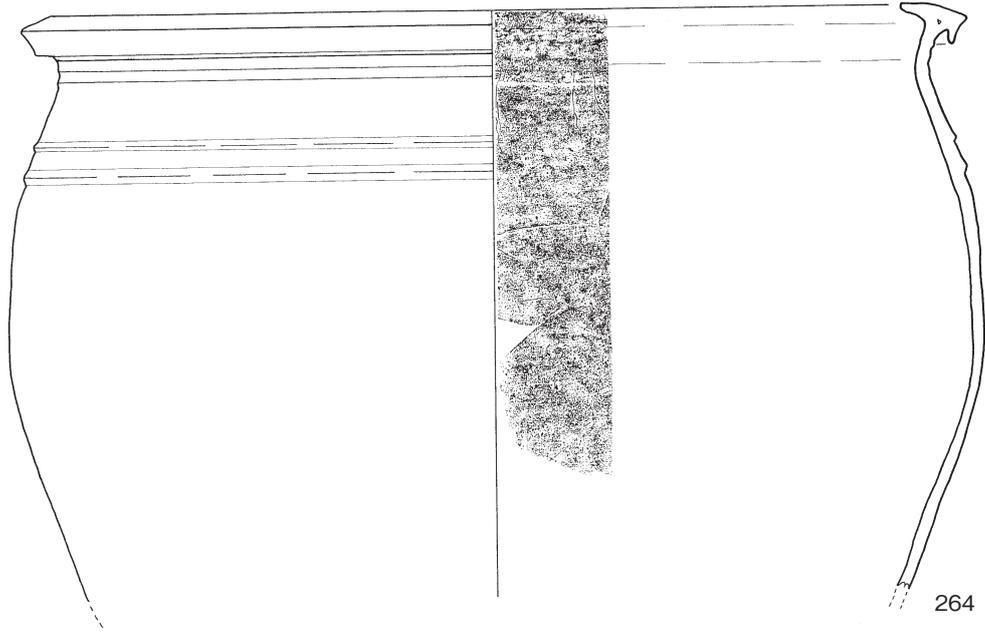
267～272は厚い器壁に、緑褐色の釉が厚くかかるものである。口唇部にはヘラ状工具による筋状の調整痕が残る。

273・274は外面に笹の掻き落とし文が描かれたものである。

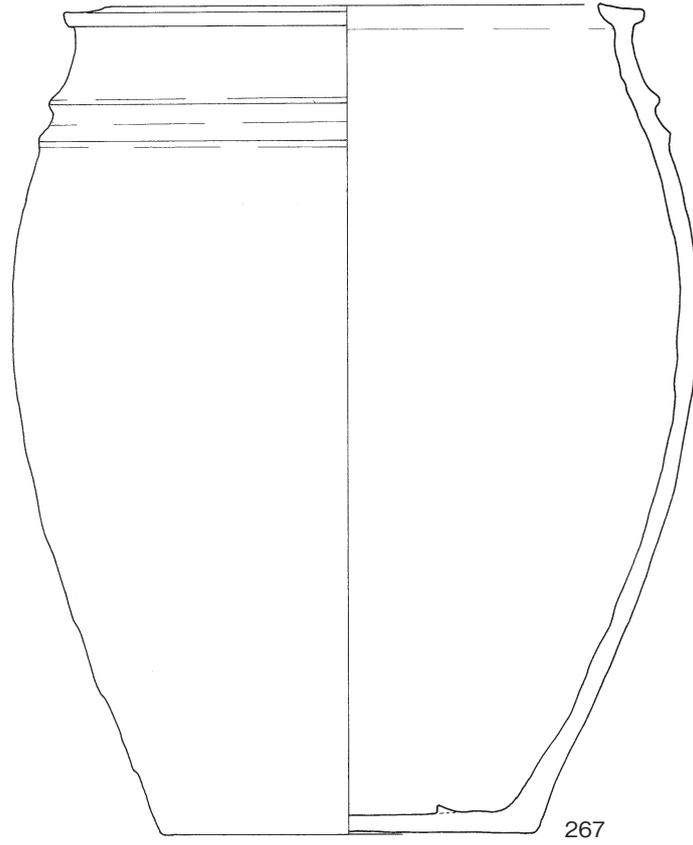
275・276は把手付甕である。277は器壁が厚手で、光沢の強い褐釉が内外面にかかるもので、外底面には、貝目と砂粒が観察される。



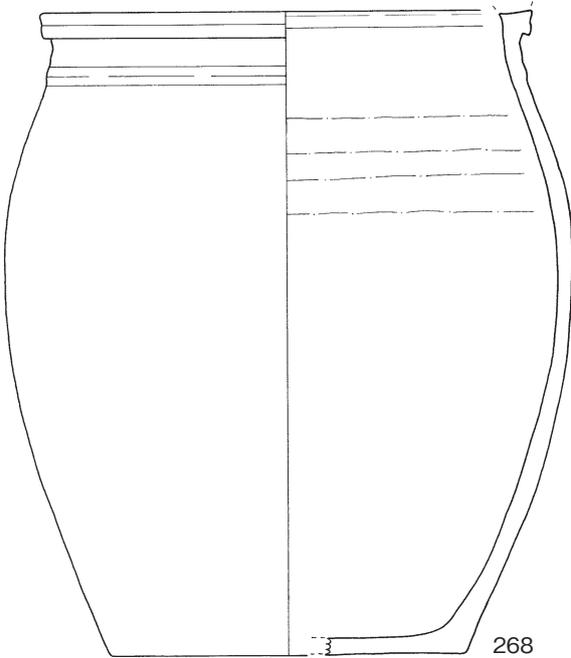
第252図 陶器32 甕類



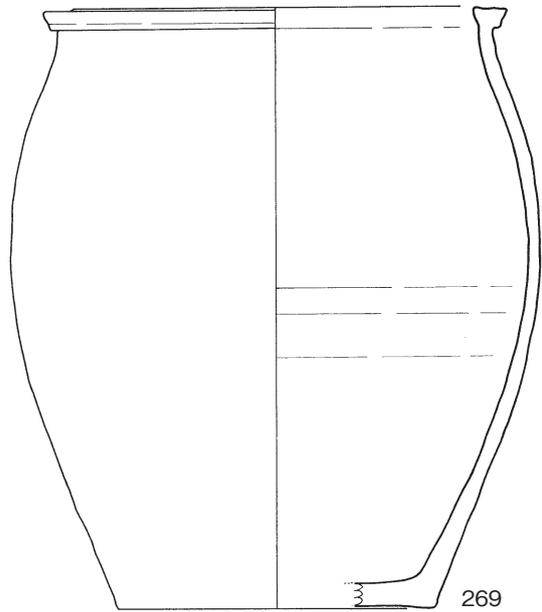
第253図 陶器33 甕類



267



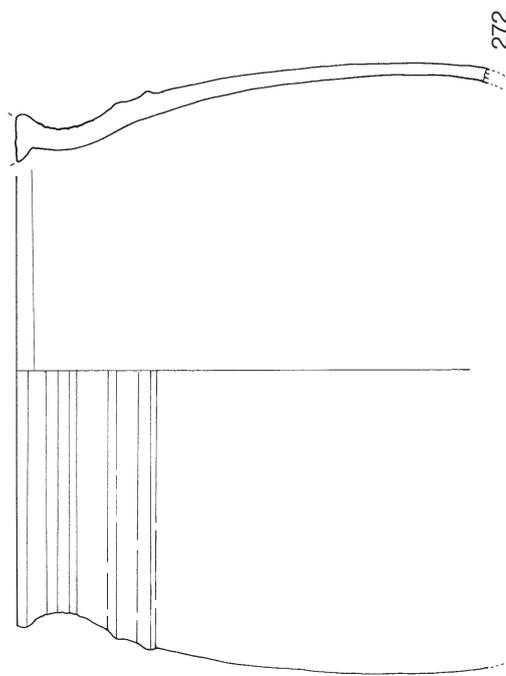
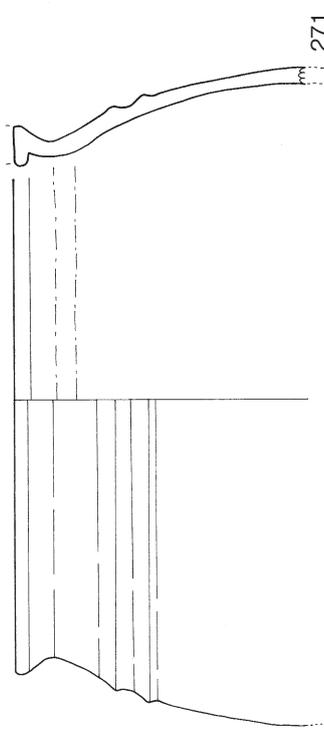
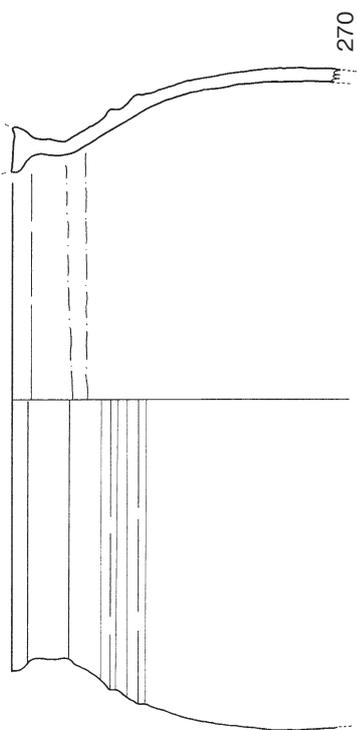
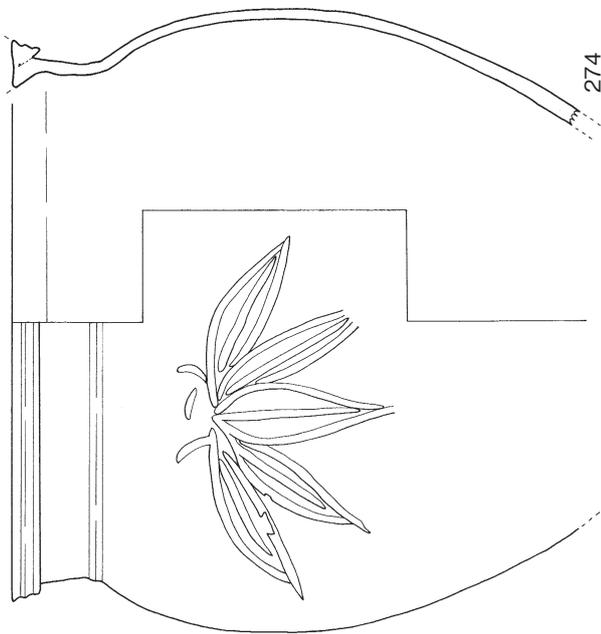
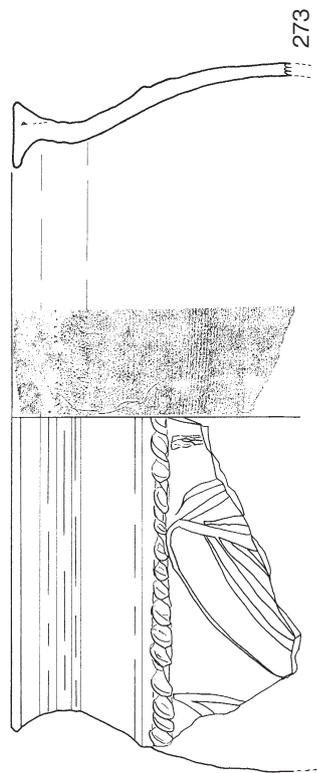
268



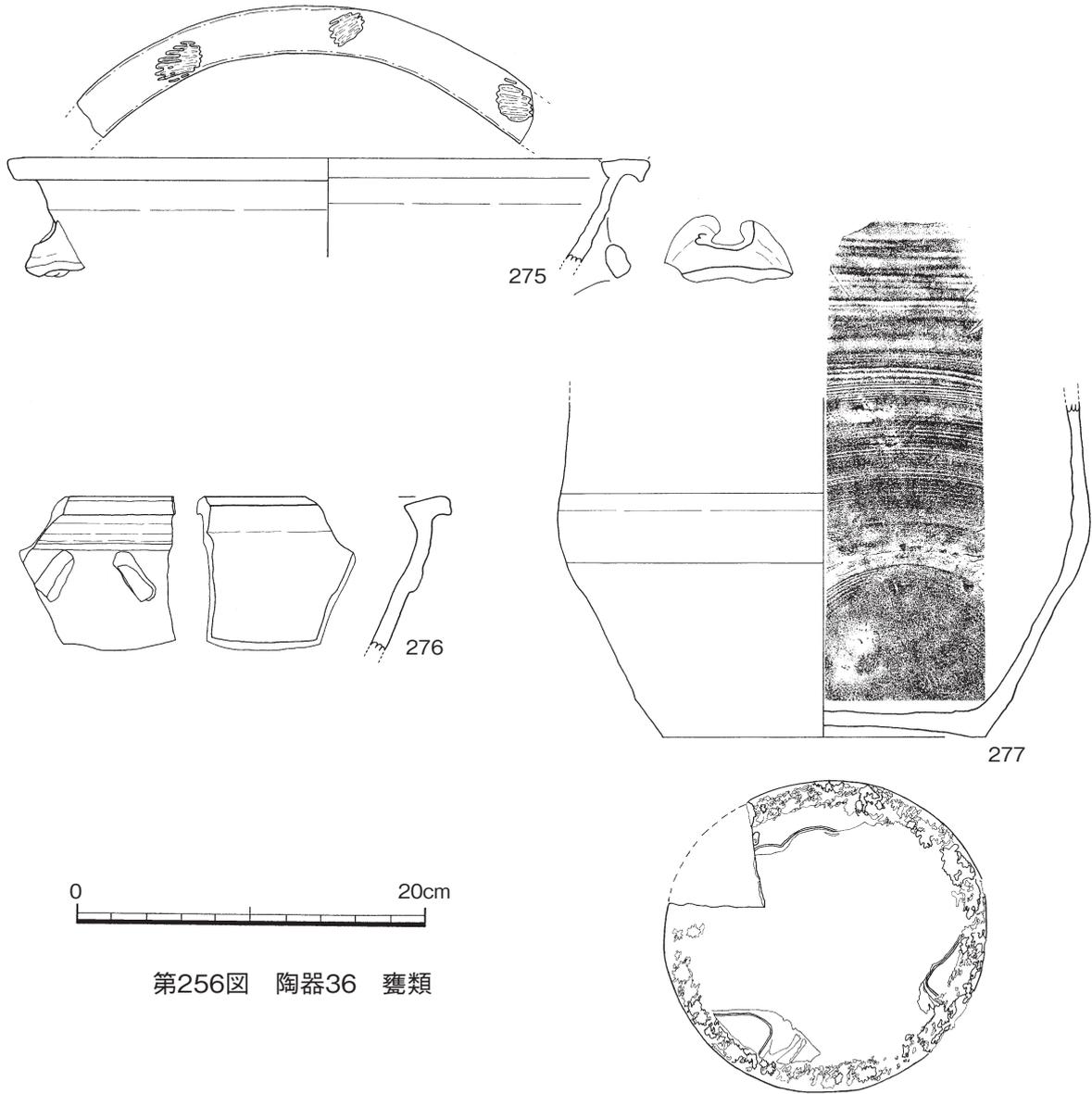
269



第254図 陶器34 甕類



第255図 陶器35 甕類



第256図 陶器36 甕類

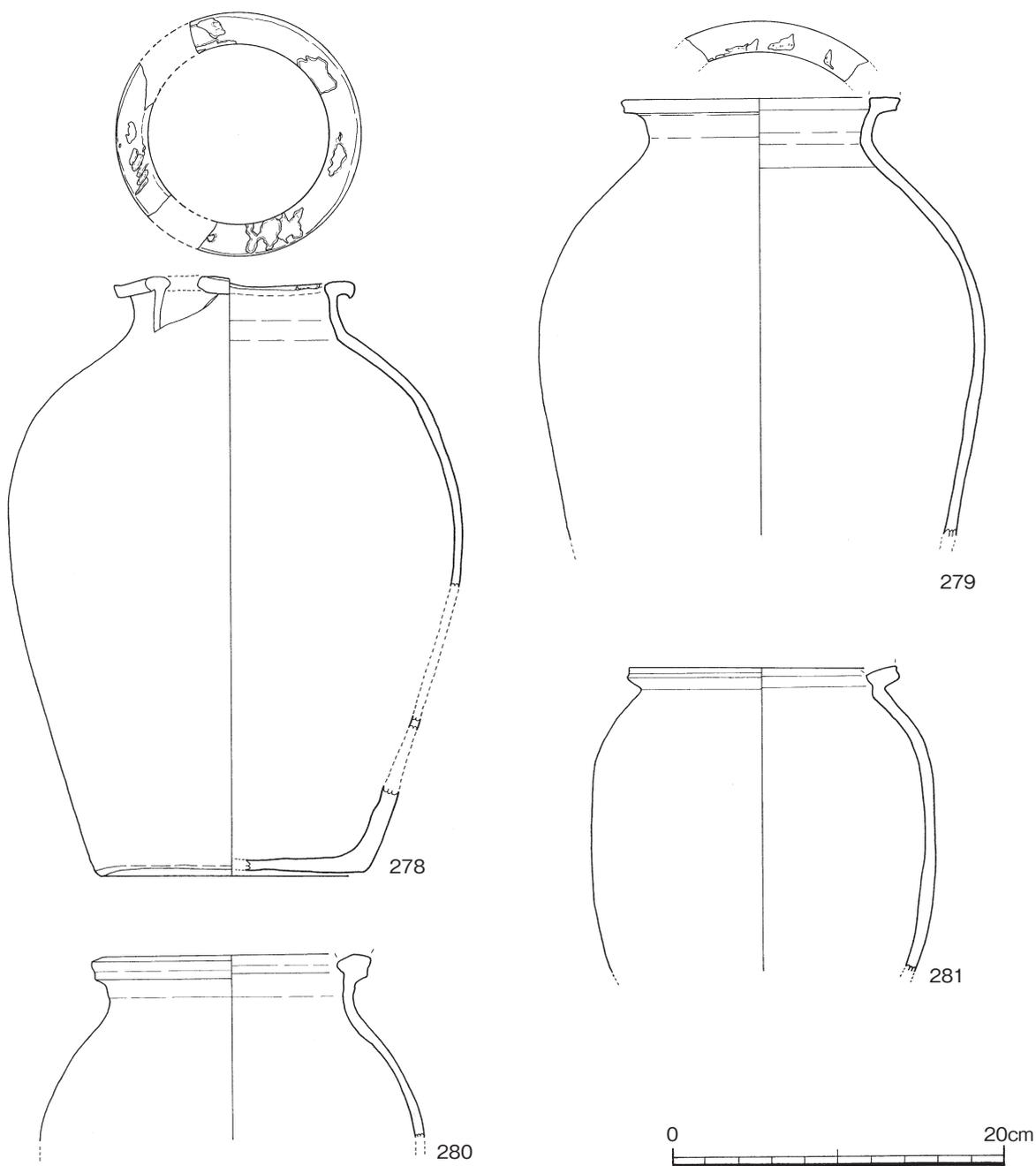
陶器観察表9

挿図 番号	掲載 番号	種別	分類	器種	産地	出土区	法量 (cm)			胎土の 色 調	釉薬の種類 色 調	施釉部位	時期	備 考
							口径	底径	器高					
第 252 図	262	陶器	甕	甕	薩摩苗代川系	G地点	25.0	-	-	黒褐色	鉄釉	口唇部無釉	17世紀後半~18世紀代	口唇部に貝目
	263	陶器	甕	甕	薩摩苗代川系	G地点	23.0	-	-	灰褐色	鉄釉	口唇部無釉	17世紀後半~18世紀代	口唇部に貝目
第 253 図	264	陶器	甕	甕	薩摩苗代川系	G地点	46.8	-	-	黒褐色	鉄釉	口唇部無釉	18世紀代	
	265	陶器	甕	甕	薩摩苗代川系	G地点	43.0	-	-	黒褐色	鉄釉	口唇部無釉	18世紀代	
	266	陶器	甕	甕	薩摩苗代川系	G地点	36.0	-	-	赤褐色	鉄釉	口唇部無釉	18世紀代	
第 254 図	267	陶器	甕	甕	薩摩苗代川系	G地点	30.6	19.6	44.4	赤褐色	鉄釉	口唇部・外底面無釉	18世紀後半~19世紀代	
	268	陶器	甕	甕	薩摩苗代川系	G地点	26.2	18.8	34.3	にぶい 褐色	鉄釉	口唇部・外底面無釉	18世紀後半~19世紀代	
	269	陶器	甕	甕	薩摩苗代川系	G地点	24.6	17.0	32.1	灰褐色	鉄釉	口唇部・外底面無釉	18世紀後半~19世紀代	
第 255 図	270	陶器	甕	甕	薩摩苗代川系	G地点	29.0	-	-	黒褐色	鉄釉	口唇部無釉	19世紀代	
	271	陶器	甕	甕	薩摩苗代川系	G地点	29.0	-	-	暗褐色	鉄釉	口唇部無釉	19世紀代	
	272	陶器	甕	甕	薩摩苗代川系	G地点	27.0	-	-	黒褐色	鉄釉	口唇部無釉	19世紀代	
	273	陶器	甕	甕	薩摩苗代川系	G地点	33.0	-	-	にぶい 赤褐色	鉄釉	口唇部無釉	19世紀代	外面に掻き落とし文
	274	陶器	甕	甕	薩摩苗代川系	G地点	29.6	-	-	にぶい 赤褐色	鉄釉	口唇部無釉	19世紀代	外面に掻き落とし文
第 256 図	275	陶器	甕	把手付甕	薩摩苗代川系	G地点	37.0	-	-	黒褐色	鉄釉	口唇部無釉	19世紀代	口唇部に貝目
	276	陶器	甕	把手付甕	薩摩苗代川系	G地点	-	-	-	灰褐色	鉄釉	口唇部無釉	19世紀代	口唇部に貝目
	277	陶器	瓶	德利	石州	G地点	-	18.6	-	にぶい 橙色	鉄釉	-	19世紀代	島根産 外底面に貝目・砂目

### 壺 (第257～260図)

278～302は壺である。

278は17世紀後半の薩摩焼苗代川系の壺である。器壁は薄く、内面には同心円状のタタキ目が残  
り、口唇部にも貝目が残る。緑褐色の薄い釉が口唇部を除きかかる。280・281は口縁部が外側から  
内側に折り返されて丸くおさめられるものである。器壁は厚く、器面調整はヘラ状工具による横ナ  
デである。282は大形の四耳壺である。器壁は厚い。タタキ成形の後、内外面をヘラ状工具でナデ  
ており、横筋が観察される。283は内面口縁部下位に幅2cmほどの釉剥ぎが見られる。284・285も  
大形の壺である。286・287は長胴の壺である。内外面とも褐釉が厚くかかるが、ヘラ状工具による



第257図 陶器37 壺類

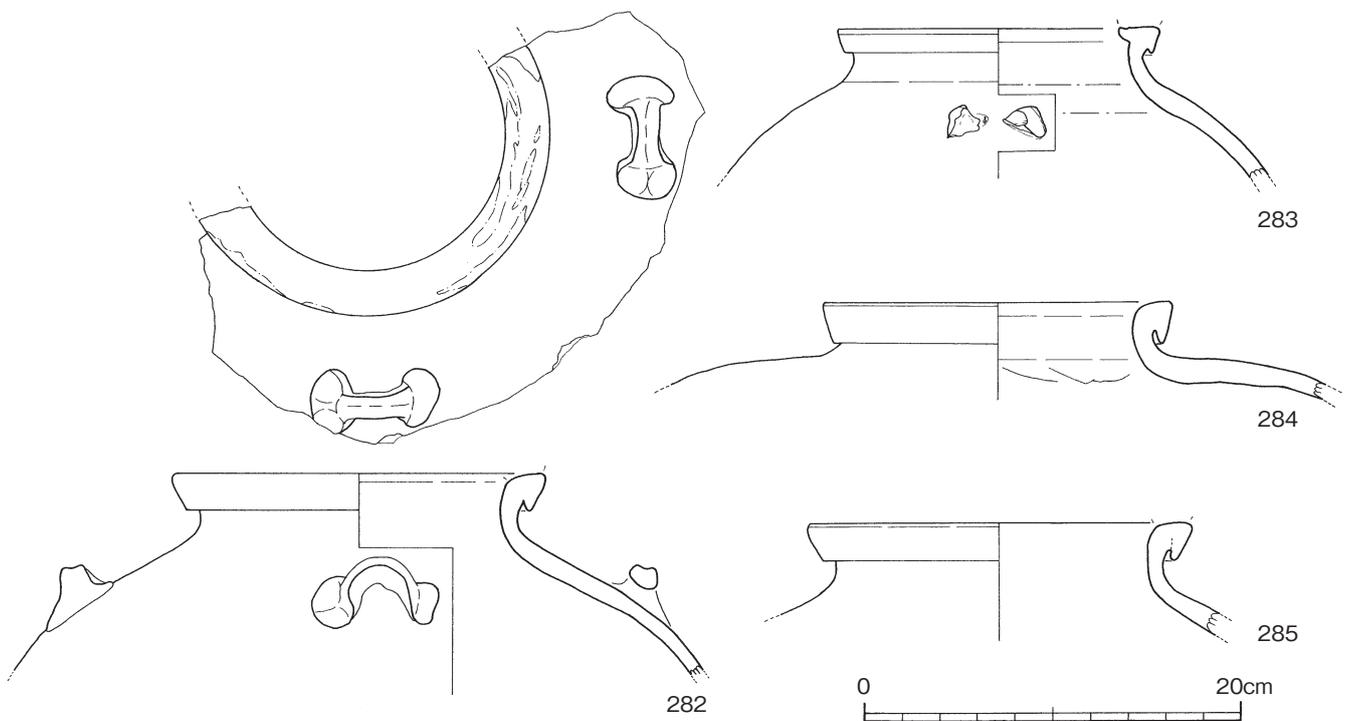
ナデ調整の横筋が、わずかに観察できる。288は貝目の残る底部である。289・290は小形で長胴の壺である。内面はヘラ状工具による横筋が強く残る。291・292は小形の壺である。291は口唇部にも底部にも釉がかかる。293は肥前の壺である。口唇部が丸くつくられ、光沢の強い褐釉が口唇部も含めかけられる。内面には横方向の調整痕が観察される。

294~297はやや小形の壺で、口縁部先端が丸くつくられるものである。294・295は、器壁が非常に薄く、内面にはタタキ成形でつくられた際の痕跡が同心円状に残る。縦耳が2か所付く。

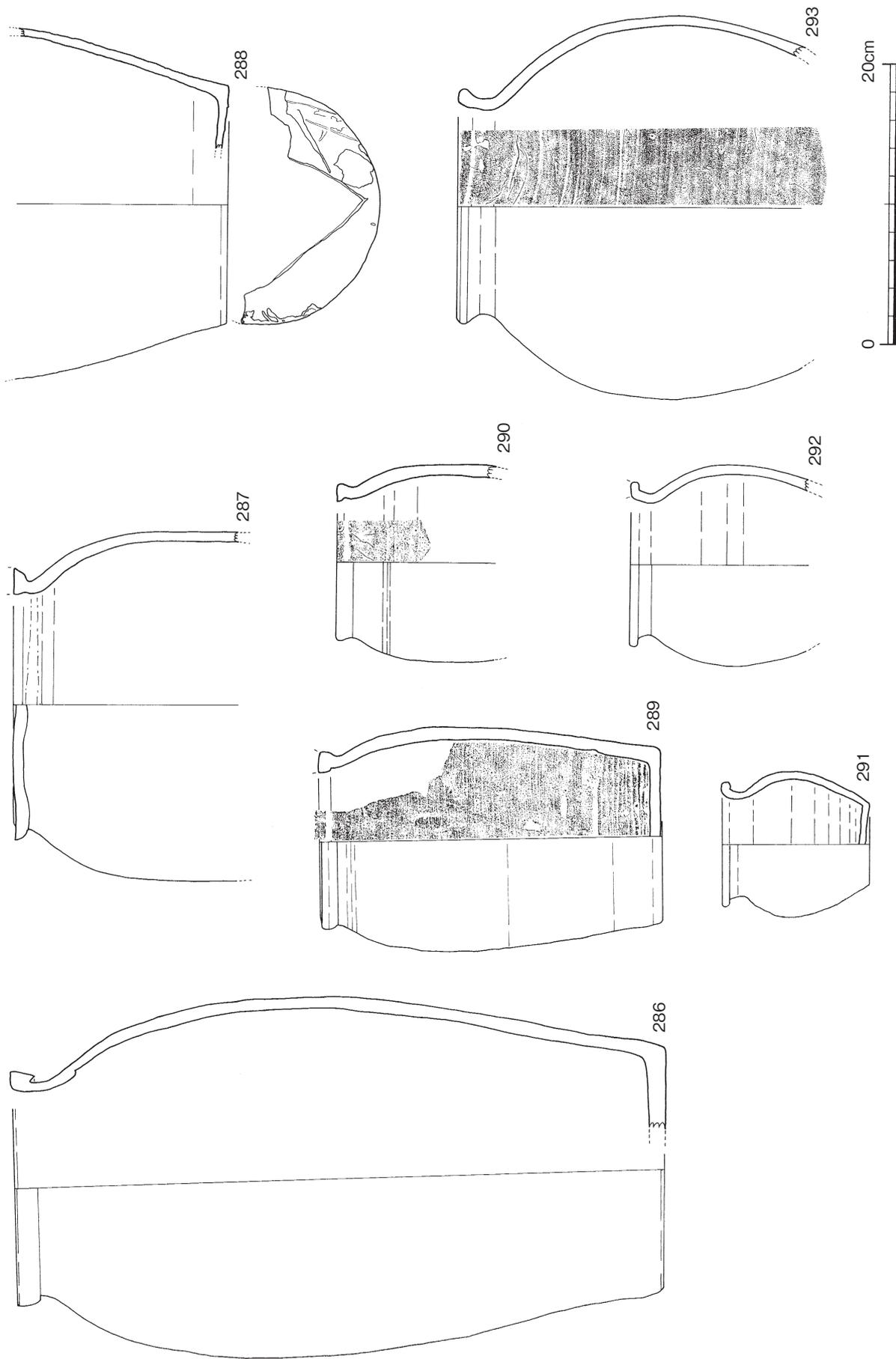
298・299は備前焼の壺である。焼き締めで、外面に横方向の工具痕が残る。300は肥前もしくは丹波かと思われる壺である。301・302は琉球の荒焼である。

### 仏具 (第261図)

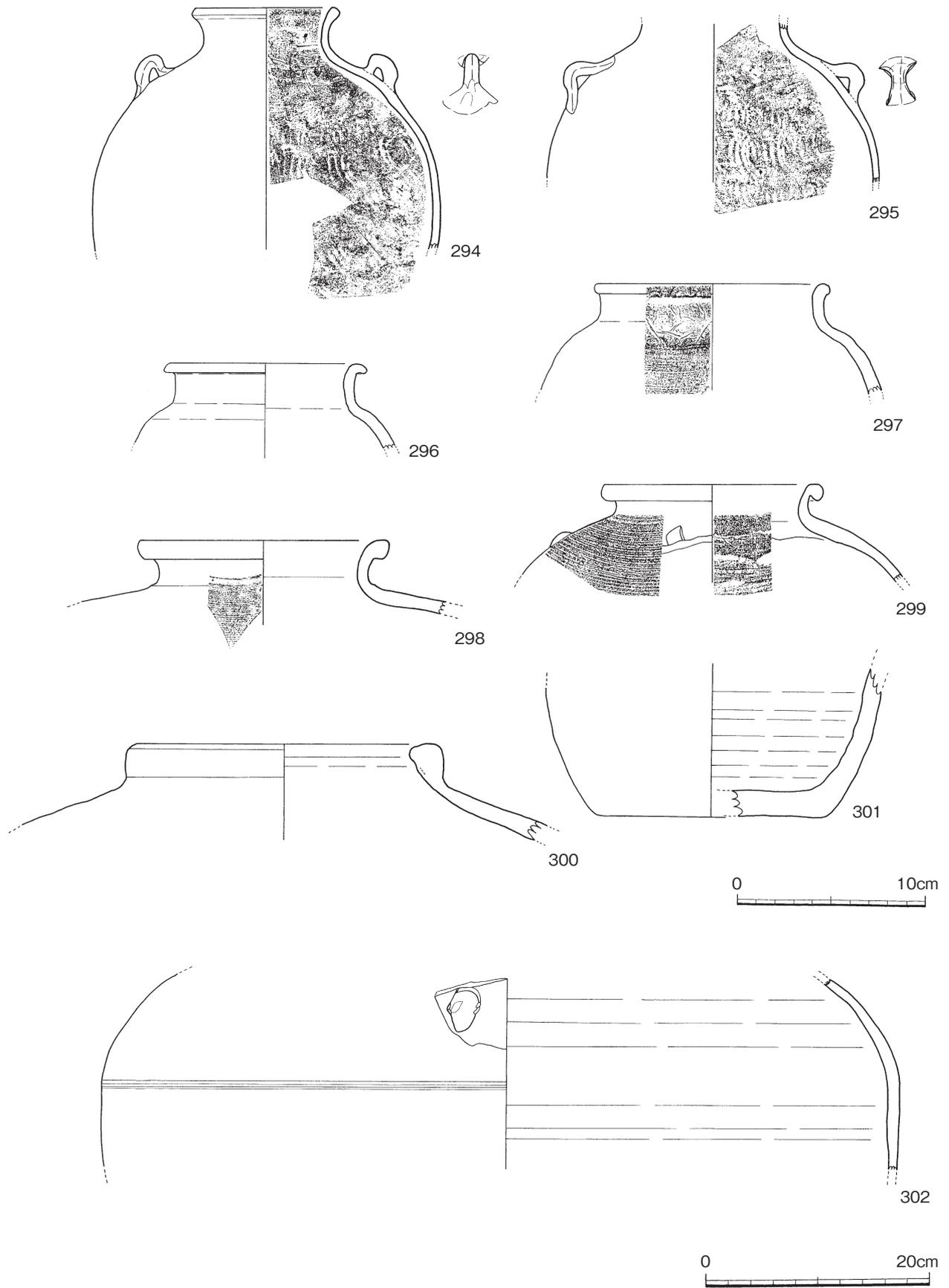
303~317は仏具である。303は薩摩焼龍門司系のものである。見込みには蛇の目釉剥ぎが施される。304~309は香炉である。304~306は内野山系のものである。304・305は外面には腰部まで胴緑釉が、306は褐釉がかかる。307・308は肥前の陶胎染付である。307は胎土が褐釉で外面にも施釉されるが、308は胎土が灰色で畳付を除き施釉される。309は龍門司焼である。白化粧土に透明釉がかかる二彩手で、内面は無釉で、外面腰部まで施釉される。312・314~317は仏花器である。311・312・314・315は薩摩焼堅野系の白色陶胎である。311は獅子頭の耳が、312は象をかたどった耳が2か所つけられる。316・317は薩摩焼元立院系のものである。316は底部が非常に厚く、黒釉が厚くかかる。317も小形のものであるが、底部が厚い。



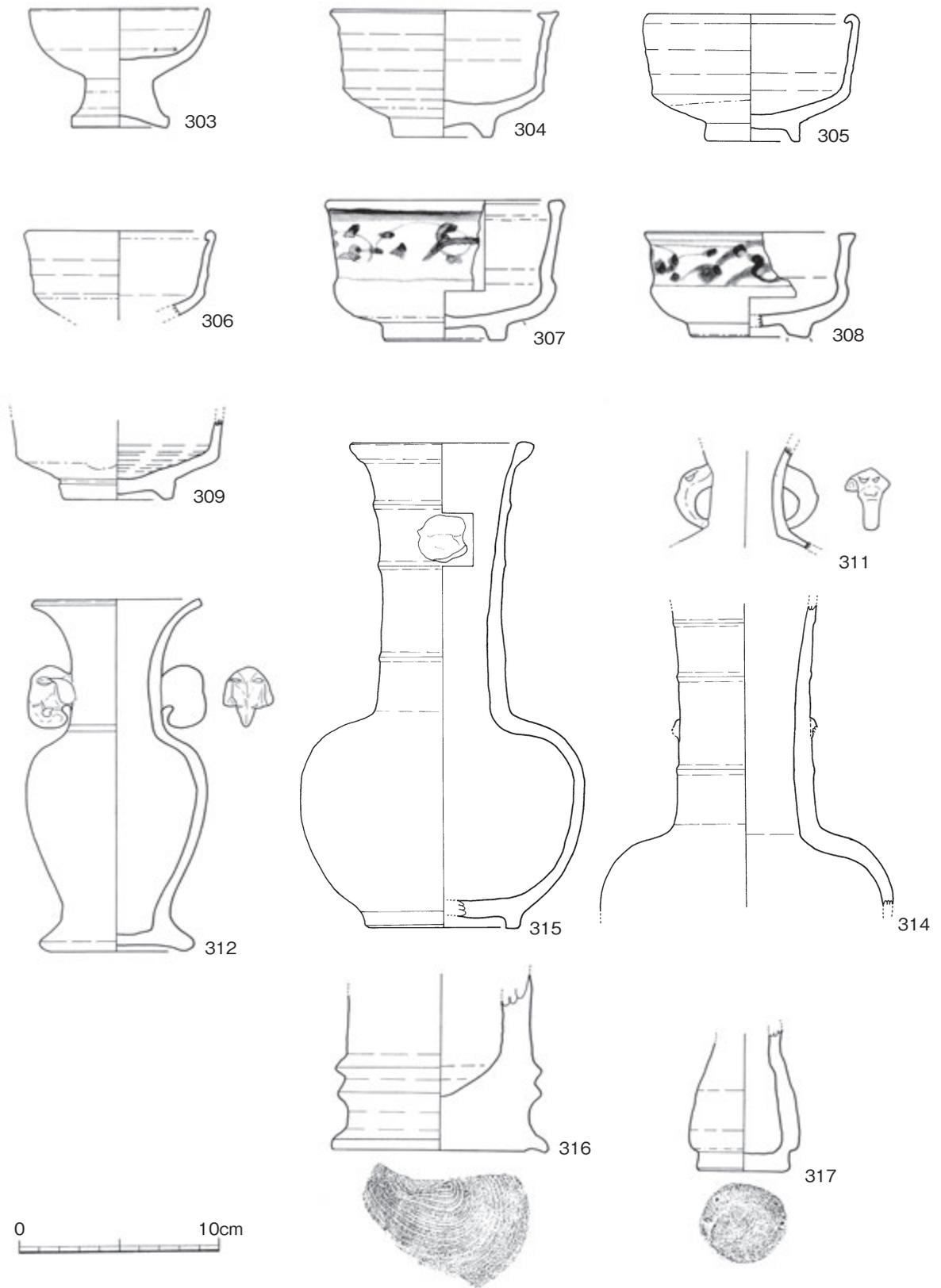
第258図 陶器38 壺類



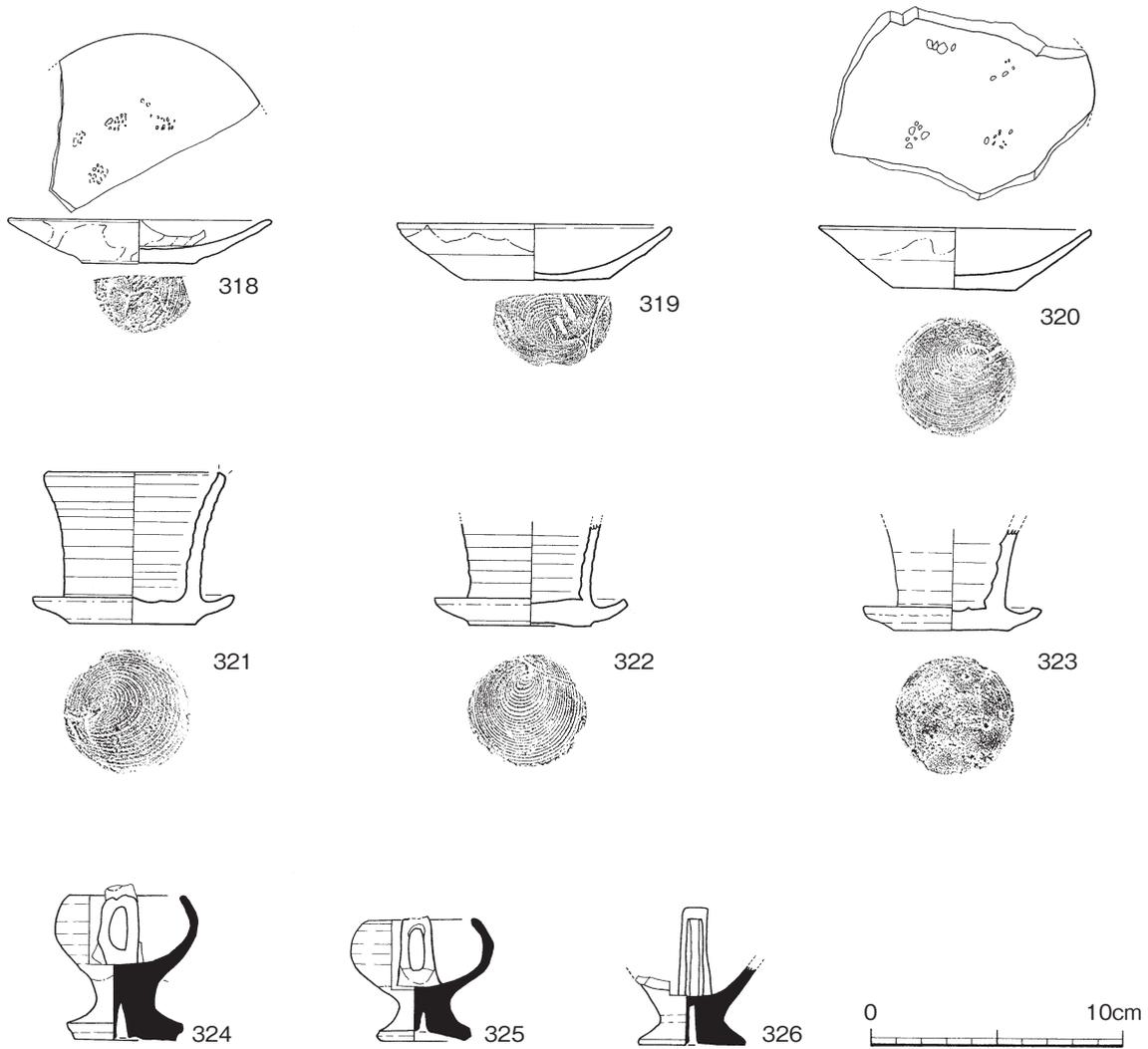
第259図 陶器39 壺類



第260図 陶器40 壺類



第261図 陶器41 仏具



第262図 陶器42 灯明具

灯明具 (第262図)

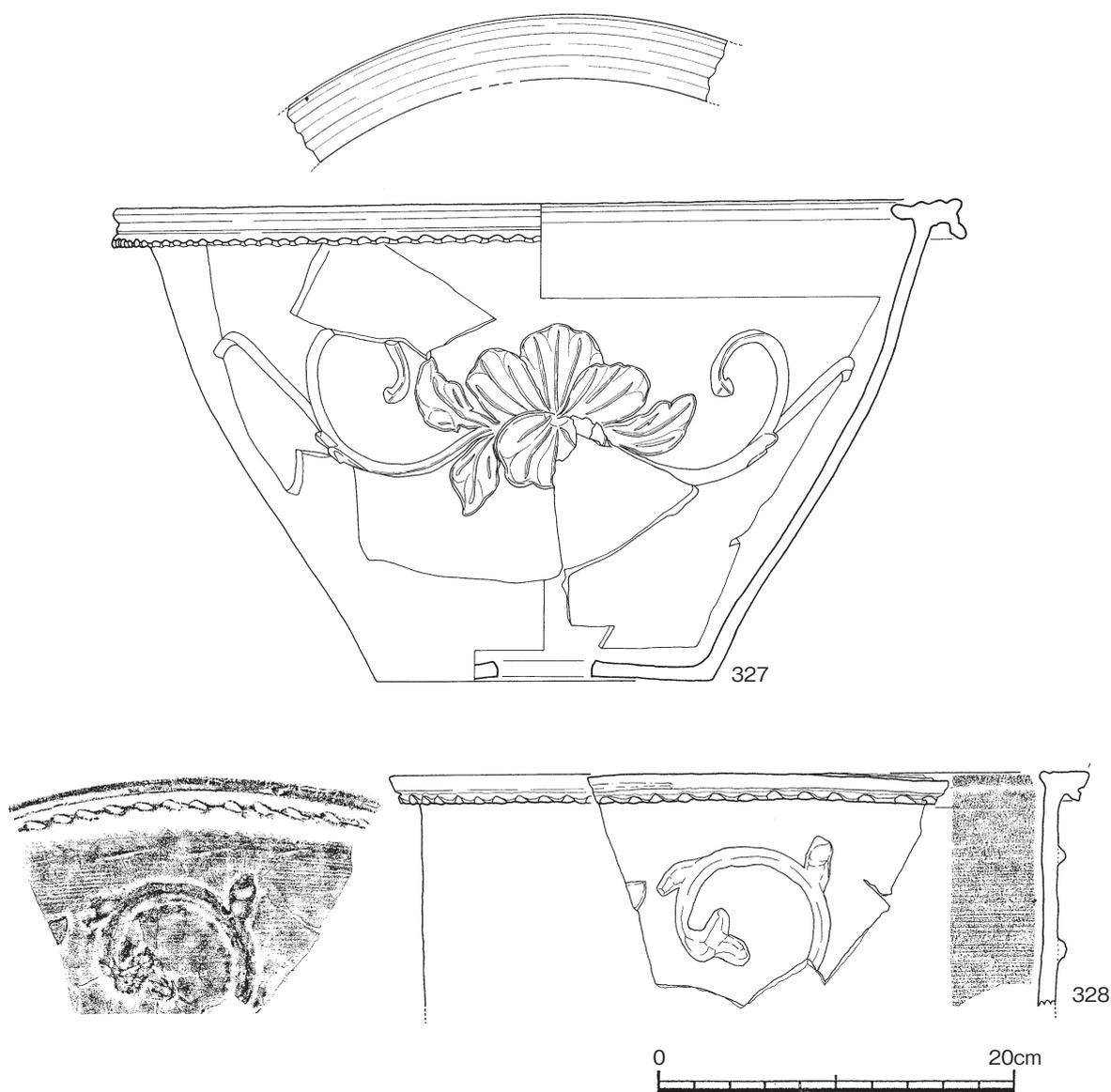
318～326は灯明具である。すべて薩摩焼である。318～320は灯明皿である。底部は糸切りで、318・320の見込みにはゴマ目が観察される。321～323は灯明皿受け台である。皿部外面から外底面を除き、褐釉がかけられる。324～326は内面の中央に芯を立てるたんころ形の秉燭である。脚台の中心には軸孔を有する。324・325は褐色の胎土に褐釉がかけられるもので、326は白色陶胎の白薩摩である。

陶器観察表10

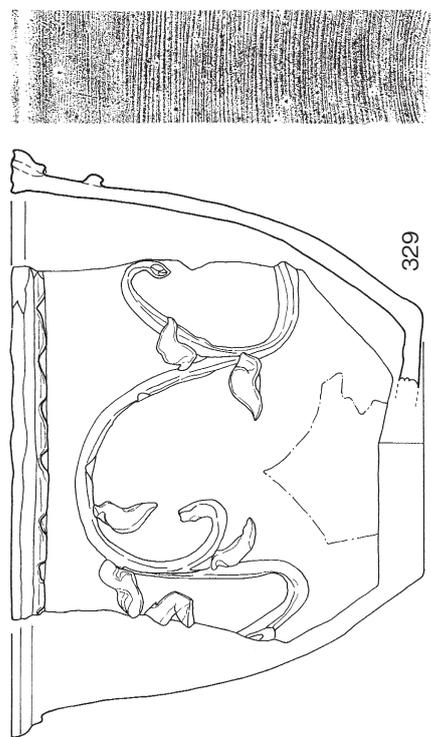
挿図番号	掲載番号	種別	分類	器種	産地	出土区	法量 (cm)			胎土の色調	釉薬の種類・色調	施釉部位	時期	備考
							口径	底径	器高					
第257図	278	陶器	壺	壺	薩摩苗代川系	G地点	14.3	15.7	36.2	灰褐色	鉄釉	口唇部無釉	17世紀後半	口唇部・外底面に貝目
	279	陶器	壺	壺	薩摩苗代川系	G地点	17.2	—	—	褐色	鉄釉	口唇部無釉	17世紀後半	口唇部に貝目
	280	陶器	壺	壺	薩摩苗代川系	G地点	16.8	—	—	褐灰色	鉄釉	口唇部無釉	18世紀代	
	281	陶器	壺	壺	薩摩苗代川系	G地点	15.8	—	—	赤褐色	鉄釉	口唇部無釉	18世紀代	
第258図	282	陶器	壺	壺	薩摩苗代川系	G地点	20.0	—	—	にぶい褐色	鉄釉	口唇部無釉	18世紀代	
	283	陶器	壺	壺	薩摩苗代川系	G地点	17.0	—	—	褐色	鉄釉	口唇部・内面口縁部下位無釉	18世紀代	
	284	陶器	壺	壺	薩摩苗代川系	G地点	18.6	—	—	黒褐色	鉄釉	—	18世紀代	
	285	陶器	壺	壺	薩摩苗代川系	G地点	20.0	—	—	にぶい赤褐色	鉄釉	口唇部無釉	18世紀代	
第259図	286	陶器	壺	壺	薩摩苗代川系	G地点	16.8	17.0	46.3	灰褐色	鉄釉	口唇部無釉 外底面拭き取り	19世紀代	
	287	陶器	壺	壺	薩摩苗代川系	G地点	19.3	—	—	にぶい褐色	鉄釉	—	19世紀代	
	288	陶器	壺	壺	薩摩苗代川系	G地点	—	17.0	—	黒褐色	鉄釉	—	19世紀代	外底面に貝目
	289	陶器	壺	壺	薩摩苗代川系	G地点	12.5	12.0	24.3	にぶい赤褐色	鉄釉	口唇部無釉 外底面拭き取り	19世紀代	
	290	陶器	壺	壺	薩摩苗代川系	G地点	11.0	—	—	黒褐色	鉄釉	口唇部無釉	19世紀代	
	291	陶器	壺	小壺	薩摩苗代川系	G地点	8.6	—	—	黒褐色	鉄釉	外底面拭き取り	18世紀代	口唇部に貝目
	292	陶器	壺	小壺	薩摩苗代川系	G地点	11.3	—	—	黒褐色	鉄釉	口唇部無釉	18世紀代	
293	陶器	壺	壺	肥前	G地点	16.4	—	—	灰褐色	褐釉	—	18世紀代		
第260図	294	陶器	壺	小壺	薩摩苗代川系	G地点	8.0	—	—	灰褐色	灰釉	—	17世紀前半	内面に同心円状のタタキ 縦耳二耳壺
	295	陶器	壺	小壺	薩摩苗代川系	G地点	—	—	—	灰褐色	灰釉	—	17世紀前半	内面に同心円状のタタキ 縦耳二耳壺
	296	陶器	壺	小壺	薩摩苗代川系	G地点	10.2	—	—	黒褐色	灰釉	—	17世紀後半	
	297	陶器	壺	小壺	薩摩苗代川系	G地点	12.4	—	—	黒褐色	鉄釉か?	—	17世紀後半	
	298	陶器	壺	壺	備前	G地点	13.4	—	—	にぶい赤褐色	—	—	17世紀～18世紀代	
	299	陶器	壺	壺	備前	G地点	11.4	—	—	にぶい赤褐色	—	—	17世紀～18世紀代	四耳壺
	300	陶器	壺	壺	肥前か?	G地点	17.0	—	—	暗赤褐色	—	—	18世紀代か?	丹波焼の可能性有り
	301	陶器	壺	壺	壺屋	G地点	12.0	—	—	にぶい赤褐色	—	—	18世紀代か?	三耳壺 琉球の荒焼き
	302	陶器	壺	壺	壺屋	G地点	—	—	—	にぶい赤褐色	—	—	18世紀代か?	三耳壺 琉球の荒焼き
第261図	303	陶器	仏具	仏飯器	薩摩龍門司系	G地点	9.0	4.8	6.1	にぶい褐色	褐釉	脚部以下無釉	18世紀後半	見込み蛇の目釉剥ぎ
	304	陶器	仏具	香炉	肥前	G地点	11.2	4.8	6.5	灰白色	銅緑釉	口唇部～腰部まで施釉	17世紀後半～18世紀前半	
	305	陶器	仏具	香炉	肥前	G地点	10.1	4.7	6.3	灰白色	銅緑釉	口唇部～腰部まで施釉	17世紀後半～18世紀前半	
	306	陶器	仏具	香炉	肥前	G地点	9.6	—	—	にぶい黄褐色	褐釉	口唇部～腰部まで施釉	17世紀後半～18世紀前半	
	307	陶胎染付	仏具	香炉	肥前	G地点	12.0	6.0	7.1	灰色	灰釉	口唇部～腰部まで施釉	18世紀前半	唐草文
	308	陶胎染付	仏具	香炉	肥前	G地点	10.6	6.0	5.3	灰色	灰釉	口唇部～腰部まで施釉	18世紀前半	唐草文
	309	陶器	仏具	香炉	薩摩龍門司系	G地点	—	5.2	—	灰褐色	白化粧土に透明釉	内面と腰部～高台内面無釉	18世紀後半	二彩手
	311	陶器	仏具	仏花器	薩摩堅野系	G地点	—	—	—	黄白色	透明釉	総釉	18世紀代	
	312	陶器	仏具	仏花器	薩摩堅野系	G地点	8.1	7.8	18.2	黄白色	透明釉	総釉	18世紀代	象形の把手
	314	陶器	仏具	仏花器	薩摩堅野系	G地点	—	—	—	黄白色	透明釉	総釉	18世紀代	
315	陶器	仏具	仏花器	薩摩堅野系	G地点	—	7.2	—	黄白色	透明釉	量付以外総釉	18世紀代	獅子頭の把手	
316	陶器	仏具	仏花器	薩摩元龍院系	G地点	—	10.6	—	灰褐色	黒釉	外底面は無釉	18世紀代		
317	陶器	仏具	仏花器	薩摩元龍院系	G地点	—	4.4	—	灰褐色	黒釉	外底面は無釉	18世紀代		
第262図	318	陶器	灯明皿	灯明具	薩摩龍門司系	G地点	10.4	4.3	1.8	赤褐色	褐釉	内面のみ施釉	18世紀代	見込みにゴマ目 外底面糸切り
	319	陶器	灯明皿	灯明具	薩摩龍門司系	G地点	10.8	5.7	2.2	赤褐色	褐釉	内面のみ施釉	18世紀代	外底面糸切り
	320	陶器	灯明皿	灯明具	薩摩龍門司系	G地点	10.7	4.8	2.4	褐色	褐釉	内面のみ施釉	18世紀代	見込みにゴマ目 外底面糸切り
	321	陶器	灯明皿受け台	灯明具	薩摩龍門司系	G地点	7.2	5.0	6.1	にぶい褐色	褐釉	皿部外面と外底面は無釉	18世紀代	外底面糸切り
	322	陶器	灯明皿受け台	灯明具	薩摩龍門司系	G地点	—	4.8	—	明赤褐色	褐釉	皿部外面と外底面は無釉	18世紀代	外底面糸切り
	323	陶器	灯明皿受け台	灯明具	薩摩龍門司系	G地点	—	4.8	—	にぶい褐色	褐釉	皿部外面と外底面は無釉	18世紀代	外底面糸切り
	324	陶器	乗燭	灯明具	薩摩龍門司系	G地点	4.5	4.0	6.1	にぶい褐色	褐釉	脚部以下無釉	18世紀代	
	325	陶器	乗燭	灯明具	薩摩龍門司系	G地点	4.0	3.6	4.9	にぶい褐色	褐釉	脚部以下無釉	18世紀代	
	326	陶器	乗燭	灯明具	薩摩堅野系	G地点	4.2	—	—	黄白色	透明釉	外底面無釉	18世紀代	

### 植木鉢 (第263～269図)

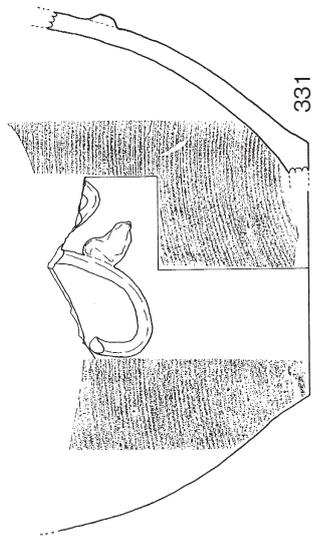
327～350は植木鉢である。327～332は外面に貼り付け文の装飾が施されるものである。332を除き薩摩焼苗代川系のものである。327は焼き締めで、口縁部にも装飾が施される。外面には器面調整の痕跡である横筋が残る。328～331は内外面ともに褐釉がかかるもので、内外面の統制はヘラ状工具による横方向のナデである。口縁部下端は装飾が施される。332は琉球の荒焼である。胎土は赤褐色を呈し、焼き締めである。外面にヘラ工具による横筋は観察されない。333～335は口縁端部をつまんで装飾を施し、胴部中位に縄目状の突帯を有するものである。内外面はヘラ状工具による横筋が観察される。336・338は底部が欠損しており、植木鉢かの判断は難しいが、口縁部に装飾が施される点や、内外面の器面調整等から植木鉢とした。337は内底面に輪状の痕跡が観察されるもので、植木鉢に転用できるように入れられたものと思われる。339～341はバケツ状の器形を呈する



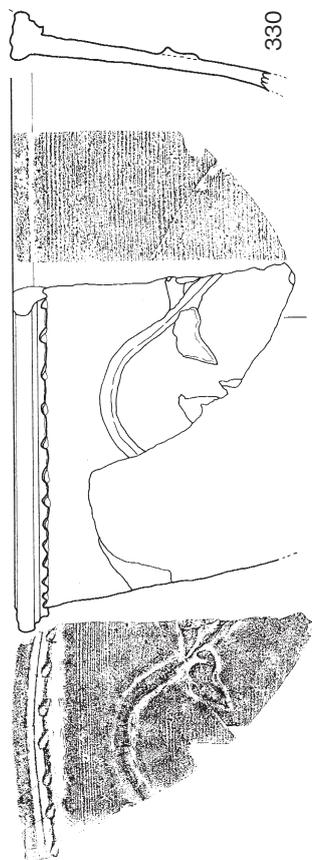
第263図 陶器43 植木鉢



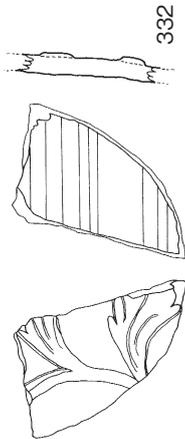
329



331



330

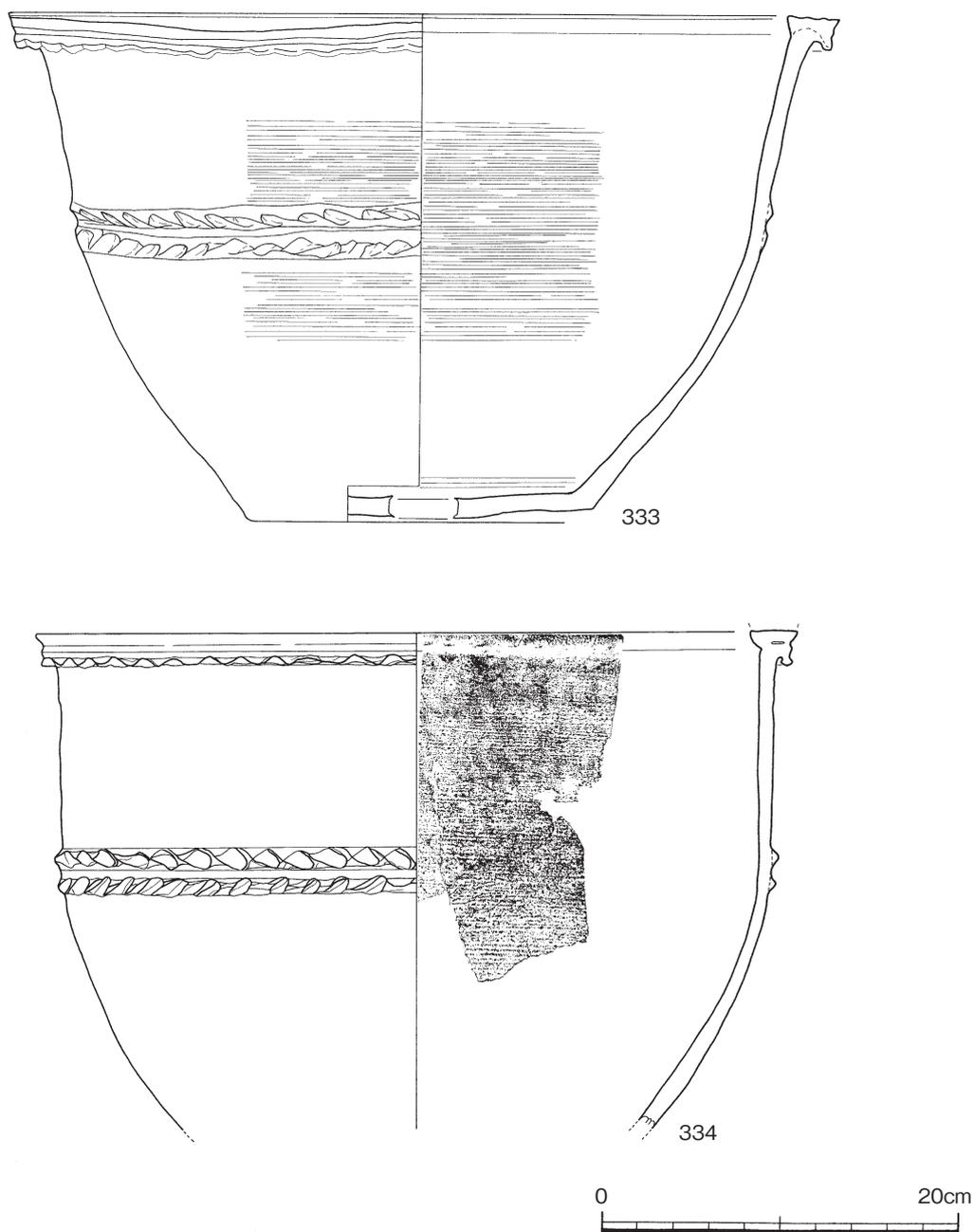


332

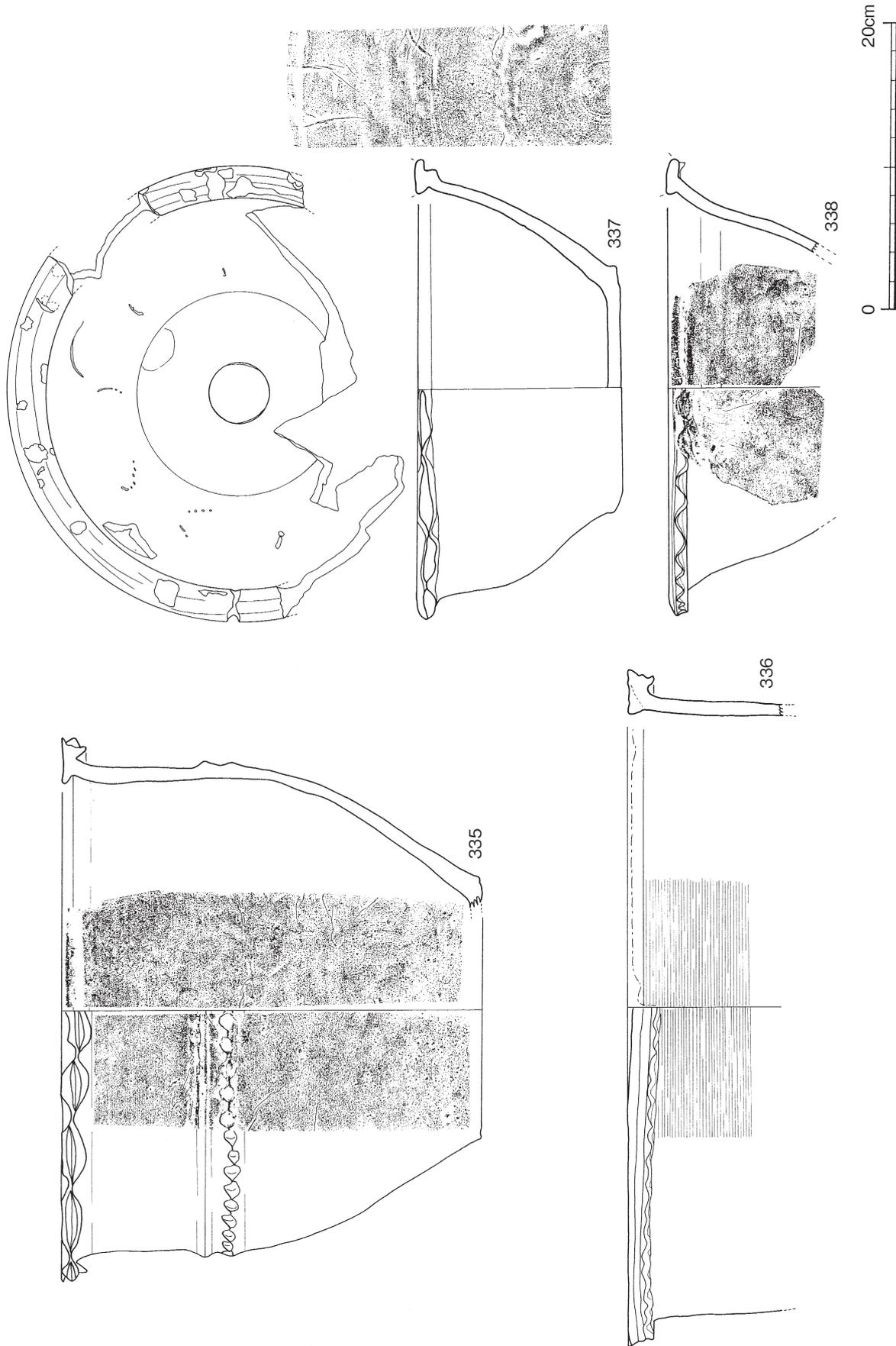


第264区 陶器44 植木鉢

ものである。基本的に外面にのみ鉄釉が施釉され、内外面にはヘラ状工具による横筋が観察される。339・340は口縁端部をつまんで装飾を施すものである。341は底部が欠損しており、植木鉢の判断はつかないが、339・340との違いが口縁部の装飾の有無だけであるため植木鉢とした。342～344は一般的に「ラン鉢」と呼ばれるものである。底部は平底で、釉は基本的に外面にもかかる。345・346は底部に3足の脚部がつくと思われる植木鉢である。345は獅子頭の獣足である。347～349は福岡近辺の窯場のものと思われるものである。釉は口唇部から外面にかけて施釉される。347・348は高台を有するもので、3か所抉りが入られる。348は褐釉の上から黒釉が流しかけられるものである。349は白化粧土の上から黒釉が流しかけられるものである。350は在地産のものと思われ、灰釉の上から絵付けが施される。高台の3か所に二連続した抉りが入られる。



第265図 陶器45 植木鉢



第266図 陶器46 植木鉢

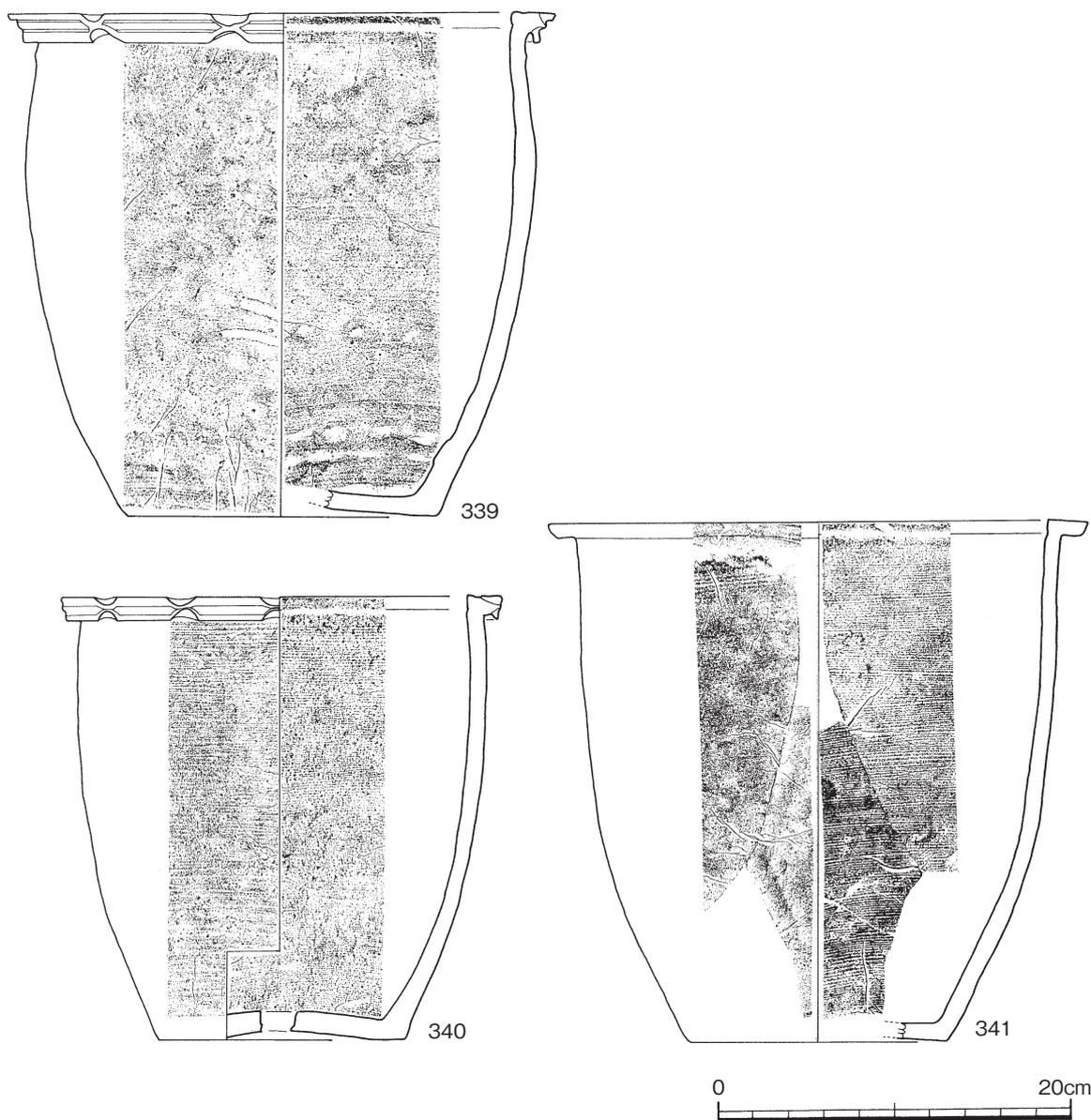
瓦質土器 (第270・271図)

火鉢 (第270図)

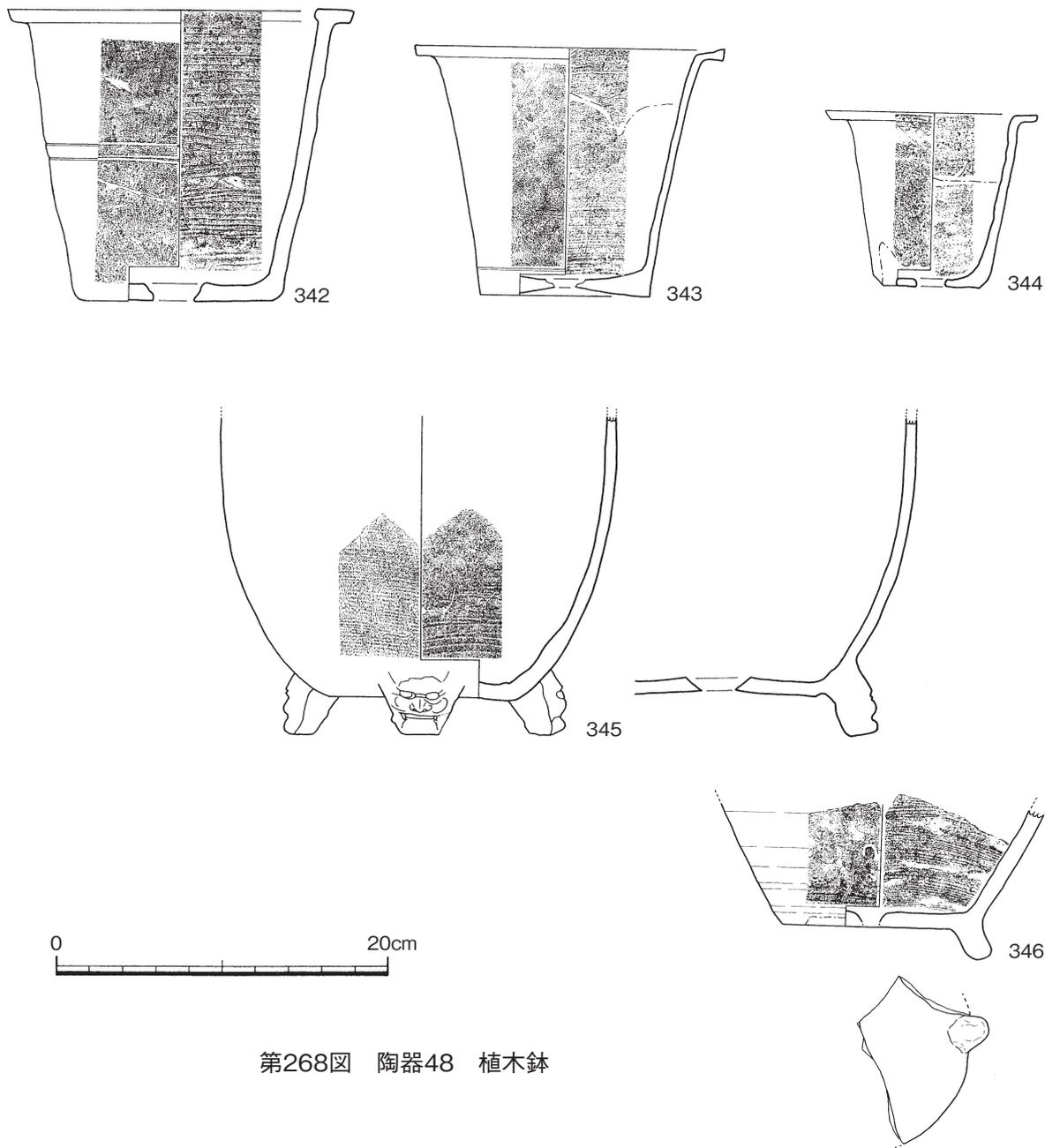
351～357は外面に型押しで文様が施されたものである。351・355・357は胎土に金雲母が入る。351は木目状の文様である。352は高台外面に「宇」の銘が押される。356は底面中央に内側から穿孔が施されており、植木鉢に転用したものと思われる。357は高台部分で、1/4程度の残存率であるため全体は不明であるが、1か所穿孔が観察される。少なくとも1か所はあけられたと確認される。

七厘 (第271図)

358～361は七厘の部品と思われるものである。361は五徳と同様の用途のものであると思われるが、突起は3か所である。



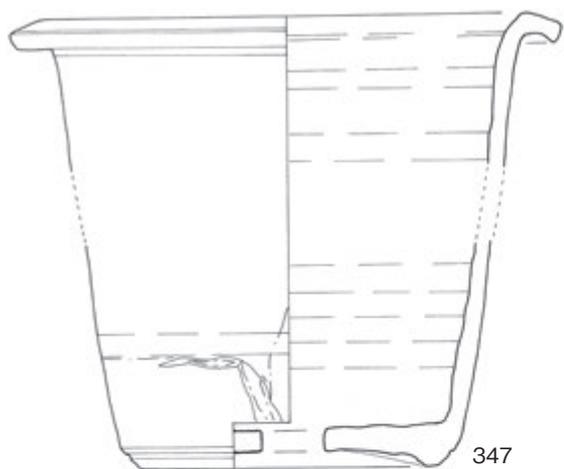
第267図 陶器47 植木鉢



第268図 陶器48 植木鉢

陶器観察表11

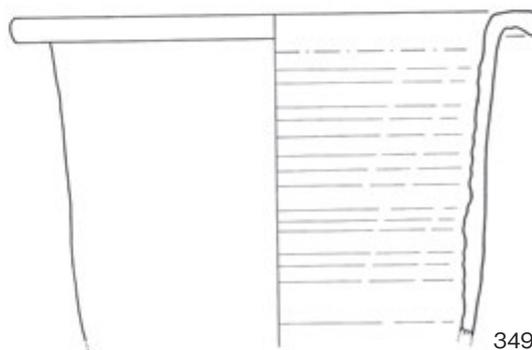
挿入 番号	掲載 番号	種別	分類	器種	産地	出土区	法量 (cm)			胎土の 色 調	釉薬の種類 色 調	施釉部位	時期	備 考
							口径	底径	器高					
第 263 図	327	陶器	鉢	植木鉢	薩摩苗代川系	G地点	47.7	19.0	27.4	にぶい 褐色	-	-	18世紀代	口縁部先端装飾 貼り付け文
	328	陶器	鉢	植木鉢	薩摩苗代川系	G地点	40.0	-	-	暗赤色	鉄釉	内面と口唇部釉剥ぎ	18世紀後半~19世紀代	口縁部先端装飾 貼り付け文
第 264 図	329	陶器	鉢	植木鉢	薩摩苗代川系	G地点	31.2	14.4	21.9	黒褐色	鉄釉	内面無釉・口唇部釉 剥ぎ	18世紀後半~19世紀代	口縁部先端装飾 貼り付け文
	330	陶器	鉢	植木鉢	薩摩苗代川系	G地点	33.0	-	-	黒褐色	鉄釉	内面無釉・口唇部釉 剥ぎ	18世紀後半~19世紀代	口縁部先端装飾 貼り付け文
	331	陶器	鉢	植木鉢	薩摩苗代川系	G地点	-	13.4	-	黒褐色	鉄釉	内面・外底面無釉	18世紀後半~19世紀代	口縁部先端装飾 貼り付け文
	332	陶器	鉢	植木鉢	壺屋	G地点	-	-	-	にぶい 赤褐色	-	-	18世紀代	琉球の焼き締め 貼り付け文
第 265 図	333	陶器	鉢	植木鉢	薩摩苗代川系	G地点	46.4	19.4	28.7	黒褐色	鉄釉	口唇部以外総釉	18世紀後半~19世紀代	口縁部先端装飾 縄目状突帯二条廻る
	334	陶器	鉢	植木鉢	薩摩苗代川系	G地点	42.4	-	-	黒褐色	鉄釉	内面・口唇部・外底 面無釉	18世紀代	口縁部先端装飾 縄目状突帯二条廻る
第 266 図	335	陶器	鉢	植木鉢	薩摩苗代川系	G地点	38.0	18.2	29.2	赤褐色	鉄釉	口唇部・外底面無釉	18世紀後半~19世紀代	口縁部先端装飾 突帯一条、縄目状突帯一条 廻る
	336	陶器	鉢	植木鉢	薩摩苗代川系	G地点	47.2	-	-	黒褐色	鉄釉	口唇部無釉	19世紀代	口縁部先端装飾
	337	陶器	鉢	植木鉢	薩摩苗代川系	G地点	32.0	17.2	14.2	灰黒色	鉄釉	口唇部・外底面無釉	19世紀代	口縁部先端装飾
	338	陶器	鉢	植木鉢	薩摩苗代川系	G地点	32.0	-	-	灰黒色	鉄釉	口唇部無釉	19世紀代	口縁部先端装飾



347



348



349



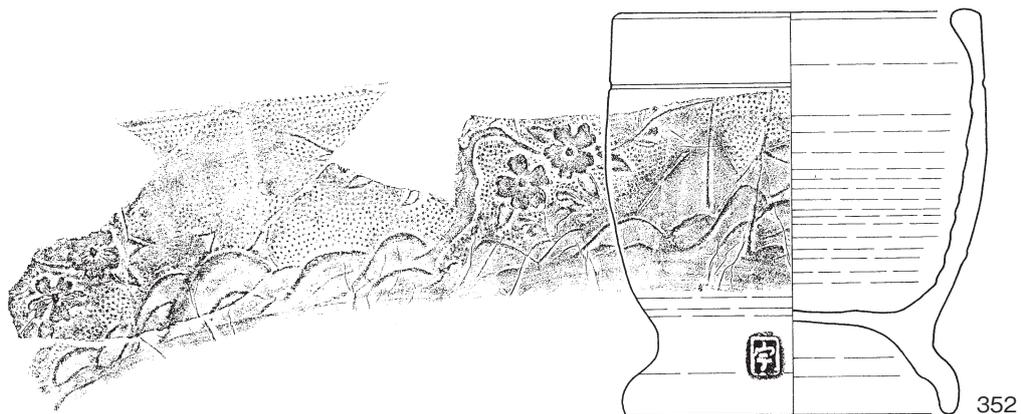
350



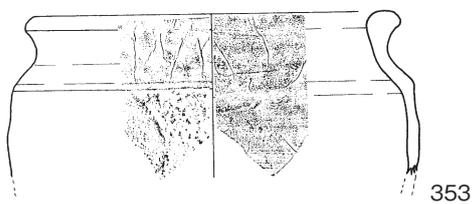
第269図 陶器49 植木鉢



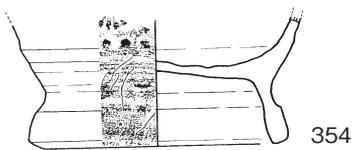
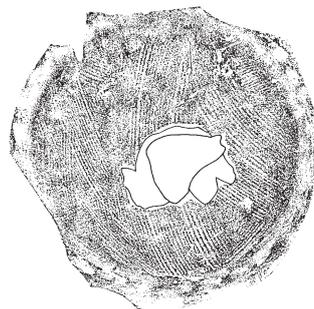
351



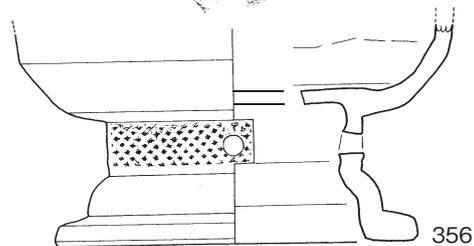
352



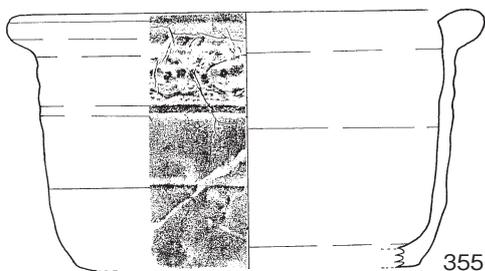
353



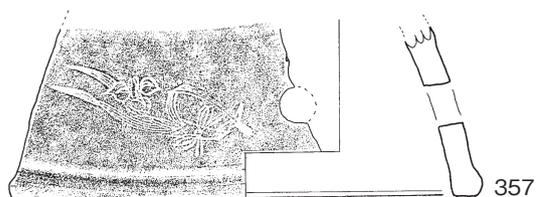
354



355



356



357



第270図 瓦質土器 1 火鉢

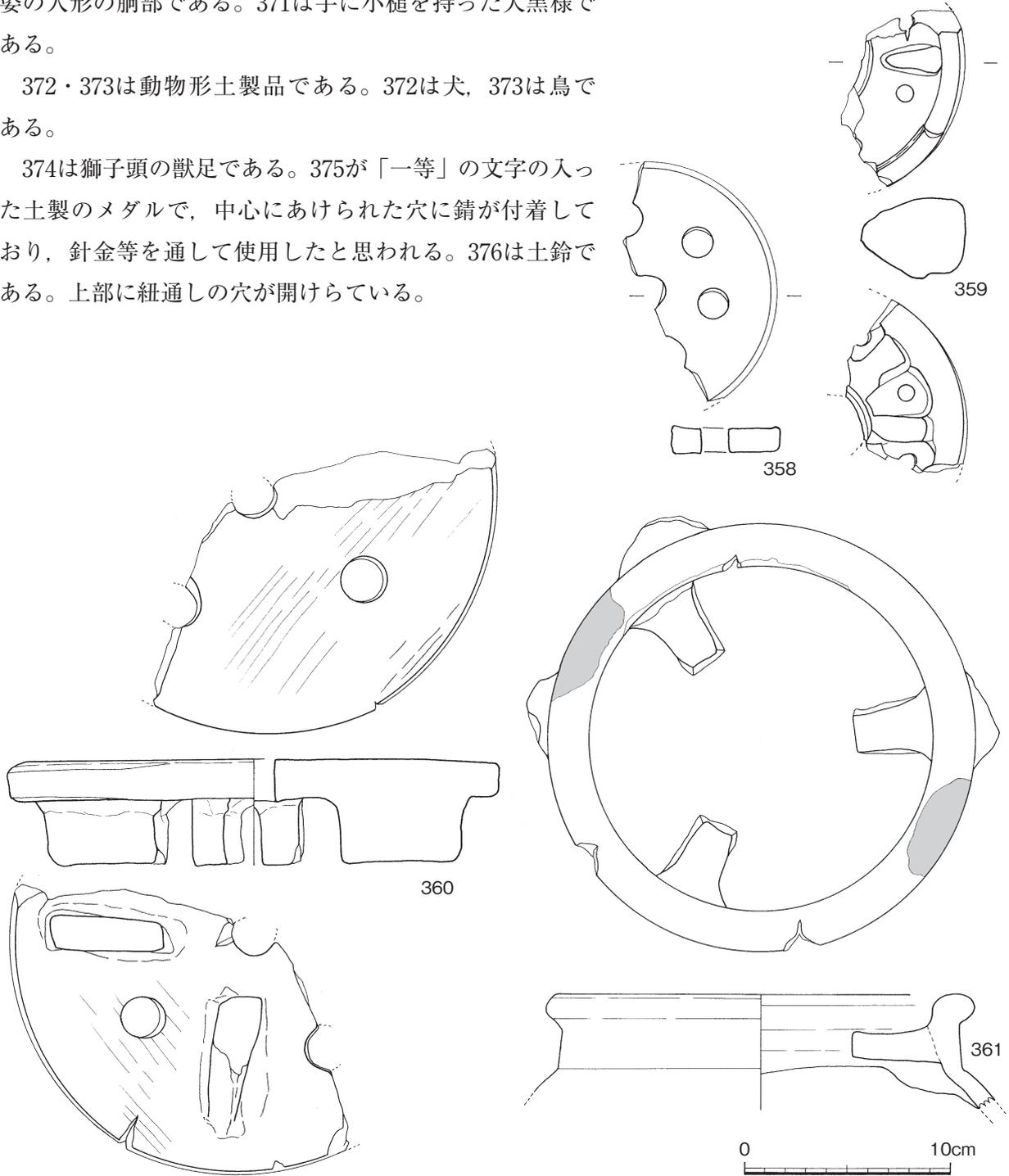
土製品 (第272~275図)

362~376は土製品である。

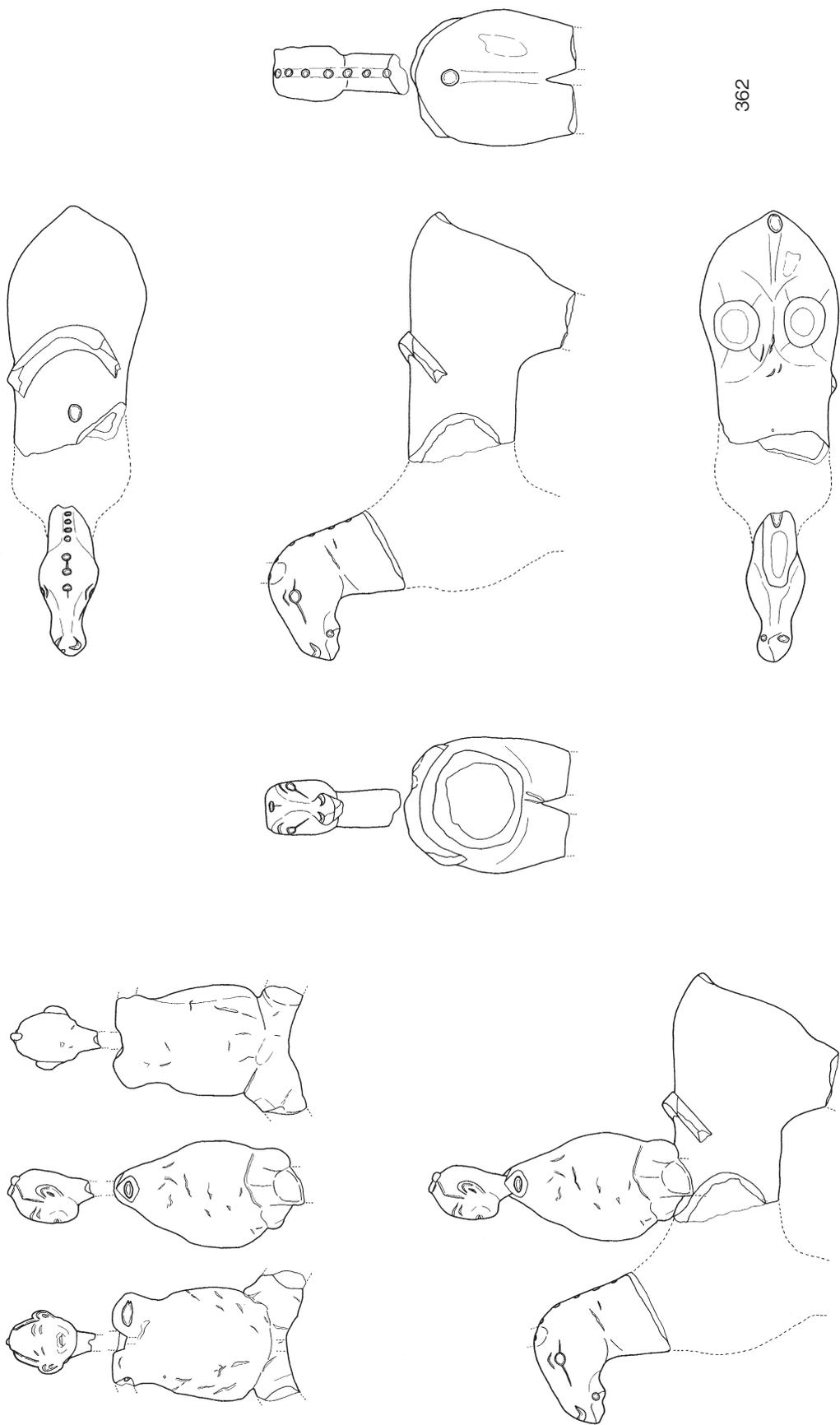
362~371は人形土製品である。絵付けがされていた可能性が考えられるが、残っていない。362は馬に侍が乗ったもので、侍の頭部や胴部、馬等がそれぞれ別々につくられ、組み合わされるようである。馬の頸部には、鬘をつけるための穴があけられている。363・364は日本髪を結った人形の頭部である。365・366は着物を着た人形の胴部である。367~369も人形の頭部である。370は軍服姿の人形の胴部である。371は手に小槌を持った大黒様である。

372・373は動物形土製品である。372は犬、373は鳥である。

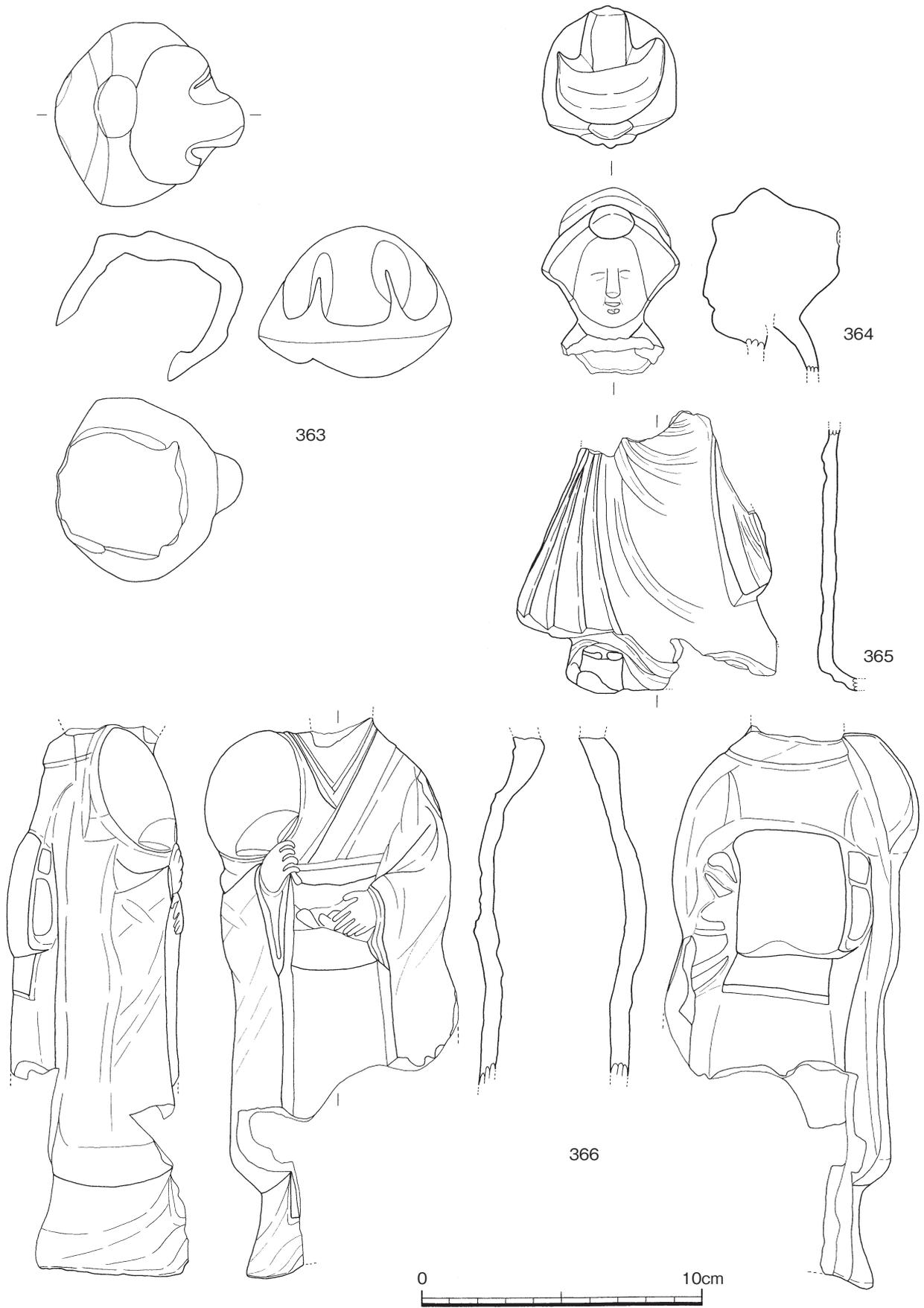
374は獅子頭の獣足である。375が「一等」の文字の入った土製のメダルで、中心にあけられた穴に鍔が付着しており、針金等を通して使用したと思われる。376は土鈴である。上部に紐通しの穴が開けられている。



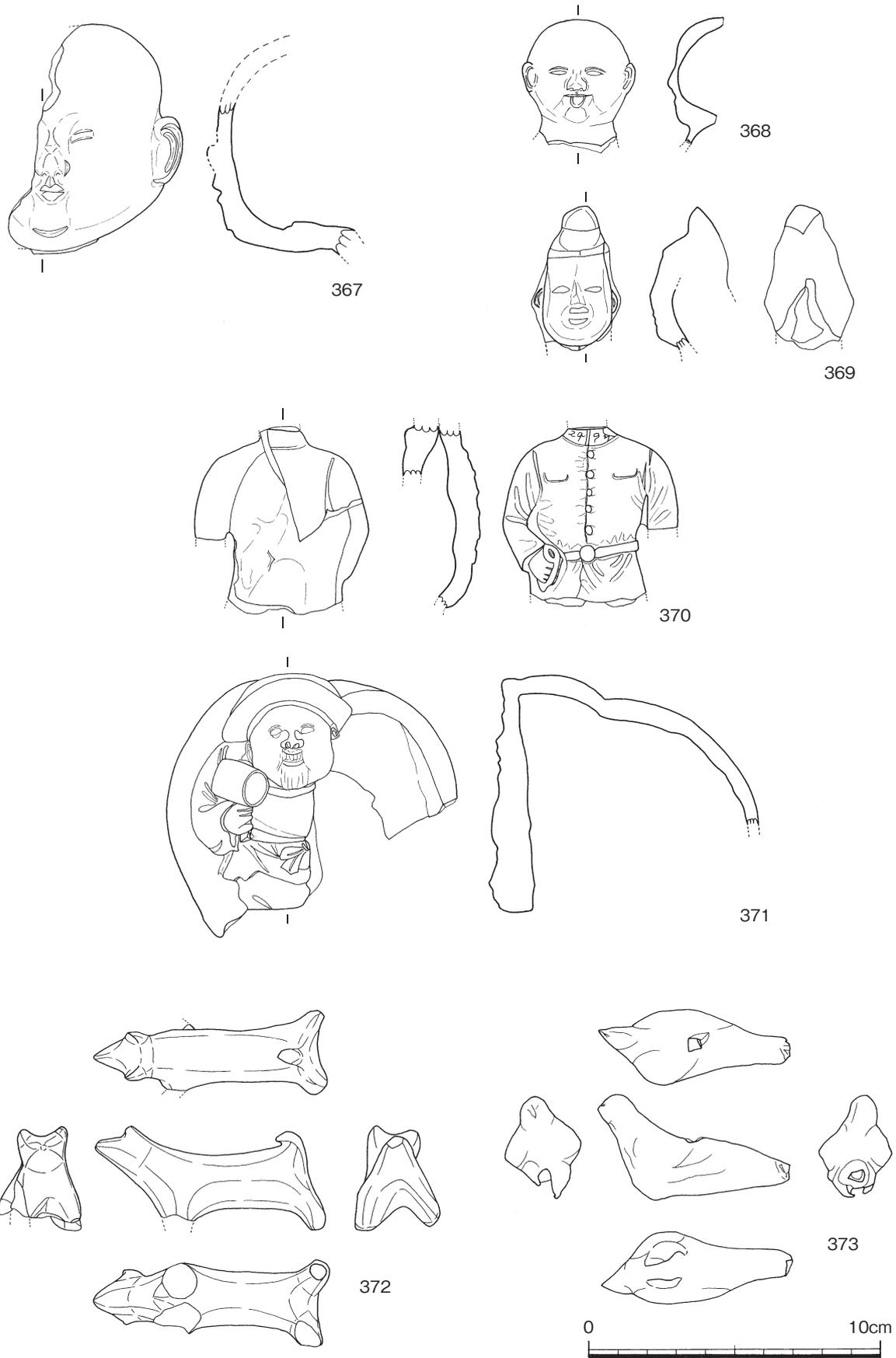
第271図 瓦質土器2 七厘他



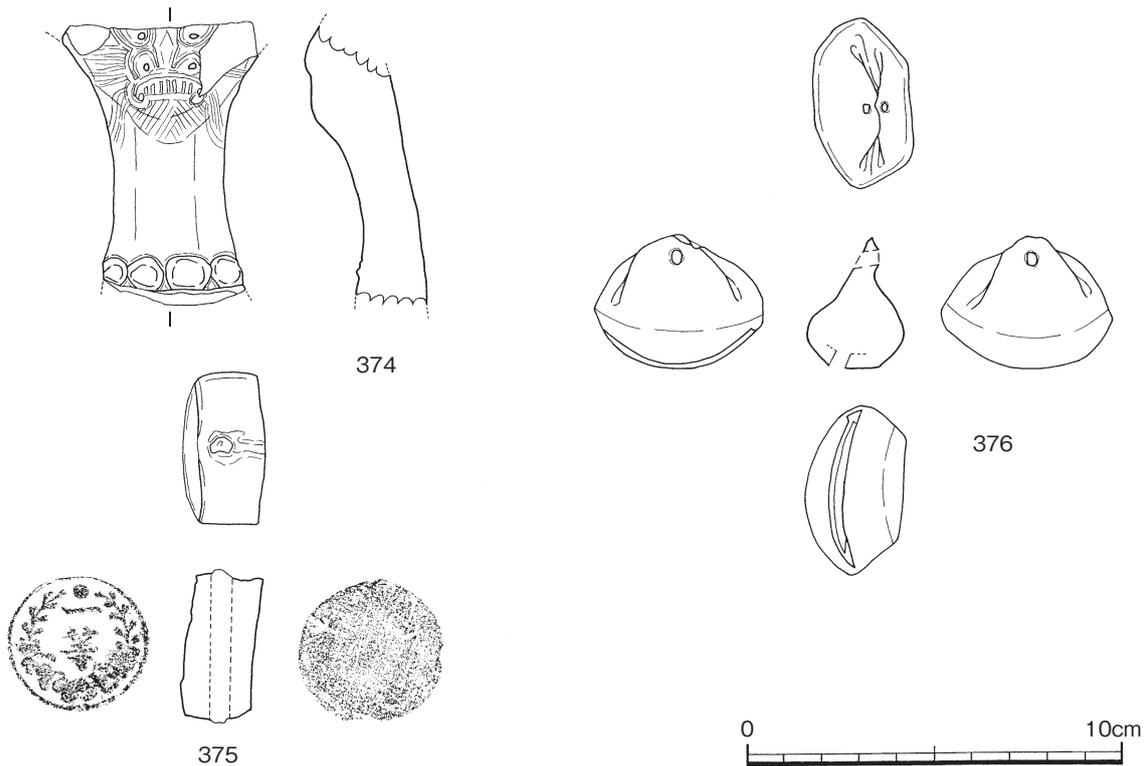
第272図 土製品1



第273図 土製品2



第274図 土製品3



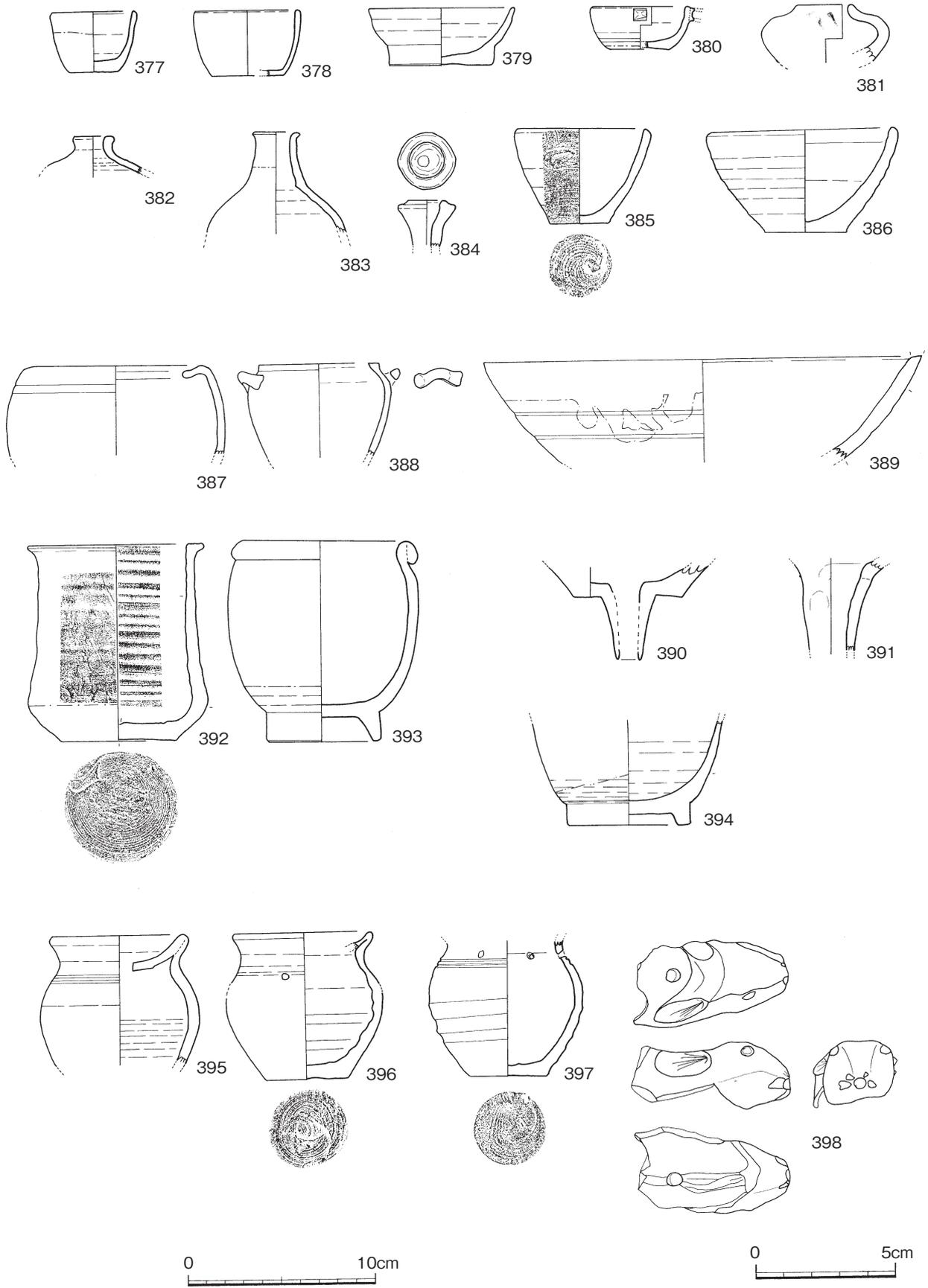
第275図 土製品4

その他 (第276~279図)

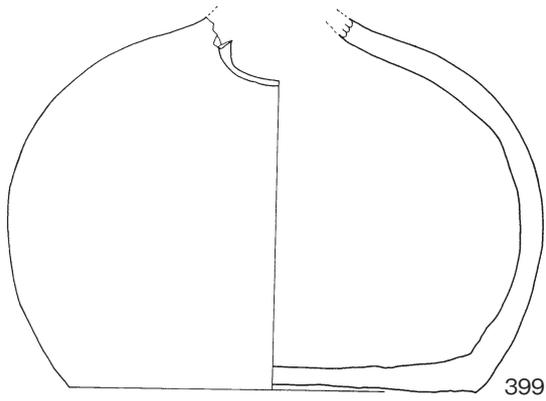
377は外面口縁部から胴部中位まで鉄釉がかけられるもので、器種用途は不明である。底部は糸切りである。378・379は土師質のものである。380は小鳥の餌入れである餌猪口である。381は鉄絵唐津の茶入れである。生産年代は1580年代~1610年代に相当するものである。382・383は小形の瓶で、油壺と思われる。383は胴部に白化粧がかかり、上から透明釉がかけられる二彩手である。384は内外面に褐釉がかかるものである。急須の把手部であろうか。385・386は、胎土が黄白色で、外面に轆轤目が強く残るもので、内面のみ透明釉がかけられる。底部は糸切りである。387は、胎土は緻密で内外面に薄い灰釉がかかるもので、17世紀代の初期の薩摩焼であると思われるが、器種不明である。388は土師質の小壺で、関西系のものであると思われる。耳は2か所付く。389~391は陶製の漏斗である。389は内面と外面の口縁部に褐釉が施釉される。390・391は基本的に内面が施釉される。

陶器・瓦質土器観察表12

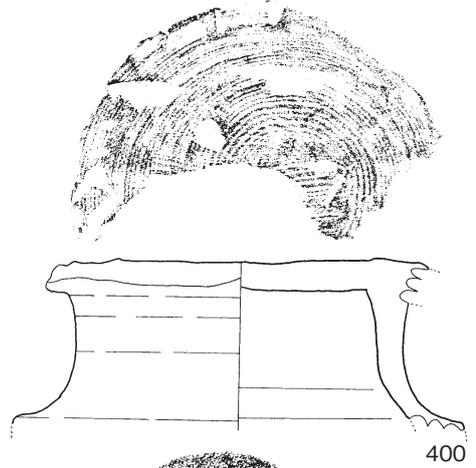
挿入番号	掲載番号	種別	分類	器種	産地	出土区	法量 (cm)			胎土の色調	釉薬の種類色調	施釉部位	時期	備考
							口径	底径	器高					
第267図	339	陶器	鉢	植木鉢	薩摩苗代川系	G地点	31.0	17.3	28.6	灰褐色	鉄釉	内面・口唇部・外底面無釉	19世紀代	口縁部先端装飾
	340	陶器	鉢	植木鉢	薩摩苗代川系	G地点	24.8	14.0	25.0	にぶい赤褐色	鉄釉	内面・口唇部・外底面無釉	19世紀代	口縁部先端装飾
	341	陶器	鉢	植木鉢	薩摩苗代川系	G地点	30.5	14.4	19.6	灰褐色	鉄釉	内面・口唇部・外底面無釉	19世紀代	
第268図	342	陶器	鉢	植木鉢	薩摩苗代川系	G地点	20.8	11.5	17.5	にぶい褐色	鉄釉	内面・口唇部・外底面無釉	19世紀代	
	343	陶器	鉢	植木鉢	薩摩苗代川系	G地点	18.6	10.2	15.0	にぶい褐色	鉄釉	内面・口唇部・外底面無釉	19世紀代	
	344	陶器	鉢	植木鉢	薩摩苗代川系	G地点	12.6	5.0	10.5	にぶい褐色	鉄釉	内面・口唇部・外底面無釉	19世紀代	
	345	陶器	鉢	植木鉢	薩摩苗代川系	G地点	—	11.0	—	にぶい褐色	鉄釉	内面無釉	19世紀代	獅子頭の脚部三か所付く
第269図	346	陶器	鉢	植木鉢	薩摩苗代川系	G地点	—	13.8	—	にぶい褐色	鉄釉	内面・外底面無釉	19世紀代	三足
	347	陶器	鉢	植木鉢	福岡辺りか?	G地点	29.2	16.0	24.0	浅黄褐色	褐釉	内面・外底面無釉	19世紀代	
	348	陶器	鉢	植木鉢	福岡辺りか?	G地点	24.8	17.0	20.4	浅黄褐色	白化粧土に鉄釉	内面・外底面無釉	19世紀代	
	349	陶器	鉢	植木鉢	福岡辺りか?	G地点	—	—	—	褐色	褐釉	内面無釉	19世紀代	
	350	陶器	鉢	植木鉢	福岡辺りか?	G地点	—	19.0	—	にぶい褐色	灰釉に染付	内面無釉	19世紀代	
第270図	351	瓦質土器	鉢	火鉢	不明	G地点	16.2	16.0	18.6	灰黄色	—	—	近代以降	外面型押し
	352	瓦質土器	鉢	火鉢	不明	G地点	19.6	17.1	21.3	浅黄褐色	—	—	近代以降	外面型押し
	353	瓦質土器	鉢	火鉢	不明	G地点	20.0	—	—	灰黄色	—	—	近代以降	外面型押し
	354	瓦質土器	鉢	火鉢	不明	G地点	—	12.2	—	褐色	—	—	近代以降	外面型押し
	355	瓦質土器	鉢	火鉢	不明	G地点	25.4	—	—	にぶい褐色	—	—	近代以降	外面型押し
	356	瓦質土器	鉢	火鉢	不明	G地点	—	18.8	—	灰白色	—	—	近代以降	外面型押し 底面に穿孔有り
	357	瓦質土器	鉢	火鉢	不明	G地点	—	24.6	—	にぶい褐色	—	—	近代以降	脚部か?



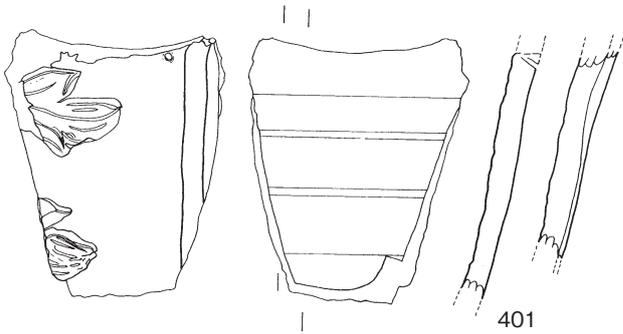
第276図 その他1



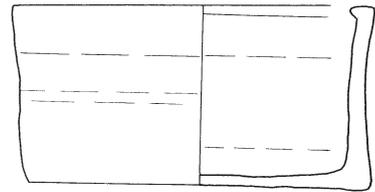
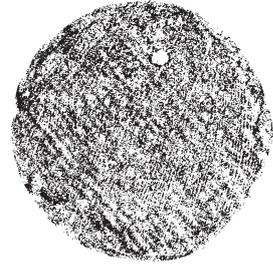
399



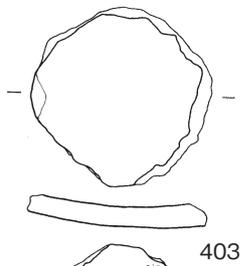
400



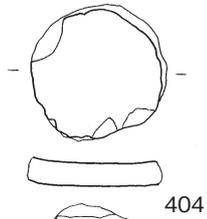
401



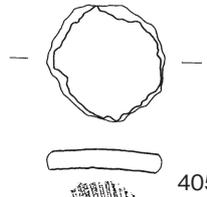
402



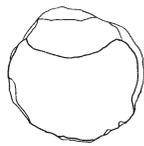
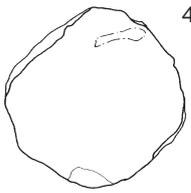
403



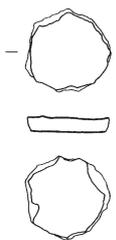
404



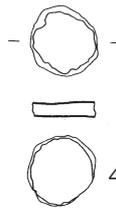
405



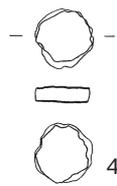
406



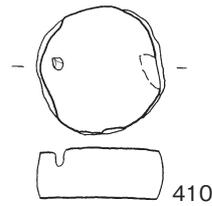
407



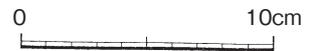
408



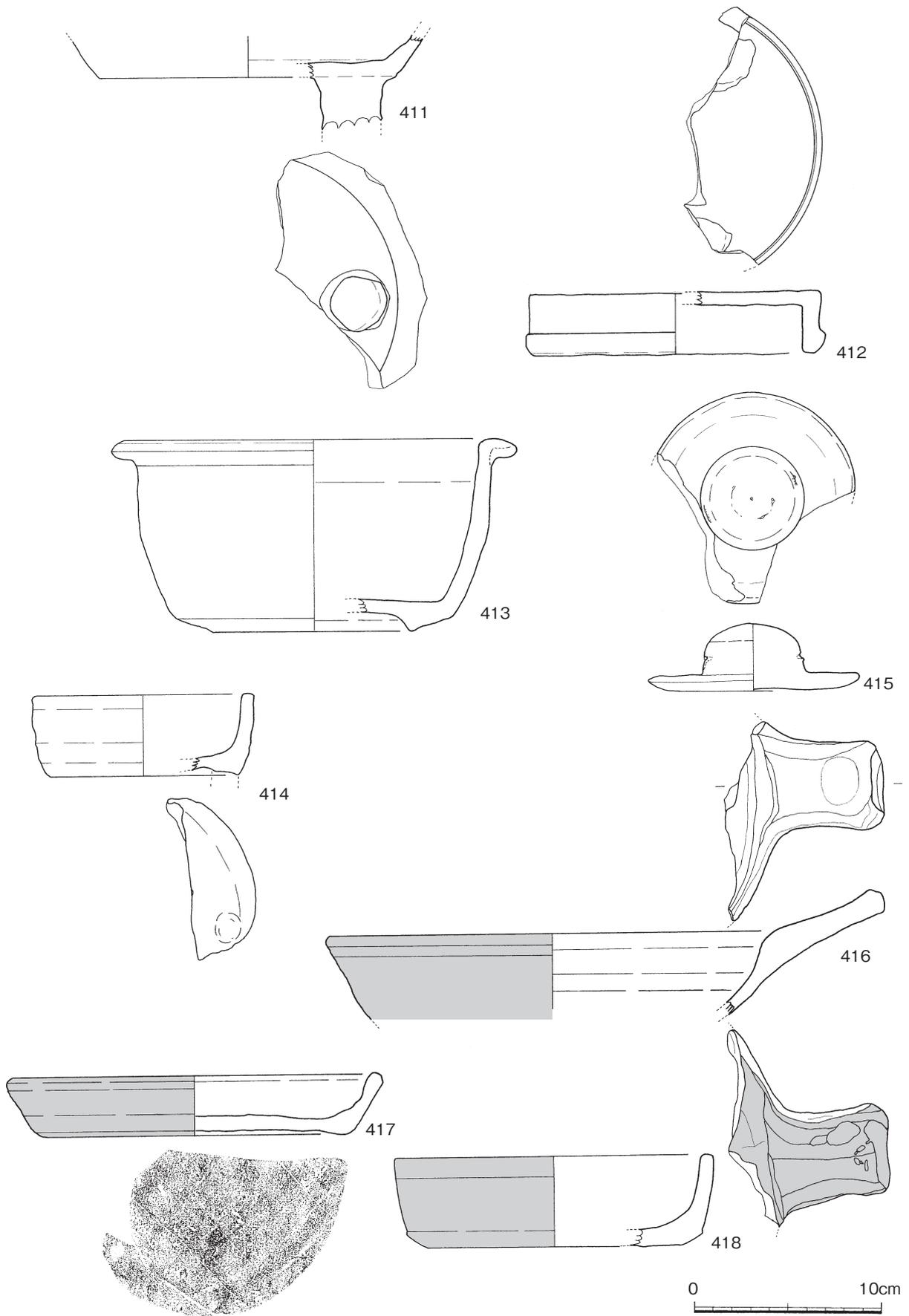
409



410

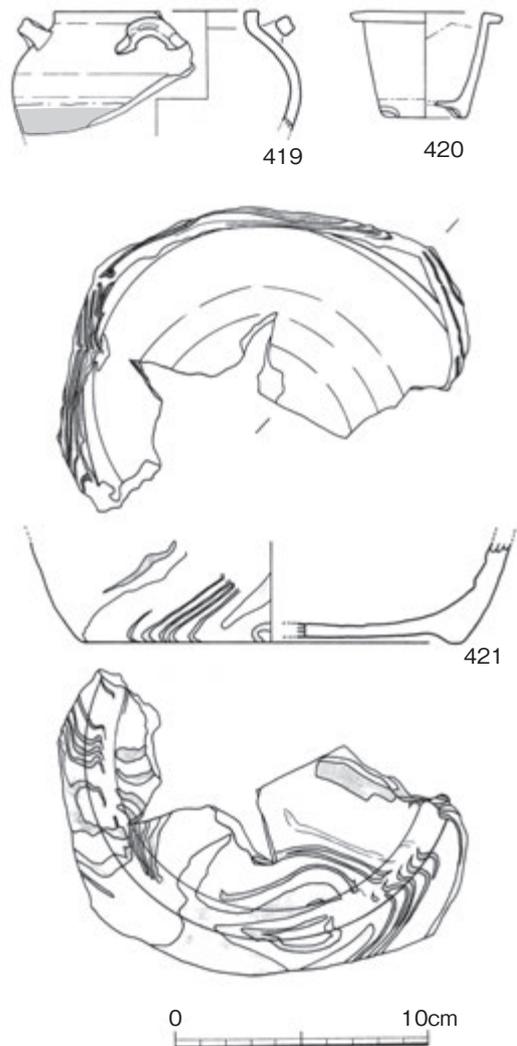


第277図 その他2



第278図 その他3

392は薩摩焼苗代川系のものであるが、器種は不明である。褐釉が外面腰部までかかり、内面は口縁部上位までで、以下無釉である。393・394は瀬戸・美濃のものである。内面と外面腰部まで褐釉が施釉される。395～397は土師質の貯金壺である。上部は閉じられ、中央にスリットが入るものと思われる。中身を出す際、上部を割って取り出すため残存していない。398は白色陶胎の白薩摩の水滴である。ウサギを型取っている。399は澁瓶である。肩部に注口が見られる。400は瓦質の器台である。胎土に金雲母が観察される。401は琉球産の荒焼である。外面に貼り付け文が施されるもので、器形は角形になると思われる。盆栽鉢等の用途が考えられるが、器種は不明である。402はサヤ鉢である。403～410は薩摩焼苗代川系の鉢や播鉢・甕・壺を転用したメンコである。406は両面に糸切りが見られる円盤状のもので、メンコとしたが詳細は不明である。410は瓦を転用したものである。411～418は、土師質のものである。411・412は器種不明のもので、411の突起部は3か所つき、その部分が412の上面に接合するものと思われる。413は鉢形のものである。414は底部に足が3か所付く。香炉と思われるが、口唇部に煤が付着しており、灯明具として使用した可能性が窺える。415は火消し壺の蓋である。416～418は焙烙である。外面には煤が付着する。419・420は土師質の胎土に柿色の釉がかかるもので、関西系の軟質施釉陶器である。419は耳が2か所付く小形の土鍋と思われ、底部には煤が付着する。420は植木鉢のミニチュアである。421は土師質の胎土に白土がマーブル状に混じったものである。



第279図 その他4

#### 鞆の羽口 (第280図)

422～427は鞆の羽口である。422～424・427の先端には鉄滓が熔着している。

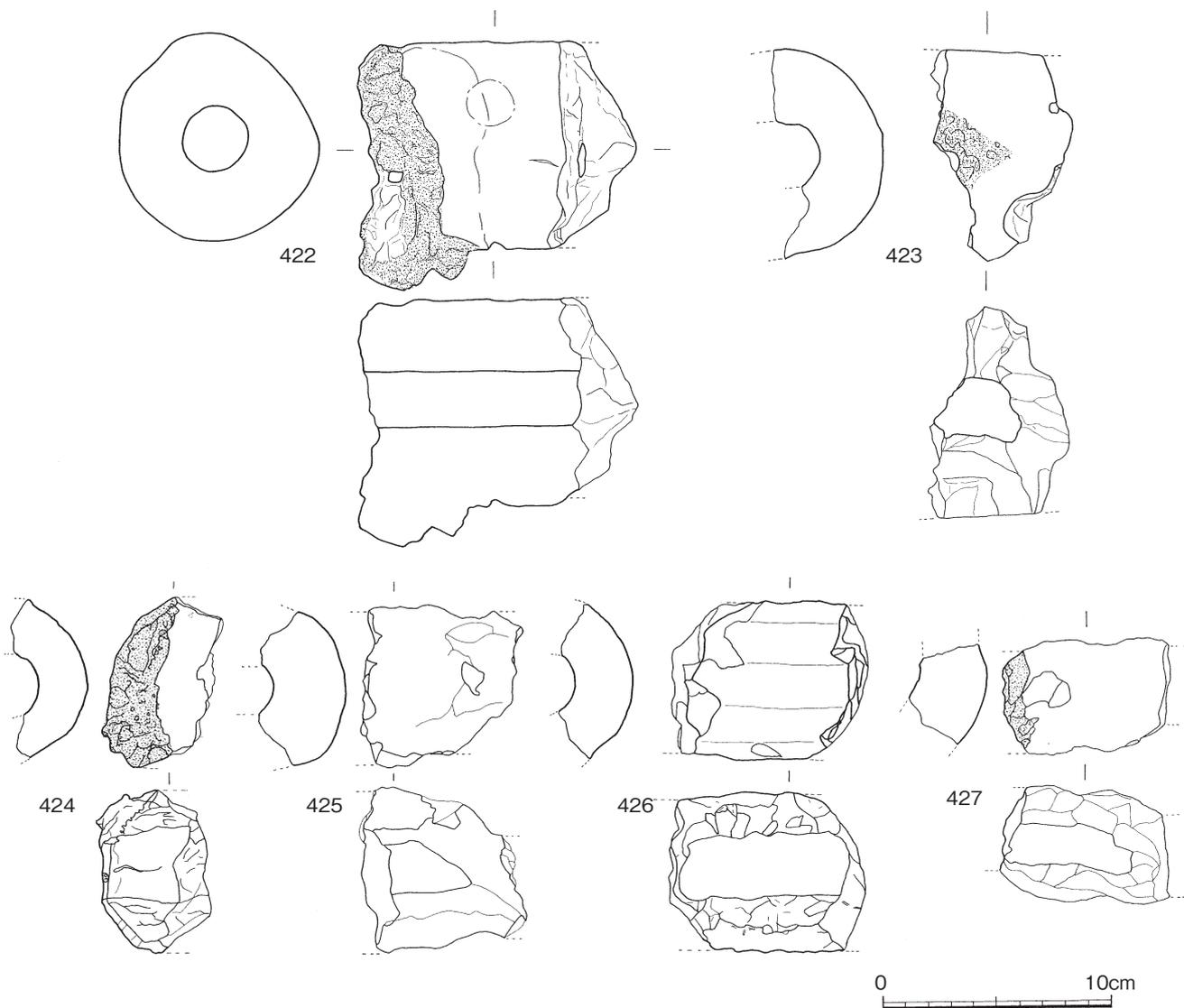
#### 土管・錫製品・石臼・木製品 (第281図・写真図版108図)

428～431は土管である。428の口縁内部と、429の口縁先端には、土管同士を合わせるときに使用した漆喰のようなものが付着している。

432は石臼である。

433は錫製の鶴首徳利である。外底面に「寸」のマークが入っている。

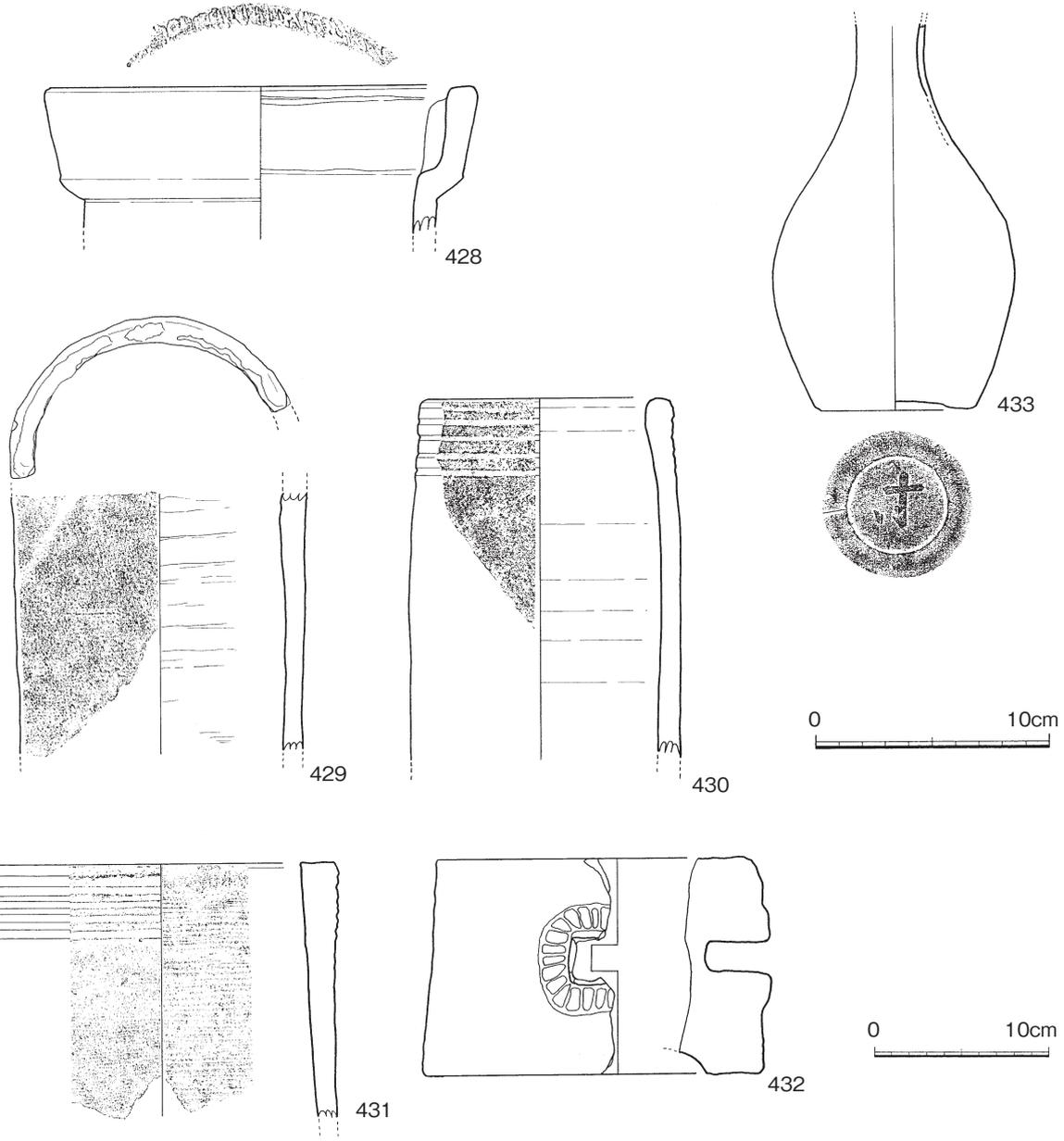
434・435は木製品の櫛で、材質はつげである。残存状況が非常に悪く、実測に耐えなかったため写真のみ掲載した。



第280図 轆の羽口

土師質土器・土製品観察表

挿図 番号	掲載 番号	種別	器種	分類	産地	出土区	法量 (cm)			胎土の 色 調	釉薬の種類 色 調	施釉部位	時期	備 考
							口径	上径	器高					
第 271 図	358	土師質土 器	火具	七輪他	不明	G 地点	-	-	-	にぶい 黄橙色	-	-	近代以降	
	359	土師質土 器	火具	七輪他	不明	G 地点	-	-	-	浅黄橙 色	-	-	近代以降	
	360	土師質土 器	火具	七輪他	不明	G 地点	22.0	-	5.1	浅黄橙 色	-	-	近代以降	
	361	土師質土 器	火具	七輪他	不明	G 地点	19.8	-	-	にぶい 橙色	-	-	近代以降	三か所スス有り
第 272 図	362	土製品	土人形	人形	在地か?	G 地点	-	-	-	橙色	-	-	19世紀以降	馬と侍
第 273 図	363	土製品	土人形	人形	在地か?	G 地点	-	-	-	にぶい 黄橙色	-	-	19世紀以降	
	364	土製品	土人形	人形	在地か?	S 地点	-	-	-	にぶい 橙色	-	-	19世紀以降	
	365	土製品	土人形	人形	在地か?	G 地点	-	-	-	橙色	-	-	19世紀以降	
	366	土製品	土人形	人形	在地か?	G 地点	-	-	-	橙色	-	-	19世紀以降	
	367	土製品	土人形	人形	在地か?	G 地点	-	-	-	灰黄	-	-	19世紀以降	
第 274 図	368	土製品	土人形	人形	在地か?	G 地点	-	-	-	にぶい 橙色	-	-	19世紀以降	
	369	土製品	土人形	人形	在地か?	Q13	-	-	-	橙色	-	-	19世紀以降	
	370	土製品	土人形	人形	在地か?	G 地点	-	-	-	にぶい 橙色	-	-	19世紀以降	
	371	土製品	土人形	人形	在地か?	G 地点	-	-	-	にぶい 黄橙色	-	-	19世紀以降	
	372	土製品	土人形	動物形	在地か?	Q14	-	-	-	にぶい 赤橙色	-	-	19世紀以降	犬
	373	土製品	土人形	動物形	在地か?	Q14	-	-	-	にぶい 黄橙色	-	-	19世紀以降	鳥



第281図 土管・錫製品・石臼

土製品・土師質土器・陶器観察表

挿図 番号	掲載 番号	種別	器種	分類	産地	出土区	法量 (cm)			胎土の 色 調	釉薬の種類 色 調	施釉部位	時期	備 考
							口径	上径	器高					
第 275 図	374	土製品?	脚部	—	在地か?	G地点	—	—	—	にぶい 褐色	—	—	19世紀以降	獅子頭の脚部
	375	土製品	メダル	—	在地か?	G地点	—	—	—	灰白色	—	一等の文字	19世紀以降	
	376	土製品	土鈴	—	在地か?	G地点	—	—	—	灰黄色	—	上部に紐通し穴あり	19世紀代	
第 276 図	377	陶器	鉢	顔猪口?	在地か?	G地点	4.6	2.6	3.2	赤褐色	鉄釉	外面口縁部のみ施釉	19世紀代	
	378	土師質土器	鉢	顔猪口?	在地か?	G地点	5.6	3.7	3.5	橙色	—	—	近代以降	
	379	土師質土器	皿	小皿	在地か?	G地点	7.8	5.4	3.1	淡黄色	—	—	近代以降	
	380	陶器	鉢	顔猪口	肥前系	G地点	5.2	3.0	2.3	浅黄色	灰釉	外底面は無釉	19世紀代	
	381	陶器	茶入	茶入	肥前	G地点	3.0	—	—	灰黄褐色	灰釉・鉄絵	全面施釉	1590~1610年代	外目に鉄絵の笹文
	382	陶器	瓶	油壺?	薩摩龍門 司系	G地点	2.2	—	—	灰褐色	褐釉	内面無釉	18世紀後半	
	383	陶器	瓶	油壺?	薩摩龍門 司系	G地点	2.6	—	—	灰褐色	透明釉 白化粧土	内面無釉	18世紀後半	二彩手
	384	陶器	水注	急須把手	薩摩苗代 川系	G地点	3.0	—	—	にぶい 赤褐色	鉄釉	全面施釉	19世紀代	
	385	陶器	不明	不明	不明	G地点	7.3	3.2	5.1	灰白色	透明釉	内面のみ施釉	19世紀代	底面糸切り
	386	陶器	不明	不明	不明	G地点	10.2	4.3	5.5	灰白色	透明釉	内面のみ施釉	19世紀代	底面糸切り
	387	陶器	壺?	小壺?	薩摩苗代 川系	G地点	11.2	—	—	灰色	灰釉	全面施釉	17世紀代	
	388	陶器	壺?	小壺?	関西系	G地点	6.4	—	—	浅黄橙 色	—	—	19世紀代	
389	陶器	—	漏斗	薩摩苗代 川系	G地点	23.2	—	—	暗赤褐 色	鉄釉	内面と外面口縁部は 施釉	19世紀代		

挿図 番号	掲載 番号	種別	分類	器種	産地	出土区	法量 (cm)			胎土の 色 調	釉薬の種類 色 調	施釉部位	時期	備 考
							口径	底径	器高					
第 276 図	390	陶器	—	漏斗	薩摩苗代 川系	G地点	—	1.4	—	暗赤褐色	鉄釉	外面注口部は無釉	19世紀代	
	391	陶器	—	漏斗	薩摩苗代 川系	G地点	—	—	—	暗赤褐色	鉄釉	内面は施釉	19世紀代	
	392	陶器	鉢	灰落とし?	薩摩龍門 司系	G地点	9.2	6.0	10.5	褐灰色	褐釉	内面と腰部から外底 面無釉	19世紀代	
	393	陶器	壺?	灰落とし?	瀬戸・美 濃	G地点	8.7	5.7	10.6	灰白色	鉄釉	外面腰部から高台内 面は無釉	17~18世紀代	
	394	陶器	壺?	灰落とし?	瀬戸・美 濃	G地点	—	6.6	—	褐灰	鉄釉	外面腰部から高台内 面は無釉	17~18世紀代	
	395	土師質土 器	壺	貯金壺	不明	G地点	6.6	—	—	浅黄褐色	—	—	近代	
	396	土師質土 器	壺	貯金壺	不明	G地点	7.4	4.4	7.9	灰白色	—	—	近代	
	397	土師質土 器	壺	貯金壺	不明	G地点	—	4.0	—	淡黄色	—	—	近代	
	398	陶器	水滴	水滴	薩摩堅野 系	G地点	—	—	—	灰白色	透明釉	内面無釉	19世紀代	白薩摩 ウサギ形
第 277 図	399	陶器	瓶	瘦瓶	薩摩苗代 川系	G地点	—	16.0	—	明赤褐色	灰釉	内面無釉 外底面拭 き取り	19世紀代	
	400	瓦質土器	貴台	器台	不明	G地点	—	—	—	にぶい 黄色	—	—	19世紀代?	胎土に全雲母含む
	401	陶器	鉢	盆栽鉢?	壺屋	G地点	—	—	—	赤褐色	—	—	19世紀代	琉球荒焼 貼り付け文
	402	土師湿度 器	窯道具	サヤ鉢	不明	G地点	13.4	14.5	7.2	明赤褐色	—	—	?	
	403	陶器	メンコ	メンコ	薩摩苗代 川系	G地点	7.2	—	0.9	暗赤褐色	鉄釉	両面施釉	19世紀代	口径はメンコ径 裏の転用
	404	陶器	メンコ	メンコ	薩摩苗代 川系	G地点	4.9	—	0.9	黄褐色	灰釉	上面施釉	19世紀代	口径はメンコ径 土瓶底部 の転用
	405	陶器	メンコ	メンコ	薩摩苗代 川系	G地点	4.2	—	0.8	明赤褐色	灰釉	両面施釉	19世紀代	口径はメンコ径 搦鉢の転 用
	406	陶器	メンコ?	メンコ?	薩摩苗代 川系	G地点	6.8	—	0.6	灰色	—	—	19世紀代	口径はメンコ径 帳面糸切 り
	407	陶器	メンコ	メンコ	薩摩苗代 川系	G地点	3.2	—	0.5	赤褐色	灰釉	両面施釉	19世紀代	口径はメンコ径
	408	陶器	メンコ	メンコ	薩摩苗代 川系	G地点	2.5	—	0.5	灰褐色	灰釉	両面施釉	19世紀代	口径はメンコ径
	409	陶器	メンコ	メンコ	薩摩苗代 川系	G地点	2.1	—	0.6	灰褐色	灰釉	両面施釉	19世紀代	口径はメンコ径
410	瓦質土器	メンコ	メンコ	薩摩苗代 川系	G地点	4.7	—	2.0	灰白色	—	—	19世紀代	口径はメンコ径 瓦の転用	
第 278 図	411	土師質土 器	不明	不明	不明	G地点	—	15.8	—	にぶい 橙色	—	—	19世紀以降	胎土中に全雲母含む 412と同一個体か
	412	土師質土 器	不明	不明	不明	G地点	—	15.2	—	にぶい 橙色	—	—	19世紀以降	胎土中に全雲母含む 411と同一個体か
	413	土師質土 器	鉢	不明	不明	G地点	20.2	10.6	10.4	にぶい 橙色	—	—	19世紀以降	胎土中に全雲母含む
	414	土師質土 器	仏具	香炉	在地?	G地点	11.8	10.0	4.4	黄灰色	—	—	19世紀以降	灯明具として使用か? 口縁部に煤付着
	415	土師質土 器	蓋	蓋	不明	G地点	—	11.2	3.1	橙色	—	—	19世紀以降	火消し壺の蓋
	416	土師質土 器	鍋	焙焙	不明	G地点	22.0	—	—	灰白色	—	—	18~19世紀代	外面に煤付着
	417	土師質土 器	鍋	焙焙	不明	G地点	19.3	16.0	3.2	灰白色	—	—	18~19世紀代	外面に煤付着
	418	土師質土 器	鍋	焙焙	不明	G地点	17.0	13.5	4.9	にぶい 黄褐色	—	—	18~19世紀代	外面に煤付着
第 279 図	419	軟質施釉 陶器	鍋?	土鍋?	関西系	G地点	8.0	—	—	にぶい 黄褐色	黄釉	—	19世紀代	外底面に煤付着
	420	軟質施釉 陶器	鉢	植木鉢	関西系	G地点	6.0	3.2	4.2	にぶい 黄褐色	黄釉	—	19世紀代	ミニチュア
	421	土師質土 器	鉢?	鉢?	肥前	G地点	—	15.0	—	にぶい 赤褐色	—	—	19世紀代	外面に煤付着
第 280 図	422	土師質土 器	竈の羽口	—	在地	G地点	—	—	—	浅黄褐色	—	—		先端に鉄滓熔着
	423	土師質土 器	竈の羽口	—	在地	G地点	—	—	—	にぶい 黄褐色	—	—		先端に鉄滓熔着
	424	土師質土 器	竈の羽口	—	在地	G地点	—	—	—	赤灰色	—	—		先端に鉄滓熔着
	425	土師質土 器	竈の羽口	—	在地	G地点	—	—	—	にぶい 黄褐色	—	—		
	426	土師質土 器	竈の羽口	—	在地	G地点	—	—	—	明赤褐色	—	—		
	427	土師質土 器	竈の羽口	—	在地	G地点	—	—	—	浅黄褐色	—	—		先端に鉄滓熔着
第 281 図	428	陶器	土管	—	薩摩苗代 川系	G地点	18.6	—	—	赤褐色	—	外面施釉	近代	
	429	陶器	土管	—	薩摩苗代 川系	G地点	—	—	—	赤褐色	—	外面施釉	近代	
	430	陶器	土管	—	薩摩苗代 川系	G地点	11.4	—	—	明赤褐色	—	外面施釉	近代	
	431	陶器	土管	—	薩摩苗代 川系	G地点	20.0	—	—	赤褐色	—	外面施釉	近代	
	432	石製品	石臼	—	—	G地点	—	19.0	12.5	—	—	—	近代	
写 真 図 版 108	433	金属製品	瓶	徳利	—	G地点	—	6.5	—	灰色	—	鑄製	近代	鑄製
	434	木製品	櫛	櫛	—	G地点	—	—	—	—	—	—	19世紀以降	つけ
	435	木製品	櫛	櫛	—	G地点	—	—	—	—	—	—	19世紀以降	つけ